岩室村文化財調査報告

和納館遺跡

発掘調査報告書

1997

岩室村教育委員会

序

この調査報告書は「1979年度　新潟県遺跡地図」に三田・館ノ内遺跡と表示されている中世城館跡、和納館又は和納館の別郭とも言われている遺跡のある岩室村大字童子地内の宅地造成開発に伴い、岩室村教育委員会が実施した発掘調査記録であります。

今回の調査では、濠、橋脚、柱穴群、井戸、土坑の遺構が確認され、特に濠の検出はこの遺跡が紛れもない城館跡であることが分かるとともにその他、出土した遺物による中世の生活や文化の一端を偲ぶ手がかりを得ることができました。

当村においては、初めての本格的な遺跡発掘調査でありますが、これを機会に遺跡や文化財に興味や関心を持たれる方が、ますます多くなることが期待されます。

調査に、献身的に努力され、ご指導いただきました川上貞雄先生を始めとし、ご協力いただいた調査員の方々また、発掘作業に従事いただいた方々に多大なご尽力をいただきました。

本書発刊に当たり、ここに深い感謝の意を表しますとともに今後の更なるご理解とご支援をお願い申し上げます。

1997年３月

岩室村教育委員会

教育長　成　田　忠　雄

上、遺跡上空　南東より北西を望む　　下、遺跡全景

例　　言

1　本書は、新潟県西蒲原郡岩室郡大字童子に所在する和納館跡の発掘調査に係わる報告書である。
2　当発掘調査は、同地内に予定された宅地造成開発計画に係わる周知の遺跡の事前調査である。
3　調査は新潟県教育庁文化行政課専門委員が行った確認調査結果に基づいて、岩室村教育委員会が行い、川上が調査の依頼を受けてこれを代行した。
4　調査体制は次ぎのとおりである。

調査主体	岩室村教育長　成　田　忠　雄	
調査担当者	川　上　貞　雄	（日本考古学協会々員）
調　査　員	杉　本　恵　子	（新潟県考古学会々員）
	佐　藤　友　子	

事　務　局	（平成７年度）	（平成８年度）
	山　田　豊　昭（課長兼公民館長）	石　添　義　克（課長兼公民館長）
	沖　野　　一（参　　事）	田　中　信　夫（参　　事）
	本　田　時　宗（係　　長）	松　本　一　栄（係　　長）
	鈴　木　　勝（主　　査）	岩　本　　恵（主　　査）
	岩　本　　恵（主　　査）	田　島　かづみ（主　　査）
	田　島　かづみ（主　　事）	川　崎　　恵（主　事　補）
	竹　内　みよ子（社会教育指導員）	竹　内　みよ子（社会教育指導員）

現地事務員	皆　川　祝　子	
	三　島　　勝	
整理作業員	田　中　順　子	（笹神村郷土資料館嘱託）
	池　谷　秀　子	

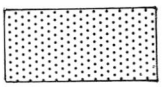
協　力　者　笹神村教育委員会　笹神村郷土資料館

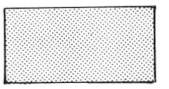
5　調査は、1994年９月に於ける確認調査と、1995同年７月26日から11月17日までの本調査と、引き続き笹神村郷土資料館での木製品の処理作業を同年11月28日まで行った。本格的な整理作業に掛かれたのは翌年1996年11月１日から1997年２月28日までの都合78日間をもって終了した。また整理作業に当たっては、諸般の事情により、笹神村郷土資料館の研究室を借用して行った。
6　出土遺物のうち土器その他では350点を図示し、木製品では379点を図示した。この他に木製品及び自然遺物など365点を計測し記録した。また、その他のものを含めて総計722点を真空パック処理を行った。
7　本書の執筆は川上が担当し、作図をはじめ計測・編集作業は、杉本、佐藤、田中、池谷が分担した。
8　発掘作業から報告書作成に至るまで、多くの方々の御指導、御支援を賜った。記して謝意を示す。（敬称略）

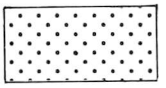
伊藤　啓雄　　遠藤　孝司　　小田由美子　　金子　拓男　　亀井　　功　　木村　康祐
木村　宗文　　唐崎　裕児　　小林　昌二　　小林　政雄　　斎藤　嘉吉　　高橋　　保
竹田　和夫　　田村　　裕　　鶴巻　康志　　戸根与八郎　　水沢　幸一　　藤巻　正信
増子　正三　　宮田　進一　　矢田　俊文　　横山　勝栄　　四柳　嘉章　　渡辺　十二
新津市立図書館　　豊浦町教育委員会　　笹神村教育委員会　　笹神村郷土資料館
㈱テック新東　　㈲サープラックス　　㈱レック三和

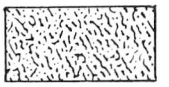
凡　　例

1　遺構に付した記号は次ぎのとおりである。SD＝濠　SE＝井戸　SK＝土坑　SX＝不明
　P_1…P_2＝ピット（柱穴・杭穴）
2　遺構番号は検出順に拠る一律のもので井戸、土坑等とも通し番号である。
3　遺物の出土地点の大部分は井戸遺構と周濠からであり、これらを遺構ごとに図示し、合わせて遺構図も付け加えた。従って土器、木製品を一同に示し、また縮尺の異なるものも同一図内に示し、それぞれ1／3　1／6などとして示した。なお、井戸・土坑などの遺構の縮尺は1／60である。
4　遺物の割り付け番号は、一覧表番号、図版での表示番号と整合する。但し遺物番号ではない。
5　土器の種別には須恵器系・瓷器系中世陶器・瓦器・土師質土器・青磁・施釉陶器などが有るが、実測図の断面はすべて白抜きである。添付した一覧表を参照されたい。漆器類には施された漆の色を「赤」・「黒」と文字で示した。
6　挿図のうち第1図、第50図の方位は真北であり、その他は磁北である。
7　遺物実測図中のスクリーン・トーンが示すものは以下のとおりである。


うつわ以外の漆塗り


焼焦げ


スラグ付着


付着炭化物

目　　次

Ⅰ　はじめに
　1　調査に至る経緯……1
　2　遺跡と周辺の遺跡……1
　3　確認調査報告書……3
　4　調査の方法と経過……7
Ⅱ　遺構と遺物
　1　遺構のあらまし……9
　2　周濠……9
　3　ピット群……14
　4　井戸と土坑……16
　5　遺構と遺構出土遺物……19
　6　遺構外出土遺物……39
　7　その他の木製品……46
Ⅲ　まとめ
　1　陶磁器とその年代……90
　2　遺構について……92
　おわりに……94
Ⅳ　写真図版……97
Ⅴ　報告書抄録

挿　図　目　次

第1図　遺跡と周辺の遺跡分布図……3
第2図　確認調査位置図……6
第3図　グリット設定図……7
第4図　遺跡地層柱状図……8
第5図　遺構全測図　Ⅰ……10
第6図　遺構全測図　Ⅱ……11
第7図　周濠地層断面図……12
第8図　柱列とピット群　A……13
第9図　柱列とピット群　B……14
第10図　ピット群　C……15
第11図　ピット群（SK-56号上層）……15
第12図　4・7号井戸と出土遺物……50
第13図　7号井戸出土遺物・8号井戸と出土遺物……51
第14図　11・71号井戸と出土遺物……52
第15図　13・53・27号井戸と出土遺物…53
第16図　29・77号井戸と出土遺物……54
第17図　32・39号井戸と出土遺物……55
第18図　48・52・55号井戸と出土遺物…56
第19図　55号井戸出土遺物……57
第20図　57・60・65・73・74・75号井戸と出土遺物……58
第21図　70・76号井戸と出土遺物……59
第22図　80号井戸と出土遺物……60
第23図　81・82・84号井戸と出土遺物…61
第24図　83・92号井戸と出土遺物……62
第25図　85・93号井戸と出土遺物……63
第26図　94号井戸と出土遺物……64
第27図　94号井戸出土遺物……65
第28図　95・98号井戸と出土遺物……66
第29図　99•102号井戸と出土遺物……67
第30図　100•101号井戸及び土坑出土遺物Ⅰ……68
第31図　土坑群と出土遺物　Ⅱ……69
第32図　土坑群と出土遺物　Ⅲ……70
第33図　土坑群と出土遺物　Ⅳ……71
第34図　土坑・不明遺構群と出土遺物　Ⅴ……72
第35図　98•69号遺構出土遺物・ピット群出土の柱類　Ⅵ……73
第36図　内周濠出土遺物　Ⅰ……74
第37図　内周濠出土遺物　Ⅱ……75
第38図　内周濠出土遺物　Ⅲ……76
第39図　内周濠出土遺物　Ⅳ……77
第40図　内周濠出土遺物　Ⅴ……78
第41図　内周濠出土遺物　Ⅵ……79
第42図　内•外周濠出土遺物　Ⅶ•Ⅰ…80
第43図　外周濠出土遺物　Ⅱ……81
第44図　遺構外出土遺物　Ⅰ……82
第45図　遺構外出土遺物　Ⅱ……83
第46図　遺構外出土遺物　Ⅲ……84
第47図　遺構外出土遺物　Ⅳ……85
第48図　遺構外出土遺物　Ⅴ……86
第49図　遺構外出土遺物　Ⅵ……87
第50図　遺構外出土遺物　Ⅶ……88
第51図　遺構外出土遺物　Ⅷ……89
第52図　中世陶器模式図……89
第53図　周辺の城館址分布図……93

図　版　目　次

図版1　遺跡全景1
図版2　遺跡全景2
図版3　作業スナップ
図版4　遺跡完掘
図版5　井戸遺構1
図版6　井戸遺構2
図版7　井戸遺構3
図版8　井戸遺構4・土坑
図版9　遺物出土状況
図版10　遺物　須恵器系陶器
図版11　遺物　須恵器系陶器
図版12　遺物　須恵器系・瓷器系陶器
図版13　遺物　瓷器系陶器
図版14　遺物　瓦器・施釉陶器・青磁
図版15　遺物　青磁・白磁
図版16　遺物　染付・漆器
図版17　遺物　漆　器
図版18　遺物　漆　器
図版19　遺物　かわらけ
図版20　遺物　火　器
図版21　遺物　土製品　石製品
図版22　遺物　金工品・木製品1
図版23　遺物　木製品2
図版24　遺物　木製品3
図版25　遺物　木製品4
図版26　遺物　木製品5
図版27　遺物　木製品6
図版28　遺物　木製品7
図版29　遺物　木製品8
図版30　遺物　柱・杭類

表　目　次

表１　周辺の中・近世遺跡一覧表……2
表２　主な柱穴・杭穴一覧表……16
表３　井戸遺構一覧表……17
表４　井戸の地層……18
表５　土坑・その他の遺構一覧表……18
表６　土坑の地層……18
表７　掲載遺物一覧表　挿図No.12……19
表８　掲載遺物一覧表　挿図No.13……19
表９　掲載遺物一覧表　挿図No.14……20
表10　掲載遺物一覧表　挿図No.15……21
表11　掲載遺物一覧表　挿図No.16……21
表12　掲載遺物一覧表　挿図No.17……22
表13　掲載遺物一覧表　挿図No.18……23
表14　掲載遺物一覧表　挿図No.19……23
表15　掲載遺物一覧表　挿図No.20……24
表16　掲載遺物一覧表　挿図No.21……25
表17　掲載遺物一覧表　挿図No.22……25
表18　掲載遺物一覧表　挿図No.23……26
表19　掲載遺物一覧表　挿図No.24……26
表20　掲載遺物一覧表　挿図No.25……27
表21　掲載遺物一覧表　挿図No.26……28
表22　掲載遺物一覧表　挿図No.27……28
表23　掲載遺物一覧表　挿図No.28……29
表24　掲載遺物一覧表　挿図No.29……30
表25　掲載遺物一覧表　挿図No.30……31
表26　掲載遺物一覧表　挿図No.31……31
表27　掲載遺物一覧表　挿図No.32……32
表28　掲載遺物一覧表　挿図No.33……32
表29　掲載遺物一覧表　挿図No.34……33
表30　掲載遺物一覧表　挿図No.35……34
表31　掲載遺物一覧表　挿図No.36……35
表32　掲載遺物一覧表　挿図No.37……35
表33　掲載遺物一覧表　挿図No.38……36
表34　掲載遺物一覧表　挿図No.39……36
表35　掲載遺物一覧表　挿図No.40……37
表36　掲載遺物一覧表　挿図No.41……37
表37　掲載遺物一覧表　挿図No.42……38
表38　掲載遺物一覧表　挿図No.43……38
表39　掲載遺物一覧表　挿図No.44……39
表40　掲載遺物一覧表　挿図No.45……40
表41　掲載遺物一覧表　挿図No.46……41
表42　掲載遺物一覧表　挿図No.47……42
表43　掲載遺物一覧表　挿図No.48……43
表44　掲載遺物一覧表　挿図No.49……44
表45　掲載遺物一覧表　挿図No.50……45
表46　掲載遺物一覧表　挿図No.51……45
表47　その他の木製品計測表……46
表48　自然遺物一覧表……90
表49　出土うつわ一覧表……90
表50　周辺の城館跡一覧表……93

Ⅰ　は　じ　め　に

1　調査に至る経緯

当該遺跡は新潟県西蒲原郡岩室村大字和納字童子1100～2200番地周辺に所在する中世の城館址である。『新潟県遺跡地図』（新潟県；1979）には和納館の名称は見られず、和納地内の字三田、及び字館の内を指定し「三田・館ノ内遺跡」として記録されてきた。一方『新潟県中世城館等分布調査報告書』（新潟県；1987）では、和納館は上和納字三田、同館ノ内に位置するが消滅したと記されているに止まっている。一方、当地点の地籍名である「童子」は、その内容は不明であるがやや離れた位置に「童子遺跡」として記されている。いま「三田・館ノ内」遺跡が和納館址であると推定された経緯は不明である。筆者らが知り得た最初の資料は、新潟大学考古学研究室の諸君による資料紹介（伊藤・他；1995）である。

遺跡は日本海に面してそそり立つ弥彦・角田連山の東側背後に広がる越後平野の低地に位置する和納の街並みの東南端にある。ここは越後平野のを南から北に向かって流れ行く西川の右岸に当たる自然堤防の微高地である。今回の調査地点はＪＲ越後線、岩室駅の東側に当たり、駅舎ホームや線路に接した水田地帯である。

ここに民間業者による「駅東住宅団地開発事業」が、1995年春の完成を目指して進められる計画が成され、岩室村に取っても長期の総合開発計画の一環に組み込み積極的に取り組んできた。開発計画に因る宅地分譲面積は取り敢えず17,300㎡で78区画、240戸である。この開発計画に伴う遺跡確認調査が1994年９月、県教育庁文化行政課によって行われた。この結果、開発予定区域の一部分が遺跡である事が分り、しかもこれが「和納館の別廓」と推測されるにいたり、開発に先立っての本調査が必要となった。これらの結果、本調査の依頼を受けた筆者らは1995年７月の準備作業から11月にかけての発掘調査を実施し、次章の如き結果を得ここに報告するものである。

2　遺跡と周辺の遺跡

新潟県西蒲原郡岩室村は、南北に長い新潟県のほぼ中央部の日本海に面して位置し、北東側の巻町、東南側の吉田町、西南側の弥彦村に接し、稲作を主体とした農業と漁業、そして弥彦・角田山の山地における林業と、古くから栄えた温泉の村である。村は日本海に接した「間瀬」地区、弥彦山の東麓の「石瀬」地区、越後平野の真っ直中に当たる和納地区からなる。遺跡の存在する和納地区は越後平野を延々と流れる西川の自然堤防上に発達した街で、上和納・下和納の集落に分れ、この内、下和納は現在では隣接する巻町に所属している。

この度の調査地点は和納館址の一部分であり、館址は西南側へ大きく広がるものと推定される。巻頭でも記述したが調査地点は、上和納に位置し古い街並の東側に位置し、現況は水田であり、

表1　周辺の中・近世遺跡一覧表

No.	遺跡名	所在地	No.	遺跡名	所在地
1	釈迦堂	黒崎町板井字本田	47	山田屋敷	巻町大原字大角
2	己ノ明	〃　字己ノ明	48	タテ	〃　布目字タテ
3	ブギリ	潟東村五之上字土手内	49	岩穴（屋）洞窟	〃　角田浜字此ノ入
4	苧畑	〃　字上土手	50	馬塚	〃　竹野町字南馬坂
5	与平潟	〃　熊谷字与平潟	51	不塔島	〃　〃　字前田
6	六十歩下	〃　〃　字六十歩下	52	久保田	〃　下水島字久保田
7	三条田	〃　〃　字三条田　他	53	桜本	〃　福井字桜本
8	長田	月潟村釣寄字長田	54	舟山神社B	〃　〃　字坂山
9	兵蔵	〃　〃　字兵蔵	55	ハザマ	〃　〃　字ハザマ
10	本行事跡	〃　東長島字本行寺	56	道下	岩室村樋曽字道下
11	荒田	中之口村道上字荒田	57	金丸	〃　上和納字金丸
12	万坊江	〃　打越字松ヶ森	58	下和納	巻　町安尻字ハガヤバ
13	万坊院跡	〃　〃　〃	59	下和納寺跡	〃　〃　〃
14	宮島	〃　河間字宮島	60	閂ノ内	岩室村上和納字閂ノ内
15	福島B	〃　福島字上向	61	高橋	〃　高橋字ヤマハリ
16	福島	〃　〃　〃	62	三田・新谷	〃　上和納字三田・新谷
17	上向	〃　〃　〃	63	童子	〃　〃　字童子
18	堀屋敷	〃　羽黒字堀屋敷	64	八幡前	〃　〃　字八幡前
19	島田B	〃　針ヶ曽根字島田	65	福明寺跡	〃　西中字寺跡
20	梅田	〃　〃　字梅田	66	天神	〃　横曽根字天神
21	円明寺跡	〃　小吉字東若宮	67	岡田	〃　石瀬字岡田
22	亀田	燕市小牧	68	浄専跡	〃　〃　字中野　他
23	万福寺跡	〃大野	69	城平	〃　〃　字城平
24	大野	〃　〃　〃	70	田ノ平	〃　〃　字田ノ平
25	上潟	〃　花見字上潟　他	71	龍池寺跡	弥彦村弥彦（字下ノ原付近）
26	西津雲	〃　〃　字西津雲	72	上段	〃　上泉字上段
27	ニインドン屋敷	〃　三王渕	73	夏井経塚	岩室村夏井字ゴロゴロ山
28	松崎	〃　松崎	74	泉性寺跡	〃　字郷屋
29	君之塚	〃　三王渕字塚田	75	弥五郎屋敷A	吉田町本町字池田
30	アヤメ塚	〃　関崎字下郷屋	76	弥五郎屋敷B	〃　〃　〃
31	下郷屋	〃　〃　〃	77	本町諏訪神社跡	〃　〃　字前田
32	長渡	〃　長渡	78	糺	〃　鴻ノ巣字糺
33	庚塚B	吉田町米納津字小諏訪前	79	福厳寺	〃　〃　字箱根
34	館屋敷	〃　〃　字館屋敷	80	新保B	〃　米納津字大島崎
35	野神屋敷	〃　佐渡山字中川	81	一本杉	〃　吉田字砂入
36	長所	燕市新京場	82	中築地	〃　浜首字中築地
37	モスの塚	中之口村打越甲字宮上	83	前畑	〃　法花堂字前畑　他
38	茶院B	〃　〃　〃	84	野沖	〃　吉栄字四番割　他
39	茶院C	〃　〃　〃	85	中沢屋敷	〃　法花堂字大開
40	宇智古志神社跡	〃　打越	86	中村	〃　〃　字中村
41	助次郎	吉田町佐渡山字川下	87	潟の内B	〃　下中野字潟ノ内
42	館ノ腰	巻町馬掘字館ノ腰	88	潟の内A	〃　〃　〃
43	河井前	〃　河井字屋敷附	89	門光寺跡	〃　〃　字筒免内
44	真田	西川町真田字上焼	90	筒免内	〃　〃　〃
45	元宮	〃　押付字浦田	91	札木A	〃　西太田字札木
46	松崎屋敷	〃　旗屋字浦廻	*	和納館跡	岩室村上和納字童子

●印＝中世・近世の遺跡　▲印＝寺院址・墳墓・塚　■印＝城館址

その標高は4.8m前後で、西川の自然堤防の微高地に接した越後平野特有の低湿地帯である。同様の低湿地帯には古代（奈良・平安時代）以降の多くの遺跡が点在しているが、岩室村における遺跡は周辺の市町村に比較して少なくはないが、いま部外者である筆者らが単純に知ることの出来る『新潟県遺跡地図』に基づけば、遺跡数は64遺跡を数える事ができる。これらの遺跡は時代の不明なものや、また重複するものもあるが、縄文時代と推定される原始時代の遺跡が山麓地域にかけて17ヶ所、古代の遺跡は主に平野部において10遺跡を数える。この他中世・近世の遺跡17ヶ所と城館址7ヶ所が記録されている。1971年、石瀬字諏訪平にある縄文時代中期・後期の「青竜寺遺跡」が村教育委員会によって発掘調査が行われている。第1図は和納館の存続したと推定

第１図　遺跡と周辺の遺跡分布図

される中世から近世にかけての周辺市町村に点在する遺跡91ヶ所と、城館址24ヶ所（■印、但し内容は第52図・表50参照）を記した。この内、村内に係わるものは当遺跡の他、城館址７ヶ所を含めた17遺跡である。

いま城館址を除く10遺跡が、どの様な性格を持つものであるか把握し難いが、寺院址以外の多くは小規模な墓址に係わるものと考えておきたい。一方、城館址７ヶ所の内、松岳山城・天神山城・城河内城は実戦に備えた山城であり、その他は平時の居館址・陣屋である。この内城河内城址は日本海に面した山頂に立地する事から、或いは時代を含めて性格を異にする可能性を含むものである。

3　確認調査報告書

新潟県教育庁文化行政課に因って行われた確認調査の結果報告書が提出されているので、本文

のみをここに転載させて戴く事にする。

岩室村和納館確認調査報告書

1　調査の目的

岩室村大字和納地内に宅地造成計画があり、計画地内が周知の和納館にかかる。そのため、事前に確認調査を実施して、計画地内における遺跡の有無を確認し、今後の協議資料を作成する。

2　調査地区

西蒲原郡岩室村大字和納字童子1146他

3　調査期間

平成6年9月5日（月）～9月9日（金）

4　調査主体

岩室村教育委員会　教育長　成田　忠雄
　　事務局　鈴木　　勝

5　調査体制

調査担当　　木村　康裕
調 査 員　　藤田　豊明

6　調査対象面積

約25.990㎡

7　発掘調査面積

570.6㎡

8　調査方法

調査対象地区に試掘坑を任意に設定し、バックホー・人力による掘削・精査を行い、遺物・遺構の有無を確認した。―― 第2図参照――

9　調査結果

・層序（地層柱状図参照）―― 図省略 ――

Ⅰ層　　暗褐色土（表土・耕作土）
Ⅱ層　　灰色土
Ⅲ層　　灰褐色粘土（鉄分含む）
Ⅳ層　　灰褐色粘土（鉄分含む、より暗い）
Ⅴ層　　灰白色粘土（植物の茎等を含み若干緑色をしている）
Ⅵ層　　灰色粘土
Ⅶ層　　暗灰色粘土

Ⅱ・Ⅲ層の内、若干土質の異なる所があった（Ⅱ’・Ⅲ’層）

・遺構・遺物

遺構……　6T：土坑・溝

9T：土坑・溝・ピット

10T：溝

11T：溝・ピット

12T：土坑・溝・ピット

13T：杭（新しい物）

15T：土坑

16T：土坑（新しい物）

遺構　（中世）はⅢ層上部で確認できる。

遺物……　9T：土師器片5・青磁器片1・柱根1

10T：土師器片1・珠洲焼片1

11T：土師器片9・須恵器片2・珠洲焼片8・中世陶器片1
近世陶器片5・石製品1

12T：土師器片6・青磁器片1・近世陶器片2

13T：近世陶器片1

14T：珠洲焼片1・青磁器片1・中世陶器片1・近世陶器片3

15T：土師器片3・珠洲焼片1

16T：土師器片2・近世陶器片3

22T：中世陶器片1

なお、3・10Tで木製品が出土しているが、時期は不明。

10　まとめ

和納館は「埋蔵文化財包蔵地調査カード(中世城館跡)」によれば、西川を天然の要害とした自然堤防上にあり、中世陶器片が発見された付近は和納館の別郭があったものと推定されている。現在知名として、「館ノ内」・「囲ノ内」が残り、地名からも城館跡の存在をうかがうことができる（今回の調査期間中に、更正図等の検討による館の区画等を読み取る作業を行なわなかったので、今後、その作業が必要となる)。文献資料では、天正8(1580）年に「和納へ及調儀、二之廻輪迄取破、巣城計成之」という記事（天正8年6月9日付け「上杉景勝書状」山岸文書）が見え、上杉景虎の「和納」館を上杉景勝方が攻めたことが明らかになっているが、この「和納」が和納館に比定できる。

調査対象地は標高約7mの平坦地で、現状は水田・畑・荒地である。「カード」に記された感の推定範囲の中で、比較的標高の高い畑の部分で館に関わる囲構等の存在の可能性が考えられた。

調査は、開発予定地内における遺跡の有無を確認すること、館の推定範囲を参考に堀等の存在の有無を確認することで館の範囲を明確にすることを中心に実施した。

調査結果をまとめると以下の通りである。

・遺構は、6・9・10・11・12・13・15・16Tで土坑・溝。ピット・杭が検出された。
13・16Tの土坑・杭は新しいものと思われるが、他のものは中世のものと思われる。
これらの遺構は比較的標高の高い畑の部分に集中している。
・遺物は、9・10・11・12・13・14・15・16・22Tで土師器片・須恵器片・珠洲焼片・中世陶器片・近世陶器片。石製品等が出土している。中心となる遺物は珠洲焼片で中世後期のものと思われる。
・遺構・遺物から「埋蔵文化財包蔵地調査カード（中世城館跡）」に記載された和納館に関わる遺跡であると推定される。9・10Tで南北に走る堀と思われる溝を検出したが、南・北側への延びが不明確であり、遺構の集中している範囲を考えると、館本体ではなく、副郭にあたるものと推定される。この副郭は文献資料に見る「二之廻輪」にあたる可能性がある。

調査の結果から、開発予定地のうち遺構・遺物が集中している所を中心に別図に示したところについては工事着工前に発掘調査（本調査）が必要である。

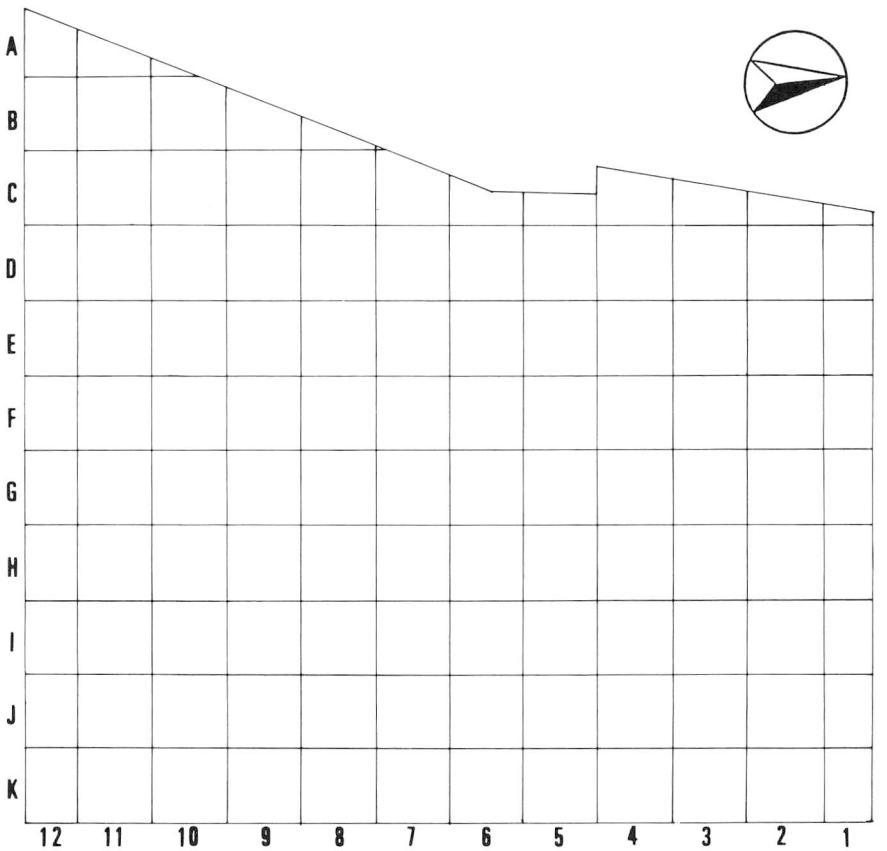
第2図　確認調査位置図

4　調査の方法と経緯

1994年10月、筆者らは隣町吉田町の佐渡山地域において、古代遺跡の発掘調査を行っていた。その現地で、岩室村教育委員会より当遺跡調査の依頼要請を再三に亘って受けた。翌年度の日程の折り合いも付かぬまま、取り敢えずこの要請を受けることになった。1995年4月から開始した前半の調査活動が長引き、調査補助員1名と作業員6名を1ヵ月余の残務作業に残して現地に赴いたのは7月末の事であった。

発掘調査範囲は開発予定区域内の南西寄りの一部分であり、第2図でスクリーン・トンで示した2,600㎡である。農道を挟んだ西側はＪＲ越後線の鉄道と岩室駅のプラットホームに接し北側には県道加茂～岩室線の主要道路に接している。現況は休耕中の水田で、かつては苗代田として使用されたと言われる如く、幅2～5m割りの境界線を見、用地の借用に苦慮する結果を見た。

調査に先立ち、バックホーとクローラーダンプを導入して表土の耕作土を排除し、その後任意の5mメッシュを組み打杭した。その後、ベルトコンベアー等を搬入して、8月1日より開始す



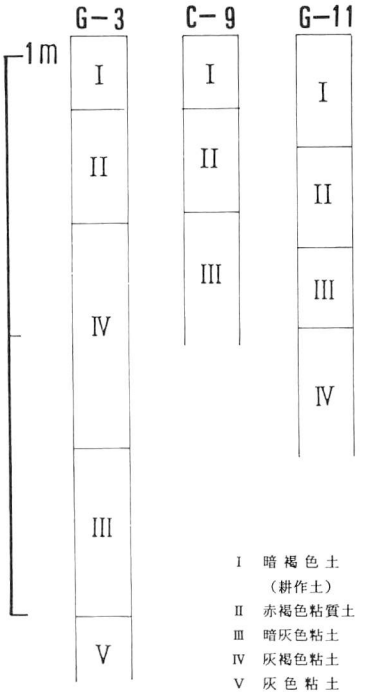
第3図　グリット設定図

る人力に拠る発掘作業に備えた。作業は順調に進められた前半に引き替え、出水と多量の雨水、さらに濠内のヘドロと困難を来した。

第3図は5mメッシュの位置図であり、北側から南側に向かって1〜12の数字、西側から東側に向かってA〜Kのアルファベットを付してそれぞれのグリット名とした。因みにメッシュの長軸の方位はN6.5° Eである。

調査進行の結果、遺跡の地層はほぼ安定しており、第4図に示した如く、Ⅱ層の赤褐色粘質土を基盤として遺物、遺構が検出された。

検出した遺構は全長95mに及ぶ内濠と、同じく56mの外濠、44基の井戸、50基の土坑等と無数のピット群であり、膨大な量の土を動かす結果と相成った。また出土した遺物も多量である。11月17日を以て現地での作業を終了した。出土遺物は筆者等の都合もあって、筆者や調査員の居住地に近い北蒲原郡笹神村の郷土資料館へ運び、そこの一室を借用して整理作業を行うことにし、1997年2月28日、漸くにして作業を終了し、当報告書の執筆に向かう時点に至った。



第4図　遺跡地層柱状図

Ⅱ 遺構と遺物

1 遺構のあらまし

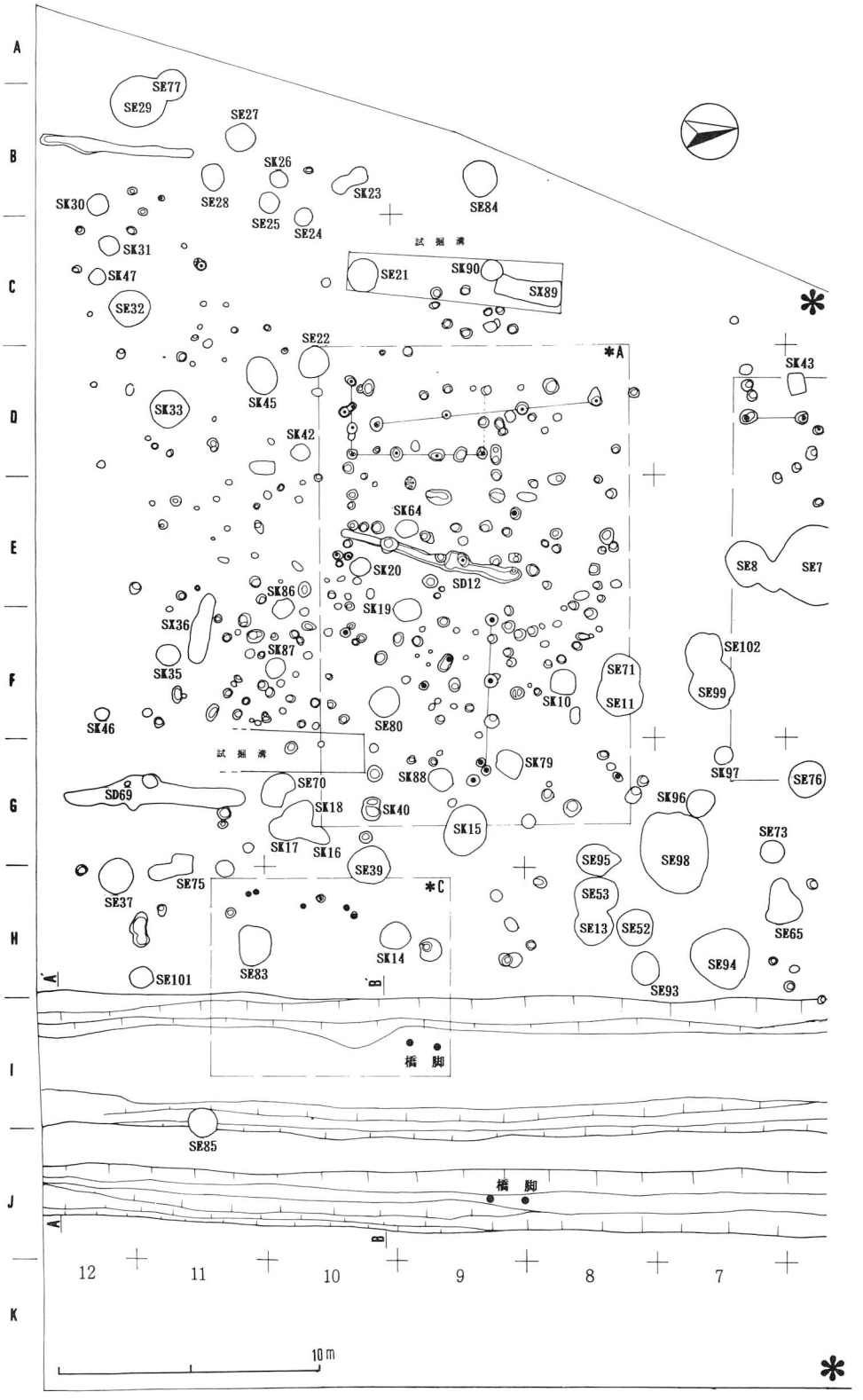
発掘調査区域の東側から7m程を隔てて南北に向かって濠が検出した。この遺構は調査区域の南北一杯に伸びるものであり、この遺跡が明らかな城館址であることが分かる。濠の一部は北端で直角に西に向かって折れ、この西南に当たる区域と一部濠内に遺構を見るが、濠東側では小量の遺物は採集されているが、遺構は一切検出されない。従ってこの濠は城館址の周濠である事が分かる。濠は大小の2重から成り、郭内には多くの遺構が有る。遺構は前章でも記したが44基の井戸、50基の土坑等の他、夥しい数のピット群がある。これらのピット群は、柱穴や杭穴で、柱根や杭尻を残すものもあるが、それぞれの全体像は把握できない。井戸遺構は互いに重複するものが多く見られ、これらの前後関係を必ずしも明らかにはできないものもある。

第5・6図は調査結果の遺構全体の実測図である。それぞれ＊印の位置で接続する図である。確認調査結果における適格な判断から、遺構の北東部分の末端部を調査範囲の中に捕える事ができた。第5・6図の東側（下側）には幅の狭い外濠と広い内濠が平行して存在し、図の北側には内濠が直角に折れ曲がって存在する。ピット群の内、●印を付したものは柱根や杭尻を残していたものである（一部腐蝕に因って取揚げないものもある)。図の中で荒い破線で区画したA・B・Cは、第8～10図として抜粋したものである。この内Cは杭列であるが、その他は建物を想定できるピット群である。位置的にはグリットの6・7列には稀薄でそれぞれのエリアに分かれていた様子が伺われる。土坑はピット群に混在しているが、井戸はピット群の外部に位置することが明らかである。グリットの6・7列区域の井戸群とB～D－9－11区域の井戸群とは大きさの規模を異にする。これは下層部の地質の異なりに因るものと考えられるものである。

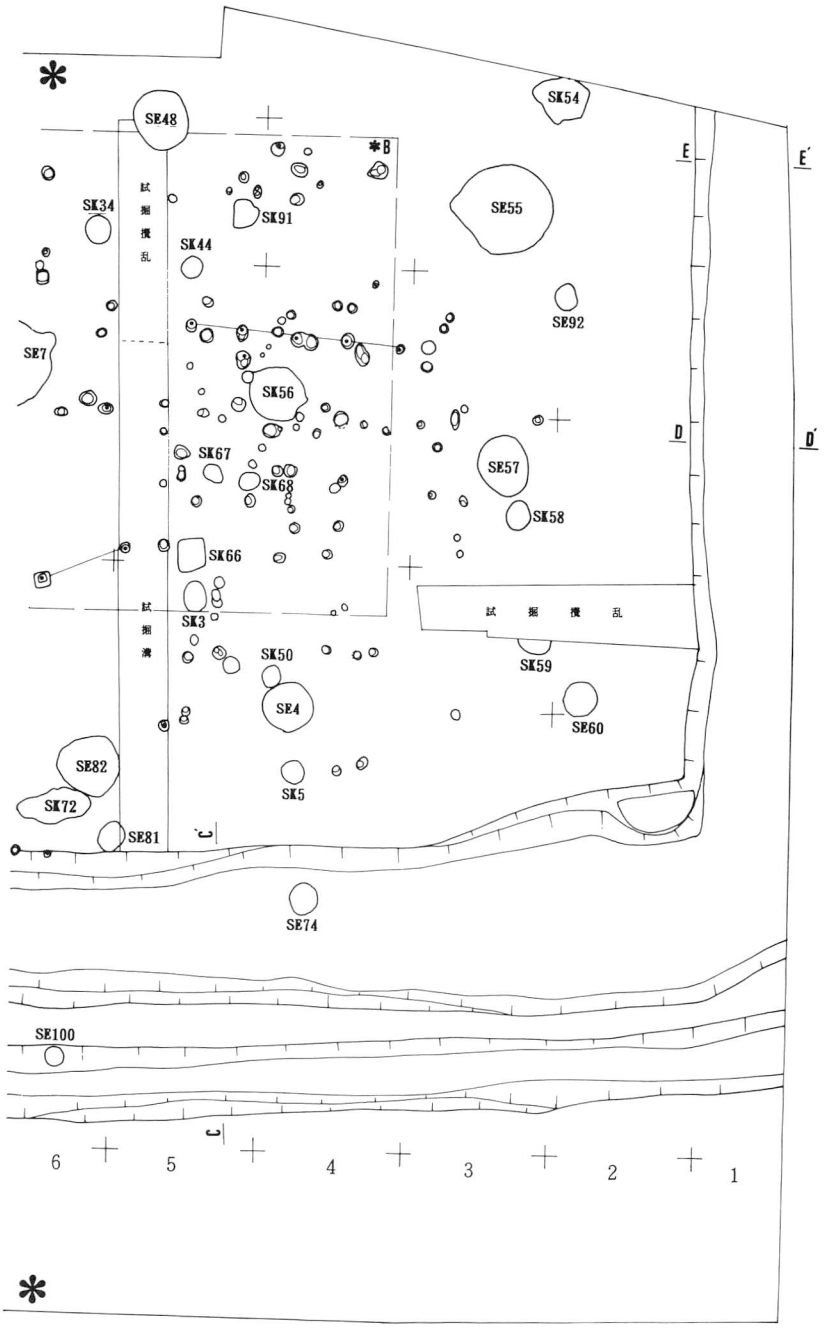
なお図中の周濠の数箇所にA－A′～E－E′の記号は第7図周濠断面図の測定箇所である。改めて周濠を図示しないのでここに付した次第である。また図中で「試掘」或いは「試掘攪乱」箇所は、前項に記した試掘におけるトレンチの跡である。

2 周　濠

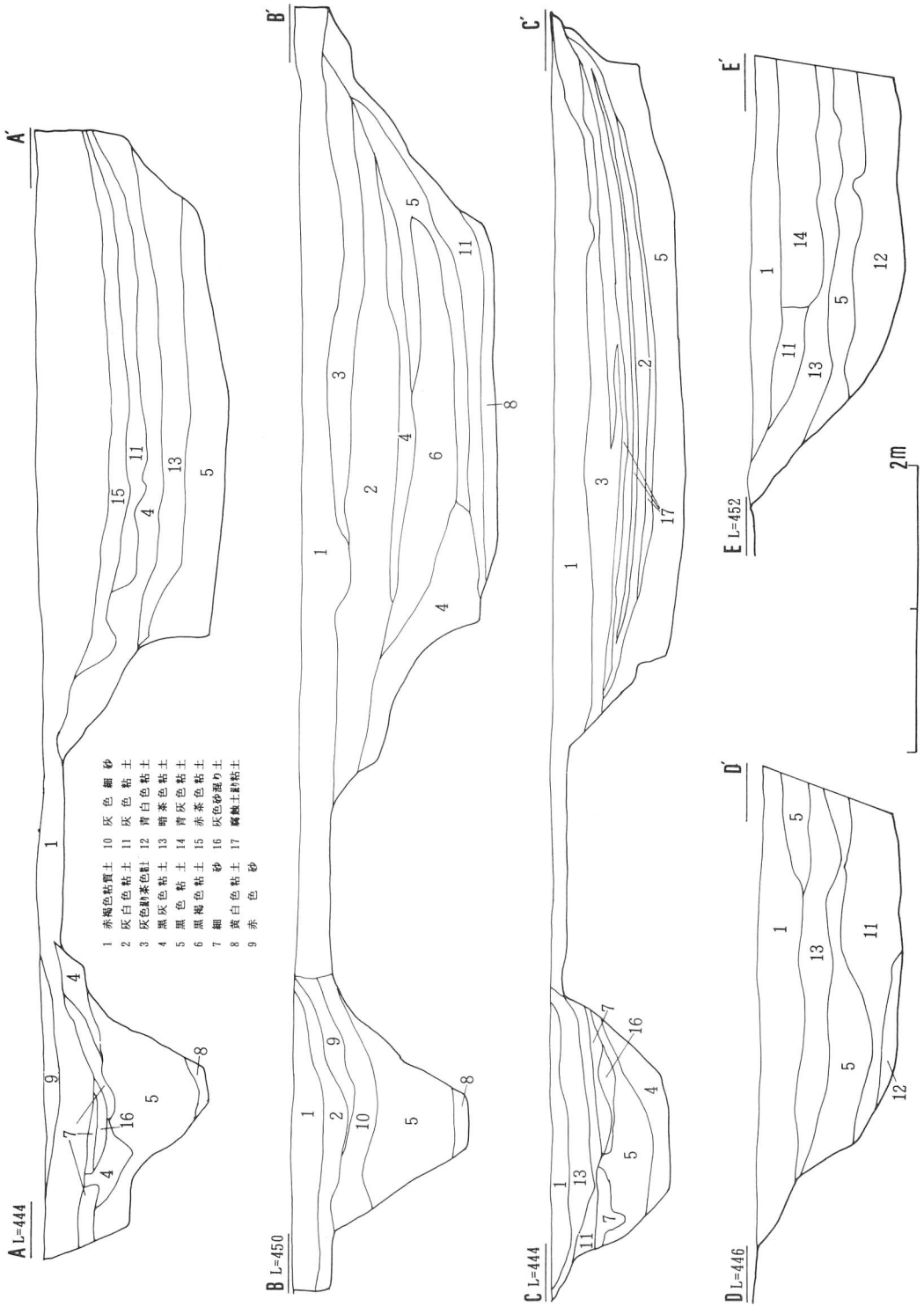
既に記載した如く遺構は2重の濠をもつ郭である。これらが同一時期に存在したものか、或いは異なった時期のものかはともかく、ここでは便宜上内濠、外濠と称する。まず外濠から記述する（第5図　図版4参照)。発掘調査区域の東側に添って約7m隔てて、南北にほぼ一直線に延びる。この位置はグリットのJ列に当たり、J－1～J－12区に及び調査範囲の全面に当たり、その全長は63.3m1～5区に掛けてはN2.5°W、5～12区に掛けてはN8.5°Eと僅かに湾曲する。上幅の最大は2.2m、最小2mでほぼ一定し、底部は8～12区に掛けてはV字状で北半


A
B
C
D
E
F
G
H
I
J
K
12
11
10
9
8
7
SE77
SE29
SE27
SK26
SK23
SE84
SK30
SE28
SE25
SE24
SK31
SK47
SE32
試掘溝
SE21
SK90
SK89
SE22
*A
SK43
SK45
SK33
SK42
SK64
SE8
SE7
SK20
SD12
SK86
SK19
SK36
SK87
SE102
SK35
SE71
SE11
SE99
SK10
SK46
SE80
試掘溝
SK79
SK97
SE76
SK88
SD69
SE70
SK96
SK18
SK40
SK15
SE73
SK17
SK16
SE39
SE95
SE98
SE75
*C
SE53
SE37
SE13
SE52
SE65
SK14
SE94
SE83
SE101
SE93
橋脚
SE85
橋脚
10m

第5図　遺構全測図　I


SE48
SK54
SK34
SK91
SK44
SE55
SE92
SE7
SK56
SK67
SK68
SE57
SK58
SK66
SK3
SK50
SK59
SE4
SE60
SE82
SK72
SK5
SE81
SE74
SE100
試掘攪乱
試掘溝
試掘攪乱
E
E′
D
D′
B
C
C′
6
5
4
3
2
1

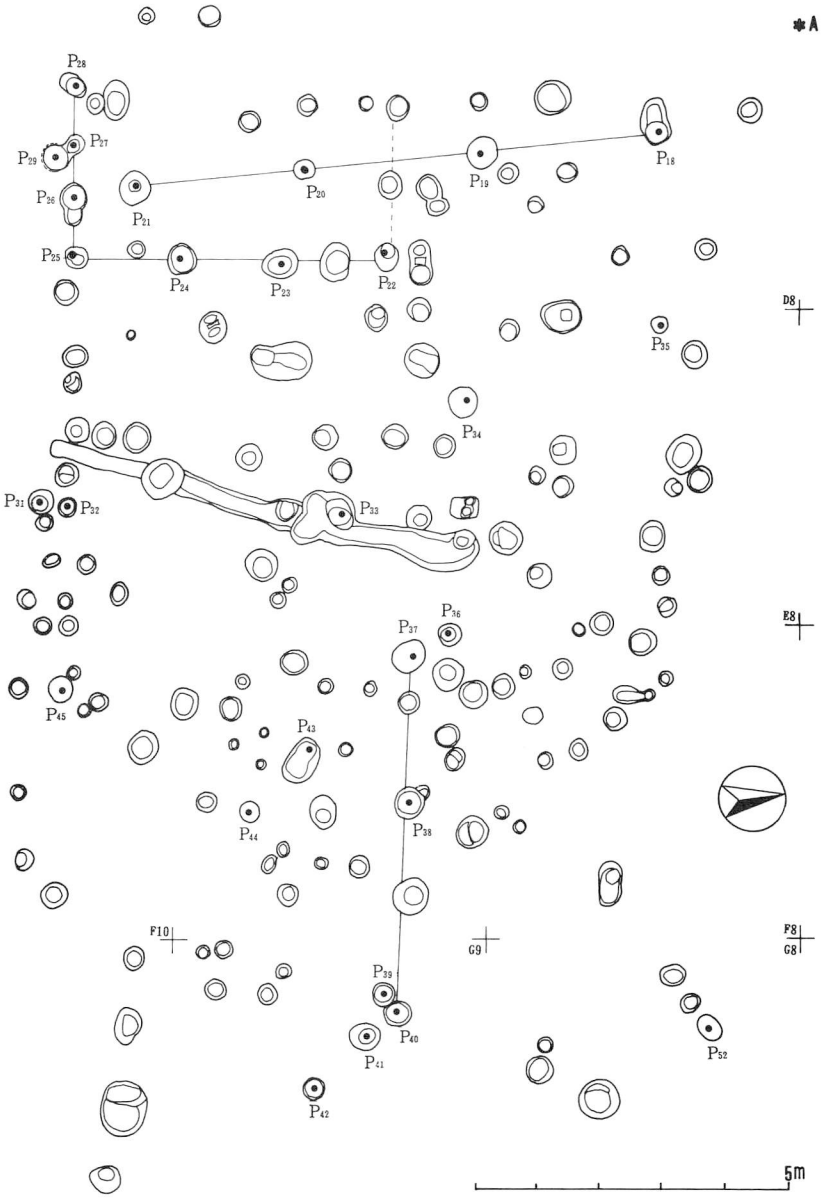
第6図　遺構全測図　II


A
A' L=444
B
B' L=450
C
C' L=444
D
D' L=446
E
E' L=452
2m
1 赤褐色粘質土
2 灰白色粘土
3 灰色粘土
4 黒灰色粘土
5 黒色粘土
6 黒褐色粘土
7 細砂
8 黄白色粘土
9 赤色砂
10 灰色細砂
11 灰色粘土
12 青白色粘土
13 暗茶色粘土
14 青灰色粘土
15 赤茶色粘土
16 灰色砂混り土
17 腐植土混り粘土

第7図　周濠地層断面図

は30〜60mと幅をもつ。深さは1.2〜1.3mで。北側では80とやや浅くなる。J−8区の底部の中心部に橋脚と考えられる杭を検出した。2本の細杭が1.2間隔で立つ。この内、北側のものは8・9間のピンラインに掛かって位置する。杭は北側は杉材、南側は栗材で共に焼杭であり、遺物割付けNo.480・481がそれである。

内濠は外濠に添って位置し、その間隔は0.8〜1.25mである。発掘位置ではグリットのI列に中心をおき2〜4区においては幅を広げH列に広がる。北側1区において西側へ直角に曲がる。

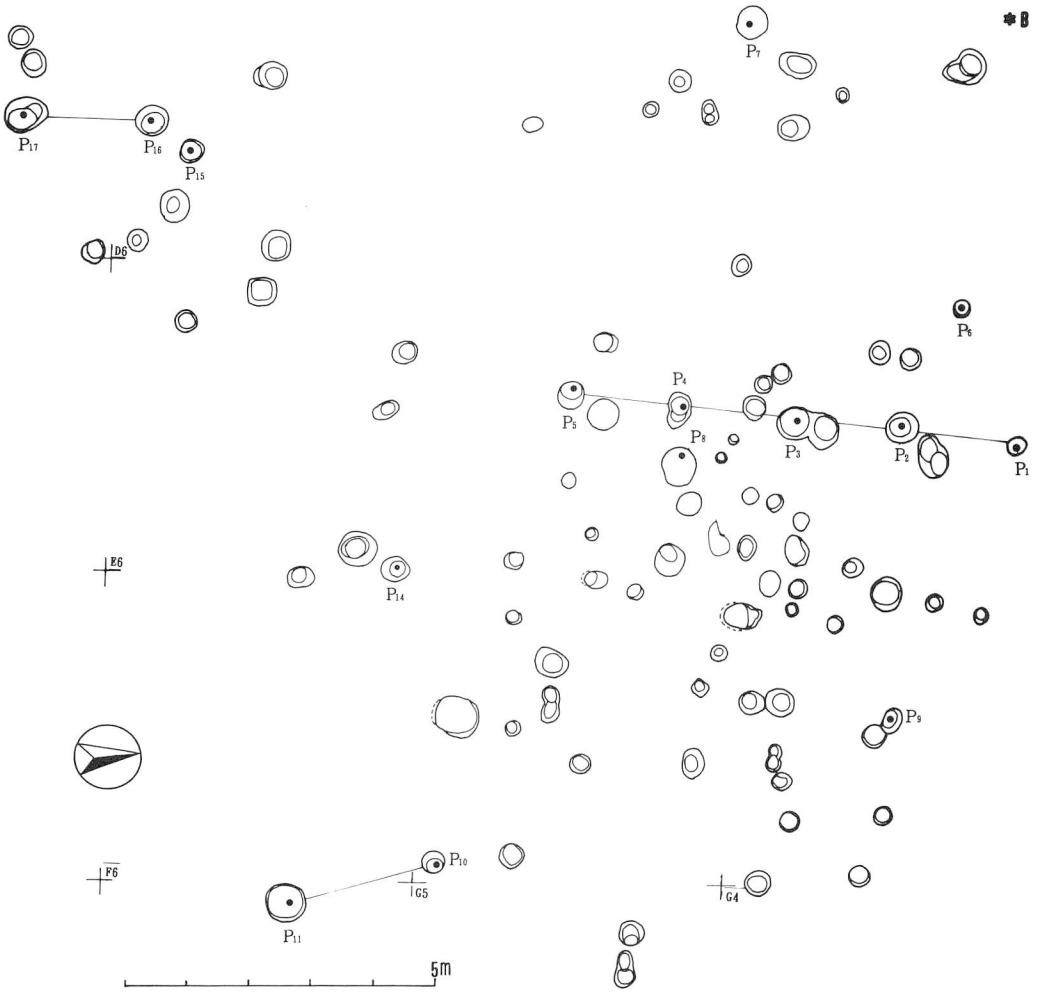


第8図　柱列とピット群　A

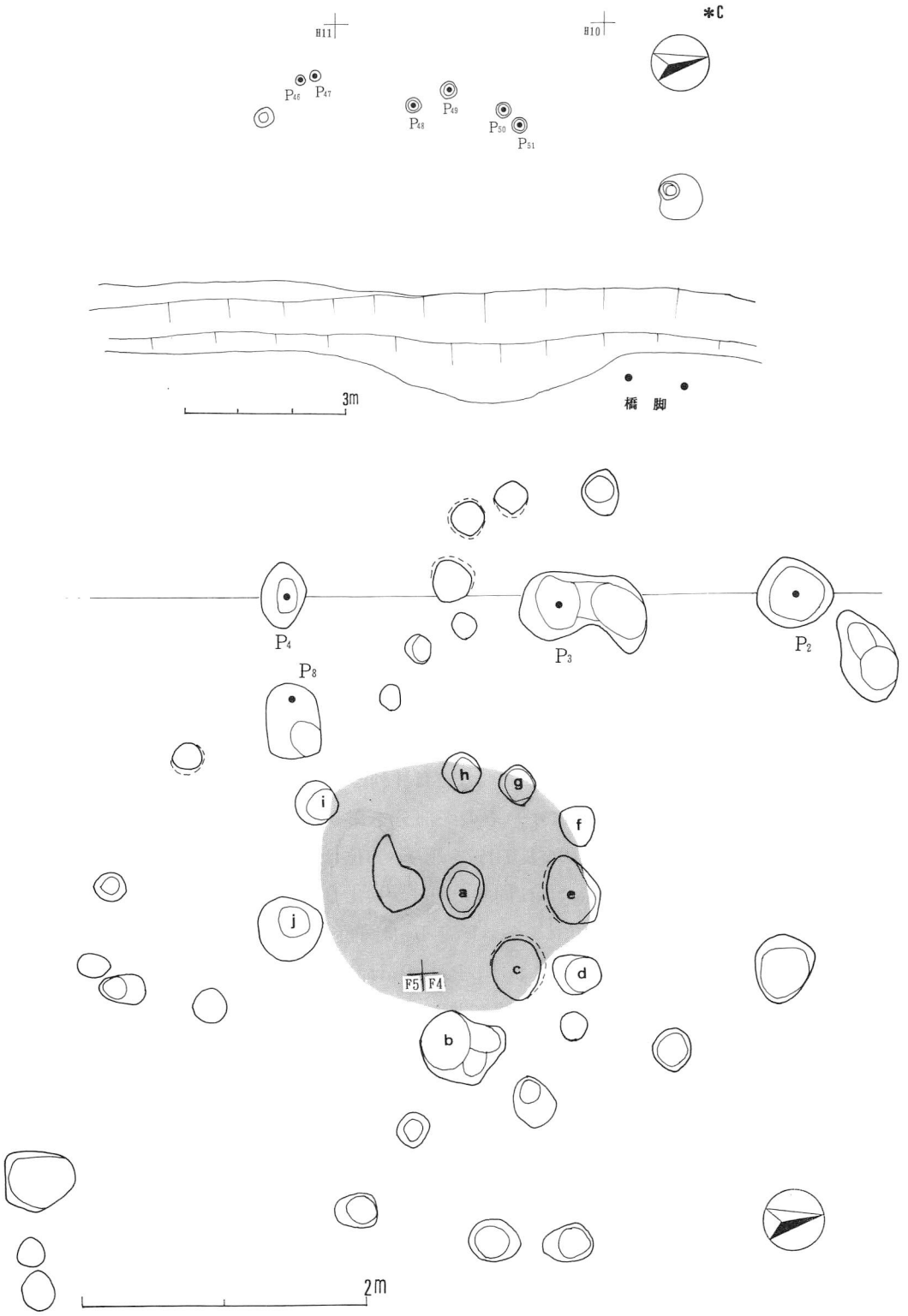
この位置での遺構はその外側が調査区域外に掛かるため福員の中ほどしか完掘していない。上幅は4〜12区に掛けては5〜5.4mであるが2・3区のコーナー部分に掛けては7〜7.8mを測る。底幅は2〜5.4mと一定ではなく底部は平坦である。深さは外濠と同様で、南側では1.3m前後で、北側のコーナー付近では80cm前後である。9区の底部内側寄りに橋脚と考えられる2本の杭が残る。この間隔は1.05mで、位置的には外濠のものより南側に寄っており、今、この内の北側のものは8・9間のピンラインより3.4m地点にある。橋脚そのものに関しては遺物の項で記すが、廃材の利用である。

3　ピット群

前述した如く多くのピット群ではあるが建物としての纏まりを把握し得ない。ここでは数基の柱列或いは杭列として記したい。AエリアはC−11・G−10〜D−8・D−8区を中心に点在す



第9図　柱列とピット群　B



第11図　ピット群（SK-56号上層）

表2　主な柱穴・杭穴一覧表

遺構番号	位置	計測(cm) 長径	短径	深さ	図示番号	遺構番号	位置	計測(cm) 長径	短径	深さ	図示番号	遺構番号	位置	計測(cm) 長径	短径	深さ	図示番号
1	E−4	30	28	28		19	D−9	49	48	84	332	37	F−9	54	49	65	345
2	〃	53	50	63		20	〃	36	34	94	333	38	〃	48	48	55	344
3	〃	55	52	53	351	21	D−10	54	47	62		39	G−9	36	37	52	343
4	E−5	56	36	42		22	D−9	49	38	31		40	〃	45	36	34	341
5	〃	46	40	70		23	〃	58	44	59		41	〃	50	41	51	330
6	E−4	26	26	42	337	24	〃	52	46	27		42	〃	34	32	40	347
7	D−4	54	50	58	342	25	D−10	36	34	40		43	F−9	72	48	44	354
8	E−5	60	52	53	338	26	〃	46	42	53		44	〃	32	32	25	349
9	F−4	43	29	25	329	27	〃	33	30	17		45	F−10	40	38	5	358
10	F−5	37	36	45	325	28	〃	48	30	46		46	H−11	19	19	40	339
11	G−6	68	64	110	324	29	〃	41	40	71	335	47	〃	21	19	9	腐蝕
12	H−5	38	38	32	340	30	C−11	48	32	31	350	48	H−10	31	27	22	355
13	H−6	26	24	40	腐蝕	31	E−10	40	38	34	348	49	〃	34	30	20	331
14	E−6	44	37	69	336	32	〃	30	30	48	346	50	〃	26	25	46	326
15	D−6	38	37	85	353	33	E−9	50	40	61	腐蝕	51	〃	27	26	20	腐蝕
16	〃	50	50	19	328	34	〃	45	44	33	352	52	G−8	46	32	27	腐蝕
17	D−7	66	52	28	357	35	E−8	28	26	48	腐蝕	53	G−7			50	327
18	D−8	73	43	56	334	36	F−9	38	34	32	356						

る。この範囲の一部分を第8図に拡大して示した。P_{18}〜P_{21}は4間の柱列でそれぞれ柱根を残す。それぞれ2.9、2.8、2.7mを一間とし、都合8.53mを測り、方位はN3°Eで、太い柱根を残している。P_{22}〜P_{25}〜P_{28}は4間×4間で柱根を残し、前者に重複して存在する。桁行5m、梁行2.7mである。北側梁行にも柱穴を見るが関連性は期待できない。今この桁行の方位はN8°Eである。P_{37}〜P_{40}、又はP_{40}〜P_{42}などは柱列としては難題である。BエリアはD−7・G−6〜D−4・G−4区に広がり、その一部分を第9図に示した。P_1〜P_5は4間の柱列で、それぞれ1.8m前後の柱間で全長7.1mを測り、方位はN13°Eである。これに対応するものは確認できない。P10、P_{11}はほぼ同寸の角柱が検出したが前後の連結が不明である。2.4mの間隔を持ち、N10°Wの方角にある。P_{16}、P_{17}は図面上で連結したが、柱の形態に異なりを見る事から難題である。CエリアにおけるP46〜P51は乱杭である。6本がそれぞれ2本づづ関連するかの様に30、70、40cmの間隔をもって並ぶ。これらの目的などは不明である。前後するが第11図はBエリアの一部分でSK56号土坑の上層部に円形に並ぶピット群である。中心に1基のピットを持ち直径2mほどに9個のピットが円陣を組む。

4　井戸と土坑

前項で記述した如く総数44基の井戸と50基の土坑を検出した。井戸の一部は周濠に重複するものもあり、この館址の推移を詮索する何等かの手掛かりになるものもある。内部施設を有するものはSE-77号が唯一でその他は素掘り井戸であり、底部の「まなこ」などの明らかな施設も見られない。また平面的には全て円形である。重複して存在するものも複数を数え、例えばSE-11号

とSE-71号、SE-29号とSE-77号、SE-99号とSE-102号などがある。井戸の所在位置では、前項のピット群のエリアの外周にあり、①E-6～H-6・H8区、②B-9・11～C-11区、③H-11～12区に集中し、④D～E-3区になどにも点在する。下層部における地質の異なりからそれぞれの深度などに相違があるものと考えられ、②区域のものは比較的浅い。またSE-85号は内濠と外濠の凌ぎ部分に所在するが掘削後自噴が止まない。土坑はその所在を特定できず、ピット群エリアにも点在する。土坑の性格などは不明であり、また一部は時代を特定できないものもある。また明らかに現代のものも多数あり、これらは除外してある。

この他、溝状遺構SD-69号の他2基、SX-89号とした土坑状の不明遺構がある。井戸、土坑を含めて個々に付いては次項で記述する。

表3　井戸遺構一覧表

番号	遺構番号	位置	計測(cm)			番号	遺構番号	位置	計測(cm)		
			長径	短径	深さ				長径	短径	深さ
1	SE－4	G－4	175	170	173	23	SE－70	G－10	115	94	136
2	SE－7	E－6	304	290	189	24	SE－71	F－8	149	121	106
3	SE－8	E－7	175	169	170	25	SE－73	G－7	94	85	165
4	SE－11	F－8	173	154	118	26	SE－74	I－4	92	107	118
5	SE－13	H－8	145	132	163	27	SE－75	G－11	77	79	138
6	SE－21	C－10	121	115	116	28	SE－76	G－6	137	140	121
7	SE－22	D－10	119	111	114	29	SE－77	A・B－11	120	120	164
8	SE－24	C－10	78	74	98	30	SE－80	F－9・10	119	105	128
9	SE－25	B－10	81	76	103	31	SE－81	H－5・6	96	85	119
10	SE－27	B－11	109	106	119	32	SE－82	〃	205	219	270
11	SE－28	〃	85	106	118	33	SE－83	H－11	118	148	228
12	SE－29	〃	198	206	142	34	SE－84	B－9	133	132	140
13	SE－32	C－11・12	152	132	131	35	SE－85	I－11	121	111	250
14	SE－37	G－12	130	132	260	36	SE－92	E－2・3	86	78	101
15	SE－39	G・H－10	142	170	166	37	SE－93	H－8	107	130	194
16	SE－48	C・D－5	182	204	285	38	SE－94	H－7	231	231	279
17	SE－52	H－8	134	137	200	39	SE－95	G・H－8	114	169	226
18	SE－53	〃	175	136	166	40	SE－98	G－7	257	323	294
19	SE－55	D－3	300	354	225	41	SE－99	F－7	170	185	268
20	SE－57	F－3	176	205	257	42	SE－100	J－6	67	67	145
21	SE－60	G－2	102	108	104	43	SE－101	H－11	87	82	119
22	SE－65	H－7	175	120	160	44	SE－102	F－7	140	145	190

表4　井戸の地層

1	赤褐色粘質土	10	灰色砂
2	暗褐色粘土	11	褐色土
3	黒褐色粘土	12	黒灰
4	灰色粘土	13	黒褐色土
5	黒色腐蝕土(炭化)	14	青色粘土
6	黒色粘土	15	細砂
7	黄褐色粘土	16	茶褐色粘土
8	赤褐色粘土	17	黒灰色土
9	黒灰色粘土	18	茶色腐蝕土

表6　土坑の地層

1	赤褐色粘質土	7	灰色粘土
2	黒色粘土	8	黒灰
3	赤茶色粘土	9	黄褐色砂質土
4	黒色土	10	黒灰色粘土
5	黒褐色土	11	暗褐色土
6	赤褐色土	12	黄褐色粘土

表5　土坑・その他の遺構一覧表

番号	遺構番号	位置	計測(cm) 長径	短径	深さ	番号	遺構番号	位置	計測(cm) 長径	短径	深さ
1	SK−3	G−5	101	72	60	26	SK−50	G−4	75	70	27
2	SK−5	H−4	79	78	18	27	SK−54	C−2・3	195	150	61
3	SK−6	I−4	115	80	15	28	SK−56	F・E−4・5	183	178	82
4	SK−10	F−8	103	99	70	29	SK−58	F−3	99	80	50
5	SK−14	H−9・10	123	103	86	30	SK−59	G−3	133	34	51
6	SK−15	G−9	210	158	73	31	SK−63	I−11	75	74	16
7	SK−16	G−10	80	75	41	32	SK−64	E−9	90	75	54
8	SK−17	〃	101	92	48	33	SK−66	F・G−5	107	100	92
9	SK−18	〃	81	76	103	34	SK−67	F−5	80	58	68
10	SK−19	E・F−9	112	95	72	35	SK−68	F−5	57	75	28
11	SK−20	E−10	70	70	60	36	SK−72	H−6	71	57	44
12	SK−23	B−12	150	41	10	37	SK−79	G−9	117	104	28
13	SK−26	〃	72	61	64	38	SK−86	E・F−10	80	75	43
14	SK−30	B−12	86	85	76	39	SK−87	F−10	78	77	47
15	SK−31	C−12	85	73	73	40	SK−88	G−9	100	86	32
16	SK−33	D−11	150	132	82	41	SK−90	C−9	90	80	75
17	SK−34	D−6	95	90	90	42	SK−91	D−5	96	85	83
18	SK−35	F−11	85	73	40	43	SK−96	G−7	96	112	87
19	SK−41	I−11	60	60	68	44	SK−97	〃	67	70	65
20	SK−42	D−10	72	62	63	45	SD−12	E−9・10	710	54	20
21	SK−43	D−6	79	62	63	46	SD−69	G−11・12	684	105	18
22	SK−44	E−5	80	74	23	47	SX−36	F−11	270	77	21
23	SK−45	D−10・11	148	115	59	48	SX−61	H・I−2	156	140	12
24	SK−46	F−12	64	55	37	49	SX−62	I−2・3	240	161	10
25	SK−47	C−12	63	60	16	50	SX−89	C−8	90	79	68

5　遺構と遺構出土遺物

SE－4号と遺物　（第12図　図版5　表7参照）

やや孤立した位置にありSK50号に接しているが関連性は認められない。底部は35cmと狭い。青磁碗の底部、須恵器系甕の胴部細片、摺鉢がある摺鉢のうち3は須恵器系、4は瓦質である。共に口縁部で面取りを持たない口唇部や、器の内外面に何等の特徴を持たない。

SE7号と遺物　（第12・13図　図版5　表7・8参照）

図版5に見られる如くSE－8号に接している。上部の崩壊がかなり進んだ様子が伺われ、3m程の上口を測る。また、この崩壊とは別に、相対する2方に作業用か或いは水汲み用と考えられるテラスがある。またこのテラスの一方に上層の柱穴が重複し、9の細柱が検出している。この

表7 掲載遺物一覧表　挿図No.12

割付No.	遺物No.	出土位置	名称又は形態	計測（mm）タテ器高	ヨコ口径	厚さ底径	残存率	造り 器表	造り 器内	造り 木器	胎土又は材質	焼成	色彩 器表	色彩 器内	備考
1	79	SE－4	青磁碗			44	12	無文	劃字		緻密	良	暗緑	暗緑	『林』
2	76	〃	須恵系甕				細	条線状叩文	ヨコナデ		長石　粗粒	中	暗灰	暗灰	割れ口を磨く
3	78	〃	〃　摺鉢				〃		擂目		微砂粒	良	黒	黒	
4	77	〃	瓦質　〃				〃	水挽	〃		〃	〃	黄土	黄土	
5	23	SE-7	須恵系　〃			150	4	ヘラ調整	〃		石英・長石微粒	中	〃	〃	SX-36に同一片
6	24	〃	瓦質　〃			122	5	ナデ	〃		長石　粗粒	〃	焦茶	薄茶	
7	25	〃	〃　〃			150	1	水挽・糸切	〃		石英・長石微・粗粒	良	暗灰	黒灰	炭化物付着
8	1378	〃	木製品　板状	380	32	8				削る	杉				
9	1875	〃	〃　柱	410	112	95				〃	楢				
10	1872	〃	〃　〃	300	130	100					栗				

1～4 S＝1／3　　5～10　S＝1／6

表8 掲載遺物一覧表　挿図No.13

割付No.	遺物No.	出土位置	名称又は形態	計測（mm）タテ器高	ヨコ口径	厚さ底径	残存率	造り 器表	造り 器内	造り 木器	胎土又は材質	焼成	色彩 器表	色彩 器内	備考
11	22	SE－7	須恵系　甕				細	条線状叩文	当て具・ナデ		長石　微粒	良	暗灰	暗灰	
12	27	〃	〃　〃				〃	〃	〃		〃	〃	茶灰	茶灰	胴部
13	29	〃	〃　〃				〃	〃	〃		〃	〃	灰	暗灰	〃
14	28	〃	〃　摺鉢				〃	ナデ	擂目		〃	〃	〃	〃	〃
15	26	〃	瓷器系　甕				〃	水挽	水挽・ナデ		長石　粗粒	〃	〃	茶	口縁部
16	30	〃	〃　摺鉢				〃	〃	擂目		〃	〃	茶	灰	
17	31	〃	〃　甕				〃	ナデ	当て具		石英・長石・細粒	〃	灰白	灰白	
18	32	〃	土師質　カワラケ				2	水挽	水挽		石英　微粒	中	薄茶	薄茶	
19	21	〃	青磁　皿	130			3				緻密	良	緑灰	緑灰	貫入
20	1379	〃	木製品　底板	80	46	5				削る	杉				平釘　曲物カ
21	1383	〃	〃　柄カ	135	19	23				〃	〃				
22	1041	〃	〃　不明	184	23	4				組む	〃				
23	320	〃	石製品　砥石	70	47	25									
24	319	〃	〃　〃	46	36	34									
25	321	〃	〃　〃	115	63	30									
26	314	〃	〃　石臼	110	300		12				石英粗面岩				上臼
27	37	SE－8	瓷器系　摺鉢			128	1	ナデ・糸切	擂目		石英・長石・微粒	良	明茶	明茶	SE-94に同一片
28	322	〃	石製品　砥石	111	79	60									三方と小口研ぎ面
29	1138	〃	木製品　板状	82	48	5					杉				
30	1364	〃	〃　組物側板	102	70	8					檜カ				升カ
31	1135	〃	〃　串カ	225	45	20					杉				
32	1134	〃	〃曲物側板カ	283	19	5					〃				

11～24・29・30 S＝1／3　　25～28・31・32　S＝1／6

表9 掲載遺物一覧表　挿図No.14

割付No.	遺物No.	出土位置	名称又は形態	計測(mm) タテ器高	ヨコ口径	厚さ底径	残存率	造り 器表	器内	木器	胎土又は材質	焼成	色彩 器表	器内	備考
33	1	SE-11	須恵系　甕		494		4	条線条叩文	水挽・当て具		石英・長石微粒	良	黒灰	黒灰	SE-8・99・16に同片
34	4	〃	〃　鉢	108	240	120	5	水挽・糸切			微砂粒	不	灰	灰	剥離
35	1869	〃	木製品　柱	200	206	160					不明				
36	2	〃	須恵系　甕				細	条線条叩文	水挽・当て具		石英・長石微粒	良	灰	灰	
37	3	〃	〃　〃				〃	〃	〃		緻密	〃	灰白	〃	
38	5	〃	〃　〃				〃	〃	当て具		石英・長石微粒	〃	暗灰	暗灰	胴部
39	6	〃	〃　摺鉢				〃	水挽	擂目		〃	〃	褐	灰	
40	7	〃	瓷器系　甕				〃	〃	ナデ		長石微粒	〃	茶	黄色	胴部
41	8	〃	〃　〃				〃	〃	〃		石英・長石微粒	〃	灰	茶	〃
42	9	〃	青磁　碗				〃	蓮弁文			緻密	〃	薄緑	薄緑	口縁部
43	49	〃	土師質カワラケ	15	91	72	3	ナデ	ナデ		石英微粒	不	薄茶	薄茶	
44	323	〃	石製品　砥石	68	65	21									三方と小口研ぎ面
45	10	〃	染付　皿	22	104	48	6	方相華唐草文	十字花文		緻密	良			
46	346	〃	金工品　銭貨		24										「元符通寶」
47	1367	〃	木製品コモヅチ	220	40	45				削る	栗				
48	1366	〃	〃　組物カ	297	33	9				釘止	杉				
49	48	SE-71	須恵系　壺A				細	水挽	水挽		石英・長石・微粒	良	灰	灰	胴部
50	1126	〃	木製品　杭	185	47	45				削る	杉				現代物カ

33～35　S＝1／6　　36～50　S＝1／3

柱に関連するものと考えられるピットは無く、この柱も当井戸との関連性は認められない。なお10の柱は井戸内に流入したものである。検出された遺物は多く、甕、鉢、カワラケ、青磁、石製品、木製品がある。甕には須恵器系の11～13、瓷器系の15・17、鉢は摺鉢で同じく須恵器系の5・14、瓷器系の16があ。瓷器系の甕、鉢共に越前焼きである。木製品では生活関連、生産関連用具と推定されるものがあり、石製品は砥石類と石臼である。石臼は搗臼と挽臼と混同しやすいが、挽臼すなわち挽磨臼の上臼である（図版21参照）。図示した如く臍受けには金輪が嵌め込まれている。図示したものの他、土器片7、木製品9点の出土がある。

SE－8号と遺物　（第13図　図版5　表8参照）

SE－7号の南側に隣接して位置する。7号に比して極端に小さく感じられようが上口170cm前後であり、ここでは中ぐらいに値するものである。深さは僅かに浅い事から7号に先行するものであろう。27は瓷器系の摺鉢である。後述するSE－94号出土の破片に接続する。木製品では升、曲物と推定される側板の他、31の串は呪術関連のものであろう。図示したものの他、木製品2点がある。

SE－11号と遺物　（第14図　図版5　表9参照）

ピット群のAエリアに接して位置しSE－71号と重複しており、71号が先行する。深さは118cmと浅く底部は広い。遺物は比較的多く陶磁器、木製品、銭貨がある。33は須恵器系の甕で口径49.4cmを知り得る数少ないものである。また口縁部を強く折り返した形態でここでは古手のものの一つである（図版10参照）。34は須恵系の鉢であるが擂目を持たない。瓷器系の甕40、41は共に胴部の細片である。42、45は青磁碗と染付皿である。後者はいわゆる明染付で唐草と十字花文の青花がある（図版16参照）。46の銭貨は「元符通寶」である。木製品の47はコモヅチ（薦槌）、48は箱物の側板であろう。

表10 掲載遺物一覧表 挿図No.15

割付No.	遺物No.	出土位置	名称又は形態	計測(mm) タテ器高	ヨコ口径	厚さ底径	残存率	造り 器表	器内	木器	胎土又は材質	焼成	色彩 器表	器内	備考
51	1221	SE-13	木製品刀物の柄	120	28	10				割る	杉				
52	82	〃	須恵系 摺鉢				細	水挽	擂目		石英・長石微・荒粒	中	黄灰	黄灰	胴部
53	103	SE-53	青磁 碗				〃	無文	無文		緻密	良	薄緑	薄緑	
54	1259	〃	木製品 ヒデ	102						削る	松				焼け
55	1131	〃	〃 串状	150	17	12				〃	杉				
56	1130	〃	〃 ハシ状	170	7	4				〃	〃				
57	1129	〃	〃 〃	200	6	4				〃	〃				
58	1128	〃	〃 〃	230	8	5				〃	〃				
59	1127	〃	〃 飾機カ	300	30	10					〃				物掛機カ
60	324	〃	石製品 砥石	104	38	29									四方に研ぎ面
61	101	SE-27	須恵系 摺鉢				細	水挽	擂目		石英長石微粒	良	灰	灰	胴部
62	100	〃	瀬戸系 瓶カ				1.5	施釉	ナデ						貫入
63	1810	〃	木製品 舟形	137	18	11				抉る	檜カ				形状

51～63 S=1／3

表11 掲載遺物一覧表 挿図No.16

割付No.	遺物No.	出土位置	名称又は形態	計測(mm) タテ器高	ヨコ口径	厚さ底径	残存率	造り 器表	器内	木器	胎土又は材質	焼成	色彩 器表	器内	備考
64	42	SE-29	青磁 碗				細		唐草文		緻密	良	黄緑	黄緑	胴部
65	41	〃	〃 〃				〃		〃		〃	〃	〃	〃	〃
66	40	〃	近世陶器 〃			76	3	水挽	水挽		〃	〃	灰白	薄黄	在地陶器
67	43	〃	土師質カワラケ				細	ナデ	ナデ		石英・長石細粒	不	赤茶	赤茶	
68	1326	〃	漆器 碗	51	156	82	10	黒漆	下地樹液カ		長石微粒	〃	灰白	灰白	
69	39	〃	須恵系 壺A		240		2	水挽	水挽						
70	1879	SE-77	木製品 曲物	610	560	500	12			綴る	杉				井戸側
71	1880	〃	〃 〃	540	466	92	12			〃	〃				〃

64～68 S=1／3 69 S=1／6 70～71 S=1／12

SE-71号と遺物 （第14図 表9参照）

SE-11号と重複しておりこれに先行することから辛うじて計測が可能であった程度である。須恵器系壺A類の腰部細片と杉の割杭が出土している。しかし杭は新しい物で偶然の物と推定される。

SE-13号と遺物 （第15図 図版5・6 表10参照）

SE-53号のテラス部分と接合し53号が先行する。13号は底部が湧水の為に大きく抉られて広がっている。底部には自然木がよこたわっている。須恵器系鉢1点の他、包丁の柄と考えられる木製品1点を図示したが、この他5点の木製品が出土している。

SE-53号と遺物 （第15図 表10 図版22・29参照）

底部が僅かに30cmと狭い構造で、隣接する13号よりやや深い。出土遺物は53の青磁碗、60の砥石の他は木製品である。ヒデとは灯明用の小型の松明である。ハシ状木製品は串と同様の呪術用具の可能性もある。56の切り込みのある桟状の物は想像の域を出ない。図示したものの他、木製品4点がある。

SE-21号・SE-22号・SE-24号・SE-25号・SE-28号（第15図 図版5参照）

いずれも遺物は無く、また小規模の物である。この内、24号が中膨らみで底部が15cmと狭い特

表12 掲載遺物一覧表 挿図No.17

割付No.	遺物No.	出土位置	名称又は形態	計測(mm) タテ器高	ヨコ口径	厚さ底径	残存率	造り 器表	造り 器内	造り 木器	胎土又は材質	焼成	色彩 器表	色彩 器内	備考
72	1306	SE-32	漆器 碗			75	7	黒漆・赤絵	赤漆						秋草絵
73	1815	〃	木製品底板	122	45	3				削る	杉				
74	1868	〃	〃 柱	510	195	160					栗				
75	1814	〃	〃 結物底板	310	185	4				削る	杉				
76	1061	〃	〃 折敷カ	288	256	2				〃	杉カ				
77	1213	SE-39	〃 串	432	16	16				〃	杉				

72・73・77 S=1／3 75・76 S=1／6 74 S=1／12

異な形態を呈している。

SE-27号と遺物 (第15図 表10 図版5参照)

小規模な井戸で図示した3点の遺物がある。62は瀬戸の施釉陶器で瓶の口縁部である。63はかなり破損が進んでいるが舟形の形代で呪術用具の一種である。

SE-29号と遺物 (第16図 表11 図版5参照)

SE-77号に隣接している。底部が砂層である事や湧水が激しい事から、掘削中に砂が押し出され大きく抉られる結果となった。青磁碗、カワラケの他、66は近世陶器で在地の所産であろう。68は漆器の椀であり、内面は漆膜が剥離し樹液らしい下地塗りが残っている。高台内の抉りを見ない平底を呈するものである(図版16参照)。69は須恵器系の壺Aの頸部片である(図版10参照)。この他、図示していないが土器片4、木片1点がある。

SE-77号と遺物 (第16図 表11 図版7・22参照)

SE-29号と口元で切り合いが見られ29号に後続する。唯一の内部施設を見るものである。大小2段から成る曲物井側である。29号で述べた如く底部が砂層である事や湧水が激しい事からの砂止めとして不可欠のものであったと推定される。井側は底部に小径のものを据え上段に大径のものを重ねている。下段の器には側板に中間に2枚の縦板を差し込み上の器を固定するものと考えられるが、この2者の口径に開きがあり、上段の器は下段の中程までずり落ちている。この状態での井側の高さは55cmで上部の素掘り部分は108cmである。曲物の径は表示した。

SE-32号と遺物 (第17図 表12 図版6参照)

ピット群Aエリアの南東に接して位置し、上層部に柱根を持つピットが重複して存在する。秋草の赤絵を持つ漆器椀を始め、容器などの生活用品の板類が検出されている(図版24参照)。折敷とは膳である。この他、木片4点がある。

SE-37号・39-号と遺物 (第17図 表12 図版6参照)

ピット群Aエリアの南東及び東側に位置する。37号は殆ど崩壊は見られず細くて深い。39号と共に狭い底部をさらに掘り込んでおり、「まなこ」を形成した事が推定される。因みに37号では径40cm、深さは20cm程である。

31号での出土遺物は図示しないが木片2点があり、39号からは串の出土がある。

SE-48号・52-号と遺物 (第18図 表13 図版6参照)

48号はピット群Ｂエリアの西側に接して位置する。285cm余の深さで最も深いものの一つに上げられる。図示した如くＶ字状を成し1.8m当たりから一気に内径が細まる。断面図で南側の上部が低いのは確認調査のトレンチで掘り込まれた部分である。須恵器系の甕片と摺鉢底部が出土した。この他、木片５点がある。

52号は井戸群がひしめく中にあり、殆ど崩壊を見ないことから比較的降代のものと思われる。木蓋と推定される一部分があり、木釘でのはぎ接いだもので漆塗りが施されている。

SE-55号と遺物　（第18・19図　表13・14図版６参照）

ピット群Ｂエリアの北西側に接して位置する大型の井戸で上部の崩壊がかなり進んでいる。底部に近く雑木の巨木が斜位にあり、そこで掘削を断念したものであろうが。深度は2.2ｍ程で充分といえるであろう。出土遺物は木製品が多く土器類では81の須恵器系鉢、82の瓦質の鉢の他、図示しないもの１点がある。木製品の内漆器では椀、杯、皿があり（図版16・17参照）、86の椀は傷みが激しく大きく歪んでいる。前後するが83のヒデ、84の楔、92の桶底板、102のキヌタ、

表13掲載遺物一覧表　挿図No.18

割付No.	遺物No.	出土位置	名称又は形態	計測（mm）タテ器高	ヨコ口径	厚さ底径	残存率	造り 器表	造り 器内	造り 木器	胎土又は材質	焼成	色彩 器表	色彩 器内	備考
78	59	SE-48	須恵器　甕				細	条線状叩文	当て具		石英・長石細粒	良	灰	暗灰	胴部
79	58	〃	〃　摺鉢			132	3	水挽・糸切	擂目		長石細粒	〃	暗灰	灰	
80	1133	SE-52	木製品　蓋カ	233	57	9					杉				漆塗り
81	95	SE-55	須恵系　摺鉢				細	糸切	ナデ		石英・長石細粒	良	暗灰	黒	底部
82	96	〃	瓦質　鉢カ				〃	水挽	水挽		石英細粒	〃	暗褐	黒褐	
83	1267	〃	木製品　ヒデ	150	15	1				削る	松				焼け
84	1365	〃	〃　楔	128	22	15				〃	杉				実繰りカ
85	1141	〃	木材切端	130	60	21					〃				

78・80～85　S＝1／3　79　S＝1／6

表14掲載遺物一覧表　挿図No.19

割付No.	遺物No.	出土位置	名称又は形態	計測（mm）タテ器高	ヨコ口径	厚さ底径	残存率	造り 器表	造り 器内	造り 木器	胎土又は材質	焼成	色彩 器表	色彩 器内	備考
86	1304	SE-55	漆器　椀			65	12	黒漆・赤絵	赤漆						歪み
87	1319	〃	〃　杯	31	85	54	12	〃	〃						『鶴紋』
88	1303	〃	〃　椀			67	7	〃	〃						
89	1320	〃	〃　皿	20	96	71	11	赤漆	〃・黒漆						高台内他の一部黒漆
90	1324	〃	〃　〃	26	88	62	7	黒漆	〃						
91	1140	〃	木製品　桟状	210	24	7				削る	杉				
92	1139	〃	〃　桶底板	340	233	14				〃	〃				
93	1047	〃	〃　高下駄	190	83	50				抉る	杉・桐				歯は胴
94	1079	〃	〃　〃	186	136	115				〃	朴・栗				歯は栗
95	1078	〃	〃　〃	170	82	34				〃	桐				中間部欠歯残片
96	1048	〃	〃　〃	73	44	30				〃	桐カ				先端部残片
97	1057	〃	〃　〃	68	82	30				〃	杉				残片
98	1056	〃	〃　〃	74	68	38				〃	桐				〃
99	1081	〃	〃高下駄の歯	98	92	17				削る	イタヤカエデ				〃
100	1080	〃	〃　〃	163	113	15				〃	栗				
101	1082	〃	〃　〃	101	55	16				〃	桐カ				残片
102	1074	〃	〃　キヌタ	355	70	70				〃	栗				割れを削り直す
103	1390	〃	〃　矢板	437	75	25				〃	杉				
104	1391	〃	〃　〃	513	92	29				〃	〃				

86～90　S＝1／3　91～104　S＝1／6

表15 掲載遺物一覧表 挿図No.20

割付No.	遺物No.	出土位置	名称又は形態	計測(mm) タテ器高	ヨコ口径	厚さ底径	残存率	造り 器表	器内	木器	胎土又は材質	焼成	色彩 器表	器内	備考
105	36	SE-57	須恵系 甕				細	条線状叩文	当て具		石英・長石細粒	良	暗灰	暗灰	SE55・99に同一片
106	1196	〃	木製品ハシ状	65	5	5				削る	杉				
107	1197	〃	〃 〃	207	7	3				〃	〃				
108	1311	SE-60	漆器 椀			75	4	黒漆	赤漆						
109	84	SE-65	須恵系 摺鉢				細	水挽	擂目		石英・長石細粒	良	灰	灰	胴部
110	1251	〃	木製品高下駄の歯	130	107	17				削る	杉				
111	1246	〃	〃 板状	150	39	6				〃	〃				
112	92	SE-74	瓷器系 甕				細	水挽	水挽		石英・長石細粒	良	茶	茶	胴部
113	1058	SE-73	木製品高下駄	217	123	104				抉る	杉・欅				歯は欅

105～109・112 S=1／3 110・111・113 S=1／6

93～98の高下駄、99～101の高下駄の歯があり、103・104の矢板状のものがある。この他、図示していないが、桟や板状のもの23点がある。

SE-57号と遺物 (第20図 表15 図版6参照)

ピット群Bエリアの北側に接して位置し、上部は崩壊しているものの深さ257cmと深い部類に属し、且つ細掘りである。須恵器系の甕片とハシ状木製品2点がある。この他、図示に耐えない土器片3点、木片16点がある。

SE-60号・65-号と遺物 (第20図 表15 図版6参照)

60号は最も北東の隅に位置し、深さは104cmと浅いが井戸と見られる。フラスコ状に中膨れであり、漆器椀を検出した。

65号は井戸群がひしめく中に位置し、30cm程下がるテラスがあるため平面的には三角形を成す。須恵器系摺鉢、高下駄の歯などが出土している。

SE-73号・74-号・75-号と遺物 (第20図 表15 図版7参照)

それぞれ分離して位置するが、概して東側にある。前後するがこの内、74号が内濠に重複する形で検出されており(図版4－1参照)、内外濠やこの館址の存続に絡む何等かの手掛かりを残すものである。構造的には下膨れのフラスコ状で底部に「まなこ」を設けた可能性が見られるものである。瓷器系甕片が出土している。

73号・75号は共に細形で原形を良く止めている。そして後者はやや方形であり希少な存在である。73号から高下駄(図版27参照)の出土がある。

SE-70号・76-号と遺物 (第21図 表15 図版6参照)

ピット群Aエリアにあるものの一基であり、方形の小型の井戸でほぼ原形を止めている。木製品を中心に検出されている。114は曲物製の柄杓で柄を失っている(図版23参照)。115はほぼ同径の曲物である。118の高下駄、119の下駄(図版27参照)の他、120は柄を失っているが鋤と考えられるものである。この他、図示しない木片3点がある。

76号はピット群Bエリアの南側に位置する小型のものである。青磁碗、石臼、矢板の他125・126は樽の栓であろう。この他、木片1点がある。

SE-80号と遺物 (第22図 表17 図版7参照)

表16 掲載遺物一覧表 挿図No.21

割付No.	遺物No.	出土位置	名称又は形態	計測(mm) タテ器高	ヨコ口径	厚さ底径	残存率	造り 器表	器内	木器	胎土又は材質	焼成	色彩 器表	器内	備考
114	1031	SE-70	木製品 柄杓	45	98		12			綴る	杉				曲物 柄欠失
115	1032	〃	〃 曲物	37	95		12			〃	〃				底部欠 破損
116	1104	〃	〃 木端状	115	68	3				削る	〃				
117	1042	〃	〃組物側板	142	11	5				〃	〃				木釘入り
118	1063	〃	〃 高下駄	203	96	43				抉る	桐				歯欠失
119	1064	〃	〃 下駄	234	147	22				削る	栗				
120	1102	〃	〃 木鋤カ	300	178	30				〃	杉				柄欠失
121	1103	〃	〃 板状	340	147	25					栗				
122	104	SE-76	青磁 碗				細	無文	無文		緻密	良	薄緑	薄緑	貫入
123	315	〃	石製品 石臼	117	308		4								上臼
124	1132	〃	木製品 矢板	175	185	30				削る	杉				
125	1155	〃	〃 栓	103	40	40				〃	桐				
126	1154	〃	〃 栓カ	160	67	60				〃	〃				

114～117・122 S=1／3 118～121・123～126 S=1／6

表17 掲載遺物一覧表 挿図No.22

割付No.	遺物No.	出土位置	名称又は形態	計測(mm) タテ器高	ヨコ口径	厚さ底径	残存率	造り 器表	器内	木器	胎土又は材質	焼成	色彩 器表	器内	備考
127	15	SE-80	土師質 皿		140		2	水挽	水挽		緻密	良	灰白	黒	炭化物付着京都系
128	12	〃	須恵系 甕				細	条線状叩文	水挽・当て具		石英・長石微粒	〃	暗灰	暗灰	胴部
129	13	〃	瓷器系 甕				〃	ナデ	圧痕		長石粗粒	〃	茶	明茶	底部
130	14	〃	〃 〃				〃	〃	ナデ		長石微粒	〃	明茶	焦茶	〃
131	20	〃	〃オハジキ		18										陶片利用
132	18	〃	瓦質火器		152		4	花菱押印文	水挽		長石微粒	良	灰	肌	SK14 15に同一片
133	1774	〃	木製品 不明	222	9	9				抉る	杉				組物 釘穴
134	1773	〃	〃 ヒデカ	135	15	11				割る	松				
135	1772	〃	竹製品 竹箆	137	18	2				〃	根竹				
136	19	〃	瓦質火器				細	押印文			長石微粒	良	明茶	黒灰	
137	16	〃	〃 〃		198		2	ミガキ	水挽		緻密	〃	灰	肌	
138	17	〃	〃 〃	155	310	200	3	水挽	〃		〃	〃	〃	灰	
139	1771	〃	木製品高下駄	157	85	35				抉る	桐				表面焼け焦げ
140	1247	〃	〃 桟状	278	25	13				削る	杉				
141	1248	〃	〃 ハシ状	320	6	4				〃	〃				
142	1802	〃	木材切端	93	70	60					〃				
143	1011	〃	木製品 杭	195	125	47				削る	楢				ホゾ穴転用品
144	1012	〃	〃 〃	850	70	60				〃	不明				
145	1881	〃	〃 〃	496	121	44				〃	楢				
146	11	〃	須恵系 甕		500		2	条線状叩文	水挽・当て具		石英・長石微粒	良	暗灰	暗灰	

127～135 S=1／3 136～142 S=1／6 143～146 S=1／12

SE70号と共にピット群Aエリアにあるものの一基で、保存状態が良い。小型でありながら多くの遺物を検出した。127は薄手の土師質の皿で京都系の産物であり、数少ないものの内に入る(図版19参照)。瓦質の火器132・136～138の4点を見、それぞれ形態を異にするものである(図版20参照)。瓷器系の甕、須恵器系の甕があり、後者はある程度の形態を掴む事ができる。131は陶片を打欠いたオハジキであり、遊具と考えられるものである。木製品では串状のもの、高下駄、杭の他、135の竹箆は根竹を材料としたものである(図版25参照)。この他、図示しないものに土器片3、木片9点がある。

表18 掲載遺物一覧表 挿図No.23

割付No.	遺物No.	出土位置	名称又は形態	計測(mm) タテ器高	ヨコ口径	厚さ底径	残存率	造り 器表	器内	木器	胎土又は材質	焼成	色彩 器表	器内	備考
147	1825	SE-81	木製品 底板	210	75	8				削る	杉				
148	1223	〃	〃箱物側板	125	65	8				抉る	〃				
149	1224	〃	〃 〃	130	54	9				削る	檜カ				
150	91	〃	土師質カワラケ				細	回転糸切り	水挽		雲母微粒	中	肌	肌	
151	1198	SE-82	木製品桟状	310	12	8				削る	杉				
152	1843	〃	〃 底板	120	20	10				〃	〃				
153	74	SE-84	青磁 碗				細	無文	無文		緻密	良	薄緑	薄緑	貫入
154	75	〃	土師質カワラケ			58	10	箆切	ナデ		石英・長石微粒	〃	黒灰	黒灰	
155	1161	〃	木製品楔状	105	70	45				切る	杉				

147～155 S=1／3

表19 掲載遺物一覧表 挿図No.24

割付No.	遺物No.	出土位置	名称又は形態	計測(mm) タテ器高	ヨコ口径	厚さ底径	残存率	造り 器表	器内	木器	胎土又は材質	焼成	色彩 器表	器内	備考
156	1328	SE-83	漆器 椀カ					黒漆・赤絵	赤絵						側面残片
157	1315	〃	〃 皿	16	100	66	5	黒漆	黒漆・赤絵						
158	97	〃	瀬戸系 碗		148		1	施釉	施釉		緻密	良	黄灰	黄灰	貫入
159	98	〃	青磁 〃		140		1	蓮弁文	無文		〃	〃	青白	青白	〃
160	99	〃	須恵系 壺B				1.5	水挽	水挽		石英・長石微粒	〃	黒灰	黒灰	胴部
161	1839	〃	木製品箱物側板	178	43	5				抉る	杉				
162	1833	〃	〃有孔板状	120	45	5				〃	〃				
163	1838	〃	木製品 串	272	33	20				削る	檜				
164	1837	〃	〃 〃	288	17	17				〃	杉				
165	1840	〃	〃 〃	285	38	5				〃	檜				
166	1836	〃	〃 〃	220	8	8				〃	杉				
167	1835	〃	〃 〃	206	17	4				〃	〃				
168	1834	〃	〃 〃	106	9	7				〃	〃				
169	1831	〃	〃 栓カ	110	19	17				〃	檜カ				
170	1832	〃	〃 玩具カ	55	28	10				〃	イタヤカエデ				
171	1829	〃	〃 底板	100	92	6				〃	杉				
172	1830	〃	〃 〃	150	97	10				〃	〃				
173	81	SE-92	須恵系 摺鉢	80	200	120	3	水挽・ミガキ	擂目		長石粗粒	良	黄土	黄土	

156～172 S=1／3 173 S=1／6

SE-81号・SE-82号・SE-84号と遺物 （第23図 表18 図版7参照）

81号は内濠に接した位置で小型の井戸である。土師質で回転糸切底を持つカワラケの他は升などと推定される箱物などが出土している。この他、図示しないものに木片1点がある。

82号は深さ270cmと深い部類に分けられる。上半部は崩壊が進んでおり下部の1m程は筒状で保存度が良い。桟状のものと、側面に平木釘を止める底板が出土している。この他、木片10点がある。

84号はピット群Aエリアの西側に位置する小型のものである。底部において湧水が激しく北西部にかけて抉られた。青磁碗、カワラケの他木製品1点を図示したが、他に5点の木片が出土している。

SE-83号と遺物 （第24図 表19 図版7参照）

ピット群Aエリアの東側と内濠の間に位置する井戸で保存状態は良い。深さ228であるが底部の40cm程上に湧水による抉れの箇所が見られる。出土遺物は多く160の須恵器恵の壺B、159の

表20 掲載遺物一覧表 挿図№25

割付№	遺物№	出土位置	名称又は形態	計測(mm) タテ器高	ヨコ口径	厚さ底径	残存率	造り 器表	器内	木器	胎土又は材質	焼成	色彩 器表	器内	備考
174	1321	SE-85	漆器碗	62	160	72	8	黒漆・赤絵	黒漆・赤絵						
175	1226	〃	木製品曲物側板	210	25	2				削る	杉				
176	1250	〃	木製品 目皿	135	70	12				抉る	〃				
177	70	SE-93	須恵系 甕				細	条線状叩文	当て具		石英・長石微	良	黒灰	黒灰	胴部
178	71	〃	〃 〃				〃	〃	〃		長石 微粒	〃	灰	〃	〃
179	69	〃	〃 〃				〃	〃	〃		石英・長石微	〃	黒褐	暗褐	〃
180	72	〃	〃 〃				〃	〃	〃		長石 微粒	〃	黄灰	灰	〃
181	67	〃	〃 〃				〃	〃	〃		石英・長石微	〃	黒灰	暗灰	〃
182	68	〃	〃 〃				〃	〃	〃		長石 微粒	〃	黒褐	暗褐	〃
183	73	〃	〃 〃			132	5	〃	水挽		石英・長石微	〃	灰	暗褐	
184	66	〃	〃 〃		480		3	〃	当て具		石英・長石微	〃	黒灰	黒灰	SE52・99と接合
185	338	〃	金工品 短刀	130	22	4									
186	1370	〃	木製品 札状	70	26	9				削る	栗				
187	1215	〃	〃 板	122	16	4				〃	杉				
188	1214	〃	〃曲物側板	148	50	5				〃	〃				
189	1218	〃	〃 〃	276	42	4				〃	〃				
190	1125	〃	〃 〃	275	78	6				〃	〃				
191	1124	〃	〃 折敷	270	70	7				〃	〃				
192	1216	〃	〃 板	272	57	5				〃	〃				折敷カ
193	1217	〃	〃 木端	140	60	4				〃	〃				

174～180・185～187 S=1／3 181～183・188～193 S=1／6 184 S=1／12

蓮弁文をもつ青磁碗（図版15参照）、瀬戸系の施釉碗、157の赤絵の漆器皿（図版17参照）の他、箱物側板、串類がある。170はペンダント状の板で玩具か装飾ものであろう（図版26参照）。その他不明のものであるが、図示しないものに木片14点がある。

SE-92号と遺物 （第24図 表19 図版７参照）

口径、深さ共に小型であるが井戸である。良く原形を止めている。図示した173の須恵器系の摺鉢がある（図版11参照）。

SE-85号・SE-93号と遺物 （第25図 表20 図版７参照）

85号は調査区の最も南東側にあり、しかも内濠と外濠との凌ぎにあり、内濠に向いた斜面に位置する。この位置がその他の井戸などと比較して30cm前後下がったレベルにある。湧水と考えられるが、中程から下部がやや広がっているが、原形を良く止めている。また湧水のみに止まらず、自噴をし、その水高は口元を越えて内濠、外濠の地表面に達する。検出された遺物は漆器の赤絵の大型の椀（図版17参照）、曲物側板、４個の補修孔をもつ目皿（図版23参照）がある。この他、木片１点がある。

93号は井戸群がひしめく７・８列の内濠に接して位置している。西側の一部分が少々崩壊している程度である。底部に直径30cm、深さ10cm程が掘り窪められており、「まなこ」を要していたものと推定できる。図示した如く出土遺物は多いが、紙面のスペースの関係から順序が相前後して見苦しいものになっている。土器類では須恵器系甕であるが、それぞれ縮尺が異なっている。184の甕は隣接するSE-52号とさらにSE-99号出土のものと接合した（図版10参照）。185は短刀である。中程より先端部を失っている。木製品では殆ど生活関連用具である。この内186を札

表21 掲載遺物一覧表 挿図No.26

割付No.	遺物No.	出土位置	名称又は形態	計測(mm) タテ器高	ヨコ口径	厚さ底径	残存率	造り 器表	器内	木器	胎土又は材質	焼成	色彩 器表	器内	備考
194	108	SE-94	瓷器系 摺鉢			128	1.5	ナデ・静止糸切	擂目		石英・長石微粒	良	明茶	明茶	SE-8に同一片
195	44	〃	須恵系 甕		460		3	条線状叩文	当て具		長石 微粒	〃	黒灰	黒灰	窯印
196	45	〃	〃 〃				細	〃	〃		石英・長石微粒	〃	灰	暗灰	
197	46	〃	〃 摺鉢				〃	ナデ	擂目		石英・長石微・荒粒	〃	暗灰	黒灰	
198	1316	〃	漆器 椀	15	89	65	11	黒漆	黒漆						
199	1105	〃	木製品木簡様	80	20	4				削る	杉				
200	1121	〃	〃 舟形	185	40	25				抉る	〃				形代
201	1779	〃	〃 独楽	47	40	40				削る	〃				児童の作カ
202	1106	〃	〃 不明	205	36	5				〃	〃				形代カ
203	1151	〃	〃 〃	53	20	3				〃	〃				
204	1118	〃	〃 ハシ状	80	5	5				〃	〃				
205	1119	〃	〃 〃	69	6	4				〃	〃				
206	1117	〃	〃 〃	90	6	4				〃	〃				
207	1116	〃	〃 〃	100	4	4				〃	〃				
208	1112	〃	〃 〃	116	5	5				〃	〃				
209	1115	〃	〃 〃	105	7	5				〃	〃				
210	1114	〃	〃 〃	117	7	5				〃	〃				
211	1252	〃	〃 〃	125	6	3				〃	〃				
212	1113	〃	〃 〃	132	8	5				〃	〃				
213	1363	〃	〃 〃	115	5	5				〃	〃				
214	1111	〃	〃 〃	175	8	5				〃	〃				
215	1110	〃	〃 〃	175	9	5				〃	〃				
216	1109	〃	〃 〃	205	6	5				〃	〃				
217	1225	〃	〃 折敷	151	38	2				〃	〃				
218	1209	〃	〃 木端状	98	28	4				〃	〃				草履の芯カ
219	1123	〃	〃 〃	88	15	2				〃	〃				〃
220	326	〃	石製品 砥石	64	56	40				〃	〃				四方研ぎ面

194・195 S=1/6 196～220 S=1/3

表22 掲載遺物一覧表 挿図No.27

割付No.	遺物No.	出土位置	名称又は形態	計測(mm) タテ器高	ヨコ口径	厚さ底径	残存率	造り 器表	器内	木器	胎土又は材質	焼成	色彩 器表	器内	備考
221	1075	SE-94	木製品センバ	218	76	51				抉る	櫨カ				把手欠失
222	1785	〃	〃カンジキカ	239	69	16				削る	栗				
223	1122	〃	〃 〃	78	69	22					〃				222と同一カ
224	1210	〃	〃 〃	70	59	10					〃				〃
225	1782	〃	〃コモヅチ	81	34	34				削る	栗カ				
226	1781	〃	〃 〃	180	40	40				〃	栗				小枝付き
227	1780	〃	〃 〃	170	38	38				〃	〃				
228	1784	〃	〃 柄	318	20	20				〃	〃				枝材 幹部に本体
229	1398	〃	〃 槌	146	73	73				抉る	〃				
230	1204	〃	〃 底板	130	42	9				削る	杉				
231	1150	〃	〃 折敷	90	70	6				〃	〃				
232	1207	〃	〃 板状	128	58	12				〃	栗				
233	1205	〃	〃 木端状	105	58	6				抉る	杉				未成品カ
234	1206	〃	〃 有孔板	102	55	7				〃	〃				
235	1202	〃	〃 木端	95	33	5				切込	〃				未成品カ
236	1208	〃	〃 桟状	104	37	8				削る	〃				
237	1108	〃	〃 桟	228	13	10				〃	〃				
238	1783	〃	〃 ヒデ	250	37	11				割る	松				焼け焦げ
239	1397	〃	〃 杭	446	33	31				削る					
240	1846	〃	〃 柱	278	133	100				〃	チャンチン				遺構上ピット出土

221～239 S=1/4 240 S=1/8

表23 掲載遺物一覧表 挿図№28

割付№	遺物№	出土位置	名称又は形態	計測(mm) タテ器高	ヨコ口径	厚さ底径	残存率	造り 器表	器内	木器	胎土又は材質	焼成	色彩 器表	器内	備考
241	80	SE-95	須恵系摺鉢				細	水挽	擂目・押印紋		石英・長石粗粒	良	灰白	灰	「二ッ巴」紋
242	1070	〃	漆器皿	10		65	4	黒漆	黒漆						
243	1143	〃	木製品折敷カ	312	118	10					杉				
244	1146	〃	〃 箆状	73	75	13					〃				
245	1142	〃	〃 不明	195	52	48					〃				
246	1147	〃	〃曲物側板	240	27	5					〃				
247	1149	〃	〃 木端状	152	65	5					栗				
248	1148	〃	木材 板切端	130	40	11					杉				
249	1145	〃	木製品矢板状	250	65	18					栗				
250	1144	〃	〃 不明	355	140	20					〃				農耕具カ
251	56	SE-98	須恵系 摺鉢				細	水挽	擂目		長石 粗粒	良	灰	灰	胴部
252	55	〃	〃 壺A				〃	〃	水挽		石英 粗粒	中	〃	〃	
253	54	〃	〃 摺鉢		264		1	〃	擂目		長石 粗粒	〃	〃	〃	
254	1160	〃	木製品ハシ状	120	7	6				削る	杉				
255	1158	〃	〃 箆状	270	40	12				〃	栗				
256	1039	〃	〃 〃	102	12	2				削る	杉				
257	1157	〃	〃 折敷カ	265	37	6				削る	〃				
258	1386	〃	〃 〃	266	93	8				〃	〃				
259	1385	〃	〃 桟状	230	11	8				〃	〃				組物 釘穴
260	1159	〃	〃 糸巻カ	208	30	8				抉る	〃				
261	339	〃	金工品 短刀	269	25	4									
262	340	〃	〃 〃	285	24	5									

241・242・251・252・261・262 S=1/3 243～249・253～260 S=1/6 250 S=1/12

状としたが不確定のものである。この他、木片6点がある。

SE-94号と遺物 (第26・27図 表21・22 図版8参照)

93号の北側にあり同じく内濠に接して位置しているやや複雑な崩壊を見ると同時に、上部が現代の土坑と重複している。上部の土坑は偶然にも井戸遺構の中心部に掛り遺構を痛めていない。土坑は支手線の基礎部と見られ。径20cm丸太2本が据えられていた(図版8右上参照)。遺物は木製品を中心に多く出土し、第26・27図に図示した。194は瓷器系の摺鉢でやや離れているSE-8号出土のものと接合する。195は刻印(窯印)を持つ甕である(図版10参照)。198は高台を持たない漆器の皿(図版18参照)、199は唯一の木簡様木製品(図版28参照)である。200は形代の舟形、202も確証はないが形代であろうか。201はコマである(図版29参照)。204～216はハシ状木製品で串類であろう。218・219は木端状としたが、草々履の芯か或いは形と考えられているものである。221は把手を欠失しているが十能すなわちセンバである。225～227は小型のコモヅチ、229の槌、222のかんじきなどの生産関連用具がある(共に図版26参照)。なお222のかんじきは湿地用の横長のものと考えているが確証はない。その他、ヒデ、折敷、砥石などがある。なお図示しないものに土器片2点、木片32点がある。

SE-95号・SE-98号と遺物(第28図 表23 図版8参照)

95号はSE-53号に接して位置する。北側の一部分が或いは崩壊かも知れないがステップ状を呈している。全体には保存状態が良く、細くて深い。241は須恵形の摺鉢で擂目の他に押印紋を持ち希少のものである(図版11参照)。242は漆器皿の細片で僅かに高台が削り出されている。こ

表24 掲載遺物一覧表 挿図No.29

割付No.	遺物No.	出土位置	名称又は形態	計測(mm) タテ器高	ヨコ口径	厚さ底径	残存率	造り 器表	器内	木器	胎土又は材質	焼成	色彩 器表	器内	備考
263	341	SE-99	金工品 短刀	283	29	4									先端欠失
264	87	〃	須恵系 甕				細	条線状叩文	当て具		石英・長石微・粗粒	良	灰	暗灰	SE-93に同一片
265	90	〃	〃 〃				〃	〃	〃		長石 微粒	〃	〃	灰	H-6に同一片
266	89	〃	〃 鉢カ				〃	水挽	水挽		石英・長石微粒	〃	黒灰	黒灰	胴部
267	88	〃	〃 鉢				〃	〃	〃		緻密	〃	灰	灰	〃
268	86	〃	青磁 碗		140		1.5	蓮弁文			〃	〃	薄緑	薄緑	
269	1325	〃	漆器 椀					黒漆	黒漆・赤絵						残片
270	1162	〃	木製品 斎串	215	25	3				削る	杉				
271	1371	〃	〃結物側板	260	45	5					〃				
272	1372	〃	〃 〃	264	64	6					〃				271と同体カ
273	1377	〃	〃 板状	227	65	17				抉る	〃				
274	1163	〃	〃 不明	270	10	11					〃				結物
275	1003	〃	〃 梯子	1067	197	155				削る	〃				
276	1167	SE-102	〃 柄カ	160	30	30					桐				
277	1062	〃	〃 高下駄	205	97	30				抉る	桐カ				腐蝕
278	1164	〃	〃 樽蓋	370	220	22				〃	檜カ				
279	1842	〃	〃 折敷カ	287	140	6					杉				
280	1165	〃	〃 桶底板	320	210	12				削る	〃				
281	1166	〃	〃 折敷カ	380	97	10					〃				

263～269 S=1／3 270～274・276・277 S=1／6 275・278～281 S=1／12

の他、折敷、側板、箆状のものなどあり、図示しないものに木片4点がある。

98号は95号の北側に位置する。かなりの崩壊があったと考えられる大型の遺構で、深さも294cmと最大である。出土遺物には須恵器系の摺鉢2点、同じく壺A類の腰部があり、木製品には255・256の何等かの工具、260のトンボは糸巻きであろうか。そして2点の短刀がある。この他、図示しないものに土器片1点、木片7点がある。

SE-99号・SE-102号と遺物（第29図 表24 図版8参照）

7列の中央で切合って位置し、その深度差が96cmある。102号が先行し、共に上部が崩壊しているが下部の状態は良い。263の短刀は切先を欠し、刃面に風化が進んでいる。その他須恵器系甕、同鉢、蓮弁文の青磁碗、赤絵を持つ漆器椀片、270は簡素な造りの斎串であろう。その他箱物側板や274の不明の板状のもの（図版24参照）などがある。この他、図示しないものに木片4点がある。

102号での出土遺物は木製品のみである。275はスペースの関係から横位に図示したが梯子と推定されるもので、足掛りを削り込んだもので井戸内に立ち掛っていたものだが風化が進んでいる。278は樽蓋（図版23参照）、その他、高下駄、折敷、底板などがあり、図示しないものに木片16点がある。

SE-100号・SE-101号（第30図 図版7参照）

100号・101号共に遺物は検出されていない。100号は外濠の内則すなわち内濠との凌ぎで検出された。片方を把握し難いものであり、濠との前後関係も決断し難い。70cm弱と小形のものである。101号は内濠に接して位置する小型のものであり、原形を良く止めている。

表25 掲載遺物一覧表 挿図No.30

割付No.	遺物No.	出土位置	名称又は形態	計測(mm) タテ器高	ヨコ口径	厚さ底径	残存率	造り 器表	器内	木器	胎土又は材質	焼成	色彩 器表	器内	備考
282	363	SK-14	瓦器火器				細	押印文	ナデ		長石微粒	良	肌	肌	「花菱」SE80に同一片
283	52	〃	〃 〃				〃	ナデ	〃		石英微粒	中	灰白	黒	
284	53	〃	土師器カワラケ	27	120	62	1	〃	〃		〃	〃	薄茶	薄茶	
285	35	SK-15	須恵系 鉢		170		2	水挽	水挽		長石粗粒	〃	黒灰	灰白	
286	33	〃	〃 壺B			108	4	水挽・静止糸切	〃		長石微粒	良	灰	灰	
287	34	〃	瓦器火器				細	押印文	ナデ		長石粗粒	〃	黒	黒	「三ッ巴」
288	362	〃	〃 〃				〃	〃	〃		長石微粒	〃	肌	灰白	「花菱」SE80に同一片
289	1156	〃	木製品 杭	215	43	35				削る	チャンチン				
290	1863	〃	〃 柱	220	82	77				〃	楢カ				
291	1848	〃	〃 〃	518	122	105				〃	栗				

282～289 S=1／3 290・291 S=1／12

表26 掲載遺物一覧表 挿図No.31

割付No.	遺物No.	出土位置	名称又は形態	計測(mm) タテ器高	ヨコ口径	厚さ底径	残存率	造り 器表	器内	木器	胎土又は材質	焼成	色彩 器表	器内	備考
292	50	SK-16	須恵系 摺鉢				細	水挽	擂目		石英・長石微粒	良	暗灰	暗灰	胴部
293	51	SK-19	青磁 碗		140		2	無文	無文		緻密	〃	薄緑	薄緑	貫入
294	63	SK-26	須恵系 壺B				細	水挽	水挽		石英微粒	〃	暗灰	灰	腰部
295	62	〃	〃 壺A		120		2	〃	〃		〃	〃	〃	〃	
296	64	〃	〃 〃			160	3	水挽・静止糸切	〃		石英・長石微粒	〃	暗灰	暗灰	
297	65	〃	〃 鉢	83	200		3	〃	〃		石英・長石細粒	〃	暗灰	灰	
298	1811	SK-33	木製品下駄カ	142	80	40				抉る	栗				
299	106	SK-35	青磁 碗				細	蓮弁文	無文		緻密	良	深緑	深緑	貫入
300	60	SK-44	瓦質 壺				〃	水挽	ナデ		長石・雲母微粒	〃	黒	白	頸～肩部
301	61	〃	須恵系 壺A				〃	菊花文	当て具		長石 微粒	〃	暗灰	灰	胴部

292～295・298～301 S=1／3 296・297 S=1／6

SK 3号・SK-5号・SK-6号・SK-10号（第30図参照）

5号・6号は15～18cm程の窪みで土坑と言えないものかも知れない。この内6号は内濠と外濠の凌ぎ上に位置し頂部を失ったきらいもある。位置的には3号のみがピットエリアにある。この内、10号から1点の木片が出土している他はいずれからも遺物は検出されていない。

SK-14号・SK-15号と遺物（第30図 表25 図版8参照）

14号はほぼ円形である。火器2点が出土しこの内1点はSE-80号出土の火器と同一固体と推定するものである。284はカワラケである。図示していないものに土器1点、木片2点がある。

15号は楕円形で長径が210cmと大型である。底部の隅に2本の細柱が建つがこの土坑がこれらの柱穴とは考えられないので、重複したものであろう。285の須恵器系の鉢は小型で擂目をもたないもので希少のものと言えよう。286は同系の壺Bでやや大型である。287・288は瓦質の火器である（図版20参照）。前者は三ッ巴の押印文を見、後者は花弁の押印文が施されSE-80号出土のものと同一個体である。この他、図示していないものに土器1点、木片2点がある。

SK-16号～20号・23号・26号・30号・31号・33号～35号・41・43～44号と遺物（第31図 表26 図版8参照）

これら多くの土坑の内、23・26・30・31・43号はピット群エリアの外周に位置する。16～18号は隣接して位置し、この内、16号より須恵器系摺鉢が検出されている。23号は浅くて土坑と言え

表27 掲載遺物一覧表 挿図No.32

割付No.	遺物No.	出土位置	名称又は形態	計測(mm) タテ器高	ヨコ口径	厚さ底径	残存率	造り 器表	器内	木器	胎土又は材質	焼成	色彩 器表	器内	備考
302	93	SK-56	瓦質 鉢カ			93	2	水挽・回転糸切	ナデ		長石 細粒	良	黒灰	灰白	
303	94	〃	土師質カワラケ			74	3				雲母 微粒	不	赤茶	赤茶	磨耗
304	325	〃	石製品 砥石	90	55	42									四方研ぎ面
305	1152	〃	木製品ハシ状	110	6	4				削る	杉				
306	1153	〃	〃 柱	150	140	45					〃				
307	1168	〃	〃 〃	355	90	70					〃				
308	57	SK-66	土師質カワラケ	20	95	64	2	ナデ	水挽		微砂粒	良	灰白	灰白	
309	1801	〃	木製品 不明	225	73	60					杉				ホゾ穴

302～305・308 S=1／3 306・307・309 S=1／6

表28 掲載遺物一覧表 挿図No.33

割付No.	遺物No.	出土位置	名称又は形態	計測(mm) タテ器高	ヨコ口径	厚さ底径	残存率	造り 器表	器内	木器	胎土又は材質	焼成	色彩 器表	器内	備考
310	1871	SK-79	木製品 杭状	530	95	50				削る	杉				
311	1312	SK-91	漆器 椀	55	135	76	6	黒漆・赤絵	赤漆						
312	1170	〃	木製品木端状	123	47	3				削る	杉				草履の芯カ
313	1171	〃	〃 〃	120	48	3				〃	〃				312とセットカ
314	1172	〃	〃 〃	115	93	3				〃	〃				草履の芯カ
315	1173	〃	〃 ヒデ	200	18	12				割る	松				焼け焦げ
316	1169	〃	〃 不明	145	40	20				割る	杉				
317	38	SK-96	須恵系 甕				細	条線状叩文	当て具		石英・長石微粒	良	黒灰	黒灰	
318	1219	〃	木製品 底板	135	54	9				削る	杉				
319	107	SK-36	瓦質 摺鉢				細	水挽	擂目		石英・長石微粒・礫	中	黄土	黄土	SE-7に同片
320	47	〃	須恵系 壺A			126	3	〃	水挽・箆調整		石英・長石微粒	良	灰	灰	

310 S=1／12 311～319 S=1／3 320 S=1／6

るものではなく、19～31は小型のものである。この内19・26号から遺物が検出されている。19号出土の青磁碗293は浅型である。26号からは須恵器系壺類と鉢があり、297の鉢は擂目を見ない片口である（図版12参照）。33号は内部が方形を呈する形態で、298の下駄状遺物を検出した。栗材の抉りものである。35号～44号はいずれも小型で、この内43号が方形である。35号からは青磁碗、44号からは瓦質の壺、須恵系の菊花文壺が出土している（図版10参照）。41号は内濠の上部に位置するもので、あたらしいものの可能性がある。

SK-45号～47号・50号・54号・59号・63号・64号・67～68号・72号（第32図 図版8参照）

第32図に示した大小様々な土坑の内、遺物を検出していないものである。この内47・63号は浅い窪みで土坑と言えないかも知れない。59号は確認調査のトレンチで殆ど破壊されている。また54は一部が未掘地に接する位置にあるが、攪乱層の広がりの中にあり不明な部分がある。72号は浅い窪みに接している。

SK-56号・58号・66号と遺物 （第32図 表27 図版8参照）

56号に関してはすでにピット群の項で記述したようにピット群エリアBの中央に位置し土坑の上層部と周囲に多数のピットがひしめいている。土器・木製品の出土がある。302は瓦質の鉢であり、回転糸切痕を残している（図版14参照）。303はカワラケとしたが土師質の坏である。その他、砥石、ハシ状木製品、柱がある。

58号から杭の残片が出土しているが図示していない。

表29 掲載遺物一覧表 挿図No.34

割付No.	遺物No.	出土位置	名称又は形態	計測(mm) タテ器高	ヨコ口径	厚さ底径	残存率	造り 器表	造り 器内	造り 木器	胎土又は材質	焼成	色彩 器表	色彩 器内	備考
321	85	SX-89	須恵系 摺鉢				細	ナデ	擂目		石英・長石微・細粒	良	灰	灰	胴部
322	1822	〃	木製品 不明	333	60	80				抉る	杉				ホゾ・溝付き
323	1245	〃	〃有孔板状	267	55	3				〃	〃				
324	1001	P_{11}	〃 柱	1196	20	14				削る	〃				
325	1002	P_{10}	〃 〃	828	156	14				〃	〃				
326	1864	P_{50}	〃 〃	485	142	60				割る	〃				
327	1852	P_{53}	〃 〃	425	123	75				〃	栗				
328	1101	P_{16}	〃 〃	260	135	82					杉				
329	1862	P_{9}	〃 〃	220	105	35				割る	栗				
330	1182	P_{41}	〃 〃	170	105	90					杉				
331	1181	P_{49}	〃 〃	190	58	70					不明				杭カ

321 S=1/3 322・323 S=1/6 324～331 S=1/12

66号は方形で92cmと最も深い土坑である。カワラケとホゾ穴を持つ不明の木製品とが出土している。

SK-79号と遺物 (第33図 表28)

ピット群Aエリアの北東側に位置し浅い窪の内に杭が建つ。杭は割物で先端を殺ぐが、打込まれた状態ではない。

SK-86号～88号・90号 (第33図)

いずれもやや浅いもので86号・87号には南側にテラスを持つ。90は西側の底部が広がっている。遺物の検出はない。

SK-91号・96号・97号と遺物 (第33図 表28)

91号はピット群Bエリアの西側に位置するやや深い土坑である。漆器を始めとして木製品が検出されている。311の漆器は赤絵の黒椀で内部は赤漆である。312～313は草履の芯であり、前者の2点は対のものと見られよう。315は灯明用のヒデ、316は削り掛けの不明物である。

96号は南側に小さなステップを持つ。317の須恵器系甕と底板が出土した。

97号はやや小型のものであり、遺物は見られない。

SX-36号・61号・62号と遺物 (第33図 表28)

36号は長さ2.7mの溝状の遺構である。319の瓦質の摺鉢と須恵系の壺Aが検出した。前者の鉢はかなり距離をおいたSE-7号に同一片を見た。

61号・62号は浅くて大きな窪みである。遺物の出土は見ない。

SX-89号と遺物 (第34図 表29)

試掘トレンチの中に位置する長方形の坑で、その目的などを推定出来ないものである。須恵器系の摺鉢、両端にホゾを持つ木製品などが出土した。

SD-12号・69号 (第34図)

12号は改めて図示していないがピット群Aエリアの中央に位置するもので全長7.1mの浅い溝である(第5図参照)。69号も同様の浅い溝である。共に遺物は検出されていないし、またその

表30 掲載遺物一覧表 挿図No.35

割付No.	遺物No.	出土位置	名称又は形態	計測(mm) タテ器高	ヨコ口径	厚さ底径	残存率	造り 器表	器内	木器	胎土又は材質	焼成	色彩 器表	器内	備考
332	1007	P19	木製品 柱	860	188	173				削る	栗				腐蝕
333	1009	P20	〃 〃	862	153	137				〃	〃				面取り
334	1010	P18	〃 〃	792	167	164					〃				
335	1004	P29	〃 〃	750	150	145				削る	〃				
336	1006	P14	〃 〃	704	201	165					〃				
337	1867	P 6	〃 〃	550	140	135					〃				
338	1854	P 8	〃 〃	425	125	125					〃				
339	1850	P46	〃 〃	415	80	70					〃				
340	1876	P12	〃 〃	280	120	100					〃				
341	1877	P40	〃 〃	415	173	75					〃				
342	1849	P 7	〃 〃	410	230	137					〃				
343	1853	P39	〃 〃	595	150	83				割る	〃				
344	1878	P38	〃 〃	600	180	110				〃	〃				
345	1005	P37	〃 〃	739	190	102				〃	〃				
346	1866	P32	〃 〃	480	110	105					檜カ				
347	1851	P42	〃 〃	420	185	110					栗				
348	1865	P31	〃 〃	403	90	60				割る	〃				
349	1174	P44	〃 〃	235	54	40					チャンチン				
350	1175	P30	〃 〃	255	90	82					〃				
351	1176	P 3	〃 〃	210	130	120					〃				
352	1847	P34	〃 〃	270	100	82					〃				
353	1845	P15	〃 〃	240	75	75					杉				
354	1183	P43	〃 〃	182	125	65					〃				
355	1180	P48	〃 〃	260	70	70					チャンチン				
356	1177	P36	〃 〃	300	100	85					栗				
357	1861	P17	〃 〃	385	68	66				削る	杉				坑カ
358	1860	P45	〃 〃	365	88	75				割る	栗				

332～358 S＝1／12

目的などを推定出来ないものである。

ピット出土の柱 (第34・35図 表29・30 図版30参照)

ピット群で示した柱の内には腐蝕が進み取り上げる事の出来ないものも多いが、ここに35点がありそれぞれ図示した。個々に付いては省略するが材質的には杉・栗・チャンチンの他、檜と推定されるものと不明の雑木がある。チャンチンは俗称リョウガ又はリョウガンなどと呼ばれているもので、栗と同様に腐蝕に強い。柱として2次的に加工したものと無加工のものとがある。324・325は杉材で方形に仕上げられた本格的なもので、共に根元に筏穴を残している。332は栗材の円形に削り仕上げを行ったもので、下部に沈下防止の切り込みが施されている。333は面取り、343～345は割りものである。

内濠出土の遺物 (第36～42図 表31～37)

内濠・外濠をとうして陶磁器の検出を全く見なく、内濠出土の遺物は漆器を含む木製品と竹製品・銭貨に限られた。ここではその内の幾つかに付いて記述したい。

a 漆器 (図版17・18参照)

359～364の椀と365の皿がある。図版に見られる如く纏まったものはない。359は唯一内底

表31 掲載遺物一覧表 挿図No.36

割付No.	遺物No.	出土位置	名称又は形態	計測(mm) タテ器高	ヨコ口径	厚さ底径	残存率	造り 器表	器内	木器	胎土又は材質	焼成	色彩 器表	器内	備考	グリット
359	1310	内濠	漆器 椀			60	12	黒漆・赤絵	黒漆							I-12
360	1065	〃	〃 〃	51	115		3	黒漆	〃							I-9
361	1314	〃	〃 〃	57	135	62	8	黒漆・赤漆	赤漆						高台内黒漆	I-11
362	1305	〃	〃 〃カ			80	5	無地	〃						底部	I-6
363	1309	〃	〃 椀			75	5	黒漆	黒漆						〃	I-12
364	1066	〃	〃 〃				細	黒漆	赤漆						残片	I-9
365	1318	〃	〃 皿	23	98	52	7	〃	〃							〃
366	1327	〃	木製品 〃	16	100	70	7	無地	無地						ロクロ痕	〃
367	1030	〃	竹製品 陽物	176	50	46		赤漆		組む						〃
368	347	〃	金工品 銭貨	28											治平元寶	〃
369	1036	〃	木製品 木札	76	38	6				削る	杉					〃
370	1037	〃	〃 蓋カ	43	37	5				〃	〃					〃
371	1191	〃	〃メンコカ	40	39	5				〃	〃					〃
372	1234	〃	〃 立ち札	242	45	10				〃	〃					I-1
373	1399	〃	竹製品 不明	117	18	5				抉る	竹					D-1
374	1228	〃	木製品 箆状	172	60	8				削る	杉					I-5
375	1395	〃	〃 桟状	183	13	5				〃	〃					D-1
376	1396	〃	〃 〃	316	15	6				〃	〃					〃
377	1354	〃	〃 串カ	183	13	4				〃	〃					F-1
378	1373	〃	〃 木端状	250	18	4				〃	〃					I-7
379	1193	〃	〃 ハシ状	185	6	5				〃	〃					I-11
380	1188	〃	〃 串	250	10	8				〃	〃					I-7
381	1192	〃	〃 把手	170	11	18				〃	〃					〃
382	1770	〃	〃 不明	226	14	10				〃	〃				多孔	I-9
383	1818	〃	〃 〃	255	18	12				〃	〃				〃	I-6
384	1350	〃	〃 桟状	125	13	7				〃	〃					I-9

359～384 S=1／3

表32 掲載遺物一覧表 挿図No.37

割付No.	遺物No.	出土位置	名称又は形態	計測(mm) タテ器高	ヨコ口径	厚さ底径	残存率	造り 器表	器内	木器	胎土又は材質	焼成	色彩 器表	器内	備考	グリット
385	1059	内濠	木製品高下駄	224	141	90				抉る	桐カ				台と歯同質	I-6
386	1060	〃	〃 田下駄	247	138	27				〃	杉					I-9
387	1844	〃	〃 下駄カ	117	50	52				〃	栗					I-11
388	1808	〃	〃高下駄の歯	125	86	15				削る	〃					D-1
389	1353	〃	〃 〃	113	105	15				〃	〃					I-11
390	1083	〃	〃 〃	139	76	17				〃	〃					I-2
391	1759	〃	〃 〃	135	99	14				〃	〃					I-9
392	1240	〃	〃 〃	119	50	15				〃	杉					〃
393	1762	〃	〃 〃	112	92	12				〃	栗					〃
394	1084	〃	〃 〃	109	65	16				〃	〃					〃
395	1763	〃	〃 〃	120	57	13				〃	〃				焼け焦げ	〃
396	1236	〃	〃 〃	98	65	15				〃	桐カ					I-1
397	1761	〃	〃 〃	95	91	13				〃	栗					I-9
398	1237	〃	〃 〃	110	52	13				〃	〃					I-12
399	1760	〃	〃 〃	94	85	12				〃	〃					I-9

385～399 S=1／4

に赤絵を持つ椀である。362は底部の残片であるが椀であり、内部に漆膜が僅かに残る。361は薄手の生地で口縁部に反りを持ち、肉眼で見る塗り肌が美しい。高台脇から高台内にかけては赤漆である。

366は生地を見せる皿で漆器であったとの確率はないがここに示した。唯一の木器である。

b 竹製品 (図版25・26参照)

表33 掲載遺物一覧表 挿図No.38

割付No.	遺物No.	出土位置	名称又は形態	計測(mm) タテ器高	ヨコ口径	厚さ底径	残存率	造り 器表	器内	木器	胎土又は材質	焼成	色彩 器表	器内	備考	グリット
400	1040	内濠	木製品曲物	95	160	4				綴る	杉					I-9
401	1038	〃	〃曲物側板	133	50	1.5				切る	〃				再利用カ	〃
402	1827	〃	〃 三方カ	217	33	3				綴る	〃				結物側板	I-10
403	1189	〃	〃 不明	200	200	10				穿つ	〃				組物	I-7
404	1231	〃	〃組物底板	114	36	10				削る	〃				釘穴	E-1
405	1819	〃	〃組物側板	197	62	11				〃	〃				〃	I-6
406	1233	〃	〃 桟状	190	32	9				抉る	〃				有孔	I-1
407	1806	〃	〃組物側板	190	67	9				削る	〃				釘穴	I-11
408	1241	〃	〃 〃	227	72	6				抉る	〃				〃	I-9
409	1235	〃	〃組物底板	249	60	13				削る	〃				折敷カ	I-1
410	1768	〃	〃 側板カ	234	43	7				〃	〃				釘穴	I-9
411	1220	〃	〃 底板	170	45	8				〃	〃					I-3
412	1384	〃	〃 〃	254	44	11				〃	〃					E-1
413	1820	〃	〃 〃	223	58	10				〃	〃					I-6
414	1230	〃	〃 目皿	195	106	15				抉る	〃				鉈削り	I-3
415	1229	〃	〃曲物底板	225	91	7				削る	〃				釘穴	I-4
416	1767	〃	〃 桶底板	215	114	8				〃	〃					I-9

400～416 S=1／4

表34 掲載遺物一覧表 挿図No.39

割付No.	遺物No.	出土位置	名称又は形態	計測(mm) タテ器高	ヨコ口径	厚さ底径	残存率	造り 器表	器内	木器	胎土又は材質	焼成	色彩 器表	器内	備考	グリット
417	1816	内濠	木製品底板	495	120	20				削る	杉					I-6
418	1194	〃	〃 不明	310	118	10				〃	〃					I-11
419	1380	〃	〃 蓋カ	188	80	8				〃	檜カ					I-5
420	1382	〃	〃 桶側板	90	89	12				〃	〃					〃
421	1807	〃	〃 底板	372	130	9				〃	杉					I-11
422	1018	〃	〃キヌタカ	676	60	58				〃	不明					I-7
423	1076	〃	〃 羽子板	382	80	10				〃	杉				焼鏝絵	I-9
424	1077	〃	〃 〃	227	107	8				〃	〃				切断焼け	I-4
425	1184	〃	〃 〃	210	63	7				〃	〃					I-7
426	1766	〃	〃 刀形	340	30	10				抉る	〃				形状	I-9
427	1804	〃	〃 串	303	20	10				削る	〃					I-11
428	1805	〃	〃 桟状	288	16	10				〃	〃					〃
429	1019	〃	〃 〃	638	38	16				〃	〃					I-7
430	1243	〃	〃 〃	328	19	12				抉る	〃					I-9
431	1765	〃	〃 箆	193	19	7				削る	〃				小孔	〃

417・418・421・422・429 S=1／8　419・420・423～428・430・431 S=1／4

367は陽物であろうか。頭部の木質部の材質は不明であるが、一点には括れ部分が造り出され、茎部には竹を嵌め込んだものである。茎部はその一部分を残すものに過ぎないが、径3.5cm程の唐竹と推定される。小口を含めた全面に赤漆が施されている（図版28参照）。373は部分的な物であり不明の物である。径2.5cm前後の竹で方形の孔が複数抉られている（図版25参照）。

c　銭貨

368の銭貨は「治平元寶」である。この初鑄造年は1064年である。

d　木製品　（図版23～30参照）

369の木札は検出時点で墨書らしきものが見られたが（図版9参照）判読できない。370・371は薄板を削った物で器物の蓋か遊具のメンコであろう。372はホゾを持ち立てられたもので位牌

表35 掲載遺物一覧表 挿図No.40

割付No.	遺物No.	出土位置	名称又は形態	計測(mm) タテ器高	ヨコ口径	厚さ底径	残存率	造り 器表	器内	木器	胎土又は材質	焼成	色彩 器表	器内	備考	グリット
432	1034	内濠	木製品不明	60	51	7				抉る	栓木				組物	I-9
433	1035	〃	〃 〃	100	45	9				〃	杉				〃	〃
434	1769	〃	〃 饅頭状	74	70	27				削る	〃				漆塗り	〃
435	1249	〃	〃 桟状	92	37	18				〃	〃				釘穴・焼け	I-8
436	1374	〃	〃組物側板	115	64	11				切る	〃					I-4
437	1222	〃	〃 杼カ	140	15	14				抉る	〃					G-1
438	1823	〃	〃 底板	118	40	6				削る	〃				木釘	I-1
439	1186	〃	〃 柄カ	125	20	14				〃	〃				有孔	I-7
440	1821	〃	〃 不明	215	34	20				抉る	〃				〃	I-6
441	1355	〃	〃 薦槌カ	170	42	30				〃	栗					F-1
442	1356	〃	〃 折敷カ	164	82	6				削る	檜カ				木皿カ	I-5
443	1351	〃	〃 不明	71	59	15				〃	杉				焼け	I-9
444	1185	〃	〃 折敷カ	145	96	7				〃	〃					I-7
445	1195	〃	〃 楔	55	27	20				〃	〃					I-11
446	1776	〃	〃 〃	126	53	16				〃	栗					I-6
447	1764	〃	〃 〃	134	30	20				〃	杉					I-9
448	1828	〃	〃 〃	175	50	30				〃	〃					I-10
449	1775	〃	〃 〃	150	48	19				〃	〃					I-6
450	1375	〃	〃 串	256	14	11				〃	〃					I-4
451	1817	〃	〃 桟状	360	20	11				〃	〃				有孔	I-6

432～451 S=1／3

表36 掲載遺物一覧表 挿図No.41

割付No.	遺物No.	出土位置	名称又は形態	計測(mm) タテ器高	ヨコ口径	厚さ底径	残存率	造り 器表	器内	木器	胎土又は材質	焼成	色彩 器表	器内	備考	グリット
452	1227	内濠	木製品板状	170	54	7				削る	杉					G-1
453	1777	〃	〃曲物側板	150	30	3		黒漆	黒漆	〃	〃					I-6
454	1812	〃	〃 木端状	95	31	3				〃	〃				草履の芯	I-8
455	1369	〃	〃 串カ	168	20	18				〃	〃					I-11
456	1368	〃	〃 棒状	230	23	15				〃	〃				木刀カ	〃
457	1387	〃	〃 桟状	213	22	8				〃	〃					F-1
458	1187	〃	〃 柄カ	208	20	10				〃	〃					I-7
459	1242	〃	〃 板状	158	53	15				〃	〃					I-9
460	1803	〃	木材切端	93	70	60				切る	〃				丸物	I-11
461	1376	〃	木製品桟状	79	31	6				削る	〃					〃
462	1778	〃	〃組物側板	375	35	7				〃	〃				木釘	I-6
463	1789	〃	〃 板状	250	108	11				〃	栗				ナラシ板	I-9
464	1787	〃	〃 矢板	443	115	35				〃	〃					〃
465	1178	〃	〃 〃	530	92	20				〃	杉					I-11
466	1179	〃	〃 串カ	580	40	8				〃	栗					I-7
467	1190	〃	〃 桟状	250	6	6				〃	杉					〃
468	1786	〃	〃 串	476	20	11				〃	〃					I-9
469	1813	〃	〃 叩き板	450	40	28				〃	〃					I-8
470	1788	〃	〃 鋤カ	427	80	35				〃	楢					I-9
471	1809	〃	木材切端	195	110	87				切る	栗				丸物	D-1
472	1870	〃	〃 不明	570	230	110					チャンチン					I-4

452～461 S=1／3　462～471 S=1／6　472 S=1／12

とも推定される（図版28参照）。377～380はハシ状のものを含むが串類である。381は行灯或いは手桶の把手である。382・383は後述する403の様な組物であろう。

第37図の385～399は高下駄、高下駄の歯、下駄である（図版28参照）。386は歯を持たない事から田下駄であろう。387は栗材でありやや難点もあるが下駄とした。高下駄の歯には栗・杉

表37 掲載遺物一覧表 挿図No.42

割付No.	遺物No.	出土位置	名称又は形態	計測(mm) タテ器高	ヨコ口径	厚さ底径	残存率	造り 器表	器内	木器	胎土又は材質	焼成	色彩 器表	器内	備考	グリット
473	1013	内濠	木製品 杭	1248	77	72				削る	杉				転用品	I-7
474	1008	〃	〃 〃	864	156	88				割る	栗					I-8
475	1014	〃	〃 橋脚	977	96	55				切る	杉				転用品	I-9
476	1015	〃	〃 〃	293	81	48				削る	〃					〃
477	1352	〃	〃 細杭	210	32	32				〃	栗				串カ	〃
478	1232	〃	〃 桟	264	15	14				〃	杉					F-1
479	1388	〃	〃 串	282	28	8				〃	栗					〃
480	1017	外濠	〃 橋脚	1260	147	118				〃	杉				焼け	J-9
481	1016	〃	〃 〃	1596	86	93				〃	栗				〃	〃
482	1389	〃	〃 不明	266	41	32				抉る	〃					F-1
483	1212	〃	〃 木片	160	25	12				削る	〃				串カ	〃
484	1855	〃	〃 杭	610	90	90				〃	杉					J-9
485	1238	〃	〃高下駄の歯	115	39	10				〃	楢					〃
486	1856	〃	〃 柱状	455	75	40				割る	栗				ホゾ付き	〃

473～476・480・481 S=1/12　482・484・486 S=1/6　477～479・483・485 S=1/3

表38 掲載遺物一覧表 挿図No.43

割付No.	遺物No.	出土位置	名称又は形態	計測(mm) タテ器高	ヨコ口径	厚さ底径	残存率	造り 器表	器内	木器	胎土又は材質	焼成	色彩 器表	器内	備考	グリット
487	1301	外濠	漆器 椀	65	126	68	8	黒漆	黒漆・赤絵						「紅葉葉」	J-1
488	1302	〃	〃 〃	69	183	77	6	〃	〃							J-11
489	1322	〃	〃 〃	70	160	87	3	〃	黒漆							〃
490	1323	〃	〃 〃	67	144	74	9	〃	〃						歪み	〃
491	1308	〃	〃 〃	50	130	74	12	黒漆・赤絵	〃							〃
492	1317	〃	〃 〃	70	138	70	8	〃	赤漆							J-1
493	1307	〃	〃 〃	55	144	66	8	黒漆	〃							J-11
494	1313	〃	〃 〃		152	76	8	黒漆・赤絵	〃							J-7
495	1239	〃	木製品 木端状	102	16	3				削る	杉					J-9
496	1394	〃	〃 杼カ	189	28	10				抉る	栗					〃
497	1244	〃	〃 ヒデ	181	23	16				削る	松				焼け	〃
498	1392	〃	〃 面取板	170	78	10				〃	杉					〃
499	1200	〃	〃 桟状	215	12	12				〃	〃					J-11
500	1199	〃	〃 台座カ	218	22	10				抉る	〃				組物	〃
501	1393	〃	〃組物側板	153	30	8				〃	〃				漆塗り	J-9

487～497・499～501 S=1/3　498 S=1/6

・桐が用いられている。第38図は主に生活用具である。曲物側板、三方と推定される結物や折敷、箱物、底板で特に416は桶の底板である。この他、414は目皿である。403は網目状に糸を張った篩状のものであろうか。第39図の一部も同様で、419は樽の蓋板、420は桶側板であり、422はキヌタである。423～425は羽子板で423には焼鏝による絵が見られる。426は先端部を失するが形代の刀形であり（共に図版29参照)、その他、串などがある。

第40・41図に示したものも実態を知り得るものは少ない。434は杉の輪切を削ったもので漆が施されている。437は杼とも考えられ、441は薦槌であろう。

第42図の473～479は杭類であり、この内、475・476が橋脚かその支えに使用されたものでその他は濠内に捨てられたものである（図版30参照)。橋脚とされた475は溝を持つ角材であり、転用材としての後補のものであろう。

以上の他、図示しないものに木片119点がある。

表39 掲載遺物一覧表 挿図No.44

割付No.	遺物No.	出土位置	名称又は形態	計測(mm) タテ器高	ヨコ口径	厚さ底径	残存率	造り 器表	造り 器内	造り 木器	胎土又は材質	焼成	色彩 器表	色彩 器内	備考
502	139	K-8他	須恵系 甕				細	条線状叩文	当て具		石英・長石 微粒	良	暗灰	暗灰	
503	140	K-7	〃 〃				〃	水挽	水挽		〃	〃	黄白	黄白	
504	138	G-7	〃 〃				〃	条線状叩文	当て具		〃	〃	暗灰	暗灰	
505	136	K-10他	〃 〃				〃	〃	箆調整		〃	〃	〃	〃	
506	137	J-11	〃 〃				〃	〃	当て具		〃	〃	〃	〃	
507	162	I-9	〃 〃				〃	〃	カキメ		石英微粒・長石粗粒	〃	黝黒	黒	胴部
508	151	G-2	〃 〃				〃	〃	当て具		石英・長石 微粒	〃	暗灰	暗灰	〃
509	155	H-6他	〃 〃				〃	〃	〃		〃	〃	灰	灰	〃
510	154	K-8	〃 〃				〃	〃	ナデ		〃	〃	〃	〃	〃輪積痕
511	169	G-1	〃 〃				〃	〃	〃		〃	〃	黒灰	暗灰	〃他に同一片
512	147	F-8	〃 〃				〃	〃	当て具		〃	〃	灰	黄灰	〃
513	157	G-1	〃 〃				〃	〃	〃		〃	〃	黒灰	黒	〃
514	144	E-10	〃 〃				〃	〃	ナデ		〃	〃	灰	灰	自然釉
515	159	H-8	〃 〃				〃	〃	当て具		微砂粒	〃	〃	〃	胴部
516	146	F-11	〃 〃				〃	〃	〃		石英・長石 微粒	〃	灰	灰	〃
517	153	G-11	〃 〃				〃	〃	ナデ		〃	〃	〃	〃	〃
518	160	E-7	〃 〃				〃	〃	当て具		〃	〃	〃	黄灰	〃
519	152	G-1	〃 〃				〃	〃	〃		微砂粒	〃	〃	灰	〃自然釉
520	158	G-2	〃 〃				〃	〃	〃		石英・長石 微粒	〃	暗灰	暗灰	〃
521	83	G-7	〃 〃				〃	〃	水挽		〃	〃	〃	〃	〃
522	142	G-11	〃 〃				〃	〃	当て具		〃	〃	〃	〃	〃
523	141	G-1	〃 〃			138	1	〃	ナデ		〃	〃	〃	黄灰	底部

501～523 S=1／3

外濠出土の遺物 (第42～43図 表37～38)

外濠からの遺物は少なく、漆器、木製品のみに限られ、図示したものの他に木片29点があるに過ぎない。480・481は濠内に立った橋脚である。栗と杉材でいずれも焼処理が施されている(図版30参照)。その他の杭は濠内に捨てられたものである。487～494の8点の漆器椀がある。この内図示した如く4点に赤絵が施されている。488は大振りの椀であり、494は高い高台をもつ。496は杼、497はヒデ、500は十文字に組合う台座である。501はスペースの関係から縦位にしたが、組物の側板で漆塗りが残る。

6 遺構外出土遺物

遺構以外からの出土遺物は薄い包含層から検出されたもので、陶磁器、土製品、石製品、金属製品であり、湿気のない包含層では木製品は残存していない。ここでは種別ごとに記述する。

須恵器系陶器 (第44～46図 表39～41 図版10～12)

甕類 確実に甕類と断定できるものは口縁部が残っている502～506の5点に過ぎず、胴部の破片は壺A類と区別し難いが、ここでは507～523の如く折り返しのやや弱いもの、そして502・503の様に外側へ強く折り返されたものと、504の如く折り返しのやや弱いもの、そして505・506の様に厚い玉縁状のものとに見分けられる。これらの内、503は頸部が少ないため叩き文が見えないが、下部にはあろう。505の拓影の縦位の線は箆劃による窯印である(共に図版10参照)。523は底部、その他は胴部でいずれも平行線状叩目文をもつ。

表40 掲載遺物一覧表 挿図No.45

割付No.	遺物No.	出土位置	名称又は形態	計測(mm) タテ 器高	ヨコ 口径	厚さ 底径	残存率	造り 器表	造り 器内	造り 木器	胎土又は材質	焼成	色彩 器表	色彩 器内	備考
524	209	G－1	須恵系 壺A		164		1	水挽	水挽		石英・長石 微粒	良	灰白	灰白	
525	211	J－10	〃 〃				2	〃	〃		微砂粒	〃	灰	灰	胴部
526	228	H－8	〃 〃				細	〃	〃		〃	〃	暗灰	黒灰	〃
527	216	G－1	〃 〃			87	9	水挽・静止糸切	〃		長石 微粒	〃	灰	灰	
528	143	I－7	〃 〃				細	条線状叩文	当て具		〃	〃	暗灰	灰	
529	212	〃	〃 〃				〃	水挽	水挽		〃	〃	黒灰	黒灰	胴部
530	167	G－2	〃 〃				〃	条線状叩文	当て具		石英・長石 微粒	中	暗茶	暗茶	肩部 北沢系
531	165	I－9	〃 〃				〃	〃	〃		微砂粒	良	黄灰	暗灰	〃 〃
532	156	J－11	〃 〃				〃	〃	〃		石英・長石 微粒	〃	灰	黒灰	〃
533	215	G－1	〃 〃				〃	箆調整	ナデ		〃 粗粒	〃	暗灰	暗灰	底部
534	208	〃	〃 〃		220		1	水挽	水挽		〃 微粒	〃	灰	灰	
535	210	〃	〃 〃				2	〃	〃		〃	〃	灰	灰	胴部
536	213	J－9	〃 〃			100	4	水挽・ナデ	水挽・指圧痕		〃	〃	紅灰	灰	
537	166	J－7・9	〃 〃				細	条線状叩文	ナデ		微砂粒	〃	黄灰	暗灰	胴部 北沢系
538	214	H－8	〃 〃			91	2	水挽・静止糸切	水挽		石英・長石 微粒	〃	薄茶	灰	
539	220	F－2	〃 壺B		94		1	水挽	〃		〃	〃	暗灰	灰	
540	221	G－1	〃 〃			155	2	櫛描波状文	〃		〃	〃	灰	灰	
541	218	H－10	〃 〃				細	水挽	〃		石英 微粒	〃	〃	〃	口縁部
542	219	D－8	〃 〃				〃	櫛描波状文	〃		微砂粒	〃	〃	〃	肩部
543	222	F－3	〃 〃				〃	水挽	〃		石英・長石 微粒	〃	暗灰	暗灰	〃
544	224	K－12	〃 〃				〃	〃	〃		長石細粒・雲母微粒	〃	黒灰	灰	胴部
545	229	J－10	〃 〃			96	3	水挽・ナデ	〃		石英・長石 微粒	〃	暗灰	暗灰	
546	227	J－9	〃 〃			82	細	水挽・静止糸切	丹塗		〃	〃	灰	灰	底部 塗料容器か
547	223	G－1	〃 〃				2	水挽	水挽		〃	〃	黒灰	黒灰	胴部

524～533・537～546 S＝1／3　534～536・547 S＝1／6

壺A類　524～538がある。口縁部2点、底部4点と少ない。口縁部はやや形態を異にするが玉縁状のものである。530～532の肩部などは甕とは混同されない明らかなものであり、いずれも平行線状叩目文をもつ。538の底部に見る柾目状の拓影は中世陶器特有の静止糸切痕である。これらの内、530・531・537は北越後の笹神古窯址群からの供給ものであろう。

壺B類　539～547があり、個体数は少ない。轆轤による水挽が主体であるが、540・542の如く肩部に波状文を持つものは希であり、前者には2段に施されている。546の内部には丹塗が見え塗料容器であったものと推定できる。

鉢類　548～583と多い。口縁部を見るもの11点があり、この口唇部が水平のもの、外傾のもの、内傾のものなどがある。また548は唯一の片口を有する。内部に擂目を持つものが殆どであり、持たないものもある。擂目も様々で、その工具も565は9条1単位であり、569は14条である。一方582は磨耗の恐れもあるが一本引きである。また擂目の施方も581の如く4条を交差させた8条のものから、575・577の様に全面に及ぶものまである。一方、特異なものでは559の波状のもの、560の格子状などが見られ、また553の横位の波状や、561の外面のそれは装飾であろう。549・552は北越後の笹神古窯址群からの供給ものであろう。

瓷器系陶器　(第47図　表42　図版12・13)

甕と鉢類に限られる。甕の内、口縁部を残すものは3点に過ぎず、この内、584・585はほぼ同形で内外面に凹帯をもち、水平の口唇外部を僅かに外側へ摘み出した形態で、596は口唇外部

表41 掲載遺物一覧表 挿図No.46

割付No.	遺物No.	出土位置	名称又は形態	計測(mm) タテ器高	ヨコ口径	厚さ底径	残存率	造り 器表	造り 器内	造り 木器	胎土又は材質	焼成	色彩 器表	色彩 器内	備考
548	172	B－9	須恵系 摺鉢				細	水挽	擂目		長石 粗粒	中	灰	灰	
549	179	G－6	〃 〃				〃	〃	〃		石英 微粒	〃	暗灰	暗灰	北沢系カ
550	365	E－10	〃 〃				〃	〃	水挽		〃	〃	灰白	灰白	口縁部
551	178	〃	〃 〃				〃	水挽	擂目		微砂粒	〃	赤茶	赤灰	
552	175	K－9	〃 〃				〃	〃	〃		長石 微粒	良	暗灰	暗灰	北沢系カ
553	170	E－10	〃 〃				〃	櫛描文	水挽		石英・長石 微粒	中	灰	灰	口縁部
554	180	D－11	〃 〃				〃	水挽	〃		緻密	〃	〃	〃	
555	176	G－2	〃 鉢カ				〃	〃	〃		石英・長石 微粒	良	暗灰	暗灰	
556	173	F－9	〃 〃		250		〃	〃	〃		緻密	〃	灰	黄灰	
557	177	G－1	〃 〃				〃	〃	〃		微砂粒	中	赤灰	灰	
558	188	I－9	〃 摺鉢				〃	〃	擂目		緻密	良	暗灰	黄灰	胴部
559	171	〃	〃 〃				〃	水挽・櫛目文	波状擂目		石英・長石 微粒	中	灰	灰	〃
560	185	I－3	〃 〃				〃	水挽	擂目		緻密	良	暗灰	暗灰	〃
561	364	E－10	〃 〃				〃	水挽・櫛目文	〃		石英・長石 微粒	中	灰	灰	口縁部
562	202	H－10	〃 〃				〃	水挽	〃		緻密	〃	〃	〃	胴部
563	203	H－8	〃 〃				〃	〃	〃		長石 微粒	良	〃	〃	〃
564	187	G－1	〃 〃				〃	〃	〃		石英・長石 微粒	〃	黒灰	黒灰	〃206と同体カ
565	207	I－9	〃 〃				〃	〃	〃		長石 細粒	〃	暗灰	暗灰	〃
566	206	G－1	〃 〃				〃	〃	〃		石英・長石 微粒	〃	〃	〃	〃
567	205	G－3	〃 〃				〃	〃	〃		〃	〃	〃	黒灰	〃
568	200	F－1	〃 〃				〃	〃	〃		微砂粒	〃	灰	灰	〃
569	204	G－2	〃 〃				〃	〃	〃		長石 微粒	〃	〃	〃	〃
570	190	K－8	〃 〃				〃	〃	〃		石英・長石 微粒	〃	暗灰	暗灰	
571	184	I－3	〃 〃				〃	水挽・ナデ	〃		長石 粗粒	〃	〃	〃	〃
572	197	G－1	〃 〃				〃	〃・静止糸切	〃		石英・長石 微粒	〃	灰	灰	
573	226	E－10	〃 鉢				〃	水挽	丹塗		微砂粒	〃	紅灰	朱	底部
574	199	I－4	〃 摺鉢				〃	〃・静止糸切	擂目		〃	〃	灰	黒	
575	201	I－11	〃 〃				〃	水挽	〃		石英・長石 微粒	〃	〃	暗灰	胴部
576	225	C－9	〃 鉢				〃	〃	水挽・櫛描		緻密	〃	〃	灰	
577	186	F－12	〃 摺鉢				〃	〃	擂目		長石 細粒	〃	〃	〃	胴部
578	183	G－8	〃 〃				1	〃	〃		緻密	〃	〃	〃	〃 自然釉
579	193	J－9	〃 〃			140	4	水挽・ナデ	〃		石英・長石 粗粒・礫	〃	〃	〃	
580	110	H－11	〃 〃			138	4	ナデ	水挽		長石 粗粒	〃	〃	〃	
581	192	H－10	〃 〃			106	6	水挽	擂目		石英・長石 粗粒・礫	〃	〃	〃	
582	196	G－1	〃 〃			128	5	〃・静止糸切	〃		石英 微粒	〃	〃	〃	205と同一カ
583	194	D－5	〃 〃			140	1	箆削 〃	〃		石英微粒・長石細粒	〃	暗灰	〃	

548～577 S＝1／3　578～583 S＝1／6

を大きく外側へ摘み出した形態のものであるが、三者共細片で多くを知り得ない。597 は腰部から底部の片で、その他は胴部の細片である。595 は内面に指による圧痕が並ぶ。591 は断面に漆が厚く付着し接着補修がなされた事が知られる。

590～601 が摺鉢である。口縁部を残す 600・601 とも内面に凹帯を持つ丸縁状のものであり、前者は荒い擂目、後者は密度の高い擂目を持つ。

瓦器　（第47・49図　表42・44　図版14・20）

瓦質の鉢と蓋がある。602～605 は摺鉢で 602 の口唇部の形態は水平で角張り、604 はやや内傾している。また後者には擂目を見ないが、603・605 とも荒いものである。606 は蓋で内部に受けをもち20cmと大きいものであり、壺蓋であろう。

661～667 は瓦質の火器である。661 は頸部に透かしをもち、663 は複雑な形態の中間部分であ

表42 掲載遺物一覧表 挿図No.47

割付No.	遺物No.	出土位置	名称又は形態	計測(mm) タテ 器高	ヨコ 口径	厚さ 底径	残存率	造り 器表	器内	木器	胎土又は材質	焼成	色彩 器表	器内	備考
584	255	G－2	瓷器系 甕				細	水挽	水挽		長石 細粒	良	茶	緑灰	口縁部 自然釉
585	259	F－6	〃 〃				〃	〃	〃		微砂粒	〃	黄灰	茶	〃
586	264	E－9	〃 〃				〃	輪積・ナデ	ナデ		〃	〃	焦茶	茶	胴部 263と同一カ
587	269	I－7	〃 〃				〃	ナデ	〃		〃	〃	〃	〃	〃
588	270	〃	〃 〃				〃	〃	〃		緻密	〃	茶	〃	自然釉
589	265	G－8	〃 〃				〃	〃	〃		〃	〃	黒灰	黄灰	〃
590	267	C－10	〃 〃				〃	輪積	〃		〃	〃	青灰	暗褐	〃
591	268	J－8	〃 〃				〃	ナデ	〃		微砂粒	〃	茶	茶	断面漆補修痕
592	263	G－2	〃 〃				〃	輪積・ナデ	〃		〃	〃	焦茶	〃	胴部
593	262	G－1	〃 〃				〃	ナデ	〃		粗砂粒	〃	赤茶	暗茶	〃
594	261	J－11	〃 〃				〃	輪積	〃		緻密	〃	黄茶	焦茶	〃
595	266	G－1	〃 〃				〃	ナデ	指圧痕		〃	〃	茶	暗茶	自然釉
596	258	J－10	〃 〃		310		1	水挽	水挽		微砂粒	〃	〃	茶	口縁部 同一カ
597	257	I－9	〃 〃				1.5	ナデ			〃	〃	〃	〃	底部
598	189	J－10	〃 摺鉢				細	水挽	擂目		長石 細粒	中	暗茶	薄茶	割れ口を擦る
599	198	G－1	〃 〃				〃	〃 ナデ	〃		〃	良	茶	〃	
600	181	G－2	〃 〃				〃	〃	〃		長石 粗粒	〃	薄茶	薄茶	
601	279	G-1他	〃 〃	100	348	154	4	〃	〃		〃	〃	茶	〃	
602	182	F－9	瓦質 〃		340		2	〃	〃		微砂粒	不	灰	灰	
603	195	K－9	〃 〃			143	3	〃 ナデ	〃		石英・長石 微粒	〃	灰白	灰白	
604	174	E－9	〃 〃				細	〃	〃		微砂粒	〃	〃	〃	
605	191	I－3	〃 〃				〃	指圧痕	〃		石英 微粒	〃	黒	黒	
606	286	E－8	〃 蓋		194		1	水挽	水挽		緻密	良	灰	灰	
607	253	E－10	土師器 〃		138		1	ナデ	〃		〃	不	明茶	明茶	
608	254	〃	〃 〃		150		1		〃			〃	薄茶	薄茶	磨耗
609	242	G－12	〃カワラケ	32	130	84	2	ナデ	ナデ		石英・長石 粗粒	〃	〃	〃	
610	250	H－10	〃 〃	28	120	50	2	〃	〃		長石 粗粒	良	茶	茶	
611	245	C－6	〃 〃	32	118	60	1	〃	〃		緻密	中	明茶	明茶	
612	246	〃	〃 〃				細	〃	〃		石英・長石 微粒	良	黄土	黄土	
613	248	H－10	〃 〃				〃	〃	〃		微砂粒	不	〃	黄白	
614	252	G－9	〃 〃				〃	〃	〃		石英・長石 微粒	良	〃	黄土	
615	241	G－11	〃 〃				〃				長石 粗粒	不	薄茶	薄茶	磨耗
616	244	E－10	〃 〃	25	110	60	1	水挽	水挽 スリップ		緻密	良	〃	〃	

584～595・598～600・604・605・607～616 S＝1／3　596・597・601～603・606 S＝1／6

り、665～667は脚部分である。

土師質土器　（第47・48図　表42・43　図版19）

蓋とカワラケがあるが、いずれも細片であり多くを知り得ない。607・608は蓋と考えられる。前者は口縁外面に膨らみを持たせ、後者は先端部を垂直に折り曲げる。609～631のカワラケがある。形態的に幾つかに分類する事ができ、aは609で代表される杯形で直立ぎみの器壁と広くて平坦な底部を持つもの、bは610の様に肉厚で丸底気味のもの、cは617の如く浅形で器肉が薄ものである。この中には口縁部を受口状を呈するものとしないものがあり、前者は概ね黒色処理を施されたものである。一方、後者の中の一部に特に緻密な胎土で磨きのある620・627は京都系の所産である。dは623～625などの個別のものがある。

瀬戸・美濃系　（第48・49図　表43・44　図版14）

632は飴釉の小壺である。頸部に凹帯をもち、肩部から胴部にかけて反蓮弁文が巡る。633～635は黒釉碗でいわゆる天目である。一般には古瀬戸といわれる一群である。

表43　掲載造物一覧表挿図№48

割付№	遺物№	出土位置	名称又は形態	計測(mm) タテ器高	ヨコ口径	厚さ底径	残存率	造り 器表	器内	木器	胎土又は材質	焼成	色彩 器表	器内	備考
617	233	G－9	土師質 カワラケ	22	130	60	2	水挽	ナデ		石英 微粒	良	黒	黒	灯明皿
618	234	I－10	〃 〃	19	120	58	2	〃	水挽		〃	〃	〃	〃	〃
619	232	K－10	〃 〃	19	98	30	4	ナデ	ナデ		石英・長石微粒	〃	〃	〃	〃
620	235	〃	〃 〃	16	30	62	4	水挽	水挽		石英 微粒・礫	不	黄白	黄白	京都系
621	230	G－9	〃 〃	22	110	60	2	ナデ	ナデ		石英・長石 微粒	良	黒	黄土	灯明皿
622	231	K－10	〃 〃	20	96	38	6	〃	〃		〃	〃	〃	黒	〃
623	249	E－9	〃 〃	15	78	49	1.5				微砂粒	不	黄白	黄白	磨耗
624	243	G－7	〃 〃	21	100	68	2	ナデ	水挽		緻密	中	薄茶	薄茶	
625	251	F－8	〃 〃	18	74	40	3	〃	ハケメ		〃	良	黒褐	黒褐	灯明皿
626	236	K－10	〃 〃				細	水挽	ナデ		微砂粒	中	薄茶	黒	〃
627	240	H－9	〃 〃				〃	ナデ	〃		緻密	〃	黄土	灰	京都系
628	239	E－6	〃 〃				〃	〃	〃		〃	〃	薄茶	薄茶	
629	237	G－9	〃 〃				〃	水挽	水挽		石英 微粒	良	暗褐	暗褐	灯明皿
630	238	G－7	〃 〃				〃	ナデ			緻密	不	黄土	薄茶	
631	247	E－9	〃 〃	21	98	70	1	〃	水挽		微砂粒	中	灰	灰白	
632	135	G－9	瀬戸系 小壺	38	30	40	12	反蓮弁文			緻密	良	緑褐	緑褐	最大径66
633	293	F－10	〃 天目碗				細	施釉	施釉		〃	〃	茶	茶	
634	291	I－4	〃 〃				〃	〃	〃		〃	〃	黒	〃	
635	292	E－6	〃 〃		110		1	〃	〃		〃	〃	茶	〃	
636	290	H－4	舶載陶器 〃		117		1	〃	〃		〃	〃	黒	黒	口縁部茶色
637	123	H－6	青磁碗		102		1	無文	無文		〃	〃	黄灰	黄灰	
638	117	D－10	〃 〃				細	蓮弁文	〃		〃	〃	青緑	青緑	
639	116	F－10	〃 〃		120		1	鎬文	線描文		〃	〃	緑灰	緑灰	
640	114	K－10他	〃 〃			56	12	無文	無文		〃	〃	薄緑	薄緑	貫入 高台内無釉
641	113	G－2	〃 〃			54	12	高台内ケズリ	文字押印		〃	〃	緑	緑	〃 「福瀛」
642	120	F－9	〃 〃				細	蓮弁文	無文		〃	〃	黄緑	黄緑	
643	125	E－8	〃 〃				〃	無文	〃		〃	〃	灰緑	灰緑	
644	124	B－8	〃 〃				〃	〃	〃		〃	〃	〃	〃	
645	118	E－4	〃 〃				〃	線描蓮弁文	〃		〃	〃	暗褐	暗褐	
646	119	J－6	〃 〃				〃	蓮弁文	〃		〃	〃	〃	〃	
647	121	E－6	〃 〃				〃	無文	劃花文		〃	〃	黄緑	黄緑	
648	127	F－5	〃 〃		128		〃	〃	無文		〃	〃	薄緑	薄緑	
649	122	E－6	〃 皿		120		1	〃	〃		〃	〃	青緑	青緑	貫入
650	109	J－9	〃 碗				細	〃	〃		〃	〃	青灰	青灰	
651	102	I－9	白磁皿			46	12	ヘラ調整	〃		〃	〃	灰白		割高台(4単位)
652	111	E－9他	青磁盤		231		4	無文	鎬文		〃	〃	薄緑	薄緑	
653	112	H－8	〃 〃		198		1	〃	無文		〃	〃	〃	〃	貫入

617～653 S＝1／3

668～674の施釉陶器がある。壺、甕、皿で一部に不確実なものもあるが瀬戸系の一群で、前者より時期を下げるであろう。

舶載陶磁器（第48・49図　表43・44　図版14～16）

636は黒釉碗でいわゆる建盞天目である。637は唯一の青磁壺で玉縁状の厚い口縁を持つ。638～648・650は碗で、蓮弁文をもつもの、劃花文をもつものがあり、640の見込みには縁起ものの文字がある。649は皿としたが確証はない。651は白磁の皿である。652・653は青磁の盤である。

654～657は染付皿で、いわゆる明染付と言われるものである。その他は碗で青花を見る。

近世陶器（第49図　表44）

ごく少量の近世陶器があり、675～678に図示した甕と皿である。これらが当遺跡と直接係わる

表44　掲載造物一覧表 挿図№49

割付№	遺物№	出土位置	名称又は形態	計測(mm) タテ器高	ヨコ口径	厚さ底径	残存率	造り 器表	器内	木器	胎土又は材質	焼成	色彩 器表	器内	備考
654	130	G－6	染付皿			70	1	花唐草文	玉取獅子文		緻密	良	白	白	明染付
655	128	G－4	〃　〃	29	120	71	3	無文	〃		〃	〃	〃	〃	〃
656	131	I－4	〃　〃				3	〃	〃		〃	〃	〃	〃	〃
657	129	J－4	〃　〃	18	100	54	1	花唐草文	十字花文		〃	〃	〃	〃	〃
658	132	G－6	〃　碗				細	無文	花唐草文		〃	〃	〃	〃	
659	134	G－4	〃　〃			30	12		青花		〃	〃	〃	〃	
660	133	K－7	〃　〃				細	唐草文	無文		〃	〃	青灰	灰白	
661	271	G－1	瓦質火器		194		1.5	ミガキ	水挽　ナデ		微砂粒	〃	薄茶	薄茶	口縁部 透かし
662	273	E－10	〃　〃		198		2	雷文	ナデ		石英・長石 微粒	中	紅黄	薄茶	波状口縁
663	272	C－8	〃　〃		220		2	蓮弁文連子文	〃		〃	良	黄土	黄土	
664	276	J－9	〃　不明				細	水挽	水挽		石英　微粒	〃	灰白	灰白	
665	275	E－6	〃　火器				〃	ケズリ			微砂粒	不	黄土	黄土	獣脚
666	274	F－8・10	〃　〃				〃	ミガキ	ナデ		微砂粒 石英微粒	良	黒	黒	脚部
667	278	E－9	〃　〃			173	3	水挽	〃		微砂粒	〃	灰白	灰白	器内釉溜
668	289	G－8	瀬戸系 壺				2	施釉	水挽		緻密	〃	黒茶	灰	長頸釉頸部
669	287	G－1	〃　〃				12	〃	〃		〃	〃	黒	明黄	〃
670	296	G－7	〃　壺カ				細	〃	〃		〃	中	黒茶	黒茶	
671	288	F－9	〃　〃				〃	〃	施釉		〃	良	黒	黒	
672	297	H－10	〃　甕カ				〃	〃	〃		微砂粒	〃	黒茶	明青	
673	294	F－8	不明 皿カ				〃	〃	〃		緻密	〃	黄茶	黄茶	
674	295	D－9	瀬戸系 甕				〃	〃	〃		〃	〃	黒	黒	
675	260	F－8	近世陶器〃				〃	水挽	水挽		微砂粒	中	茶	茶	口縁部
676	126	F－7	〃　皿カ				〃	施釉	施釉		緻密	良	黄緑	黄緑	
677	277	〃	〃　甕				〃	水挽	押印文		石英・長石 微粒	〃	焦茶	薄茶	「格子目文」
678	115	J－10	〃　皿カ			50	1	施釉	劃花文		緻密	〃	黄土	黄土	
679	280	I－9	須恵系 オハジキ		28							〃	灰	灰	甕片
680	282	J－9	〃　〃		23							〃	暗灰	暗灰	〃
681	284	G－4	〃　〃		29							〃	黒灰	灰	〃
682	283	〃	〃　〃		22							〃	灰	灰	〃
683	281	G－2	〃　〃		30							〃	暗灰	暗灰	〃
684	285	F－8	瓷器系 〃		26							〃	青灰	茶	〃

654～665・668～684 S＝1／3　666・667 S＝1／6

か否かは不明である。

土製品（第49・50図　表44・45　図版21）

679～684は陶片を打欠いたオハジキであり、土製品と言うにはやや不都合があろうがここに記した。直径2.2～3㎝程で須恵器系又は瓷器系の甕片を材料にしている。682～692はルツボ（とりべ）である。ノロが付着しているものが多い。693は羽口である。ここにも使用痕としてノロの付着を見る。ルツボと共にこの遺跡内で小鍛冶が行われた事を物語るものである。694～699は土錘である。直径5㎝程とおおきく、大型網の錘である。

石製品（第50図　表45　図版21・22）

石臼と砥石である。700・702が上臼、701・703は下臼である。砥石は大小様々であり、いずれもかなり使い込んだものである。

金工品（第51図　表46　図版22）

712は和鏡の鈕部片である。亀甲をあしらい孔を穿つ。713は不明のものであるが、合わせ金具で割りピンによって留められた部分である。714～728の銭貨がある。銭種を列記すれば「開元通寶」4（初鑄造年621）、「景徳元寶」（同1004）、「皇宋通寶」（同1039）、「元豊通寶」（同

表45　掲載造物一覧表 挿図No.50

割付No.	遺物No.	出土位置	名称又は形態	計測(mm) タテ器高	ヨコ口径	厚さ底径	残存率	造り 器表	器内	木器	胎土又は材質	焼成	色彩 器表	器内	備考
685	307	F－3	土製品 ルツボ	36	95	丸底	6	手捏			石英 微粒	良	灰	黒	ノロ付着
686	304	G－2	〃 〃	37	95	〃	5	〃			微砂粒	〃	〃	灰	〃
687	306	H－6	〃 〃	37	85		3	〃			石英 微粒	〃	黄土	〃	〃
688	305	〃	〃 〃	36	86	丸底	4	〃			微砂粒	〃	灰白	〃	
689	311	F－3	〃 〃				細	〃			〃	〃	暗灰	黒	ノロ付着
690	310	H－7	〃 〃				〃	〃			〃	〃	灰	黄土	〃
691	308	I－7	〃 〃				〃	〃			石英 微粒	〃	〃	黒	〃
692	309	I－3	〃 〃				〃	〃			石英・長石 微粒	〃	黒	〃	
693	312	〃	〃 羽口		30		〃	〃			長石 細粒	〃	暗灰	薄茶	ノロ付着
694	302	G－1	〃 土錘	45	50		3	〃			長石 粗粒	〃	黄土	黄土	
695	301	I－4	〃 〃	65	55		4	〃			〃	中	薄茶	薄茶	
696	298	G－8	〃 〃	52	58		12	〃			〃	良	〃	〃	完形
697	303	E－9	〃 〃	48	55		3	〃			緻密	〃	黄灰	黄灰	
698	299	〃	〃 〃	60	49		6	〃			長石 粗粒	〃	薄茶	薄茶	
699	300	H－7	〃 〃	53	50		6	〃			石英・長石 微粒	不	赤茶	赤茶	
700	318	J－8	石製品 石臼	110	320		2								上臼
701	317	H－11	〃 〃	76	305		4								下臼
702	316	J－9	〃 〃	104	319		1.5								上臼
703	313	H－9	〃 〃		27		細								下臼
704	333	C－7	〃 砥石	61	30	19									四方研ぎ面
705	332	G－2	〃 〃	117	32	24									〃
706	336	J－8	〃 〃	48	35	12									〃
707	334	〃	〃 〃	44	24	18									〃
708	328	G－1	〃 〃	79	52	53									〃 V字痕
709	329	G－3	〃 〃	89	60	62									〃 〃
710	337	H－8	〃 〃	135	66	19									二方研ぎ面
711	331	F－7	〃 〃	233	56	52									四方研ぎ面

685～699・703～710 S＝1／3　700～702・711 S＝1／6

表46　掲載造物一覧表 挿図No.51

割付No.	遺物No.	出土位置	名称又は形態	計測(mm) タテ器高	ヨコ口径	厚さ底径	残存率	造り 器表	器内	木器	胎土又は材質	焼成	色彩 器表	器内	備考
712	344	J－4	金工品 和鏡				細	亀甲							鈕部
713	342	〃	〃 不明	37	27	9	〃								残欠
714	360	F－7	〃 銭貨				12								「開元通寶」
715	358	C－10	〃 〃				12								「 〃 」
716	345	E－9	〃 〃				12								「 〃 」
717	350	C－6	〃 〃				10								「 〃 」
718	361	〃	〃 〃				8								「景德元寶」
719	348	F－10	〃 〃				3								磨耗
720	354	E－9	〃 〃				12								「元豊通寶」
721	357	〃	〃 〃				12								「元祐通寶」
722	353	G－11	〃 〃				12								「政和通寶」
723	355	H－9	〃 〃				12								「 〃 」
724	351	F－10	〃 〃				12								「洪武通寶」
725	356	H－11	〃 〃				12								「 〃 」
726	359	G－11	〃 〃				12								「永楽通寶」
727	349	H－10	〃 〃				8								不明 残欠
728	352	I－3	〃 〃				4								「寶」 〃
729	343	G－2	〃 火箸	352	5	5									

712 S＝1／1　713～729 S＝1／2

1078）、「元祐通寶」（同1086）、「政和通寶」2（同1111）、「洪武通寶」2（同1368）、「永楽通寶」（同1408）、「不明」2でいる。729は火箸であり、時期を特定できない。

7　その他の木製品

遺構出土の遺物の内、図示しなかった木製品281点を表47に記録した。曲物側板、底板、など生活関連用具を始めとして、切端、削屑に至るまで様々であるが改めて図示にたえる程のものではない。

表47－1　その他の木製品計測表

番号	遺物番号	出土位置	名称又は形態	計測（mm） タテ	ヨコ	厚さ	直径	材質	造り	備考
1	748	SE－7	板状	125	65	8		杉		
2	749	〃	〃	100	50	9		〃	切る	
3	750	〃	木端	115	20	2		〃	〃	
4	751	〃	杭状	315	50	3		栗	割る	
5	752	〃	〃	215	35	2		〃	割る・削る	
6	753	〃	木片	230	44	10		〃	削る	（コッパ）
7	754	〃	切端	135	70	30		不明	割る・削る	
8	136	SE－8	曲線側板	(130)	(50)	4		杉		
9	137	〃	〃	150	15	3		〃		
10	331	SE－9	不明	252	80	30		桧カ	削る	
11	826	〃	楔	190	21	15		杉		
12	610	SE－13	自然木	620			55	不明		
13	611	〃	朶	174			32	〃	切る	
14	612	〃	木片	110	45	25		栗	〃・割る	
15	682	〃	〃	55	18	15		イタヤカ	削る	
16	683	〃	木切	105	31	15		杉	削る・切る	
17	518	SE－29	〃	112			24	不明	〃	切込・コモヅチカ
18	524	SE－32	曲物側板	245	15	4		杉	〃	切目・風化激しい
19	625	〃	板	245	105	9		〃	切る	
20	626	〃	曲物側板	265	16	3		〃	削る	結紐・結孔・4点一括
21	627	〃	木片	110	23	12		〃	〃・切る	
22	514	SE－37	杭状	295	35	35		栗	〃	
23	597	〃	桟片	120	25	12		杉	切る	
24	526	SE－48	削屑	370	18	2		〃	削る	4点一括
25	527	〃	木片	248	20	17		栗カ	割る	
26	528	〃	〃	100	43	10		杉	〃	
27	529	〃	杭状	220	50	40		栗カ	〃	焼け
28	550	〃	曲物側板	130	15	2		杉	削る	有孔
29	255	SE－53	桟状	264	18	5		〃	〃・切る	
30	256	〃	〃	115	16	7		〃	〃	焼け
31	257	〃	木端	103	15	2		〃	〃	
32	258	〃	〃	105	13	1		〃	〃	
33	264	SE－55	木片	90	40	20		不明	割る	
34	265	〃	〃	90	60	10		杉		
35	266	〃	切端	67	40	10		杉	切る	
36	268	〃	板状	170	15	1		〃	削る	
37	269	〃	桶底板	130	25	7		〃	〃	
38	270	〃	切端	95	35	15		〃	切る・割る	
39	271	〃	木片	100	47	5		〃	削る	割りコッパ
40	272	〃	切端	122			20	栗	切る	
41	617	〃	〃	56	48	25		〃	〃	
42	618	〃	木端	62	40	2		杉	〃　削る	
43	619	〃	木炭	52	22	20		楢カ		2点一括
44	689	〃	木片	195	60	15		イタヤカ	削る	
45	690	〃	板状	160	140	10		〃	割る	
46	726	〃	〃	260	16	3		杉	削る	面取り
47	727	〃	杭状	275			35	栗	〃	丸材
48	728	〃	〃	160	45	25		〃	〃・割る	
49	279	〃	〃	180	35	17		〃	〃・〃	焼け
50	730	〃	木片	132	35	18		〃	〃・〃	
51	731	〃	切端	182	85	37		楢カ	〃・〃	
52	732	〃	杭	270	60	30		栗	〃・〃	完形
53	733	〃	〃	210	75	35		〃	〃・〃	〃
54	734	〃	杭状	210	30	18		〃	〃・〃	
55	735	〃	木片	720	27	25		〃	〃・切る	2点
56	547	SE－57	〃	105	48	30		桐カ	〃	
57	548	〃	〃	125	45	25		不明	〃	
58	549	〃	〃	160	40	27		チャンチンカ	割る	

表47－2

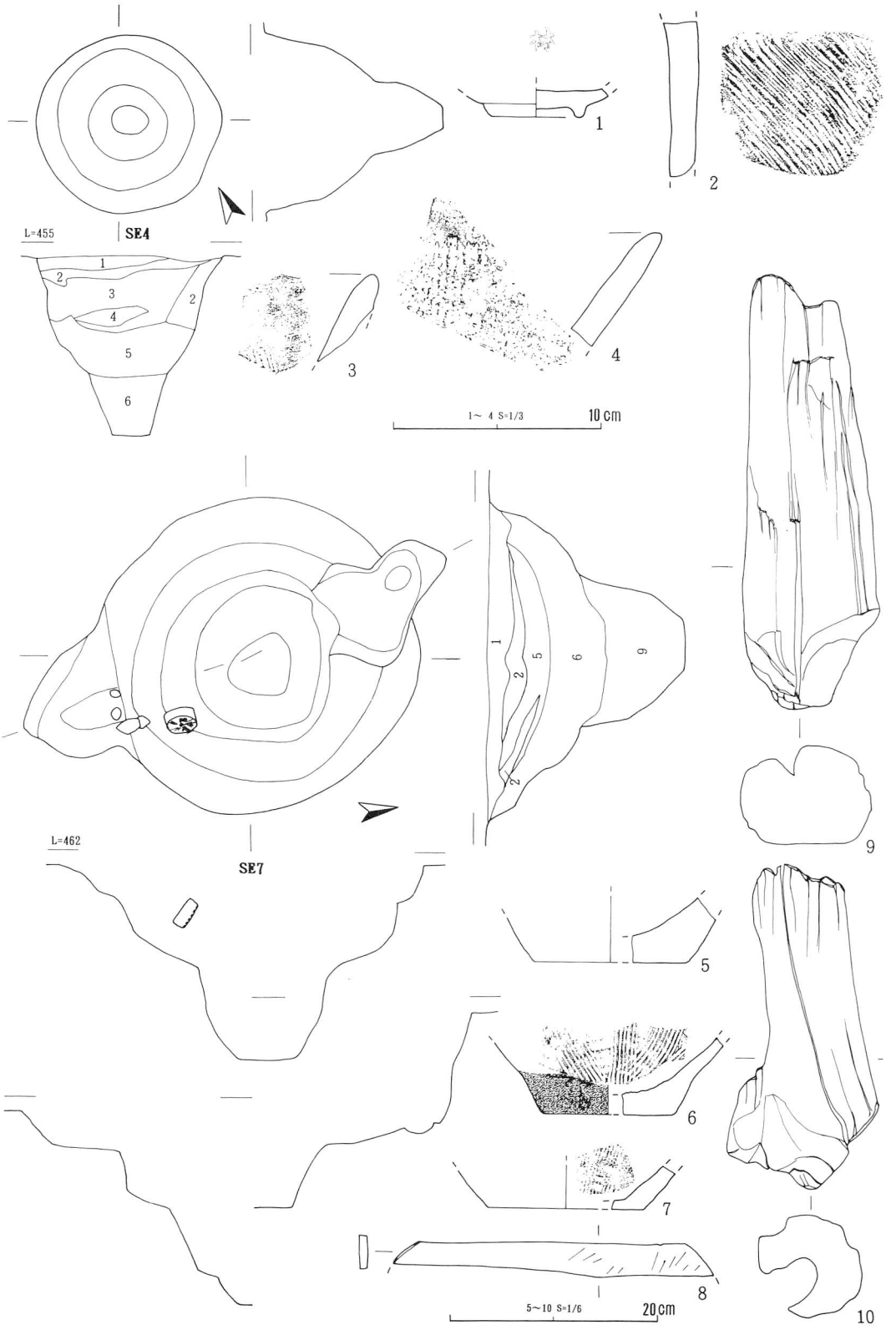
番号	遺物番号	出土位置	名称又は形態	計測（mm） タテ	ヨコ	厚さ	直径	材質	造り	備考
59	550	SE－57	切屑	50	24	17		杉	割る	
60	551	〃	木尻	72			20	不明		焼け・雑木
61	552	〃	朶端	50			18	〃	切る	
62	553	〃	切屑	120	15	8		杉	割る	桟状
63	554	〃	切端	80	15	3		〃	削る	
64	555	〃	桟片	12	12	3		〃	〃	
65	556	〃	板状	82	50	3		〃	〃	柾目
66	557	〃	〃	180	31	7		桧カ	切る	板目・切込
67	558	〃	曲見側板	130	54	5		杉	削る	切目
68	559	〃	木端	95	32	2		〃	〃	6点一括
69	560	〃	桟状	10	12	3		〃		
70	561	〃	削屑	12	2	3		〃	削る	
71	562	〃	木炭	40	40	15				硬質
72	67	SE－70	高下駄の歯	70	80	14		イタヤ	削る	残片
73	254	〃	杭状	156	60	20		栗	〃・切る	
74	272	SE－76	〃	215	45	20		杉		
75	519	SE－80	木端	161	40	16		栗		焼け
76	520	〃	〃	106	18	8		〃		〃
77	741	〃	杭	236	43	40		〃	削る・割る	上部焼け
78	742	〃	切端	130	35	20		桧カ	切る・〃	
79	743	〃	桟状	90	14	12		杉	〃	
80	744	〃	木片	215	80	25		栗	削る・割る	焼け（コッパ）
81	745	〃	〃	120	55	15		〃	〃・〃	〃（〃）
82	746	〃	〃	85	75	15		〃	〃・切る	2点（〃）
83	747	〃	〃	132	37	12		杉	割る	（〃）
84	564	SE－81	切端	120	62	6		不明	切る	
85	515	SE－82	木切	88	32	25		杉	削る	楔状
86	516	〃	桟状	153	20	2		〃		切込み
87	517	〃	切端	142	16	5		栗	削る	
88	565	〃	木切	202			45	不明	切る	桜カ
89	566	〃	〃	95	40	17		桜	〃・割る	
90	567	〃	木端	100	40	3		杉	削る・〃	
91	568	〃	杭	96	28	17		栗	〃・〃	
92	569	〃	覧物側板カ	370	11	1		杉	〃	
93	570	〃	桟状	260	36	4		桧カ	〃	
94	571	〃	板片	126	35	3		杉	〃	切込み
95	329	SE－83	漆器片							表黒・内赤漆
96	574	〃	板状	129	65	4		杉	切る	柾
97	575	〃	〃	133	41	5		〃	削る	〃
98	576	〃	〃	80	72	6		桧カ	〃・切る	結紐付
99	577	〃	桟	195	14	8		杉	〃	切込
100	578	〃	桟状	85	12	6		〃	〃	
101	579	〃	〃	113	14	6		〃	割る	
102	580	〃	板状	140	32	5		〃		
103	581	〃	木片	150	29	10		〃	削る	
104	582	〃	曲見側板	70	20	2		〃	〃	3点一括
105	583	〃	木端状	115	18	2		〃	〃	2点一括・有孔
106	584	〃	串状	75	7	3		〃	〃	3点
107	585	〃	〃	110	9	2		〃	〃	
108	586	〃	木端	121	12	1		〃	〃	
109	691	SE÷84	切端	145	65	35		桧カ	切る・割る	
110	692	〃	〃	100	33	33		〃	〃・〃	
111	693	〃	〃	114	30	21		杉	〃	
112	694	〃	〃	42	24	12		〃	〃	
113	695	〃	削屑	105	45	2		〃	削る	4点一括
114	573	SE－85	曲物側板	220	60	3		〃	〃	大型・井戸側カ
115	684	SE－93	桟状	95	20	5		〃	〃・切る	
116	685	〃	木端	111	20	1		〃	〃	
117	686	〃	木片	67	25	5		栗	〃・切る	
118	687	〃	木尻	75	35	18		不明	割る・〃	焼け
119	688	〃	樹皮	90	35	6		チャンチンカ		
120	107	SE－94	串カ	20	7	3		杉		
121	120	〃	刀形カ	90	(17)	5		〃		
122	201	〃	木端	150	38	6		〃	削る・切る	
123	203	〃	〃	101	28	6		〃	〃・〃	
124	211	〃	桟状	120	22	5		〃	〃	
125	358	〃	箆状	81	16	6		栗	〃	
126	359	〃	ハシ状木製品	111	7	5		杉		
127	360	〃	〃	80	7	4				
128	361	〃	〃	52	6	4				
129	362	〃	〃	80	6	4				
130	593	〃	切端	100	65	60		不映	切る	
131	594	〃	〃	90	50	20		〃	〃	
132	595	〃	〃	65	47	22		〃	〃	
133	596	〃	〃	68	50	22		〃	〃	3点一括

表47－3

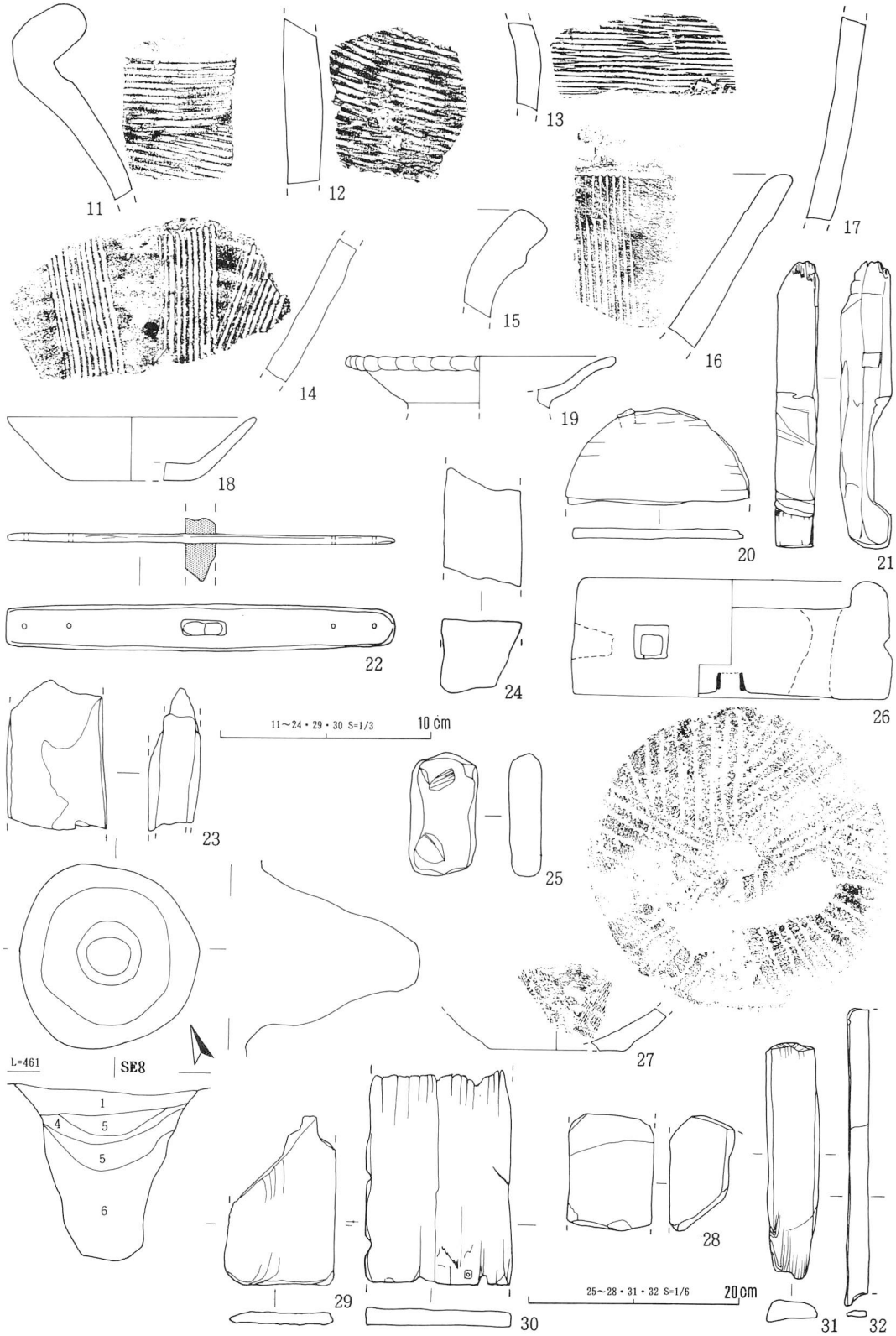
番号	遺物番号	出土位置	名称又は形態	計測（mm） タテ	ヨコ	厚さ	直径	材質	造り	備考
134	644	SE－94	串状	175	20	12		桧カ	切る・削る	
135	645	〃	〃	97	20	8		杉	削る	面取り
136	646	〃	〃	120	20	6		楢カ	〃	
137	647	〃	木切	60	15	12		杉		
138	648	〃	〃	132	15	12		〃	割る	
139	649	〃	切端	65	20	10		欅	切る	
140	650	〃	〃	50	11	10		〃	〃	
141	651	〃	木片	100	35	3		栗カ	削る	2点
142	652	〃	〃	85	35	4		杉	〃	
143	653	〃	〃	115	65	14		〃	〃	
144	654	〃	板状	230	17	3		〃	〃	
145	655	〃	〃	240	15	3		〃	〃	切込
146	656	〃	桟状	135	12	4		〃	割る	
147	657	〃	板状	210	28	3		〃		切込
148	658	〃	木端	135	17					15点
149	736	〃	切端	110	100	65		不明	切る	
150	737	〃	〃	160	40	35		杉	〃	角材
151	738	〃	〃	115			39	〃	〃・削る	丸材・柄カ
152	260	SE－95	板状	110	48	5		桧カ	〃・〃	
153	261	〃	〃	120	40	8		杉	〃・〃	
154	262	〃	〃	100	35	3		〃	〃・〃	
155	263	〃	〃	150	25	6		〃	〃	
156	659	SE－98	切端	135	48	27		〃	切る・〃	面取り
157	660	〃	板状	130	34	3		〃	〃・〃	
158	661	〃	桟状	220	34	12		栗	〃	
159	662	〃	切端	90	65	50		イタヤカ	切る	2点一括
160	663	〃	〃	180	110	65		〃	〃	
161	757	〃	底板	180	35	4		杉	〃・削る	
162	758	〃	板片	85	56	6		〃	〃	2点
163	71	SE－99	樹皮（桜皮）	15	28	0.2		桜		原材料カ
164	696	〃	板状	350	64	10		桧カ	切る	
165	697	〃	桟状	347	26	6		栗	削る・割る	
166	698	〃	杭	440	34	32		〃	〃・〃	
167	276	SE－102	蓋板カ	255	105	5		杉	〃・切る	面取り
168	277	〃	桟状	165	70	8		〃	〃・割る	
169	278	〃	木片	100	20	3		〃	〃	
170	279	〃	曲物側板	95	27	3		〃	〃	
171	280	〃	桟状	135	46	7		〃	〃	
172	281	〃	〃	175	30	15		梃カ	〃	
173	282	〃	〃	130	7	5		杉	〃	
174	283	〃	〃	185	20	10		〃	〃	
175	284	〃	木片	118	20	4		〃	〃	
176	285	〃	板状	230	50	4		桧カ	〃	
177	286	〃	木端	270	20	1		杉	〃	
178	287	〃	板状	285	58	5		〃		折敷片カ
179	288	〃	〃	286	155	6		〃	切る	
180	289	〃	〃	475	100	8		栗	削る	
181	290	〃	桟状	500	50	11		杉	切る	
182	291	〃	杭状	760	70	50		〃	〃・削る	丸太
183	613	SX－89	〃	256			40	チャンチンカ	削る	
184	614	〃	木片	320	80	50		杉	切る・割る	
185	525	SK－10	木端	110	35	13		〃		3点一括
186	680	SK－14	木片カ	66	10	10		〃	切る	
187	681	〃	木尻	100			25	不明		焼け
188	591	SK－15	桟状	32	25	6		杉		
189	592	〃	樹皮	110	44	4		不明		
190	598	SK－26	板状	205	83	8		杉		4点一括・底板カ
191	523	SK－66	木端	80	17	9		栗		煙け（折れ）
192	501	内漆1－1	曲物側板	65	25	2		杉		ノコギリ目
193	502	〃	〃	120	11	1		〃		
194	503	〃	杭状	210	32	30		栗	削る	
195	664	〃	木片	110			25	不明	切る	
196	609	内漆1－5	板	141	50	12		杉	〃	新しいもの
197	544	内漆1－6	木切	400			30	松	削る	焼け・松枝
198	545	〃	木端	310	90	50		栗	割る	
199	546	〃	〃	95	45	20		杉	切る	
200	615	〃	板	210	110	9		桐	〃	一括
201	730	〃	切端	230	95	55		栗	〃・割る	
202	740	〃	木片	327	50	8		〃	〃	（コッパ）
203	531	内漆1－7	〃	180	20	17		桧カ	割る	
204	532	〃	〃	70	20	8		杉	切る	桟状
205	533	〃	木切	110	25	14		〃		折れ
206	534	〃	木端	118	25	3		〃	削る	
207	535	〃	切端	100	51	7		〃	切る	

表47－4

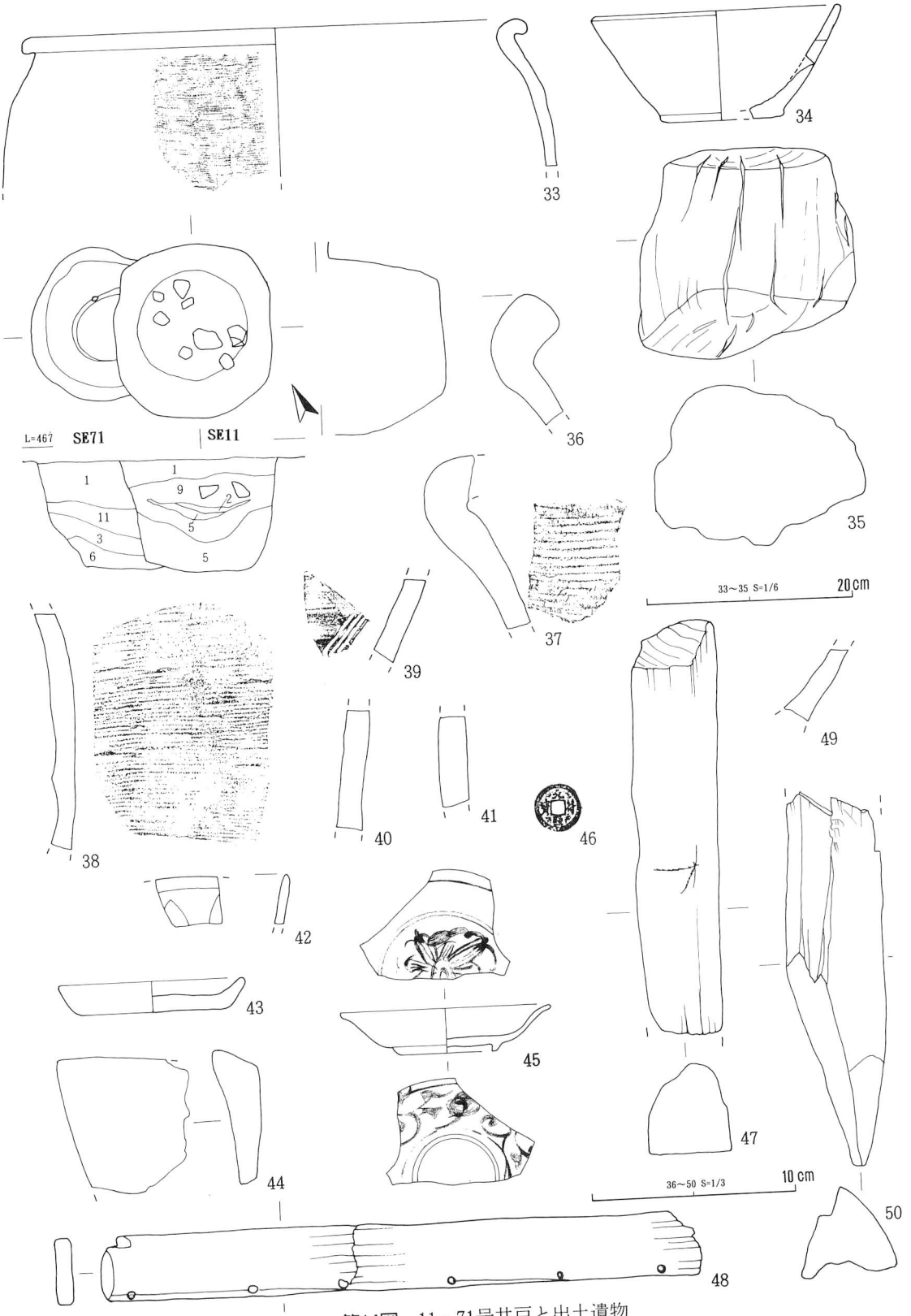
番号	遺物番号	出土位置	名称又は形態	計測（mm） タテ	ヨコ	厚さ	直径	材質	造り	備考
208	536	内漆1－7	木尻	150		25		不明		焼け
209	537	〃	切端	142	69	22		杉	切る	
210	538	内漆1－8	〃	44	25	6		〃	〃	
211	539	〃	木片	124	24	6		〃	削る	刀形カ
212	540	〃	切端	175	120	50		〃	切る	
213	541	〃	木片	270	110	40		栗	割る	
214	542	〃	曲物側板	300	35	3		杉	削る	14点一括・復元不能
215	543	〃	〃	185	25	2		〃	〃	3殴一括
216	616	〃	串状	170	6	2		〃	切る	一括
217	43	内漆1－9	板状	128	44	7		栗	削る	
218	44	〃	〃	142	18	5		杉	〃	
219	45	〃	桟状	68	12	5		〃	〃	
220	46	〃	〃	140	16	9		〃	〃	
221	72	〃	削屑	95	15	0.2		〃		
222	73	〃	〃	90	14	0.2		〃		
223	85	〃	切端	53	47	27		〃	切る	角桟・切片
224	86	〃	杭	142	42	23		栗	削る・割る	割杭
225	88	〃	切端	60	48	15		杉	切る・〃	両端切
226	89	〃	角桟・切端	315	41	18		〃	〃	平角桟
227	90	〃	桟・切端	253	16	15		〃	削る	楔栓状
228	91	〃	杭状	315	75	44		〃	削る・割る	
229	92	〃	桟状	125	16	5		〃		折れ
230	93	〃	〃	80	20	4		〃		〃
231	94	〃	木端	159	27	1		〃	切る	
232	95	〃	〃	130	25	2		〃	〃	
233	96	〃	〃	127	26	2		〃	〃	
234	97	〃	〃	133	20	1		〃	〃	
235	98	〃	〃	144	15	1		〃	〃	
236	99	〃	曲物側板	120	44	1		〃	削る	ノコギリ目・有孔
237	100	〃	〃	250	50	3		〃	〃	〃
238	522	〃	〃	225	25	2		〃	〃	2枚一括
239	523	〃	木端	90	20	1		〃	切る	〃
240	665	〃	切端	74	45	30		桧カ	〃	
241	666	〃	削屑	225	35	8		杉	削る	2点一括
242	699	〃	曲物側板	200	50	30		〃	〃	切目・5点一括
243	700	〃	切端	70	58	32		〃	切る	角材
244	701	〃	切端カ	100	80	30		〃	〃	〃・切込
245	702	〃	切端	70	48	44		栗	〃	〃
246	703	〃	〃	75	36	30		杉	〃	〃
247	704	〃	杭状	230	60	46		不明	削る	丸材
248	705	〃	杭	195			40	栗	〃	〃
249	706	〃	切端	180	80	35		楢	〃・切る	〃・切込
250	707	〃	〃	100	35	17		杉	切る	〃
251	708	〃	〃	110	42	37		栗	〃・割る	
252	709	〃	〃	145	75	19		杉	〃・削る	板材
253	710	〃	〃	92	90	12		〃	〃	〃
254	711	〃	〃	97	42	14		〃	〃	〃
255	712	〃	〃	48	40	14		〃	〃	〃
256	713	〃	〃	106			25	栗カ	〃・削る	丸材
257	714	〃	木片	275	10	27		杉	〃・割る	焼け（コッパ）
258	715	〃	〃	160	65	5		〃	削る・〃	（コッパ）
259	716	〃	〃	230	60	6		〃	〃	〃
260	717	〃	〃	150	55	15		〃	割る	〃
261	718	〃	〃	110	30	5		〃	削る	〃
262	719	〃	〃	220	45	12		〃	〃	焼け
263	720	〃	木端	105	35	4		〃	切る	3点
264	721	〃	〃	180	45	3		〃	〃	板状
265	722	〃	木片	45	12	10		栗		
266	723	〃	樹皮	303	100	3		杉	切る	両端切り
267	724	〃	面取棒	380	30	12		〃	削る・割る	〃
268	725	〃	〃	380	32	15		栗	〃・〃	〃
269	755	内漆1－10	桟状	185	21	12		杉カ	切る・割る	
270	599	内漆1－11	板状	287	38	2		杉	〃・削る	曲物側板カ
271	600	〃	〃	312	25	4		〃	〃・〃	
272	601	〃	木端	147	15	3		〃	削る	
273	602	〃	〃	50	21	2		〃	〃	2点一括
274	603	〃	木片	160	35	13		栗カ	割る	
275	629	内漆1－11	曲物側板	410	58	2		杉	削る	3点一括
276	630	〃	〃	80	18	1		〃	〃	4点一括
277	631	〃	曲物カ	72	23	4		〃	〃	2点一括
278	632	〃	〃	158	11	2		〃	〃	
279	633	〃	〃	270	29	1		〃	〃	
280	634	〃	板	262	50	10		〃	〃・切る	
281	635	〃	〃	170	74	10		〃	〃	



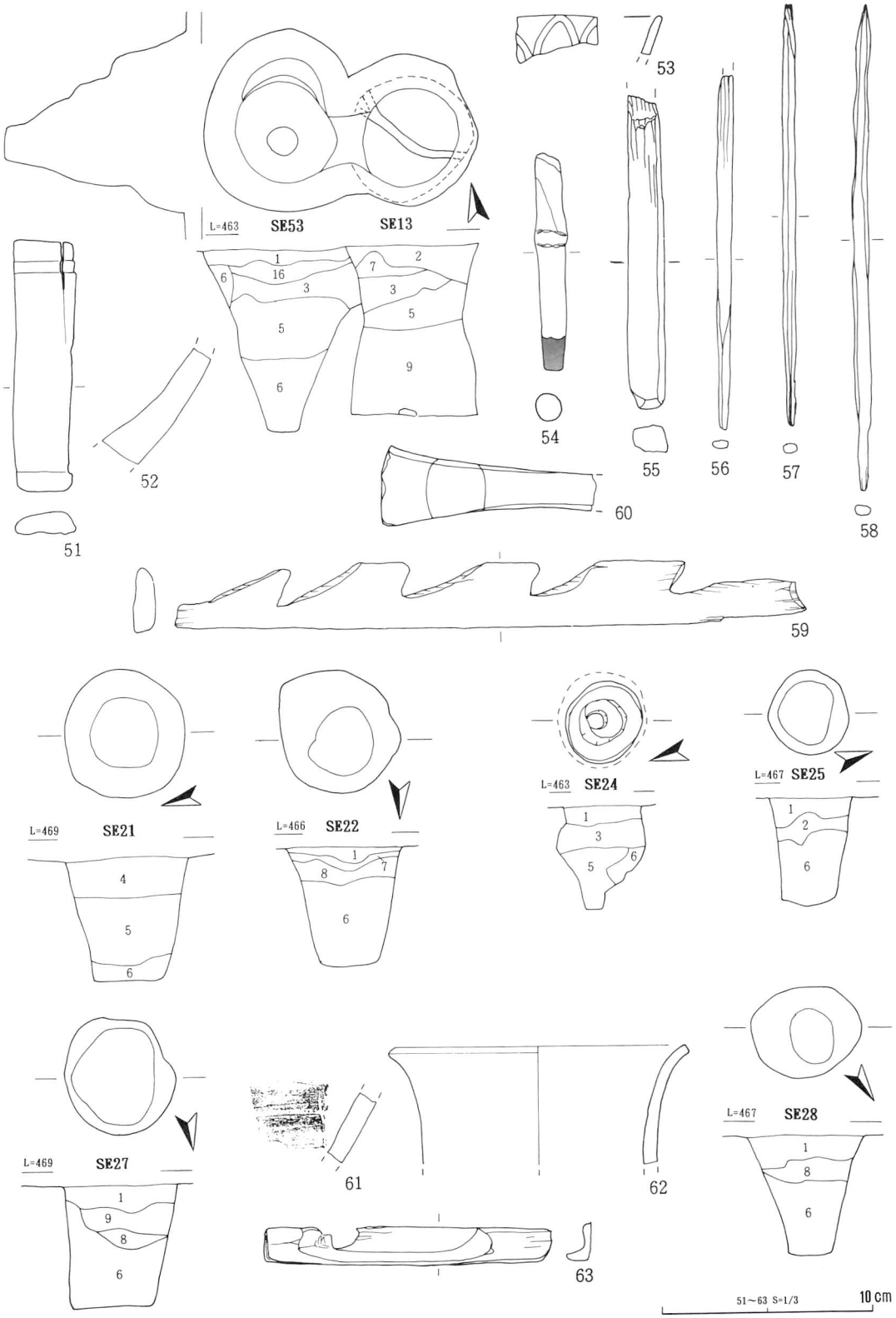
第12図　4・7号井戸と出土遺物



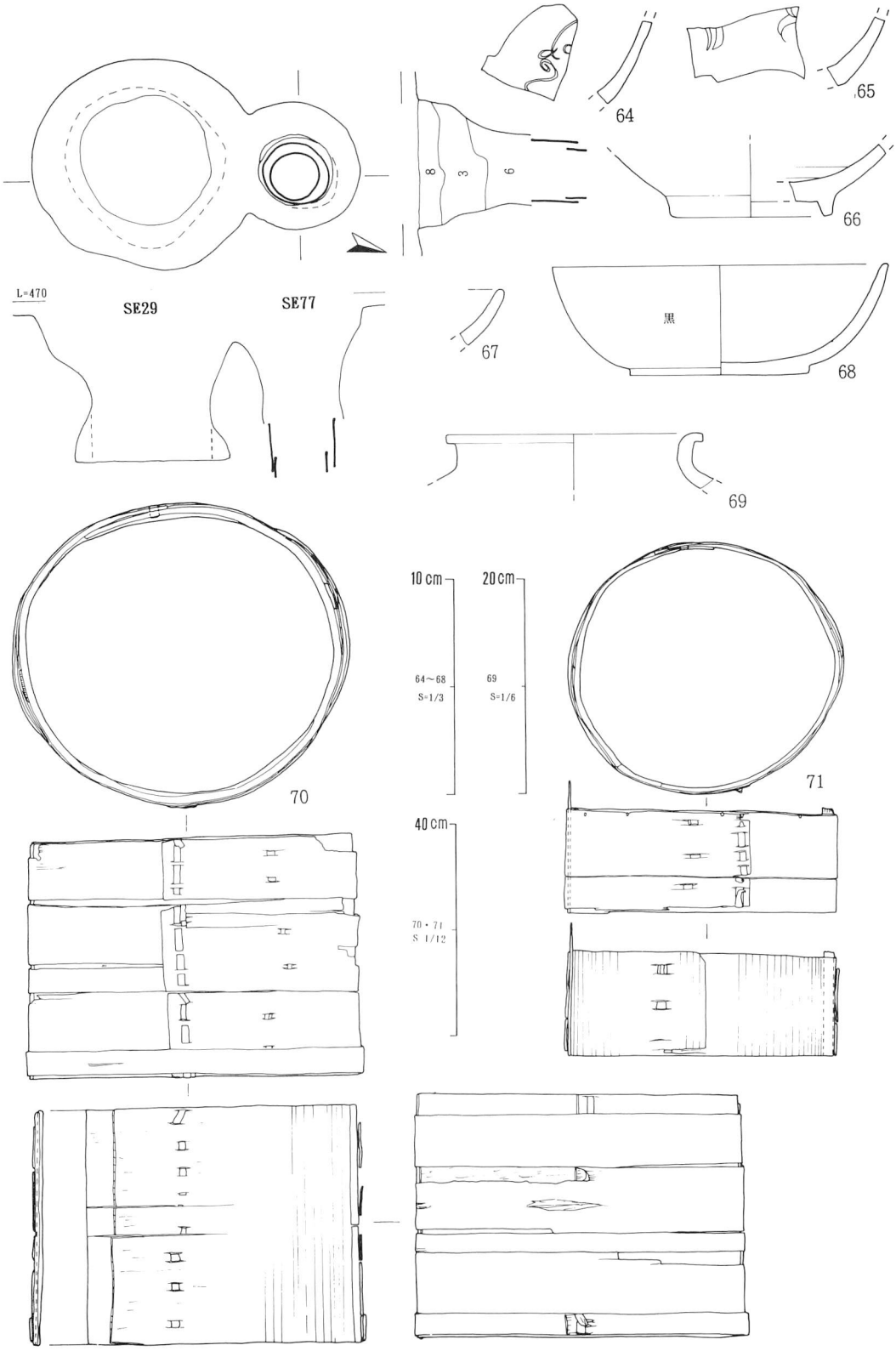
第13図　7号井戸出土遺物・8号井戸と出土遺物



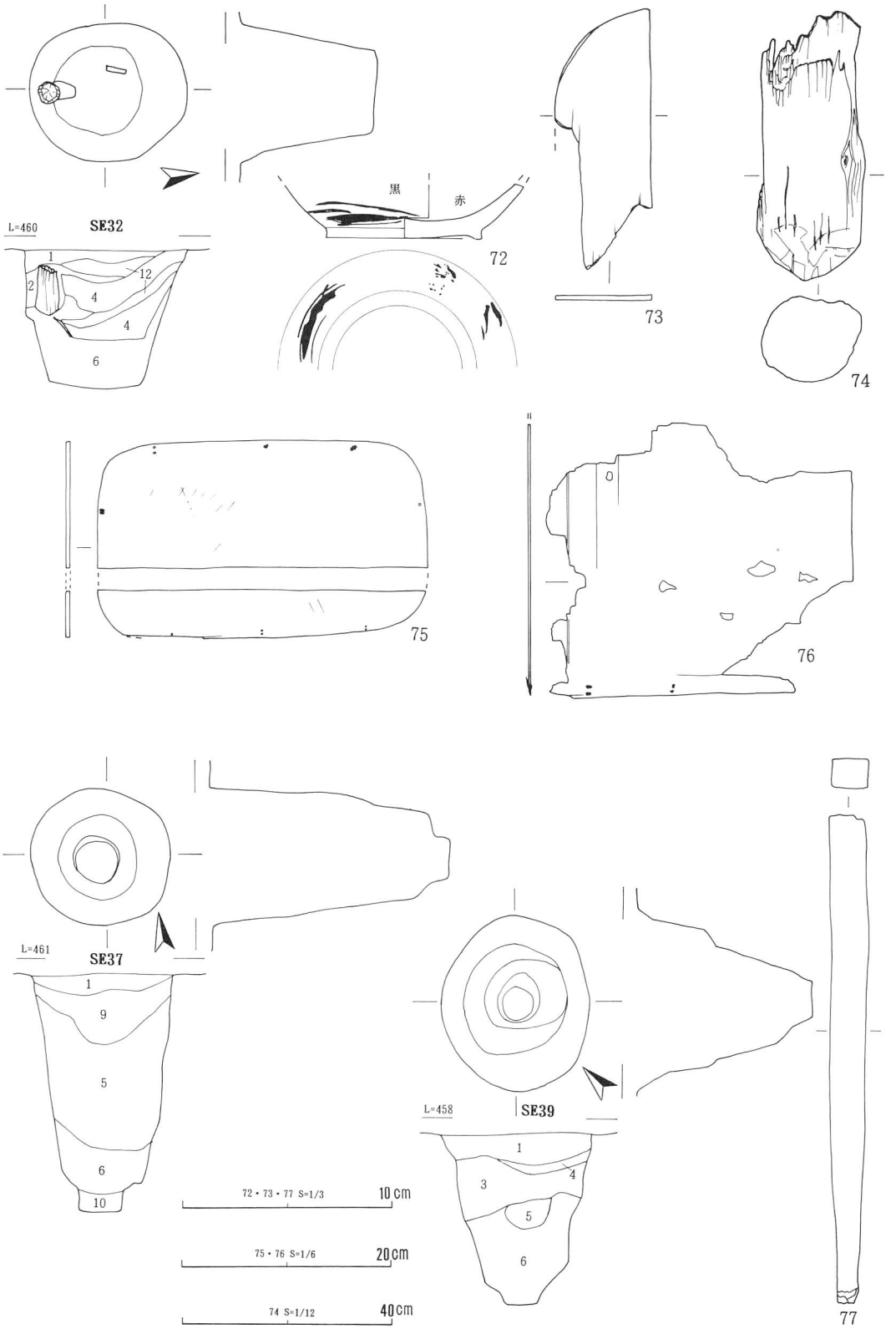
第14図　11・71号井戸と出土遺物



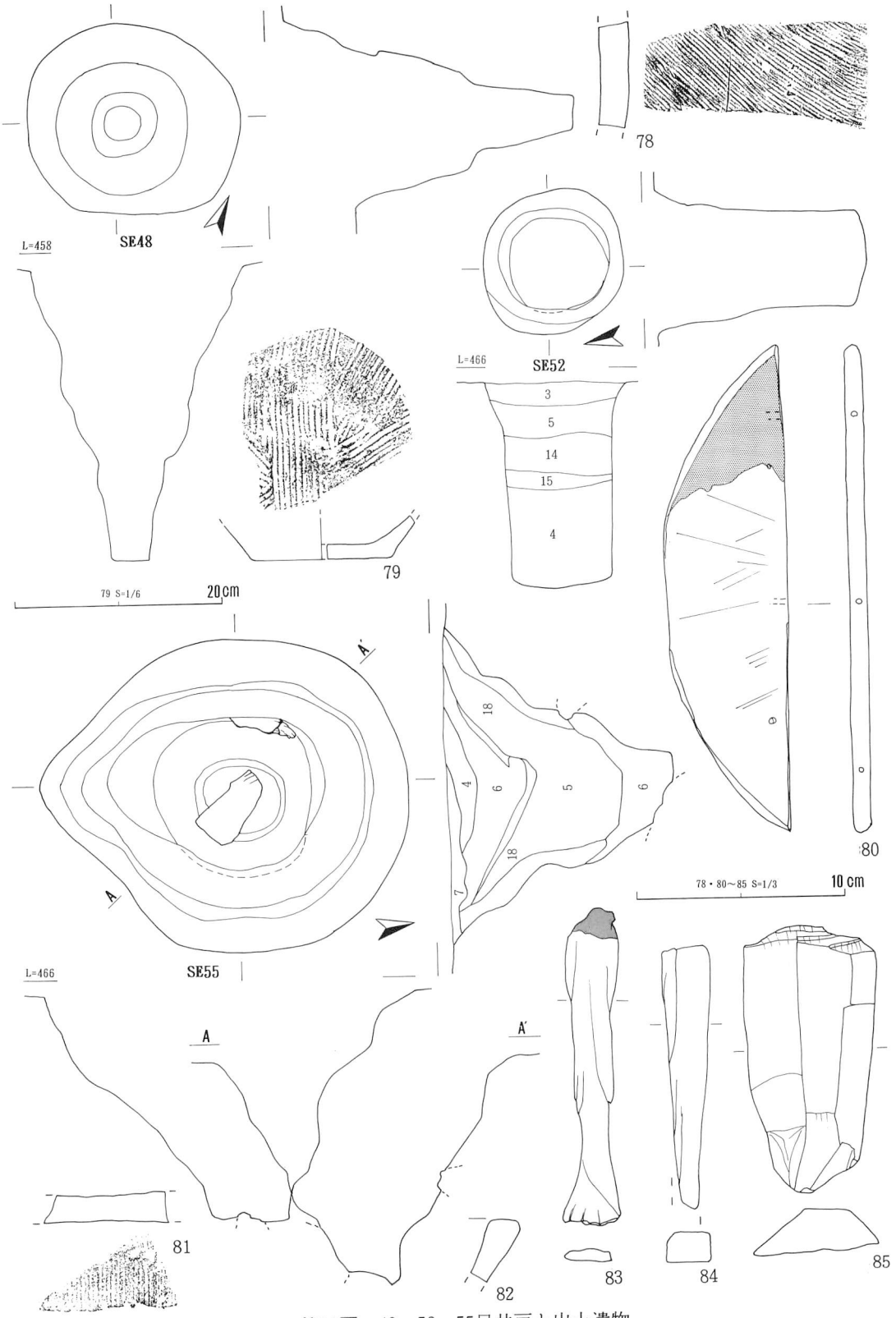
第15図　13・53・27号井戸と出土遺物



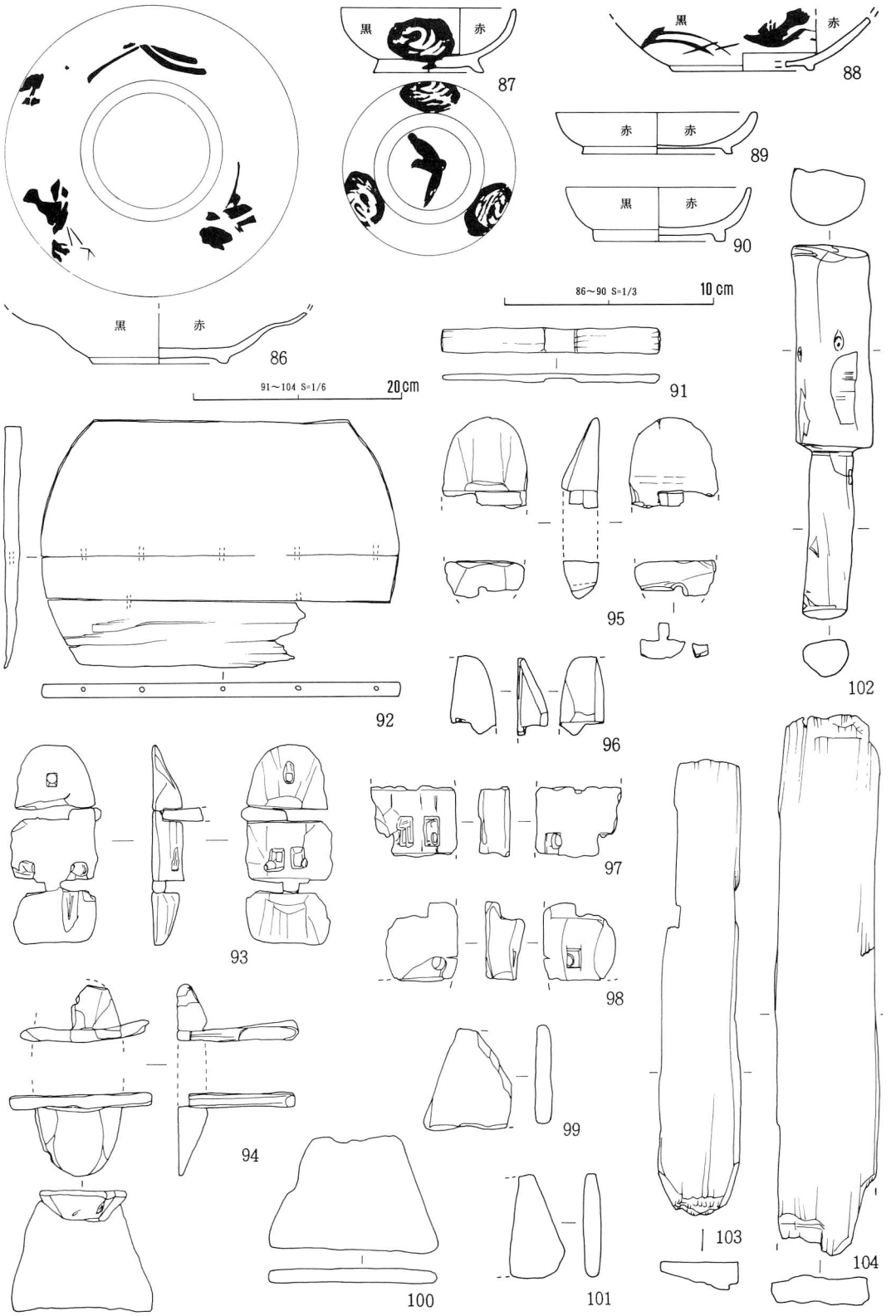
第16図　29・77号井戸と出土遺物



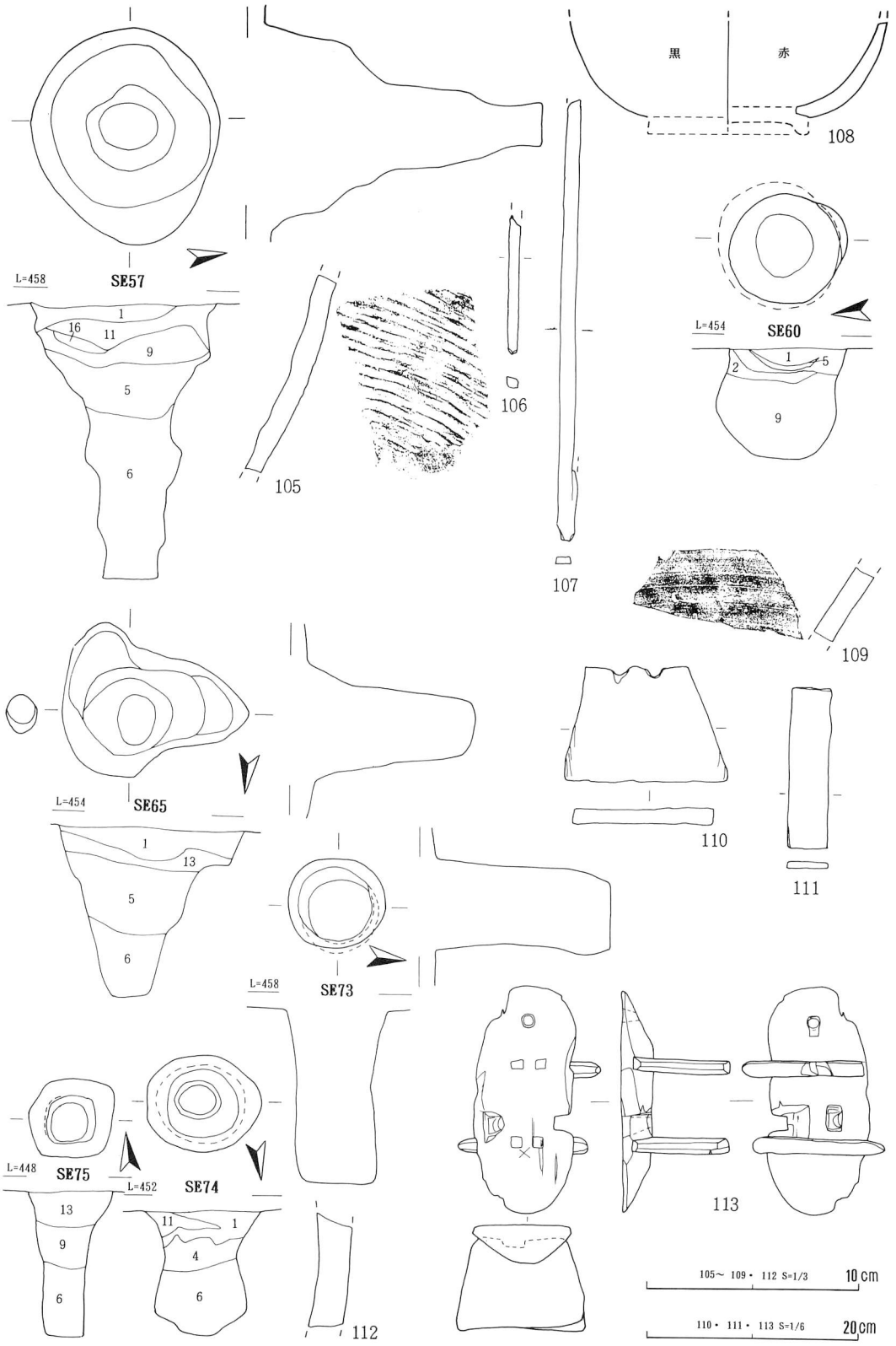
第17図　32・39号井戸と出土遺物



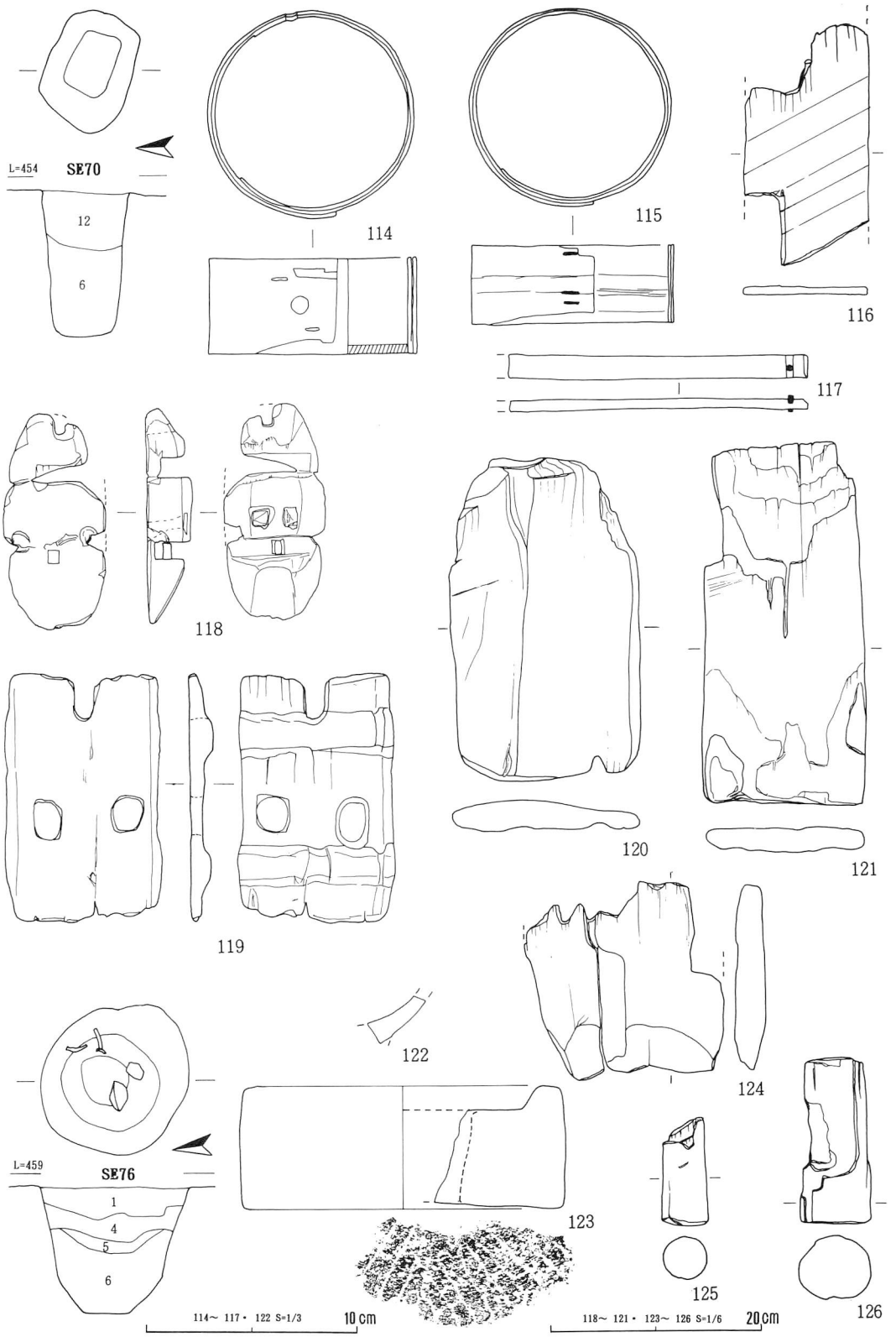
第18図　48・52・55号井戸と出土遺物



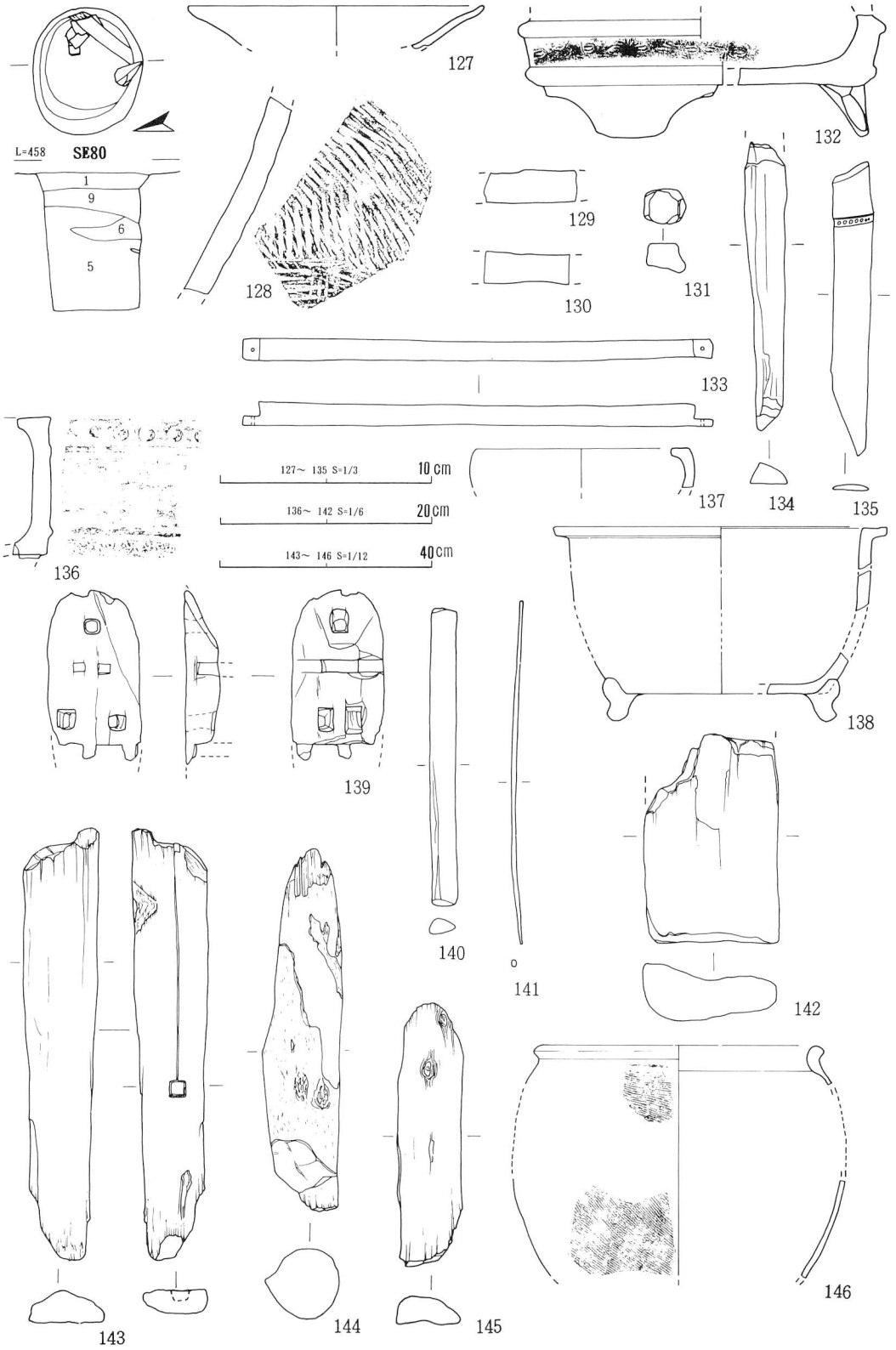
第19図　55号井戸出土遺物



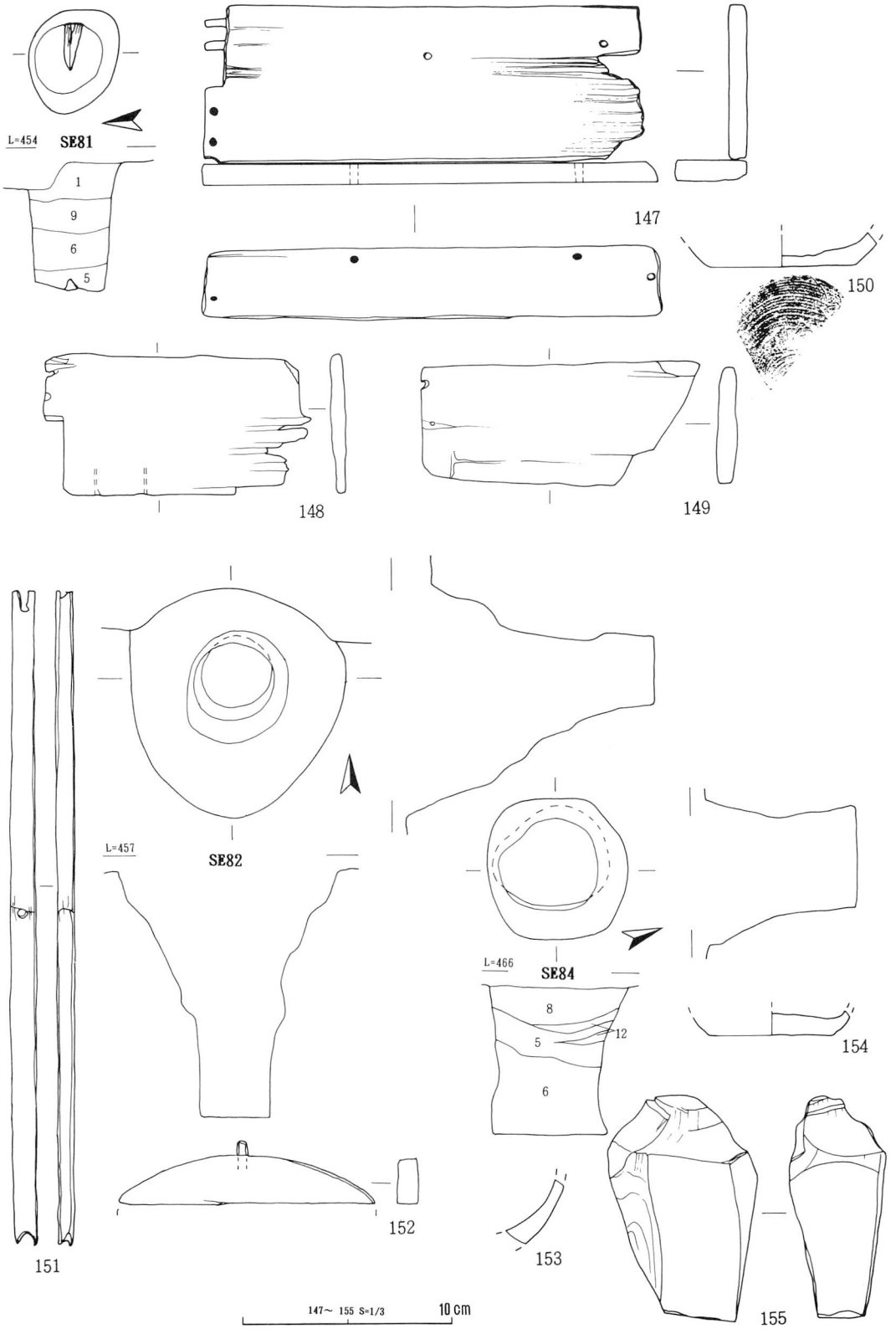
第20図　57・60・65・73・74・75号井戸と出土遺物



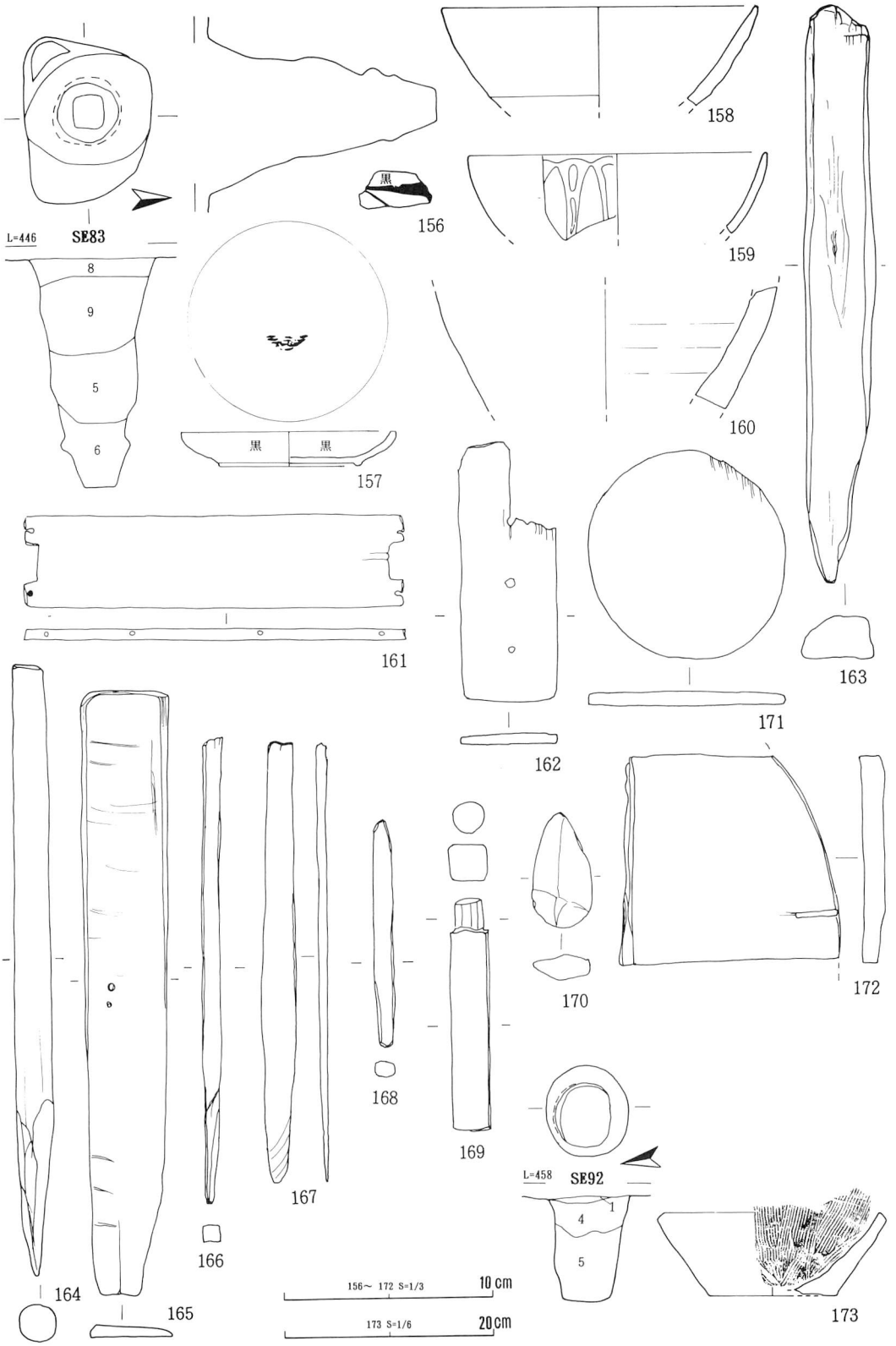
第21図　70・76号井戸と出土遺物



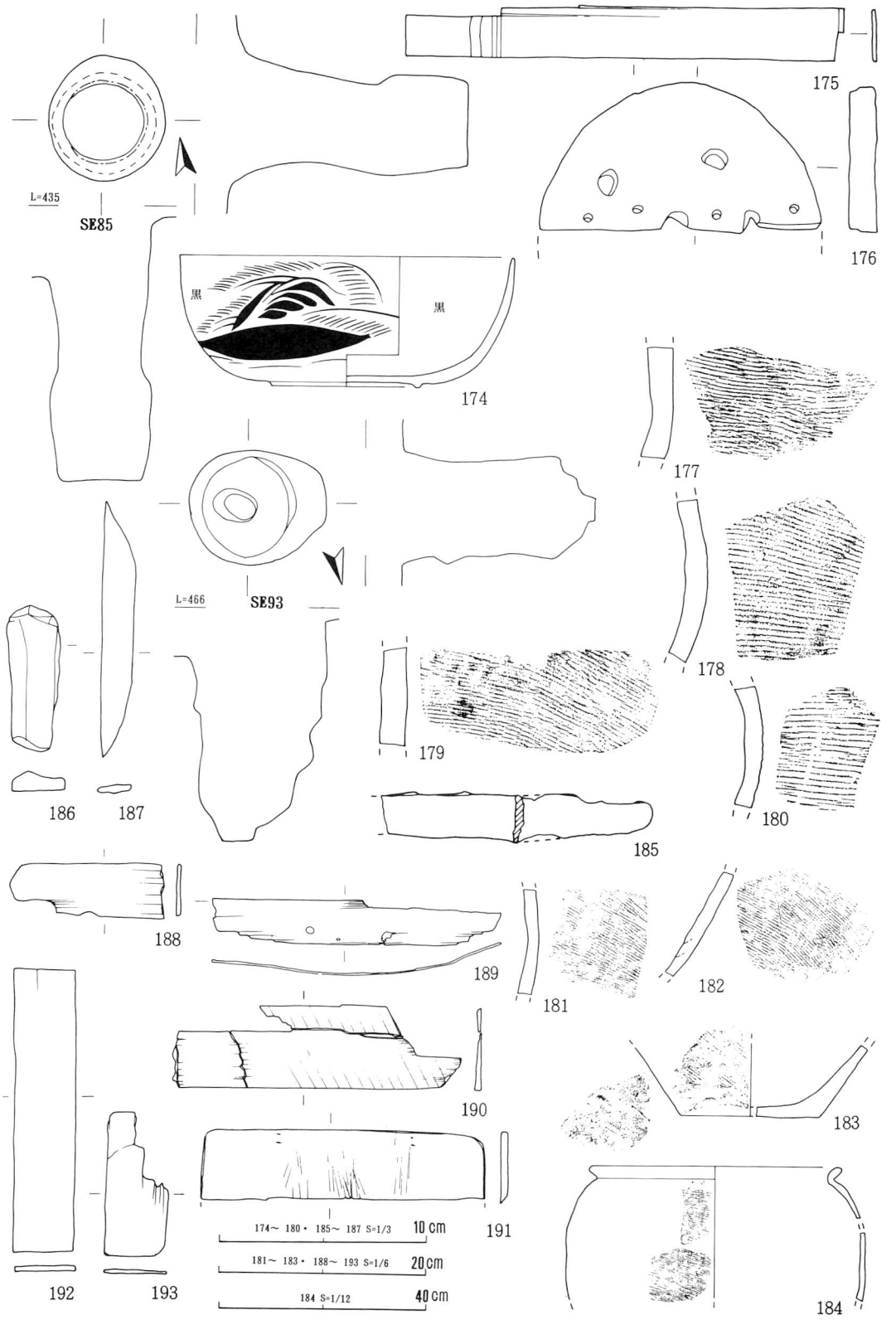
第22図　80号井戸と出土遺物



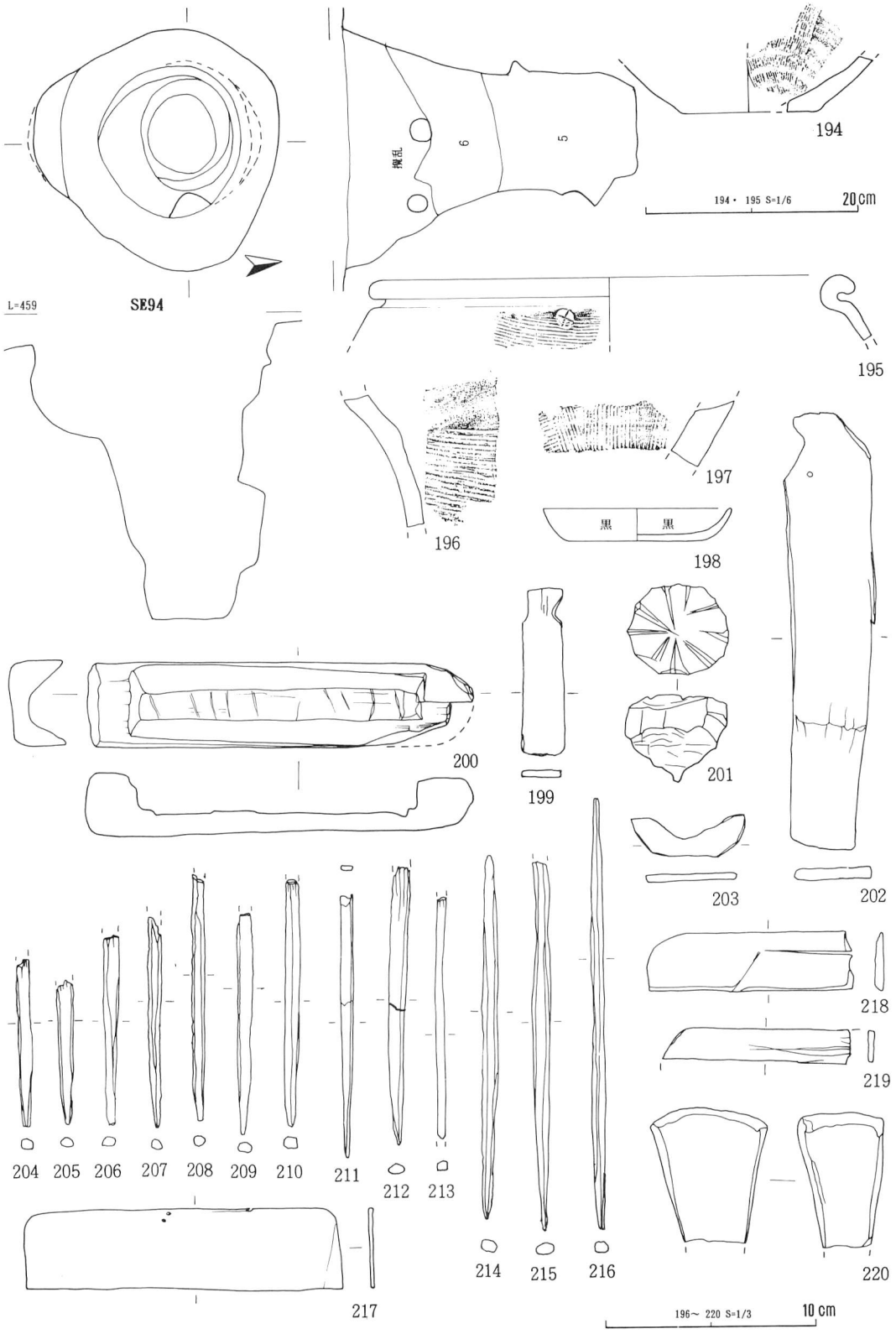
第23図　81・82・84号井戸と出土遺物



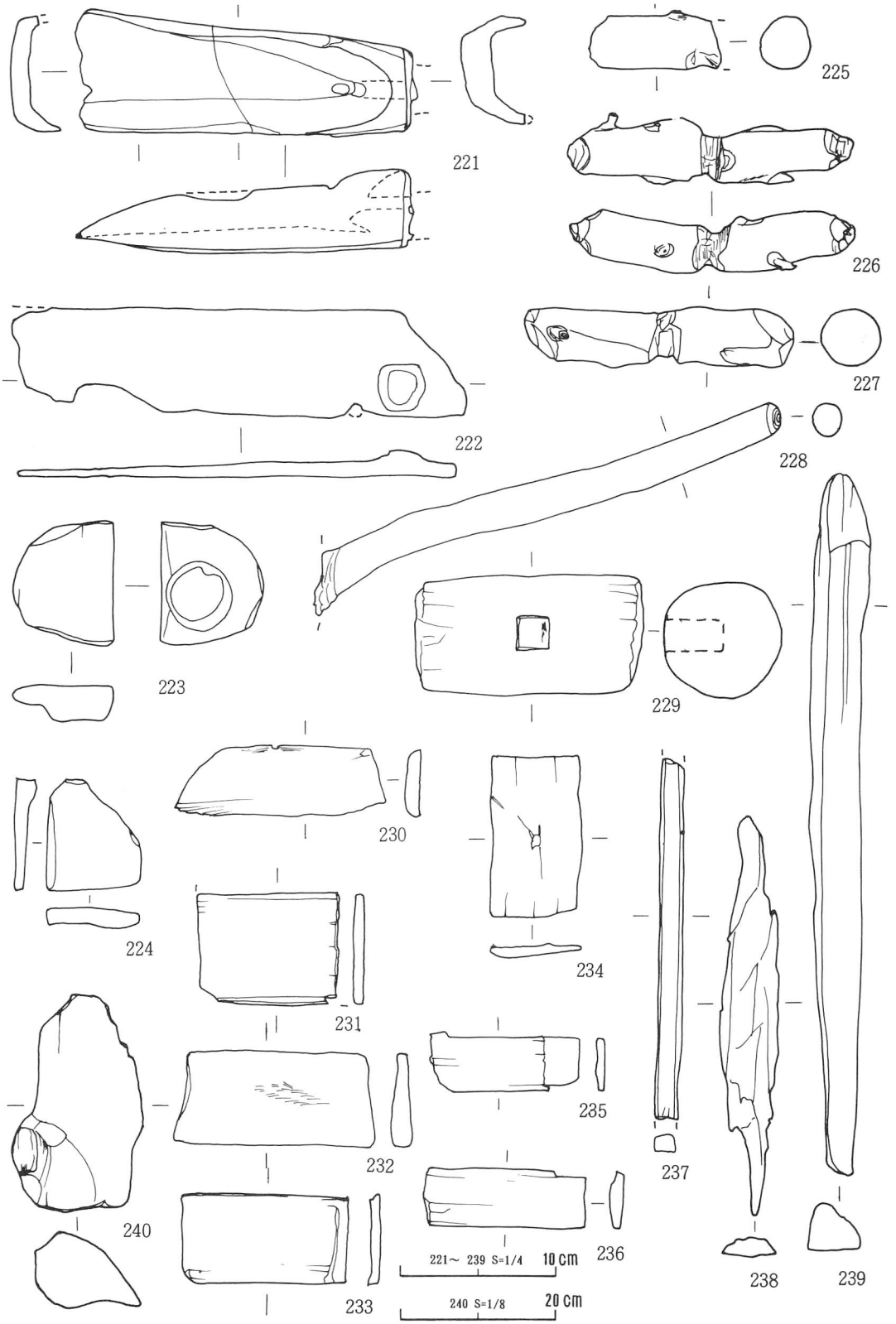
第24図　83・92号井戸と出土遺物



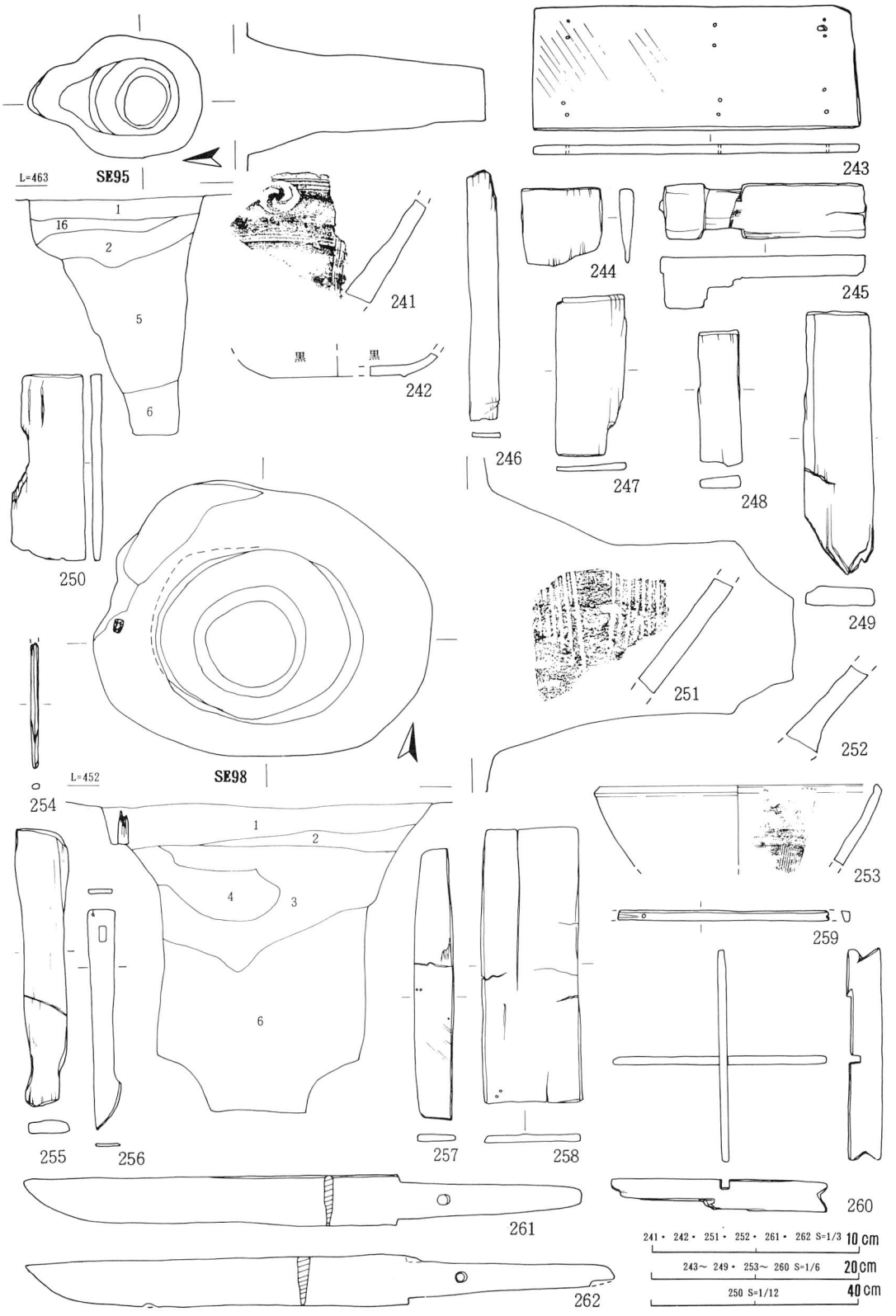
第25図　85・93号井戸と出土遺物



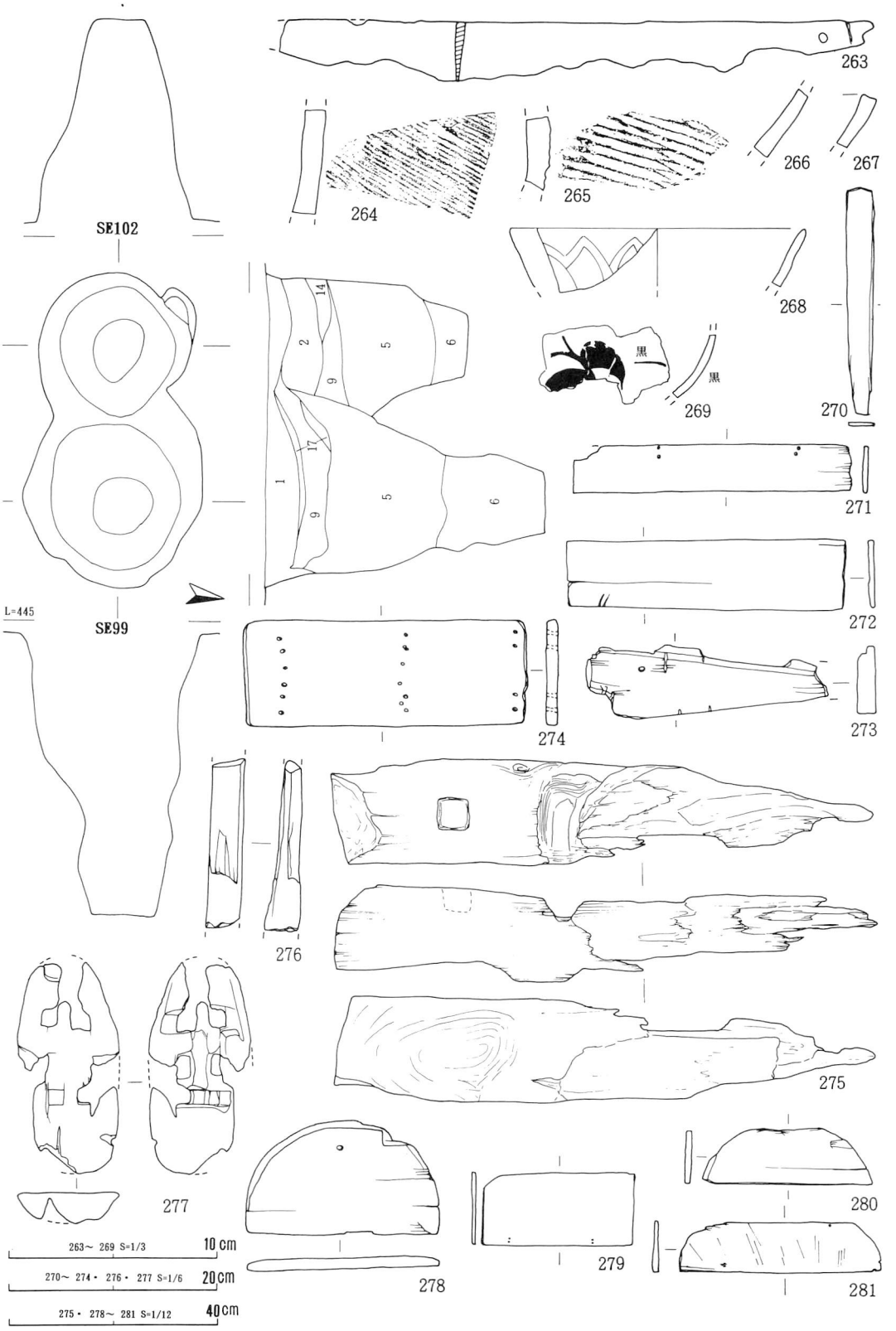
第26図　94号井戸と出土遺物



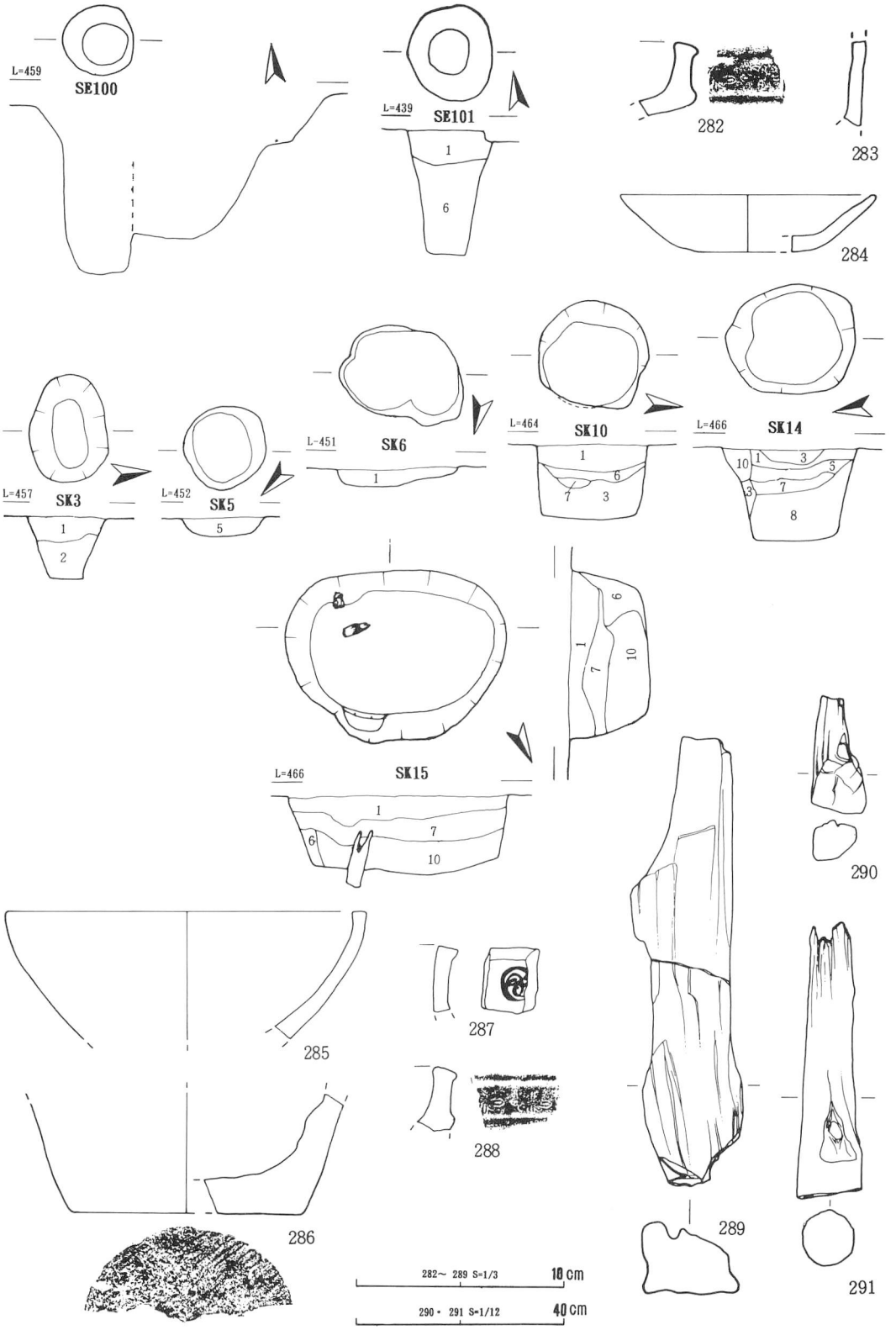
第27図　94号井戸出土遺物



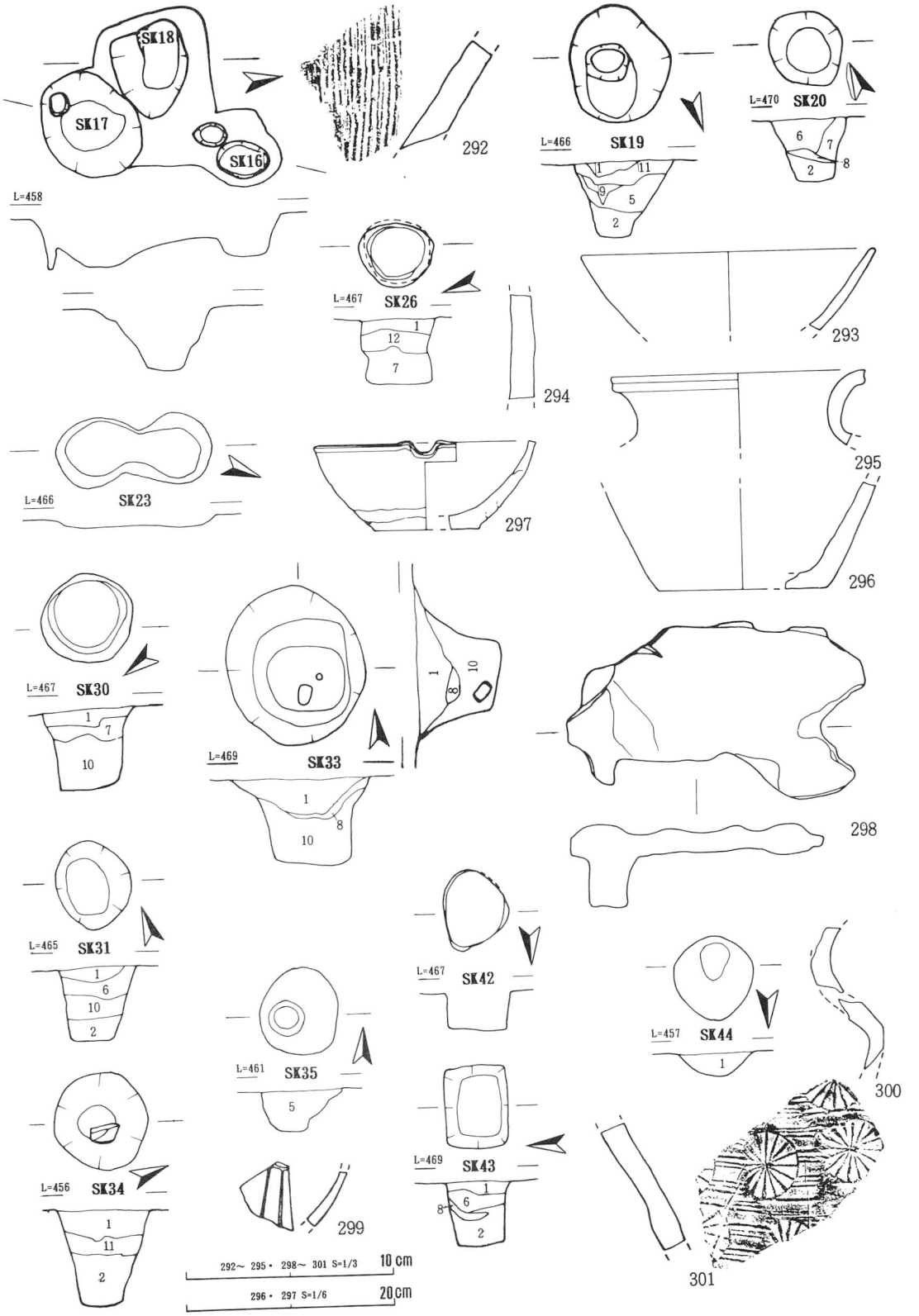
第28図　95・98号井戸と出土遺物



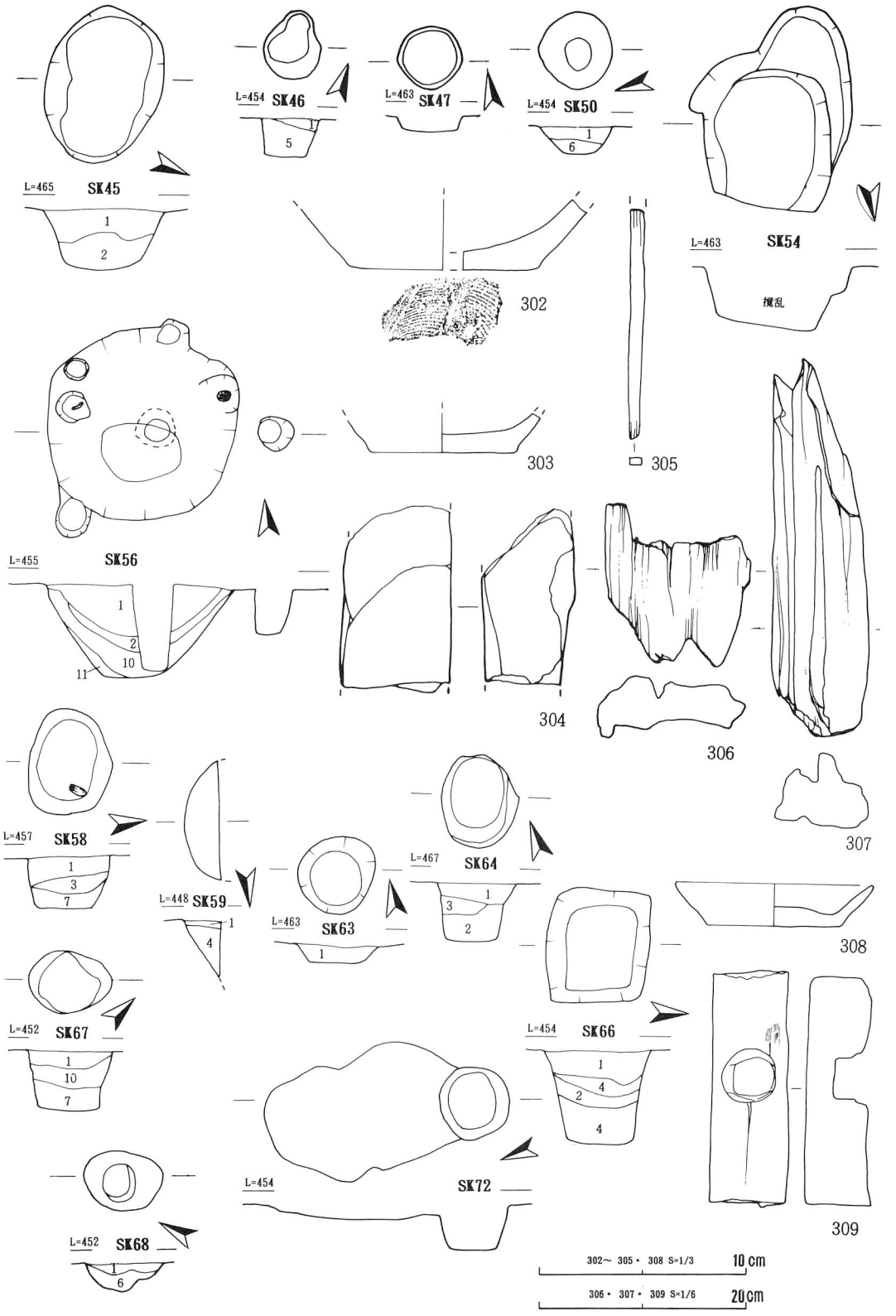
第29図　99・102号井戸と出土遺物



第30図　100・101号井戸及び土坑と出土遺物　I

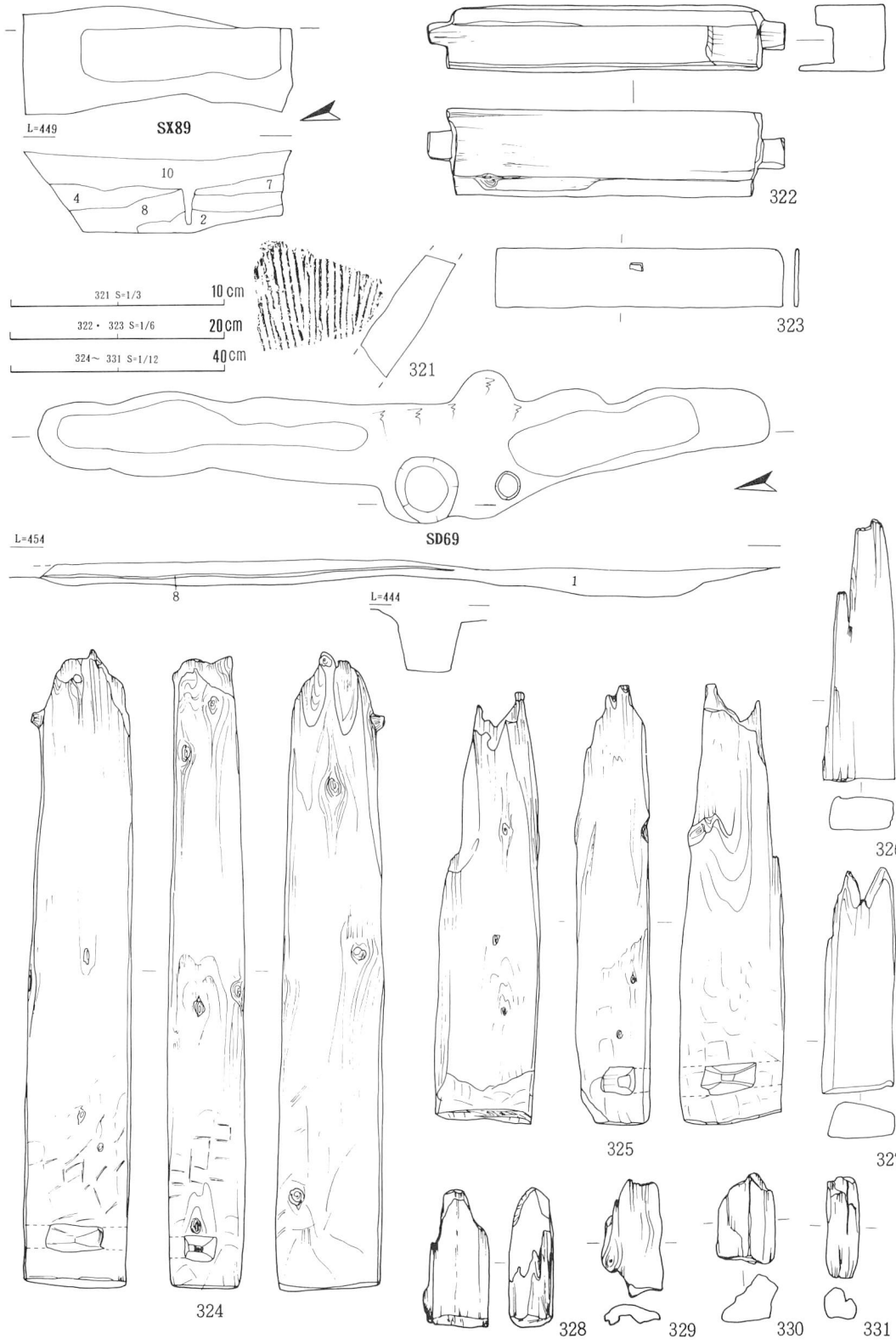


第31図　土坑群と出土遺物　II

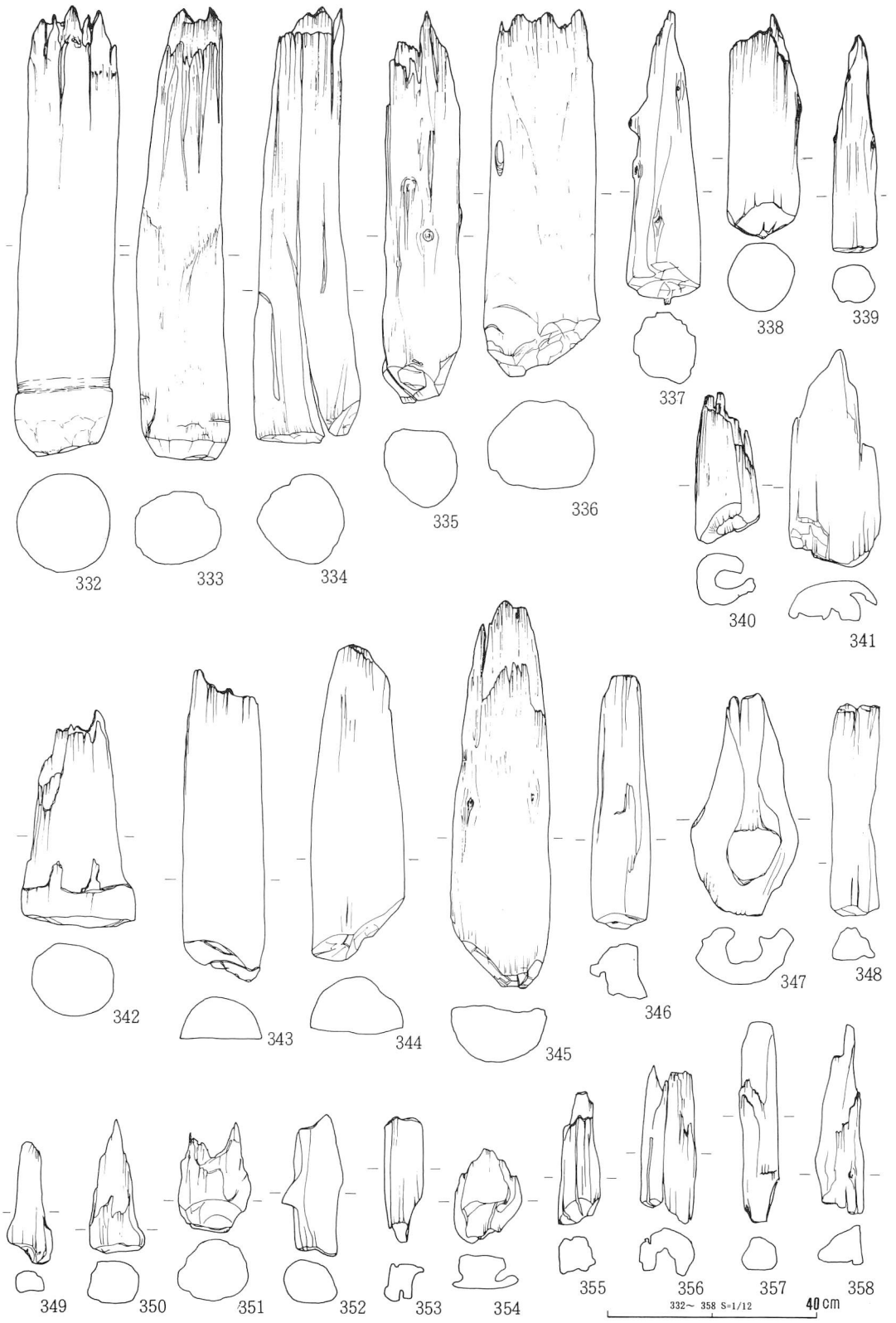


第32図　土坑群と出土遺物　Ⅲ

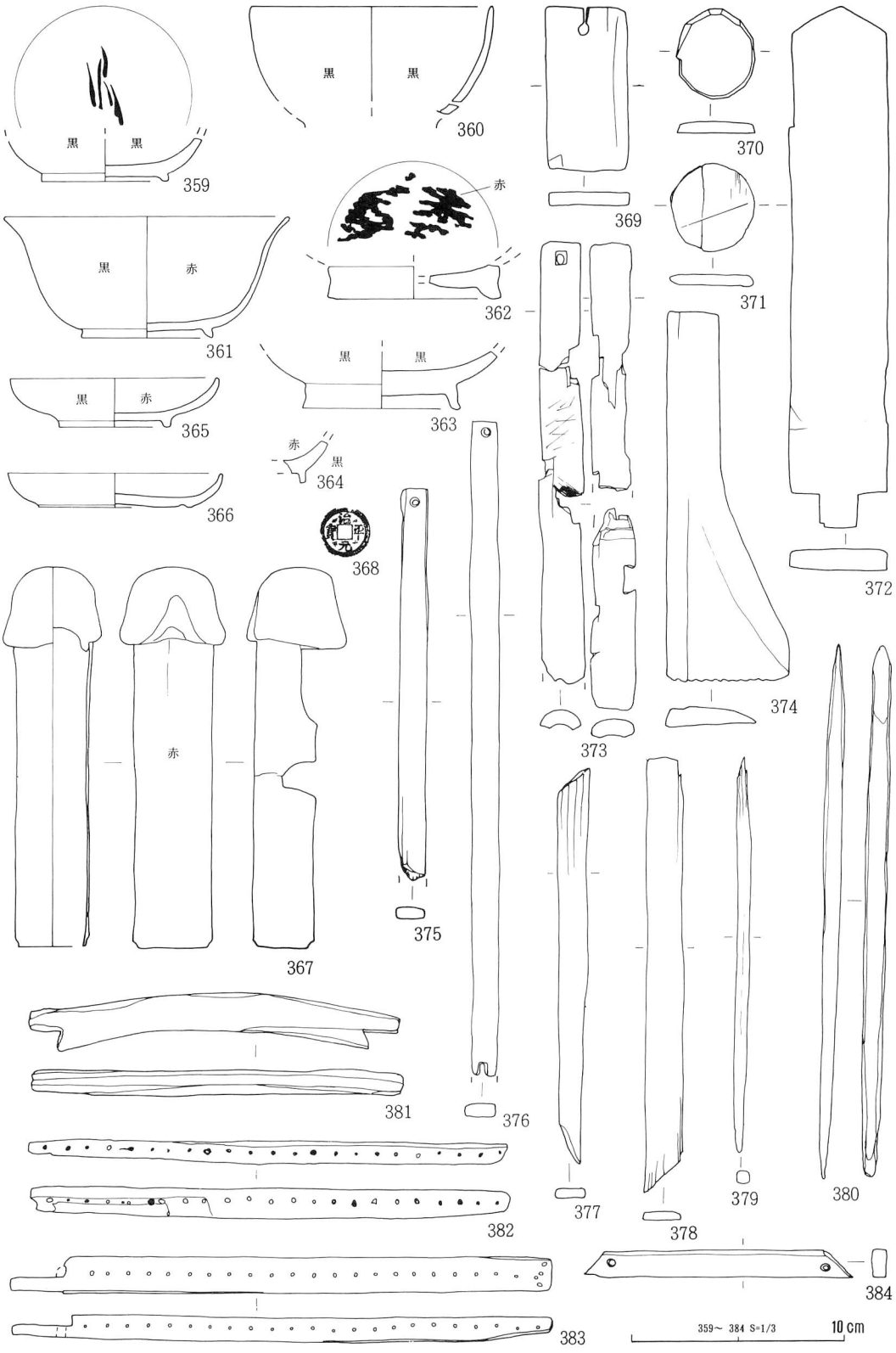
第33図　土坑群と出土遺物　Ⅳ



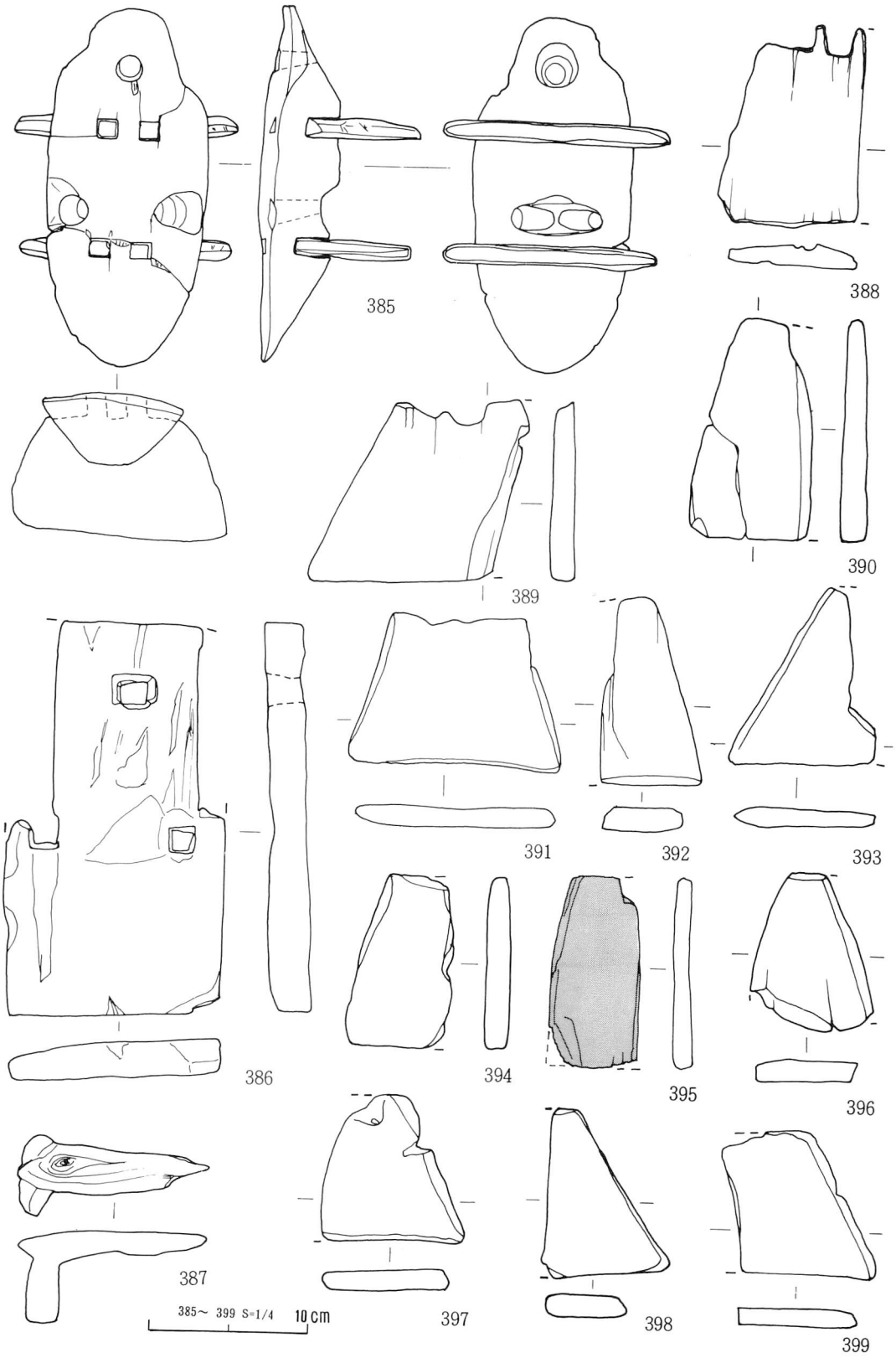
第34図　土坑・不明遺構群と出土遺物　V



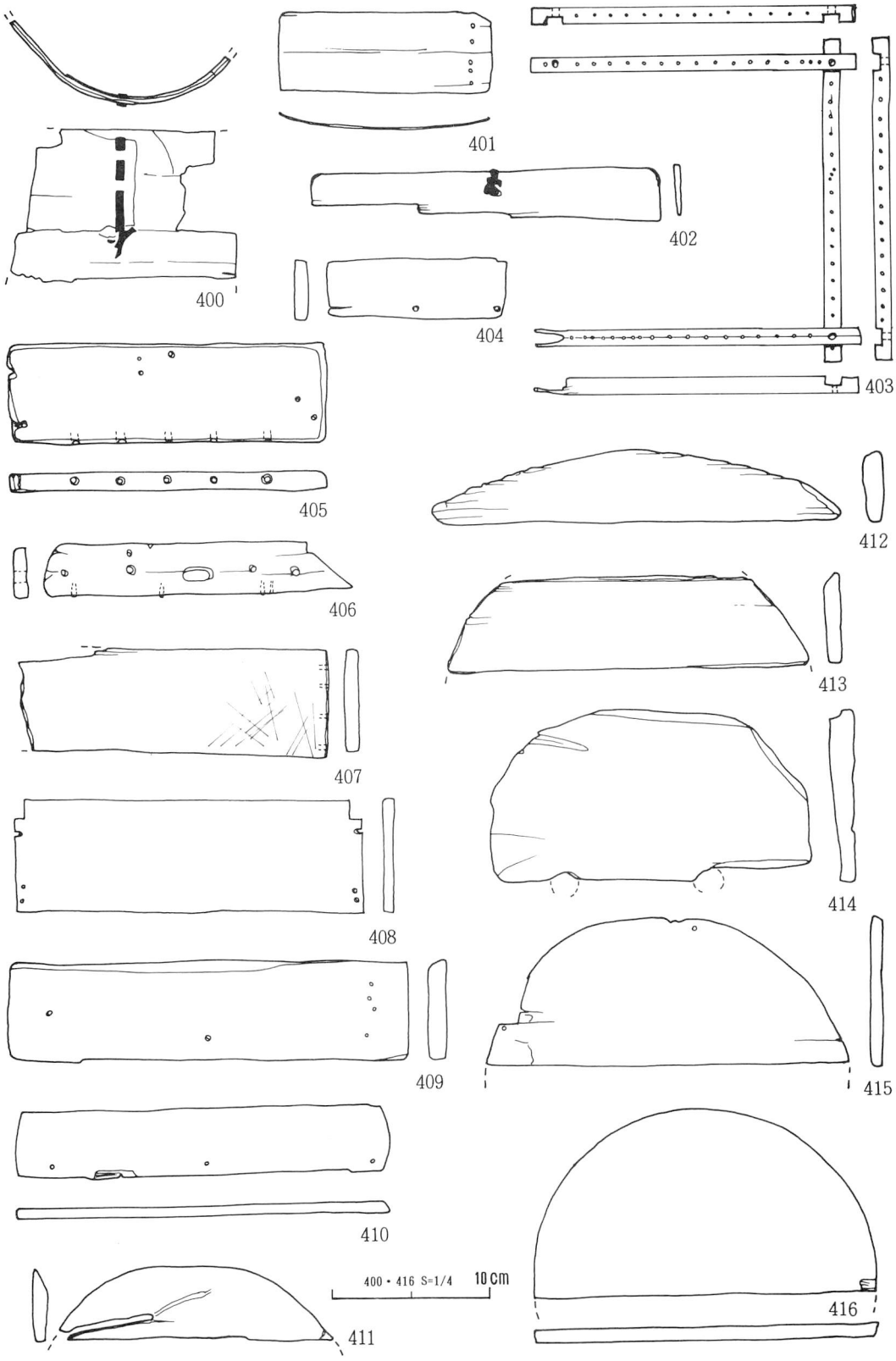
第35図　98・69号遺構出土遺物・ピット群出土の柱類　VI



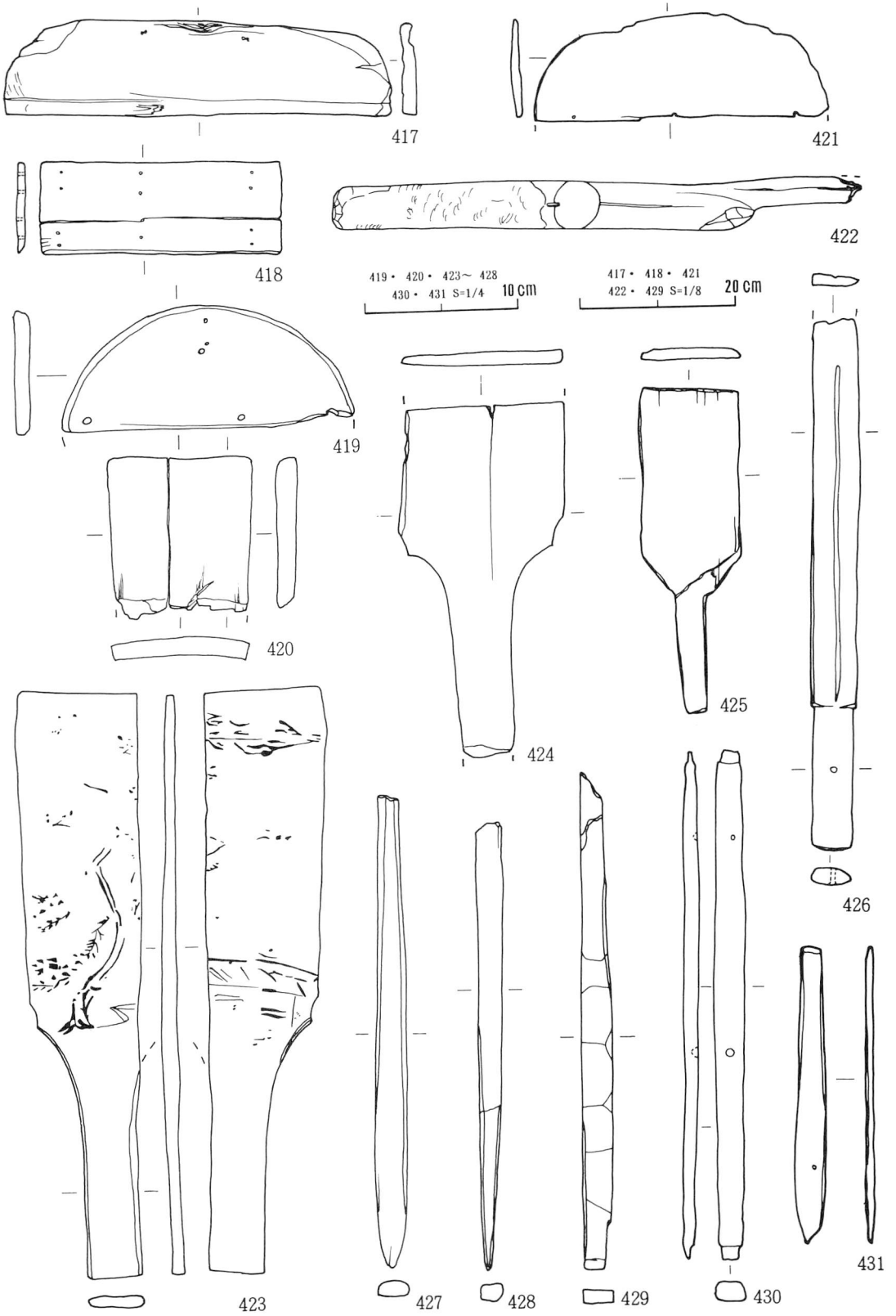
第36図　内周濠出土遺物　Ⅰ



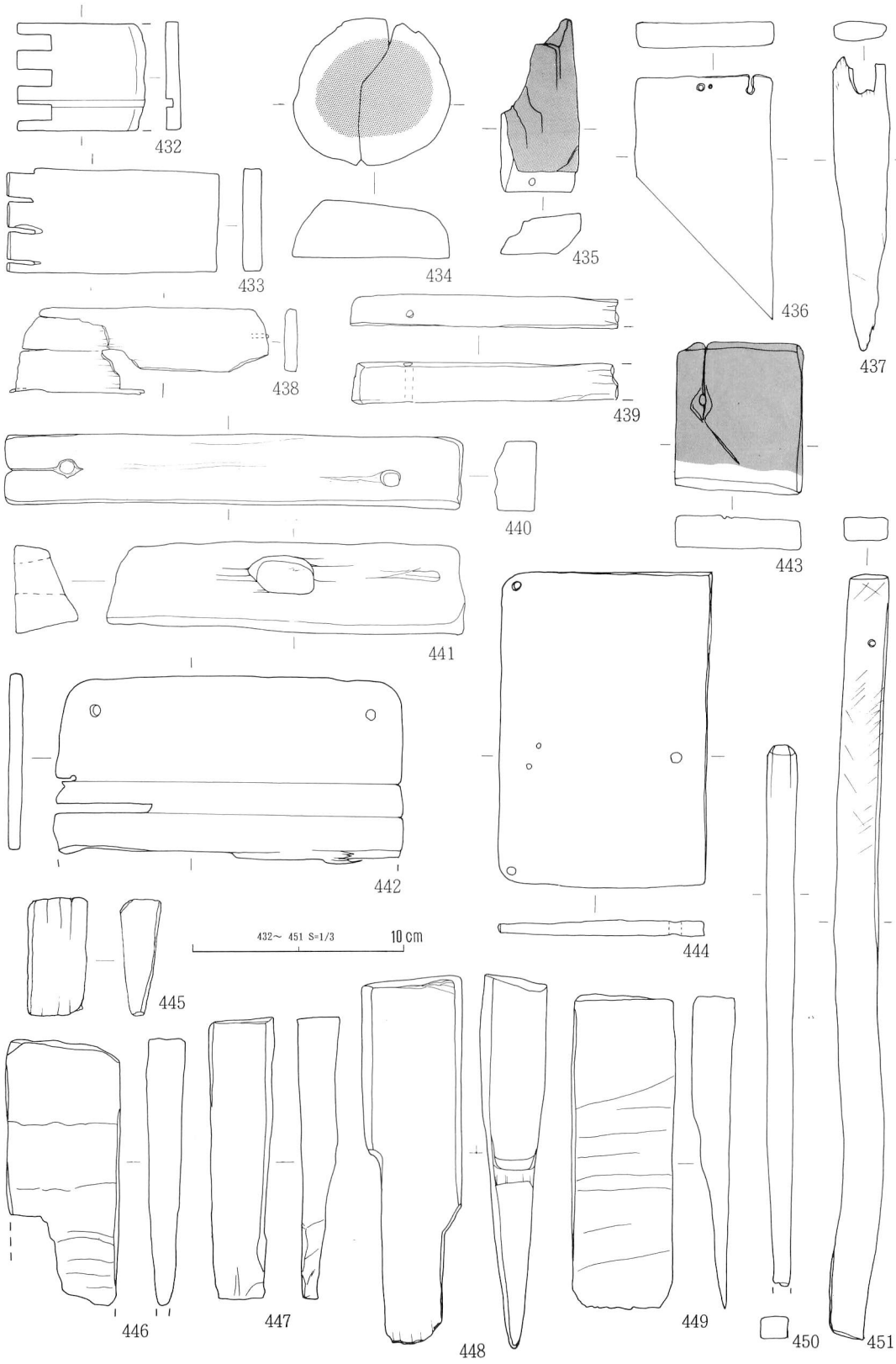
第37図　内周濠出土遺物　II



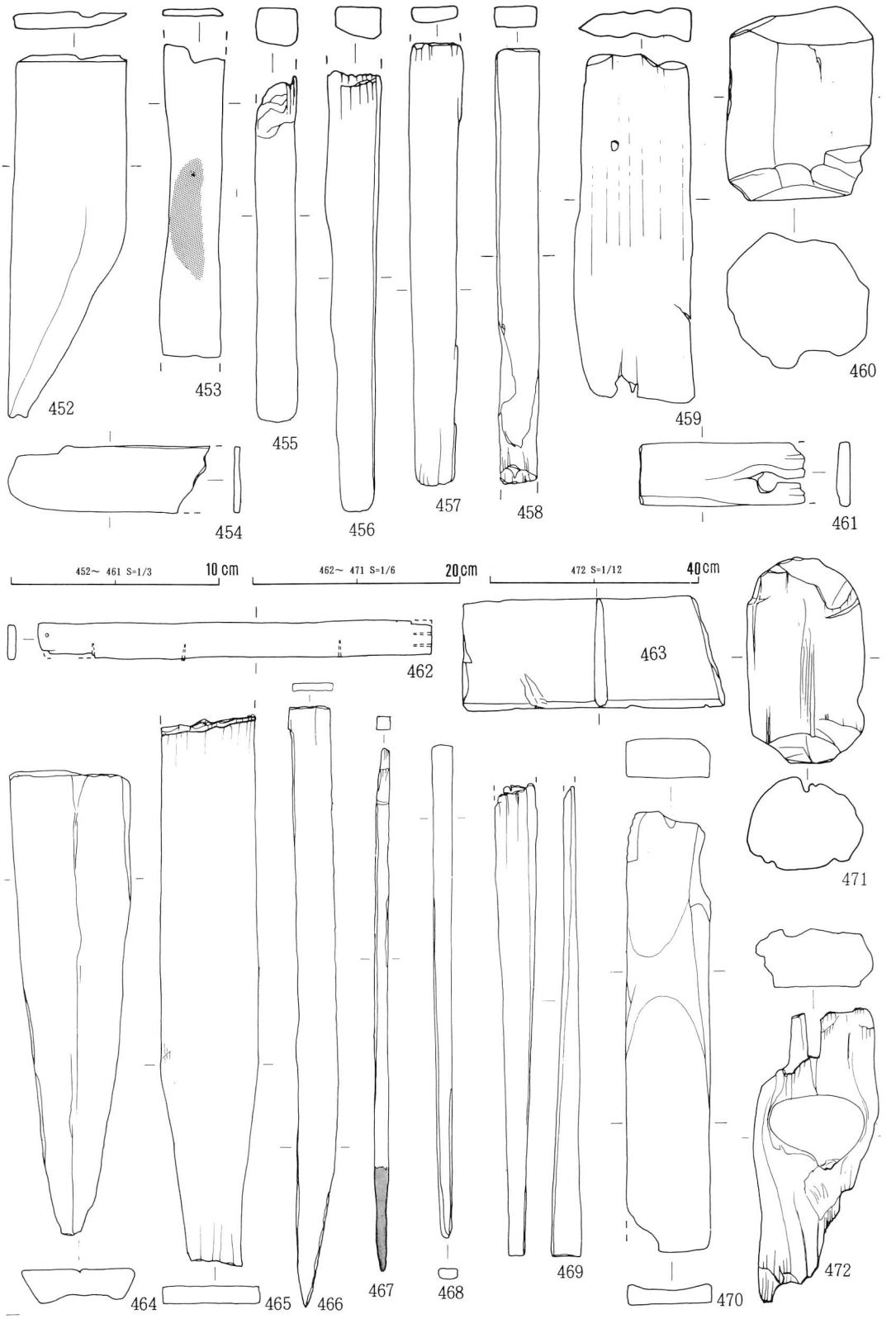
第38図　内周濠出土遺物　Ⅲ



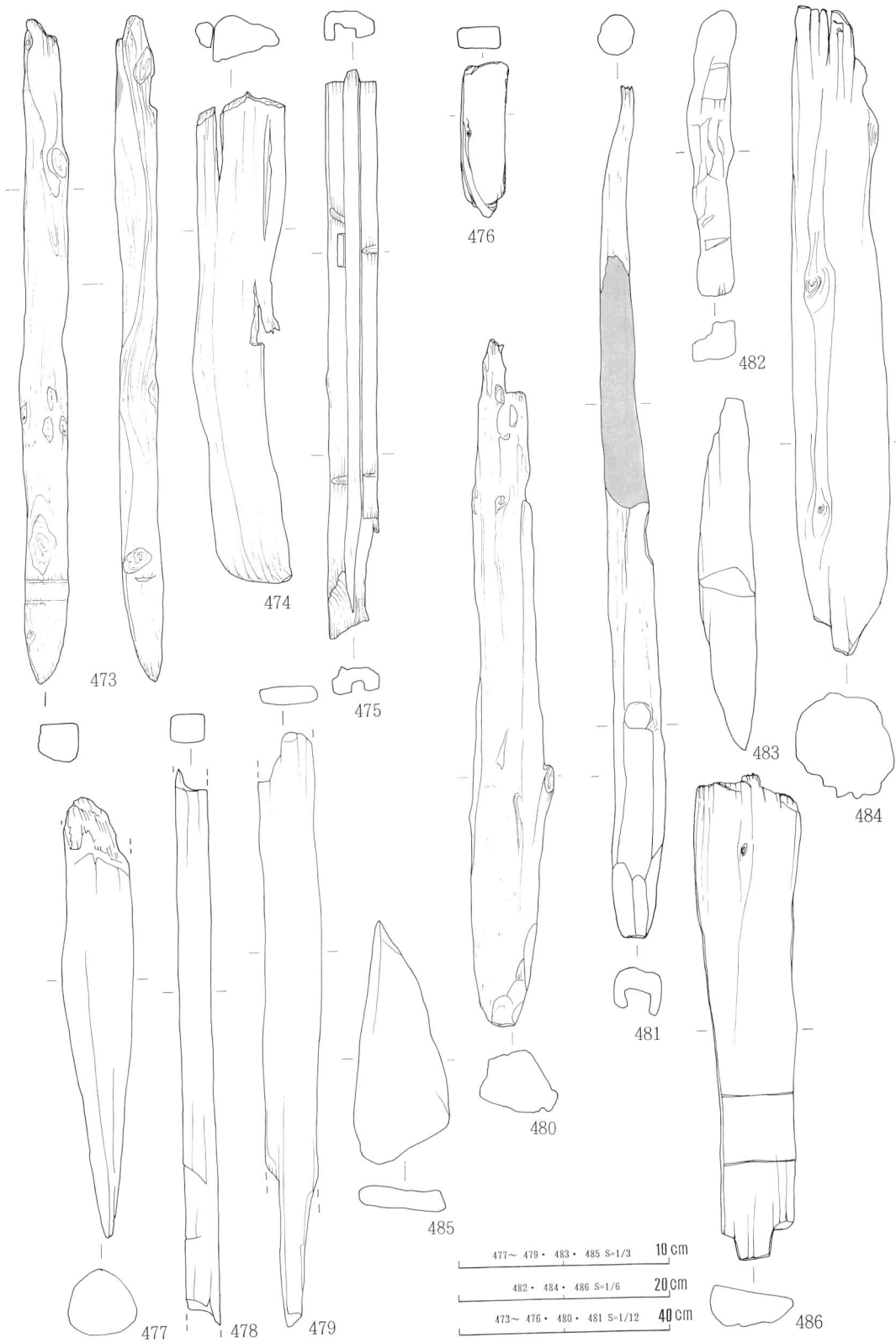
第39図　内周濠出土遺物　Ⅳ



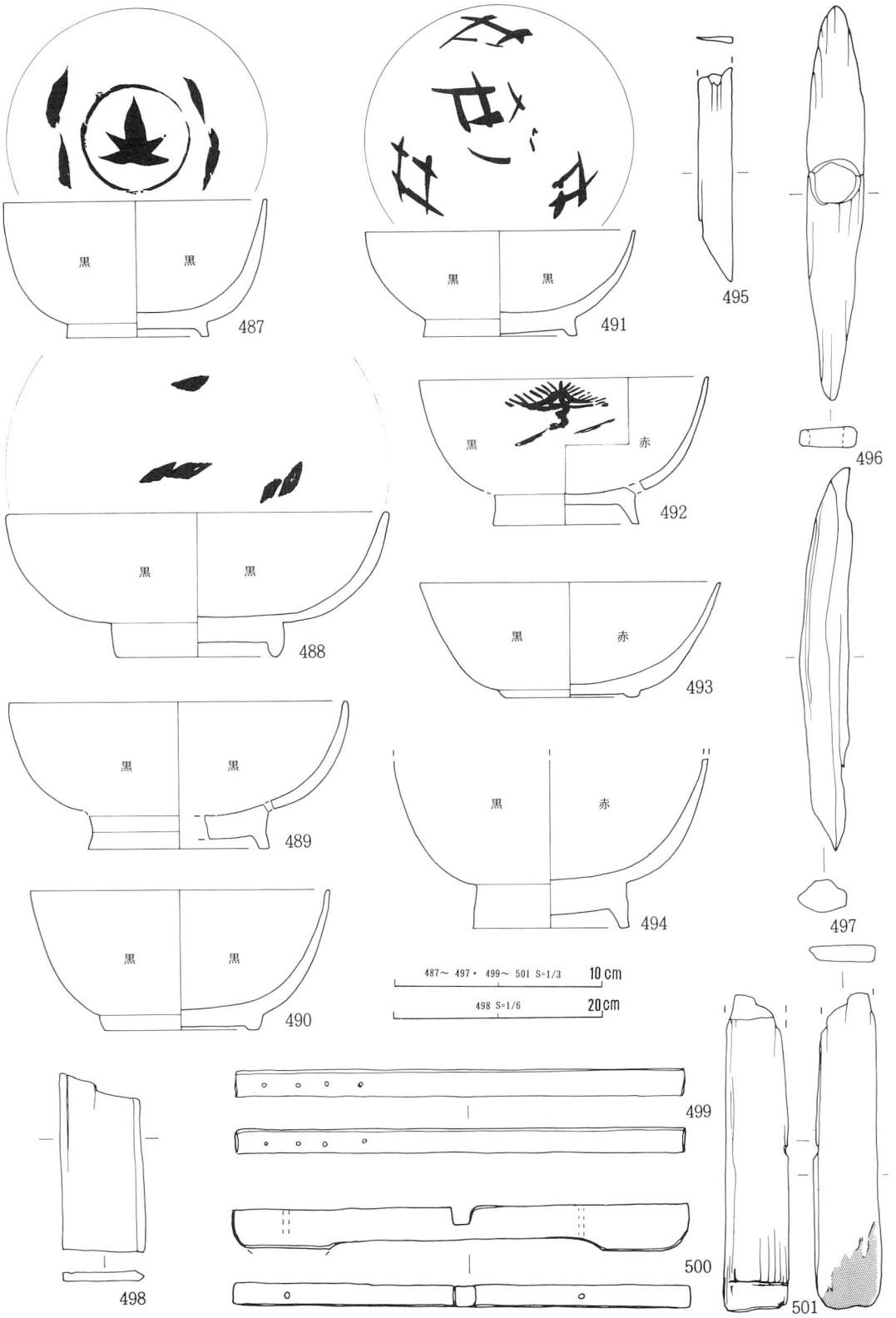
第40図　内周濠出土遺物　V



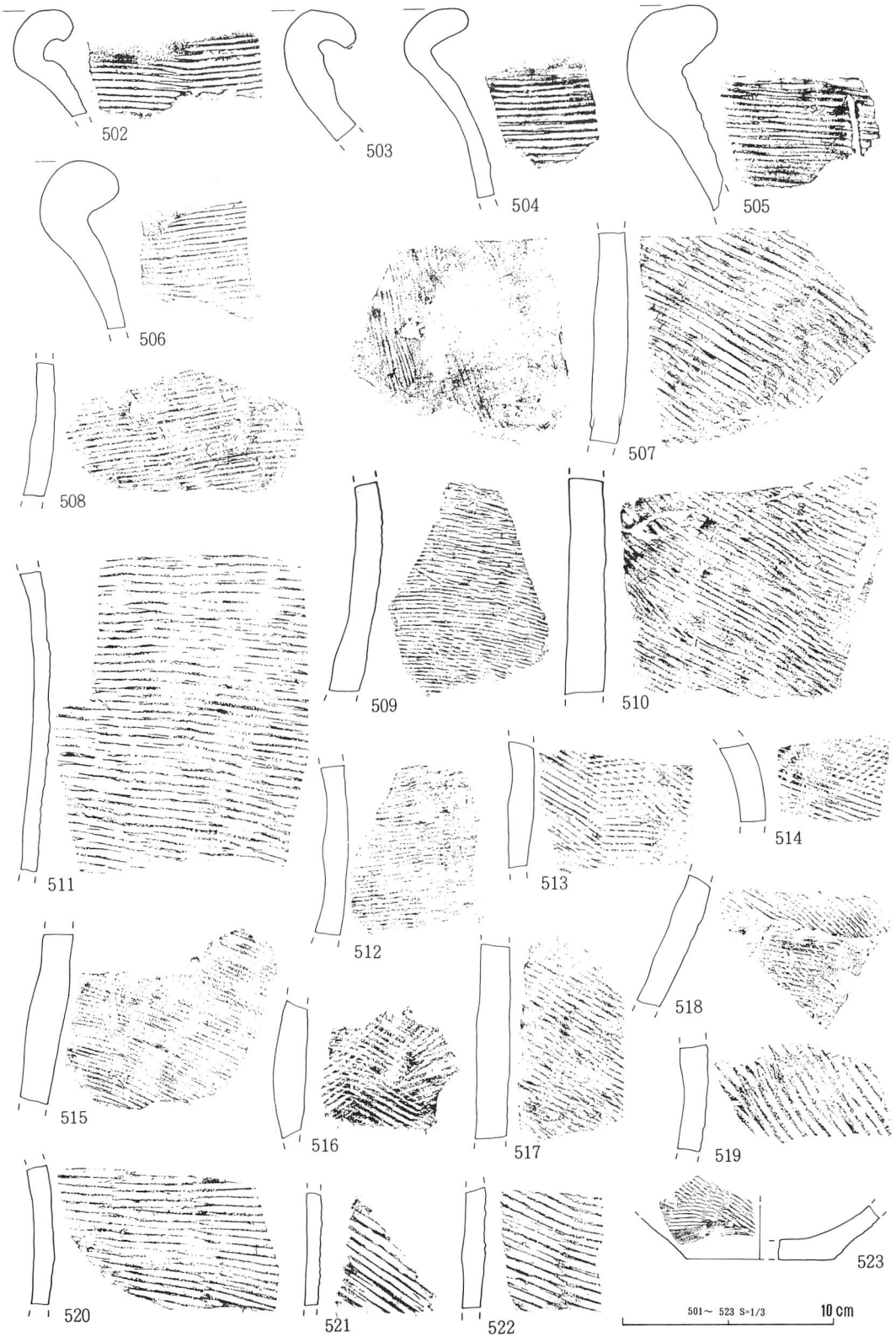
第41図　内周濠出土遺物　VI



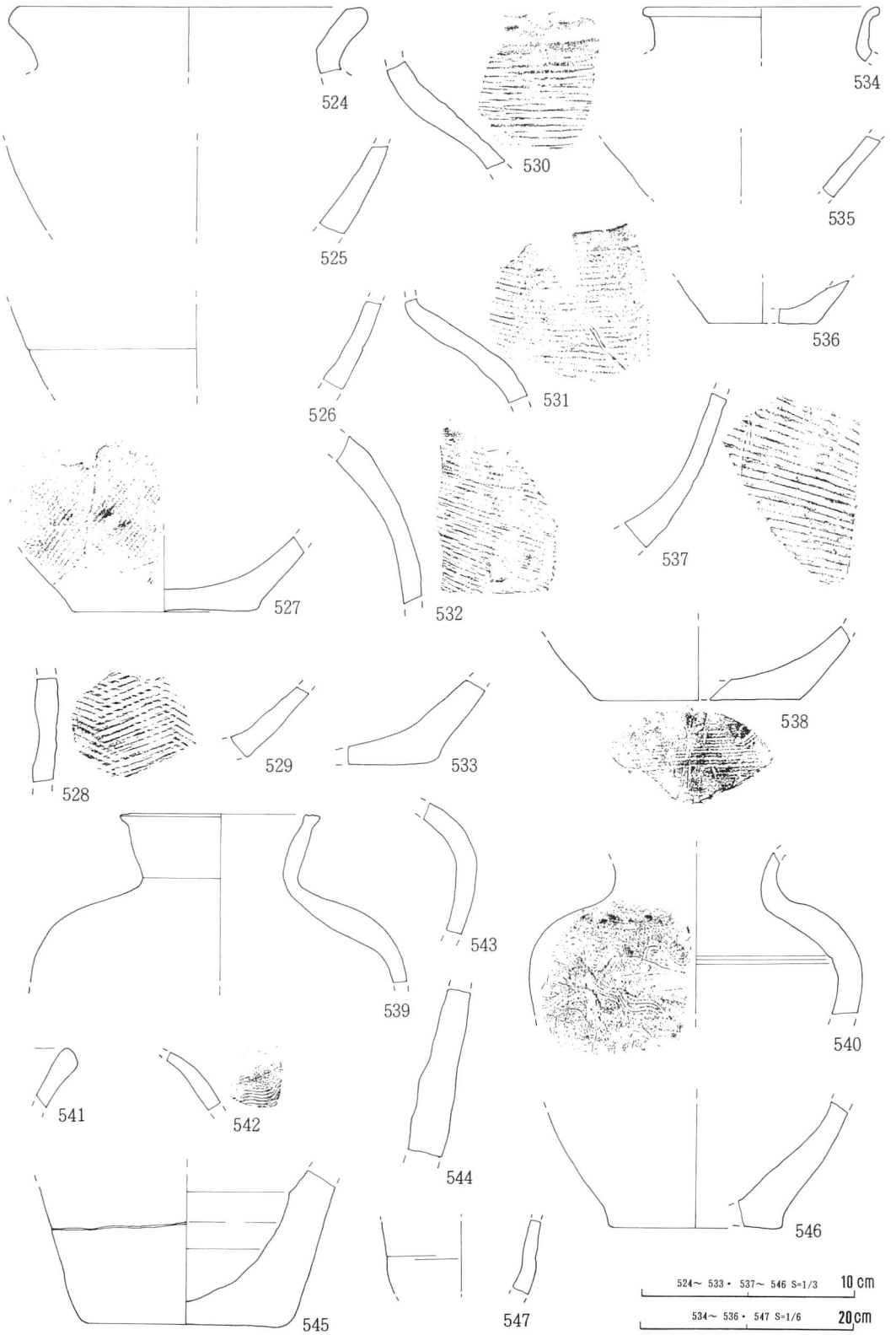
第42図　内・外周濠出土遺物　Ⅶ・Ⅰ



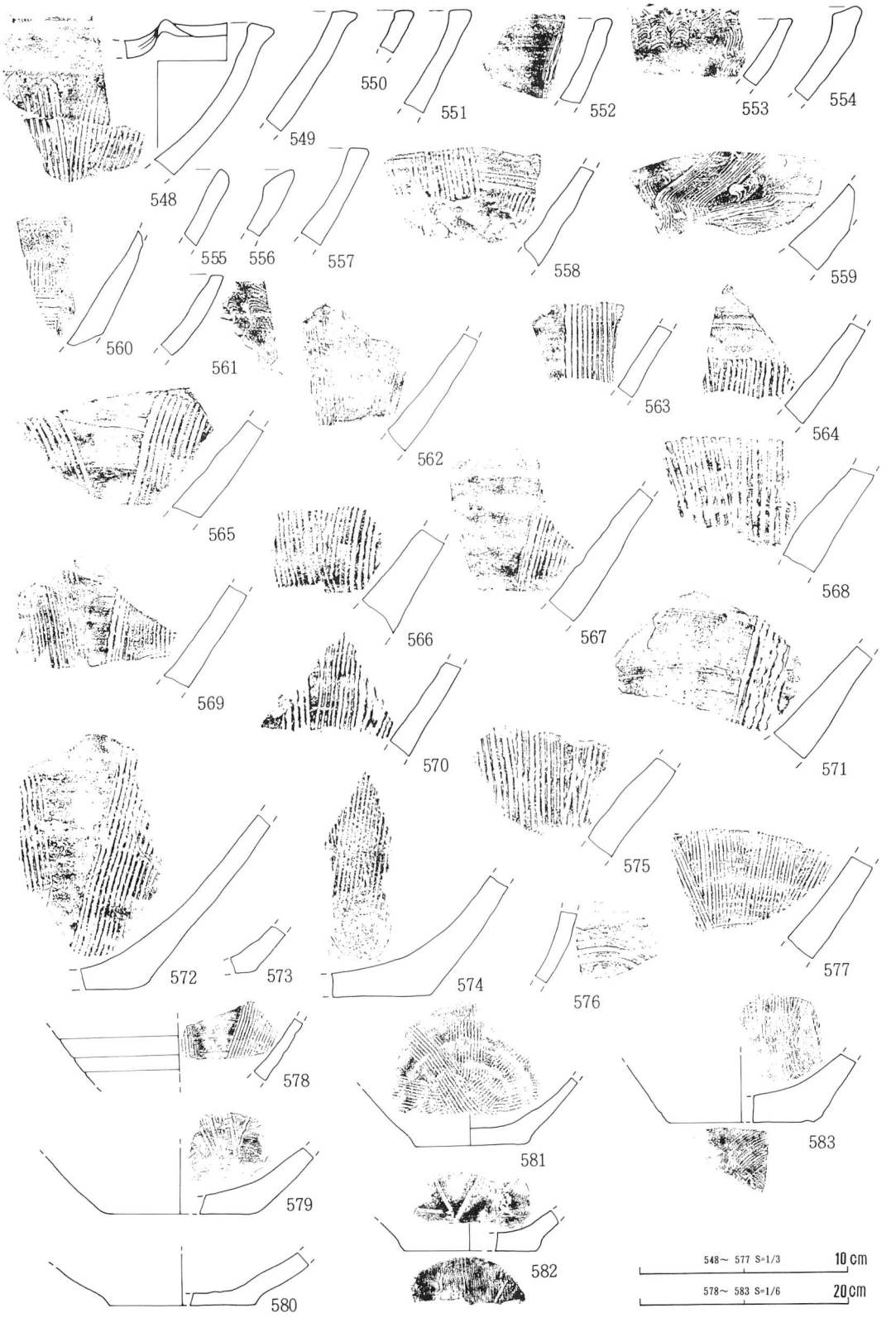
第43図　外周濠出土遺物　Ⅱ



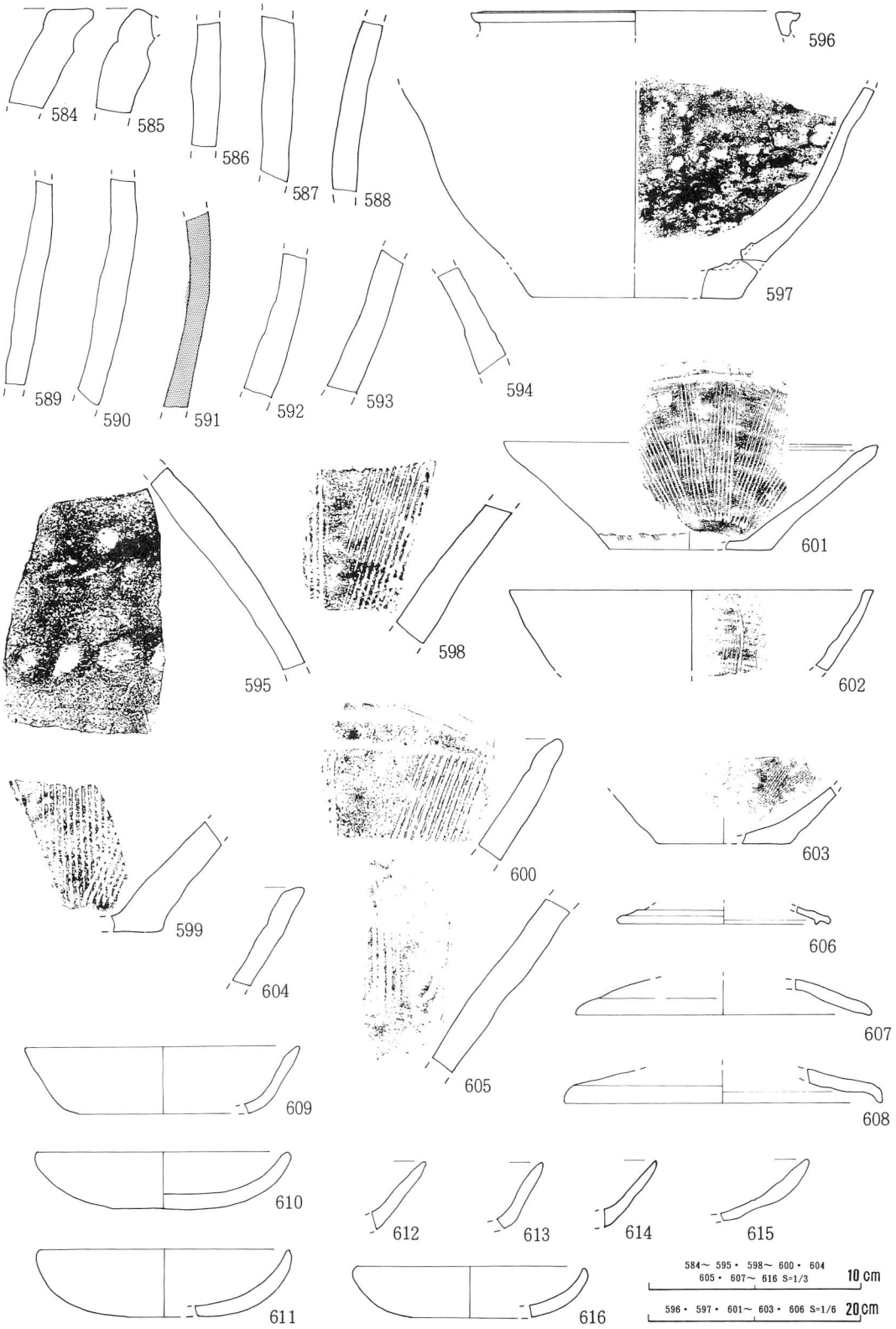
第44図　遺構外出土遺物　I



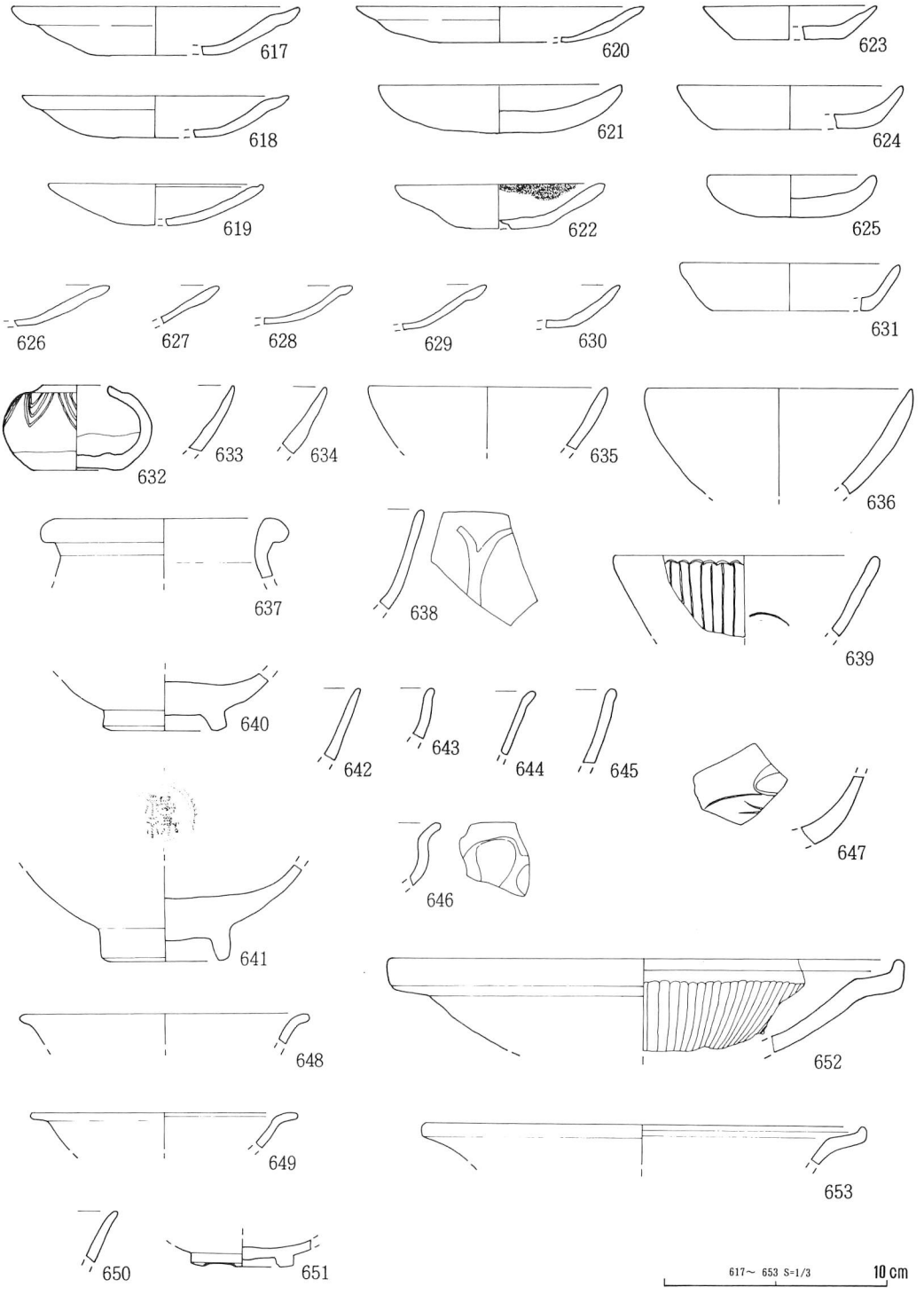
第45図　遺構外出土遺物　II



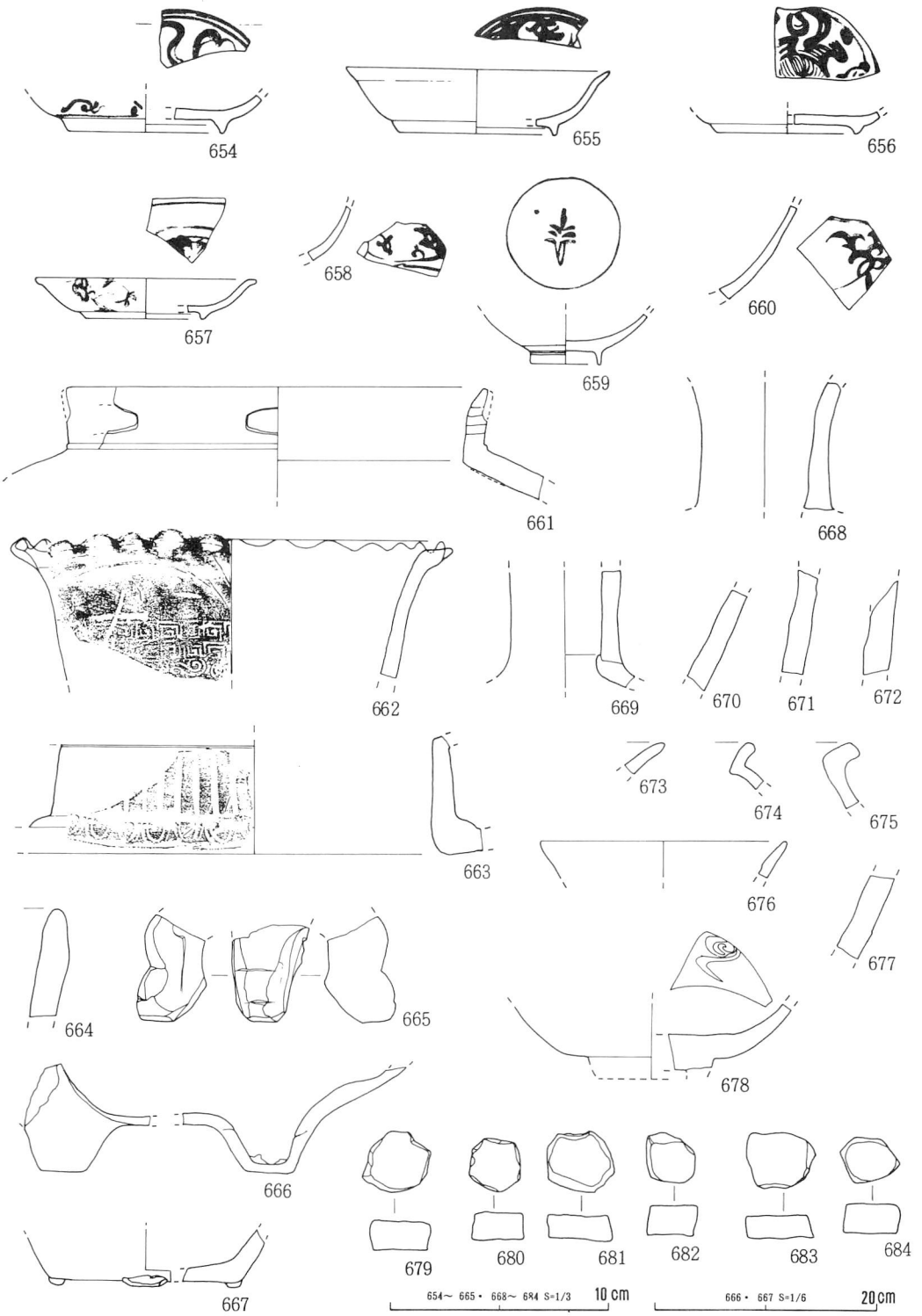
第46図　遺構外出土遺物　Ⅲ



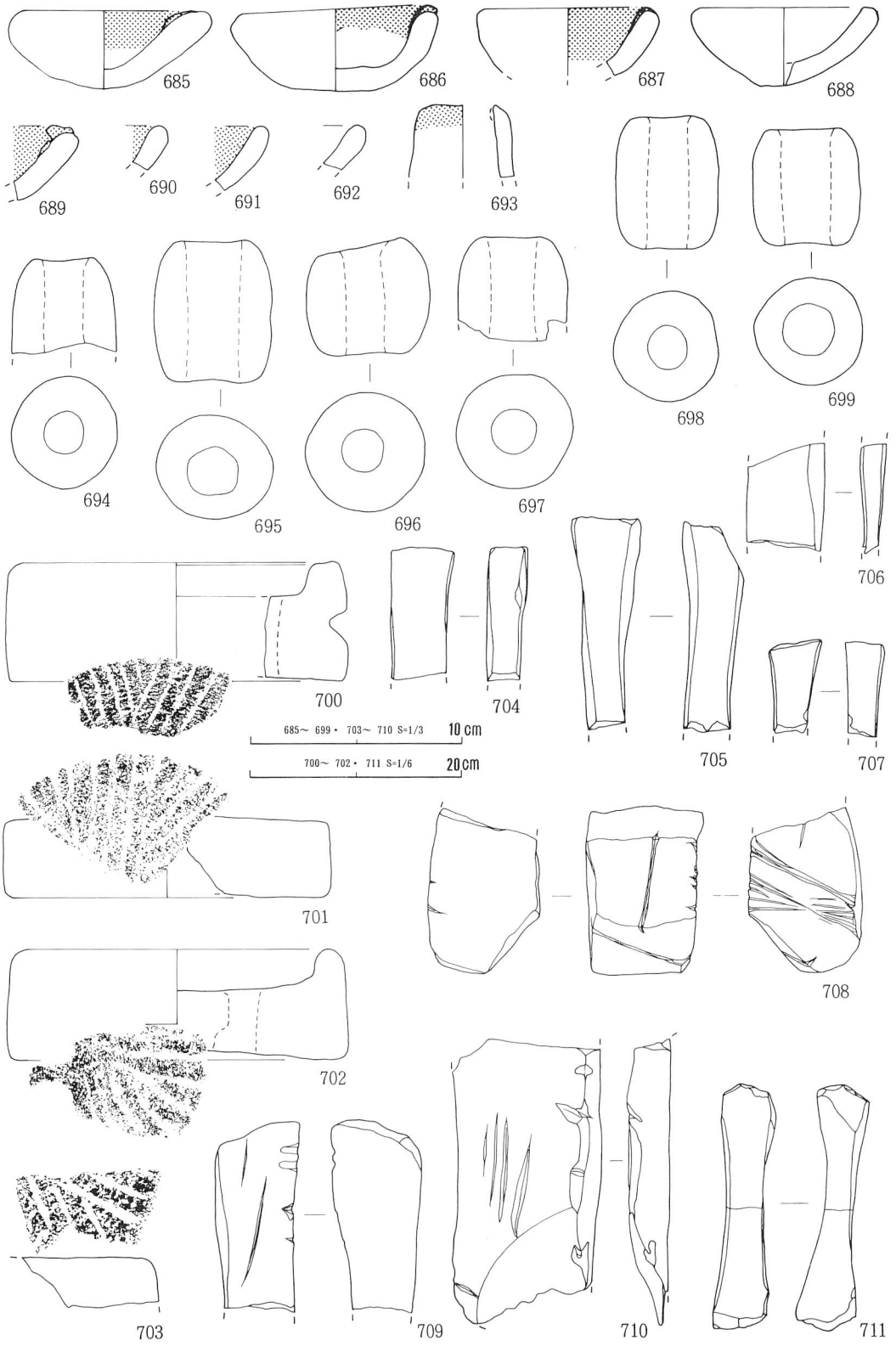
第47図　遺構外出土遺物　Ⅳ



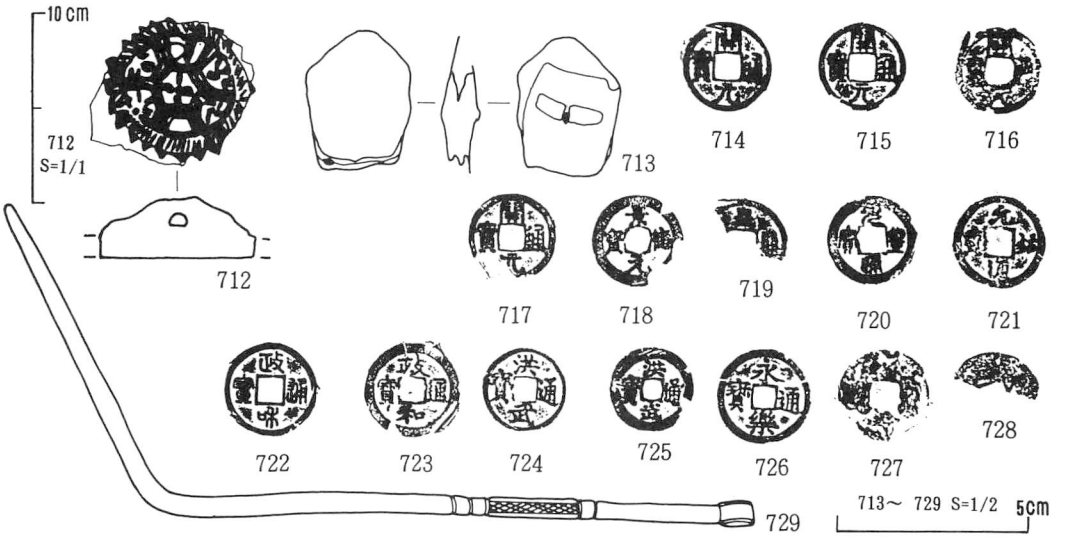
第48図　遺構外出土遺物　V



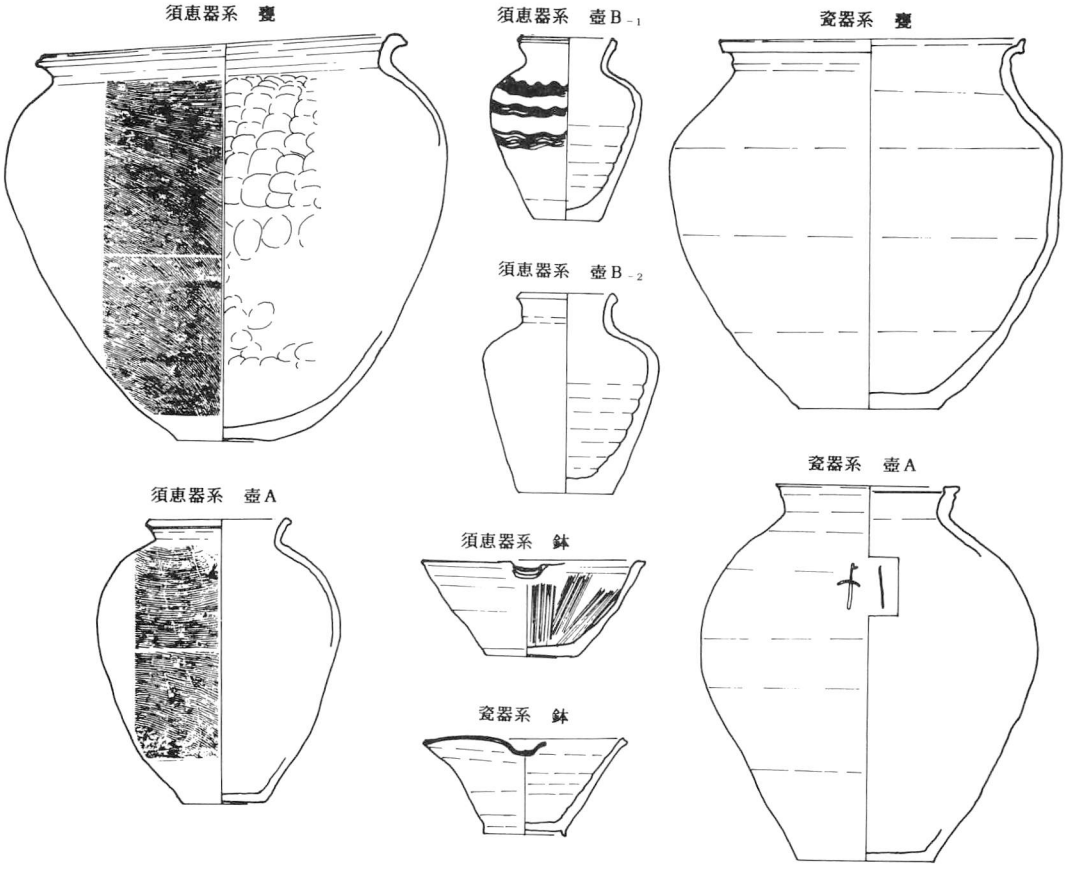
第49図　遺構外出土遺物　VI



第50図　遺構外出土遺物　Ⅶ



第51図　遺構外出土遺物　Ⅷ



第52図　中世陶器模式図

Ⅲ　ま　と　め

1　陶磁器とその年代

発掘調査の結果、検出された遺物は前章までに記述した如く陶磁器、土製品、石製品、木製品、金工品である。これらのものの内容を具体的に言うならば、陶磁器では中世陶器・青白磁・染付・瀬戸系施釉陶器・瓦器・カワラケなどと少量の近世陶器からなる。この内、中世陶器は言うまでもなく中世のものであり、その他の青白磁・染付・瀬戸系施釉陶器・カワラケなどは近世にも同類はあるがここでの遺物は中世に限られたものであった。また少量の近世陶器は遺跡との関連が明らかにできない事を指摘しておいた。

検出された中世陶器は「須恵器系中世陶器」と「瓷器系中世陶器」と区分されるもので、前者は珠洲系或いは珠洲焼そのものを主体とし、僅かに笹神系のものを含んでいる。後者は加賀・越前系のものであり笹神系のものは認められない。

日本の中世とは鎌倉時代から江戸幕府を開くまでの約400年間であり、それは13世紀から16世紀の間に当たる。日本の縄文土器が世界最古の焼物であり、その文化は、弥生時代、古墳時代、古代を通じて日本古来の焼き物の伝統と、大陸系の技術に相待って古代即ち奈良・平安時代には陶芸の世界に高度な製作技術と多様な器種を生み出すに至った。しかしながら律令制の敗退と王朝文化の衰退は、陶芸の世界に於いても同様であり、中世における焼物は僅かに須恵器の系統を残した「須恵器系中世陶器」と灰釉陶器の流れである「瓷器系中世陶器」が生活関連用具の甕・壺・鉢を中心とした陶器に復活し、僅かに祭祀用の施釉陶器が瀬戸古窯で生産された。ここで、「須恵器系中世陶器」または「瓷器系中世陶器」としたものを、県内では前者を「珠洲焼」或い

表48　自然遺物一覧表

番号	遺物番号	出土位置	種　　類	数量
1	271	SE－ 76	モ　モ　種子	1
2	292	SE－102	ウリ科　〃	77
3	563	SE－ 57	モ　モ　〃	15
4	572	SE－ 82	モ　モ　〃	1
5	587	SE－ 83	モ　モ　〃	1
6	588	内濠Ⅰ－8	モ　モ　〃	1
7	589	〃	オニグルミ　〃	1
8	643	内濠Ⅰ－11	モ　モ　〃	1

表49　出土うつわ一覧表

器種	須恵器系			瓷器系		瓦器				青磁白磁	染付	施釉陶器	土師質土器	近世陶器	漆器椀皿
	甕	壺	鉢	甕	鉢	壺	鉢	蓋	火器						
図示あり	47	34	58	21	7	10	1	1	15	29	8	14	34	5	31
図示なし	110	32	50	19	－	2	－	－	9	9	1	－	156	6	1
小　計	157	66	108	40	7	12	1	1	24	38	9	14	190	11	32
														合計	710

は「珠洲系」と称し、後者を「常滑系」又は「越前焼」と称していることが多いものである。ここでは「須恵器系」又は「瓷器系」として報告した。現在では県内唯一の中世古窯として北越後の五頭山麓に笹神古窯が知られ、幾つかの支群を保ち、須恵器系または瓷器系の双方が生産され各地に供給された事が知られている。これら中世陶器の甕・壺鉢の器形を模式図にして第52図に示した。現在各地の遺跡から出土する中世陶器はその地域や時期によって様々な変遷を見、13～14世紀を通じて北越後一帯では笹神古窯の「須恵器系」又は「瓷器系」陶器が主体をなし、信濃川流域では珠洲焼きそのものと見られる須恵器系陶器が多く、僅かに笹神古窯の製品が入込むかに見受けられる。そして加賀・越前系の移入は前者に後続するものと考えられる。

前章で出土遺物の時期や年代などに付いては触れて来なかったのでここで検討したい。検出された陶器の殆どが細片で検討出来るものは少ない。須恵器系陶器は同編年に基づけば次ぎの様である。またこれらの他、「北沢系」としたものはⅡ～Ⅲ期に相当するもので13世紀のものであろう。

Ⅰ　期	503（甕）	
Ⅱ　期	33・37・504・512（甕）	
Ⅱ～Ⅲ期	69（壺A）	253（鉢）
Ⅲ　期	295（壺A）	548（鉢）
Ⅲ～Ⅳ期	534（壺A）	
Ⅳ　期	11（甕）	540（壺B）
Ⅳ～Ⅴ期	184（甕）	285・549～553（鉢）・539（壺B）
Ⅴ　期	505・506（甕）	556・557・561（鉢）
Ⅴ～Ⅵ期	524（壺A）	
Ⅵ　期	146（甕）	554・556（鉢）
Ⅶ　期	555（鉢）	

加賀・越前系陶器は同編年に基づけば次ぎの様であり、604（鉢）はⅦ期、585（甕）、16・600・601（鉢）はⅦ～Ⅷ期に相当する。なお確証はないが596の甕は18世紀の所産と推定されるものであるが、遺跡との係わりは不明である。

瓦器系（瓦質系）のものの内、これまで鉢類は須恵器系壺A類とセット関係で墓址などからの出土を見、また火器も城館址などからの報告を見るが、筆者等にとって300の壺形器種は初見のものである。かっては瀬戸内を中心にした西日本特有のものとも考えられていたが、県内及び山形・秋田県での出土が見らろる。これらの産地も不明であり、時期的にも不確定な所が多いが、602・624の鉢は14～15世紀の要素を踏まえるもので、須恵器系からの過度的な産物とは考えられず、今後の課題としたい。火器としたものの大方は暖房具としての手炙りであり，一部は茶の湯に纏わる風炉である。しかしながらここでは風炉の要素となる窓部分を見るものはない。

舶載陶磁器は少なくとも12世紀末には北越にも入ったことが経塚資料などから知られるが、食器としての碗・皿の移入は主に15世紀以後に多くなる。ここに検出された青磁の殆どは細片であ

り形態を見極められないが、15～16世紀の範疇に部類するものであり、染付は16世紀の前葉と後半のものとである。

豊富な木製品の出土を見た遺跡の一つに数えられる。建築用材を除いた日常用品では折敷、曲物、箱物、木栓、串、形代などの白木のものと、椀、皿、陽物などの他、容器の一部と見られるものに漆塗りがある。この塗物には椀と皿が圧倒的に多い。椀・皿の漆器は各地によって相違はあろうが、関東では13世紀前半と14世紀中葉頃の２回の画期が考えられると言われている［穴戸；1986］。また北陸においても最も古い椀は黒塗り無文の椀で、12世紀後半に位置付けられ、赤漆によって施文された椀は13世紀に入っての出現で、総高台、輪高台の皿も13世紀になってからの出現で、14世紀末頃まで存続する［四柳；1986］。15世紀には全国的に見ても少なくなり、特に15世紀前半には資料はなく、その後16世紀には増加する。当遺跡で出土した椀類は底部と高台の形態がそれぞれ薄造りで低いものと、厚造りで高いものとの２通りに区分でき、皿に付いても高台の形態から２通りに区分できる。ここでは詳細な検討の時間がないが、新旧２通りの時間の中にあるものであり、それらは14世紀に中心を置くものとしておきたい。

石臼は言うまでもなく五穀などを粉末にしたり、胡麻油を絞るためのもので、摺鉢にとって変わったものである。石臼に関する報告例は、近年各地にあり最も古い事例では関東における八王子城からのものがあるが［註１］、編年的には不確かであり、従ってここでは15世紀以降の所産と考えておきたい。

木製品では生活用具と生産関連用具が多い。これらの他、串、形代などの呪術関連用具がある。ハシ状木製品としたものの多くもこの串と見做される。串の多くは大地に刺して結界などとし、あるものは占いの筮とした事が考えられる。形代のうち刀形は悪魔を払う魔除けであり、舟形は疫病や災いを流し出す役目を果たした。この他、遊具の独楽や羽子板がある。中世では独楽は「胡魔」で夷狄すなわち西城の悪魔であり、独楽に鞭打つ事によって悪魔を祓ったとされた。羽子板は「胡鬼板」と称し、羽根突きは「胡鬼子勝負」と呼ばれ、胡鬼の子が子供に取り付かないように相互に祓ったとされたもので、これらが遊戯になったものである。

2　遺構に付いて

多数のピットと相当数の柱根を検出したにも係わらずこれらの中で建物を把握しきれなかった。このことは時間的な制約と経験不足による所のものであり、報告した幾つかの柱列は建物になることは疑いないものである。機会を見て再検討をしたいと考えている。

多数の井戸が検出されている。一般的にはそれぞれが建物に付随するものであることは言うまでもない事であるが、ここでは建物のエリア外の特定の箇所に集中して存在している。しかもこれらが狭い範囲に多くが存在し、或るものは重なりあって検出されている。このことは必ずしも良水に恵まれなかった事も伺われ、またこれらの井戸が意識的に埋め戻された形跡のものはないが、事あるごとに掘り替えられたものと推定することが出来る。

表50　周辺の城館跡一覧表

No.	遺跡名	所在地	No.	遺跡名	所在地
1	木場城跡	黒崎町木場新田	13	矢根五郎屋敷跡	岩室村夏井字境
2	巻城跡	巻町巻字中江	14	原館跡	〃　原字館
3	下城跡	〃　竹野町字下城	15	本町城跡	吉田町本町字館野
4	上城跡	〃　〃　字城山　他	16	鴻ノ巣城跡	〃　鴻ノ巣字箱根
5	長島館跡	岩室村長島字腰廻り	17	米納津城跡	〃　米納津字小諏訪前
6	石瀬陣屋跡	〃　石瀬字岡田	18	佐渡山城跡	〃　佐渡山字諏訪腰
7	松岳山城跡	〃　岩室字松岳山	19	長所館跡	燕市長所字村中
8	天神山城	〃　〃　字十三車	20	打越館跡	中之口村打越甲字宮下
9	城河内城跡	〃　間瀬字城河内	21	東船越館跡	〃　東船越字五ケ入
10	黒瀧城跡	弥彦村麓字要害・黒瀧	22	高野宮館跡	〃　上小吉字宮浦
11	観音寺砦跡	〃　弥彦字熊ケ谷	23	新飯田館跡	白根市新飯田字館
12	桔梗城跡	〃　〃　字荒城	24	杣木	燕市杣木字館の内

＊印＝和納館跡

二重の濠があり、これを内濠、外濠と称したが言葉から来るイメージとしては適格ではなかった。内外濠の間に郭などのスペースは無く、細い凌ぎを残して連なる濠である。この様な二重の濠はこれまでの所、県内での類例は見られない。僅かに福島県須賀川市の「蛭館」に二重の掘を見るに止まると聞く［註２］。ところで当遺跡の二重の濠が果たして同時に存在したものであろうか検討して見たい。異例とも言える事であるが双方の濠より一片の陶器片も検出されていない。しかしながら濠の上層部の包含層からは、例えば507・508などの須恵系の陶器片が相当数検出されており、これらが後の攪乱によるものにせよ陶器以後の濠では有り得ない。濠出土のものに漆器がある。内濠外濠共に前述した２通りの時期と考えられるものが検出されており優劣を定めにくい。濠そのものの構造から見ると、幅員差はあれ確実に並列しまたその深さも同一である。濠に重複する複数の井戸遺構がある。SE－74号・85号・100号でありこれらとの係わり合いを見ると、まず74号は内濠の上に掛り内濠埋没後に掘削されたのもである。85号・100号は双方の凌ぎ部分に位置し、前者は内濠側に、後者は外濠側に位置し共に濠の掘削によって破壊されたものであることが判明する。これらの井戸遺構からの出土遺物である程度の時期を推定できるものはSE－74号では112の瓷器系甕即ち越前の甕である。胴部の細片であるがその他の一連のものと同様に16世紀のものと推定される。一方SE－85号からは174の漆器椀である。低い高台と薄肉で広い見込み造りから、当遺跡出土の漆器では最も古式と考えられるものであり、13世紀の所産であろう。SE－100号からの出土遺物はない。濠内に掛けられたものと推定される橋脚とそれに係わるものの位置が３ｍ程ずれている。電光形の橋梁があっても不都合ではなくここでは二重の濠が備わっており、その時期は前記井戸からの出土遺物の時期に当たるものであり、遺跡自体の存続は更にこの時期の前後に跨がるものであるが、16世紀を下るものとは考えられない。

3　おわりに

上幅９ｍを測る二重の濠の出現でこの遺跡が城館址である事が確実となった。そしてこれが文献で知られる和納城であった事は間違いあるまい。当調査地点がこの濠に囲まれた北東の隅に当たり濠外には全く遺構を見ないことから最も外周にあたる位置である。巻頭の『確認調査報告書』では「二の廓…別廓」と推定しているが、それはともかくここでは方形プランの一角が現れた。今この区域の古地籍図からも全く旧状を読み取る事はできない。そしてこの城館址の営みは前述した遺物から13世紀の後半から16世紀後半に及ぶものである事が知られる。

和納の初見は書写ではあるが、元暦元（1184）年、後白河院庁下文之写（国上寺累代記録写）に「庄内七箇条」として、「中条・矢作条・船越条・下条・上条渡部条・仁勝条・和納条」が見える（新潟県史；資料編５－2819）。また下って天正五（1577）年、上杉家古文書には和納伊豆守の名が見える（越佐史料　巻五　十二月二十三日の項）。和納城が歴史上に現れるのは天正八（1580）年、上杉景勝書状であり、「小国石見守加勢之儀申越ニ付而、先日安部二介ニ人数相添差越候、然者二介与令二談合一、和納へ及二調議一、二之廻輪迄取破、巣城計成之引除之由簡要候、雖下無二申迄一候上、前々之事者、縦如何様に石見守手遺之子細候共、此上者天神山無力与云、

就レ中彼家来之者共、若輩故、無二正体一由、其聞候間、身のかたへの志ニ、彼地堅固之様ニ、畢竟父子意見頼の事候、自然天神山教示凶事も出来候てハ、慥父子手前之備も可レ為二劬労一候条、不レ可レ過二分別一候、云々」とある。これによれば、天神山城主小国石見守が加勢を求めたので、景勝は坂戸城将安部二介に兵を授けて派遣し、和納城の二之廻輪まで突入している。越後を動乱の渦に巻き込んだ御館の乱の事である。この攻防戦に関しては『岩室村史』に詳しく報じられているところである。

当調査の結果、当館址は少なくとも13世紀後半には存在したことは確実で、後世の書写文書とは言え国上寺累代記録写の年代に少しは近寄った。そして天正八（1580）年夏には陥落したものと考えられており、検出された遺物の年代とも符合する。しかしながら中世の300年間の記録が前記のものに止まると言う事は余りにも空しい事である。

現地調査から当報告書の作成まで長い時間を経た。私たちに与えられたものは極く限られたものであり、厳しさの中での作業となった。従ってデータ・論考ともに不充分な点があることを率直に認める。大方の叱咤を甘んじるものである。しかしながらこのささやかな報告書でそれこそ幻ともいえる和納城が現実のものとなり、地域の方々にとって何等かの糧になれば望外の幸である。

またこの間、御教導、御支援下された多くの方々へ紙面を借りてお礼申し上げる次第である。

1997　3　川上貞雄

註 及び 参 考 文 献

註1　土井義夫氏の御教示による。

註2　横山勝栄氏の御教示による。

新　潟　県　1980『新潟県遺跡地図』新潟県教育委員会

新　潟　県　1987『新潟県中世城跡館跡等分布調査報告書』新潟県教育委員会

伊藤啓雄　1995「和納館」『FIELDNOTE　第7号』新潟大学考古学研究部

井上慶隆　1974「中世の岩室」『岩室村史』岩室村史編纂委員会

吉岡康暢・他1976「珠洲古窯跡」『石川県珠洲市史　第1巻』珠洲市史編纂委員会

吉岡康暢　1994『中世須恵器の研究』吉川弘文館

上野与一・他1981『日本やきもの集成4　北陸』平凡社

田中照久　1994「越前焼の歴史」『越前古陶とその再現』出光美術館

遠藤孝司　1995「白根市馬場屋敷遺跡出土の陶磁器／『越後の出土の陶磁器』日本貿易陶磁研究会

四柳嘉章　1987「中近世漆器の編年」『西川島』穴水町教育委員会

穴戸信悟　1986「中世鎌倉の漆器木製椀・皿の分類と変遷」『神奈川考古22』

志田原重人　1991「年中行事にみるまじない」―占いとまじない―『別冊太陽』平凡社

中井さやか　1989「漆椀」―特集　東京の中世考古学―『文化財の保護』第21号　東京都教育委員会

新　潟　県　1984『新潟県史』資料編5　中世三

田村　裕　1993「中世の燕とその周辺」『燕市史通史編』燕市

高橋義彦　1971『越佐史料』巻五　名著出版

橋口定志　1984「中世居館の再検討」『東京考古』第5号

橋口定志　1989「中世方形館を巡る諸問題」『歴史評論454号』

中川成夫・他1973『新潟県北蒲原郡笹神村狼沢窯址の調査』笹神村教育委員会

川上貞雄　1992『北沢遺跡群』豊浦町教育委員会

報　告　書　抄　録

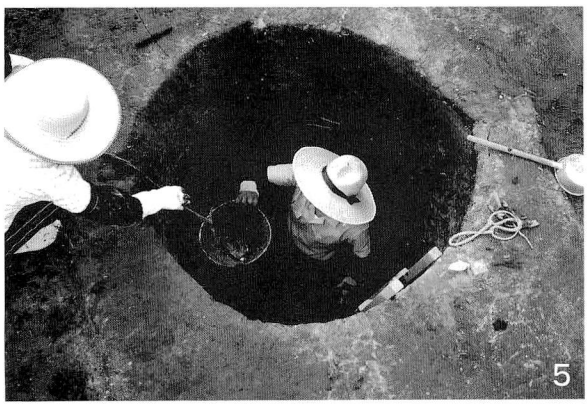
ふりがな	わのうやかたいせき
書名	和納館遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	川上貞雄
編集機関	岩室村教育委員会
所在地	〒953－01 新潟県西蒲原郡岩室村西中860　TEL0256－82－4444
発行年月日	西暦1997年　3月　30　日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東径	調査期間	調査面積	調査原因
		市町	遺跡番	°′″	°′″		㎡	
わのうやかた 和納館	にしかんばらぐん 西蒲原郡 いわむろむらどうじ 岩室村童子 1146番地他	341		37° 43′ 13″	138° 52′ 35″	1995.07.26 ～ 1995.11.17	2,642	住宅団地 造成工事

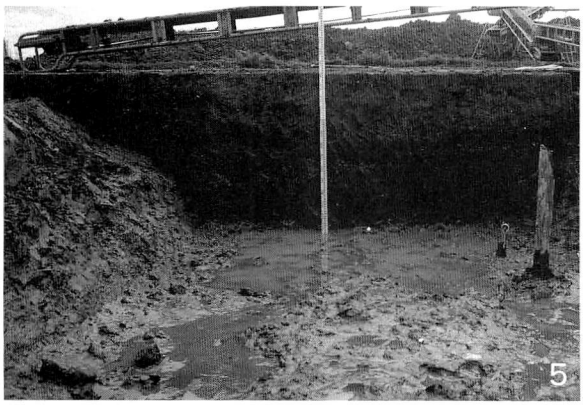
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
和納館遺跡	館跡	中世	周濠・井戸遺構	須恵器系中世陶器 瓷器系陶器 土師質土器 青磁器、漆器 木製品他	二重周濠

上、遺跡遠景　　中、作業風景　　下、遺跡完掘

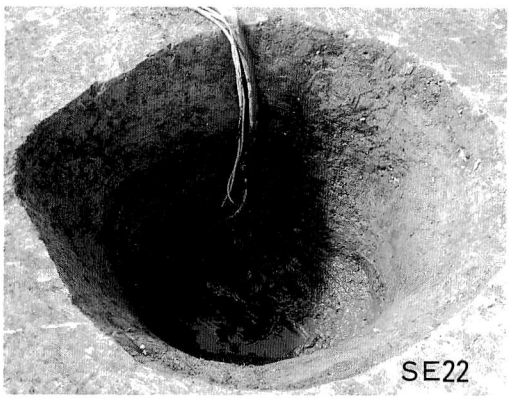
図版２

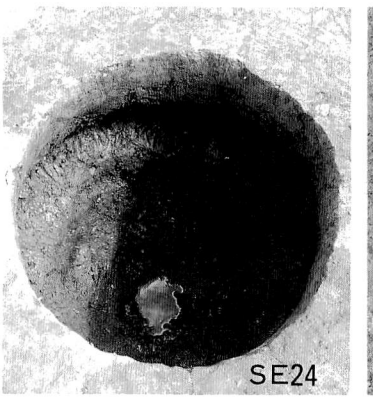


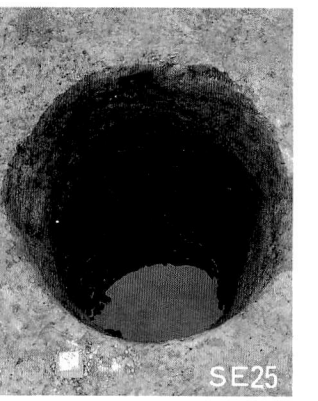
調査スナップ　1，器材配置状況　2，周濠内橋脚　3，SE98号　4，SE55号　5・7，SE37号　6，SE57号
6，SE57号　8，SE27号

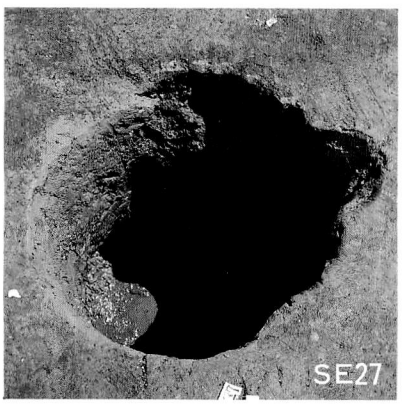


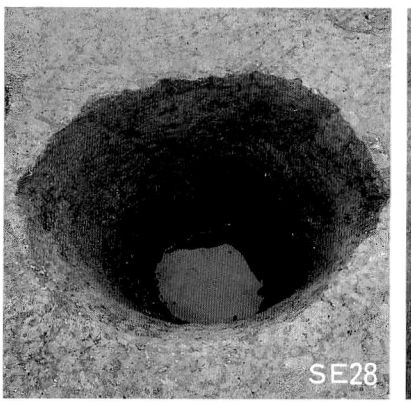
遺跡完掘　　1，東北より　2，南東より　3，南側より　4，中央井戸群　5，内濠橋脚
6，外濠橋脚　7，内外濠橋脚　8，周濠水没





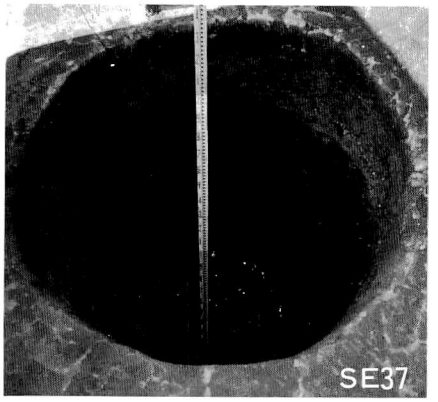


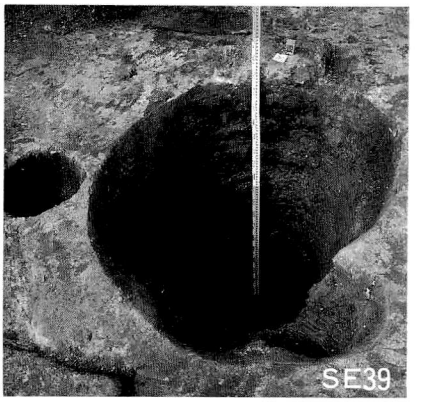


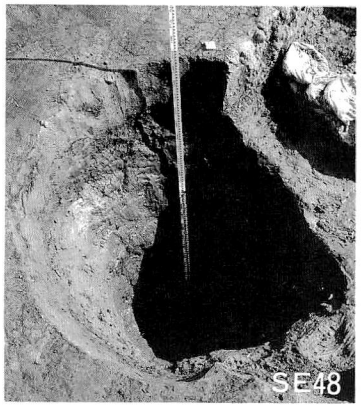


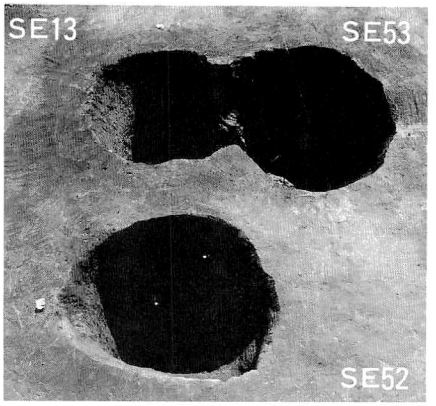
井戸遺構１

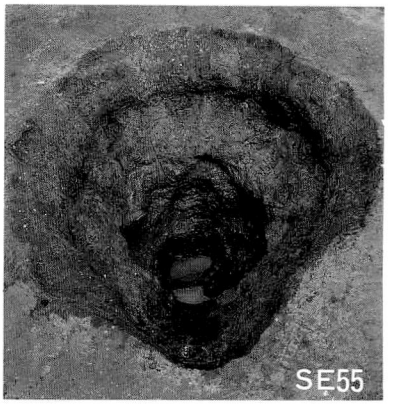
SE32

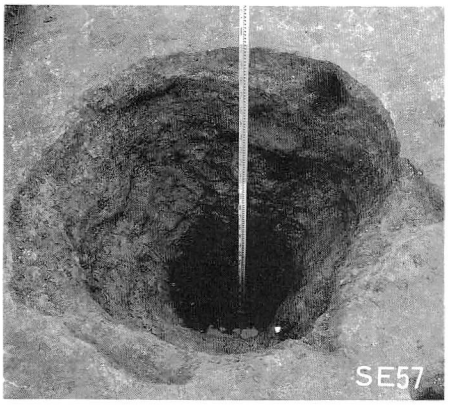

SE37

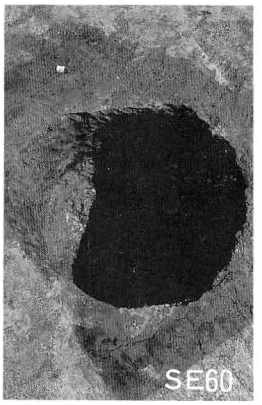

SE39

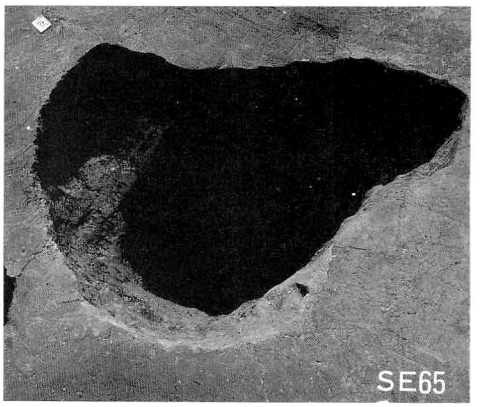

SE48

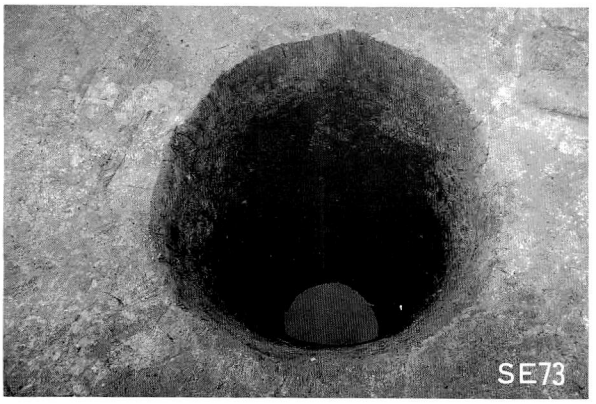

SE13
SE53
SE52

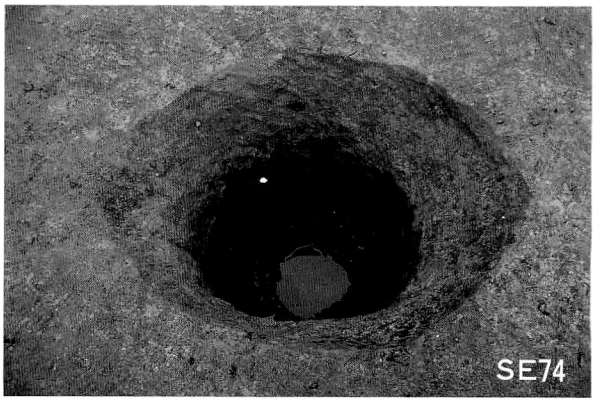

SE55


SE57


SE60

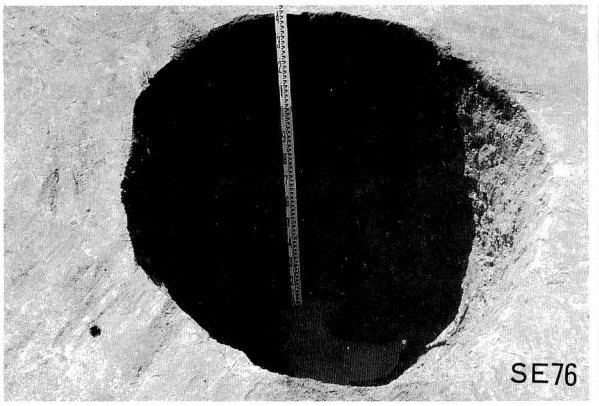

SE65

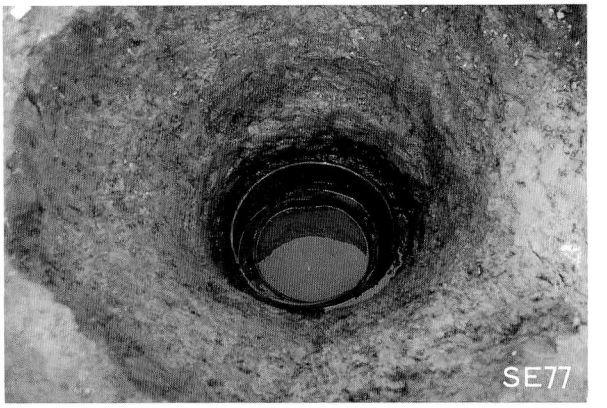

SE73

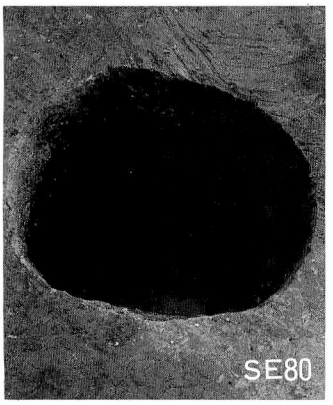

SE74

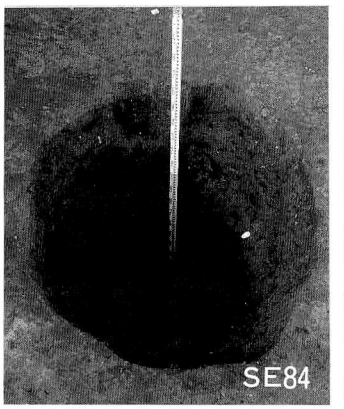
井戸遺構 2

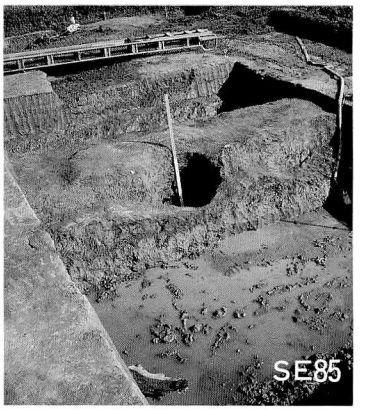
図版6

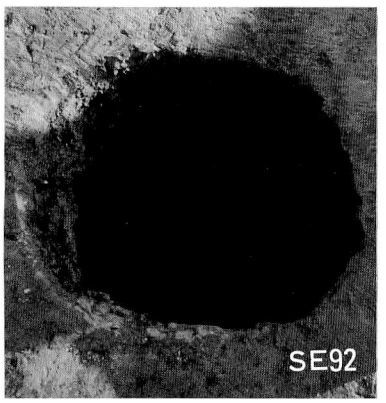


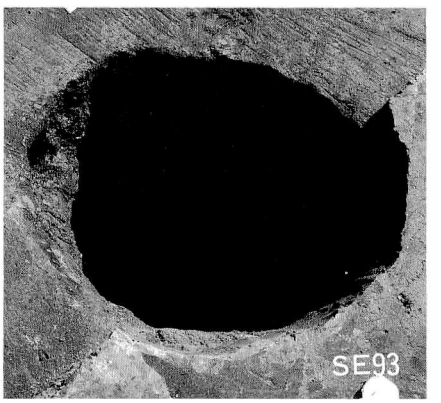


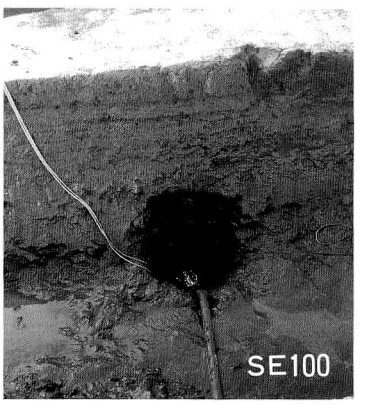




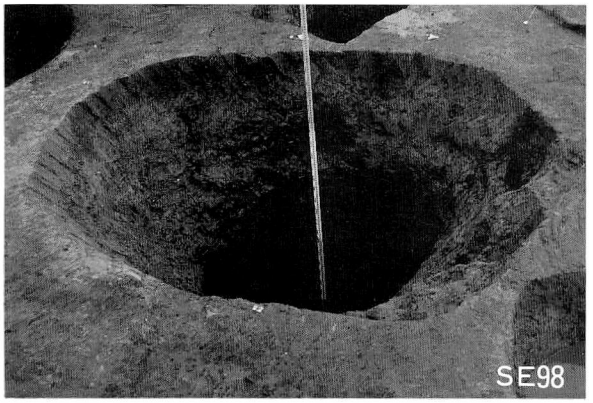


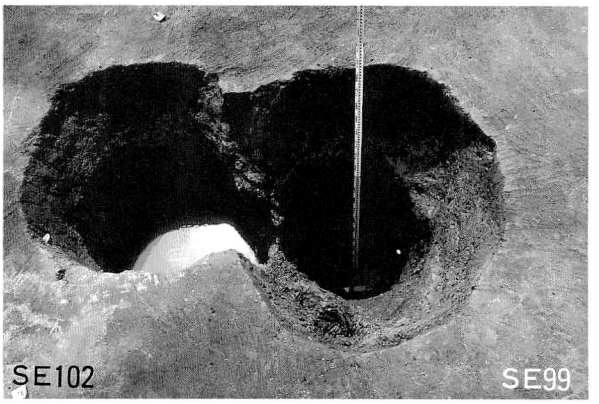


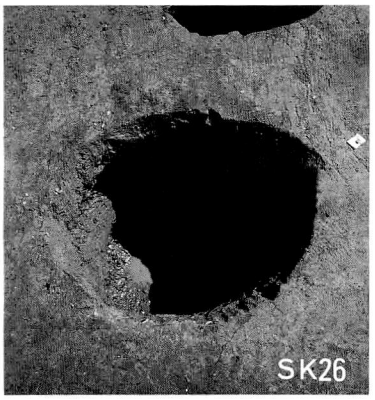


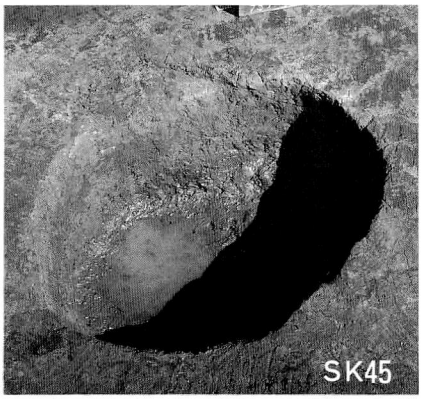


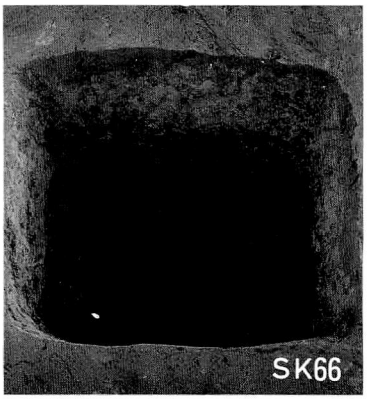
井戸遺構 3





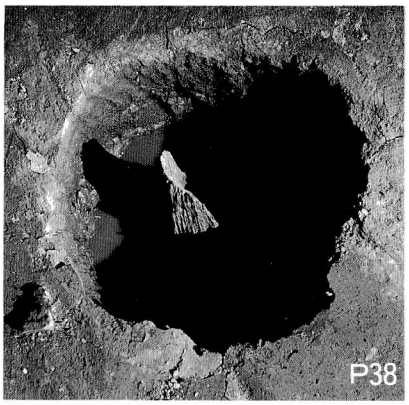


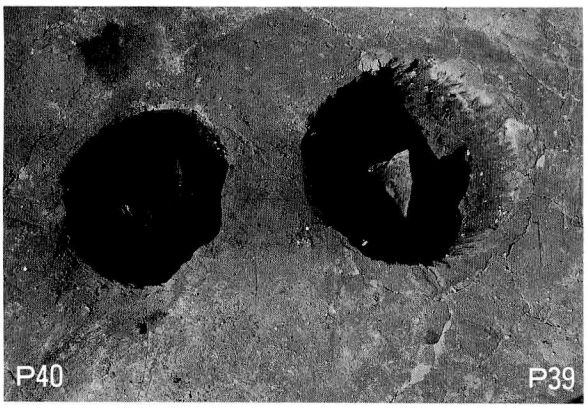


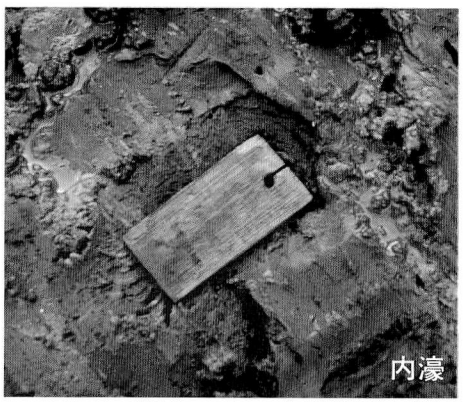


井戸遺構４・土坑

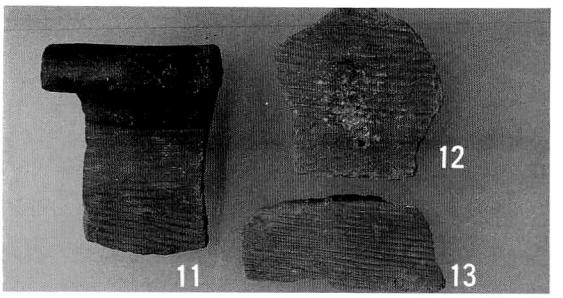
図版８

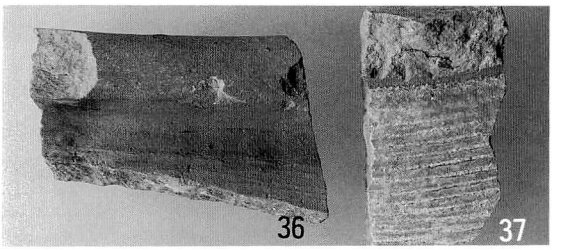


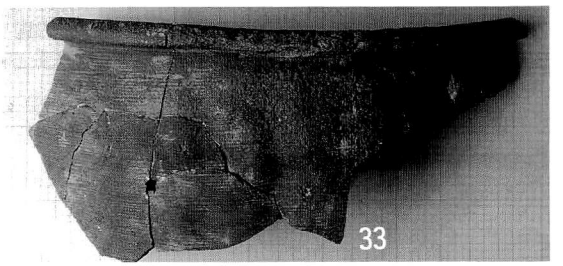


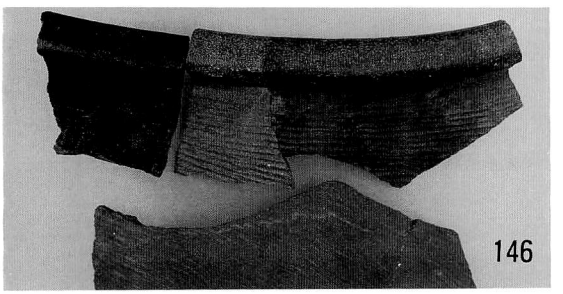


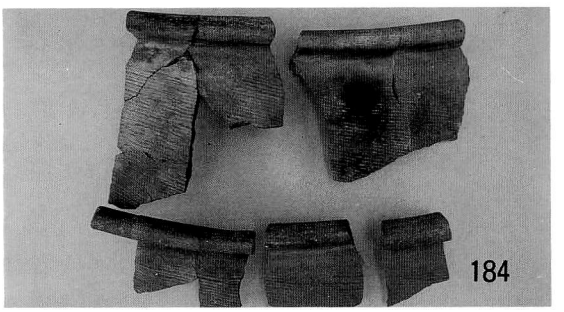
遺物出土状況

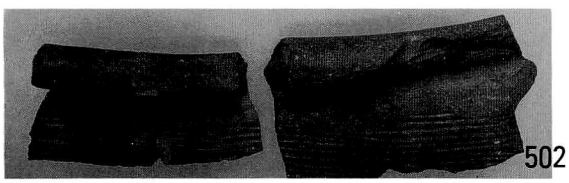

12
11
13

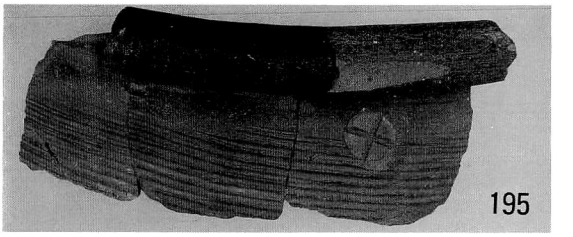

36
37

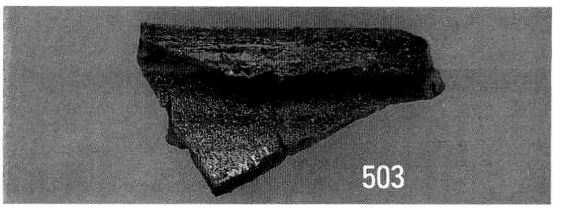

33

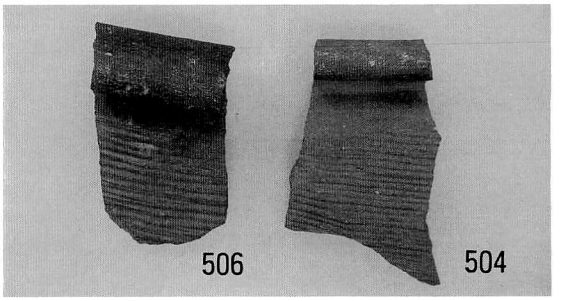

146

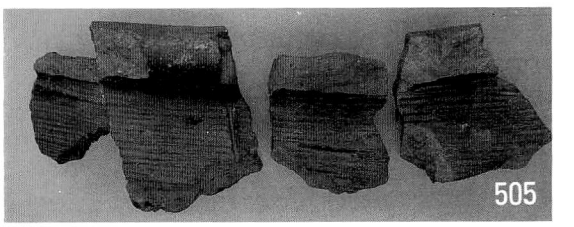

184

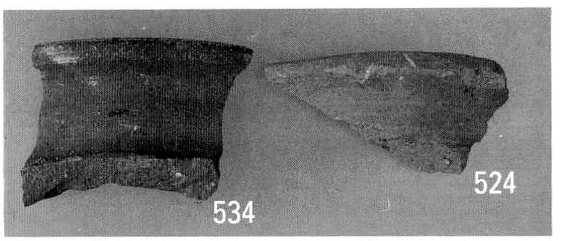

502

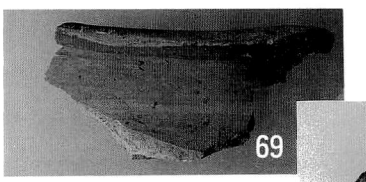

195

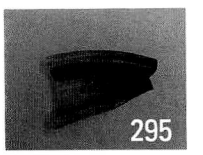

503

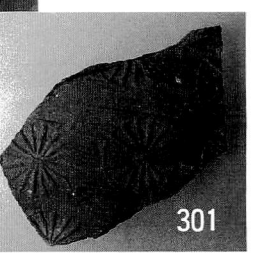

506
504


505

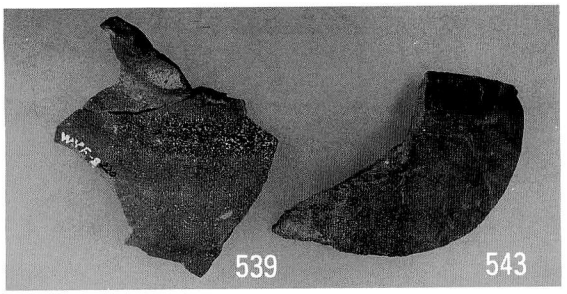

534
524

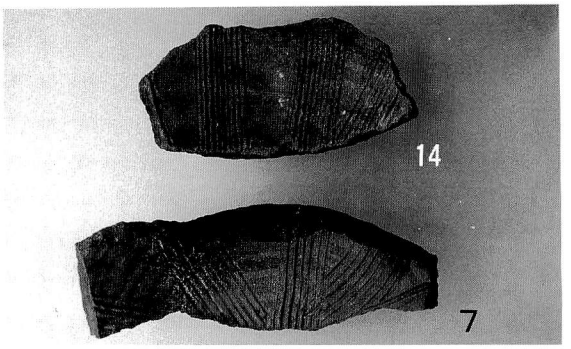

69

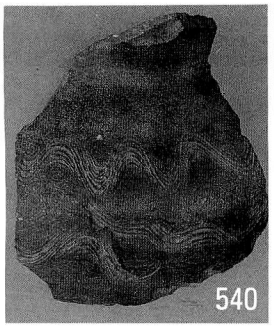

295

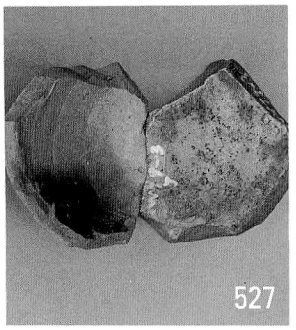

301

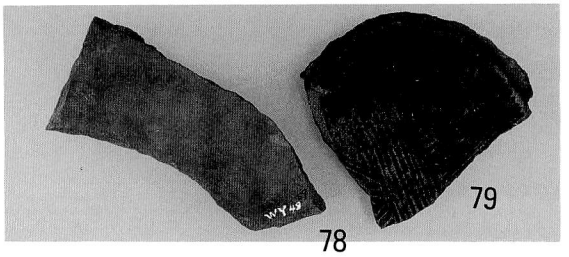
須恵器系陶器、　甕・壺Ａ類

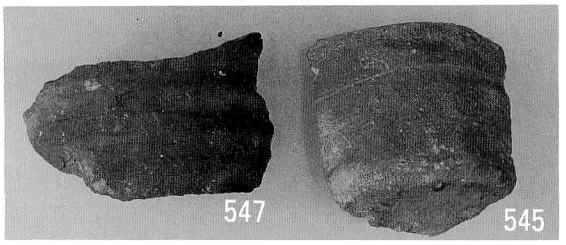

539
543

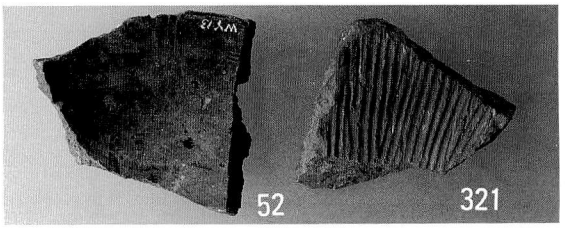

14
7

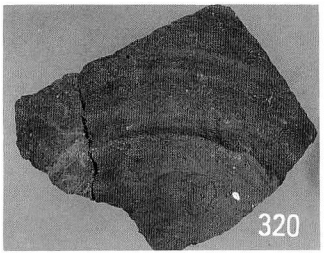

540

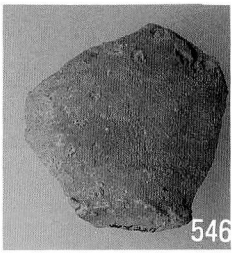

527

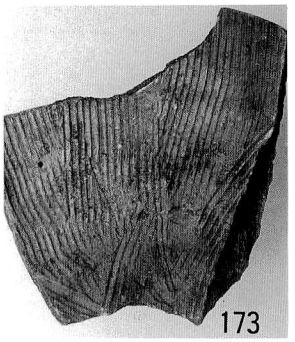

78
79


547
545

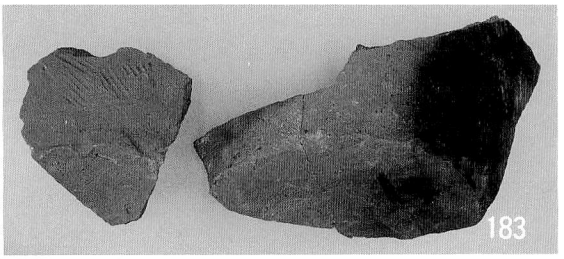

52
321

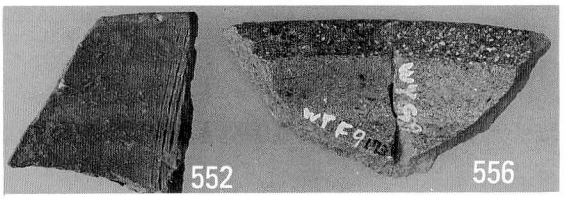

320

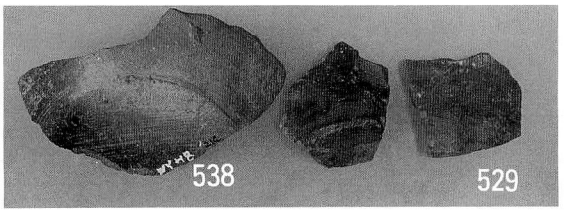

546

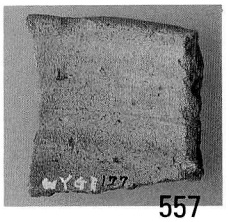

173

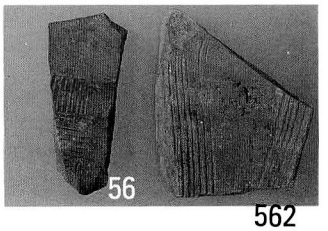
241


183

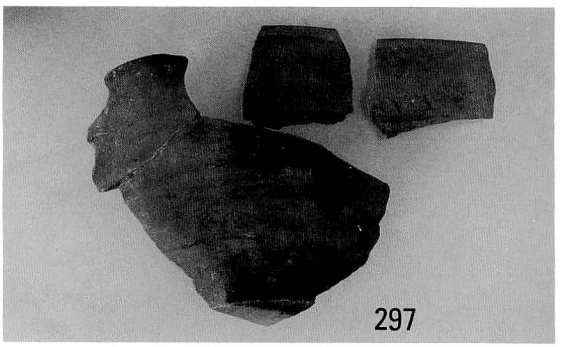

552
556

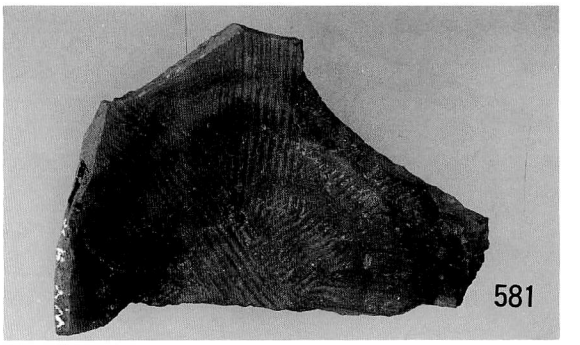

538
529

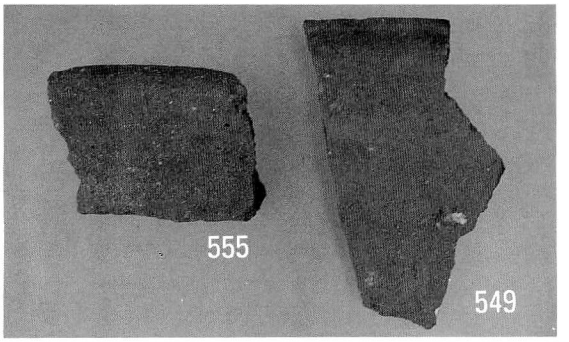

557

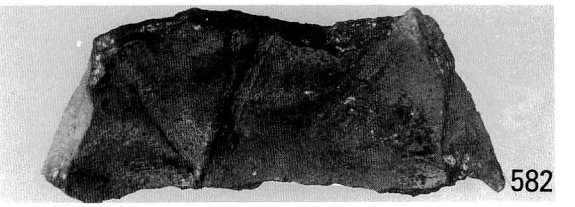

56
562

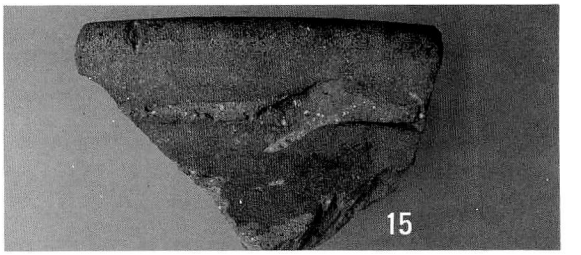
須恵器系陶器、壺B類・鉢

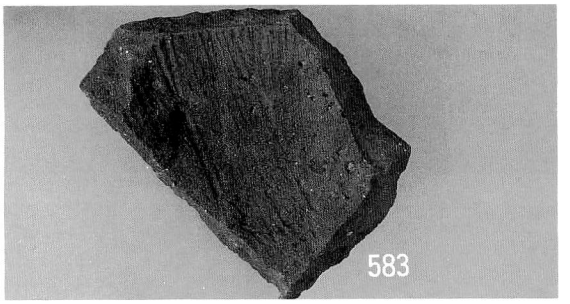


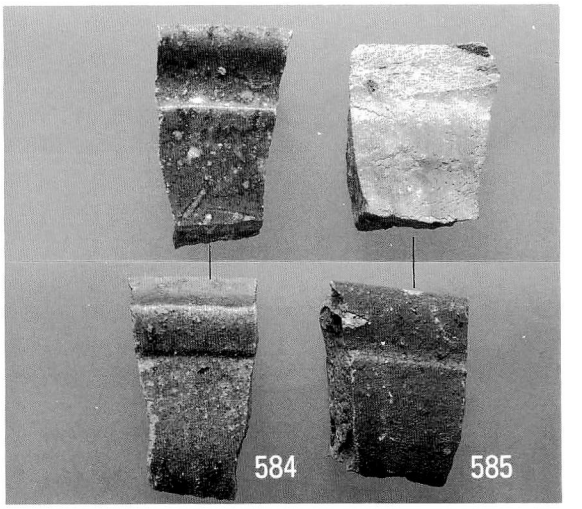


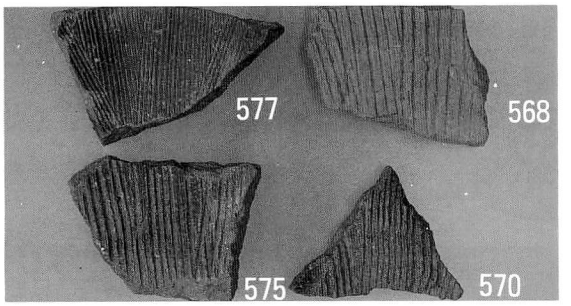


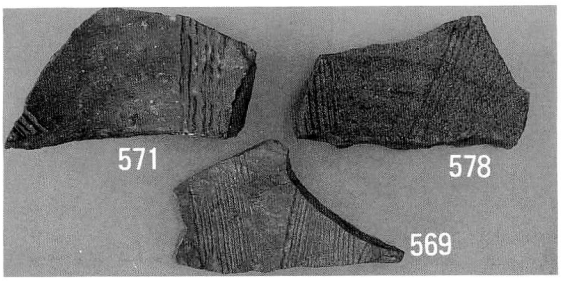


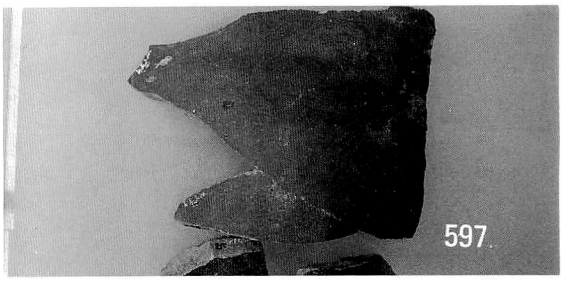




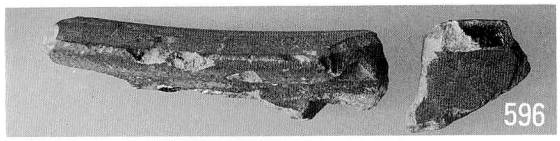


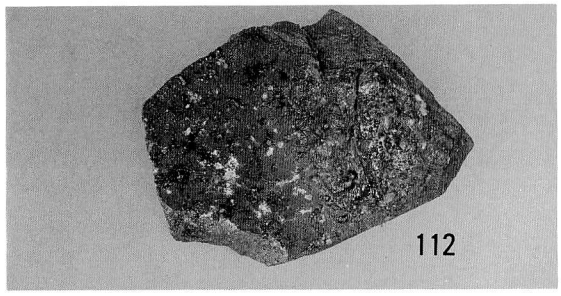


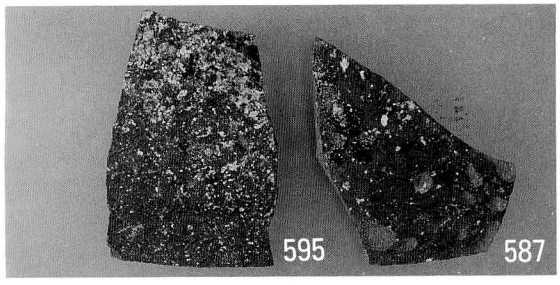


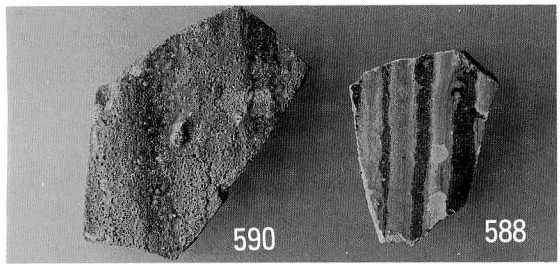


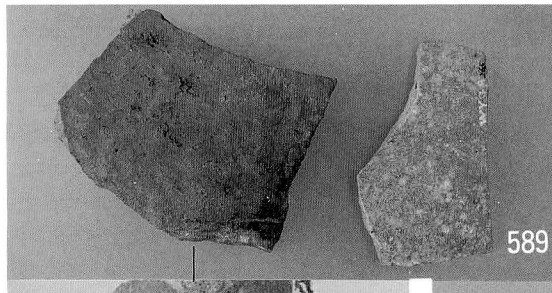
須恵器系、　鉢　　瓷器系陶器、甕

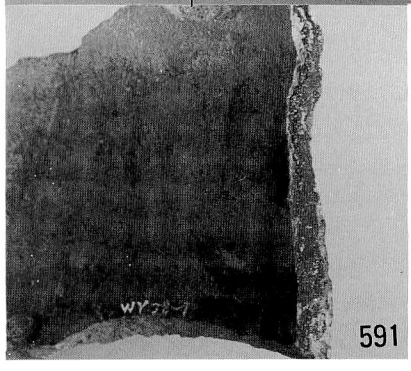


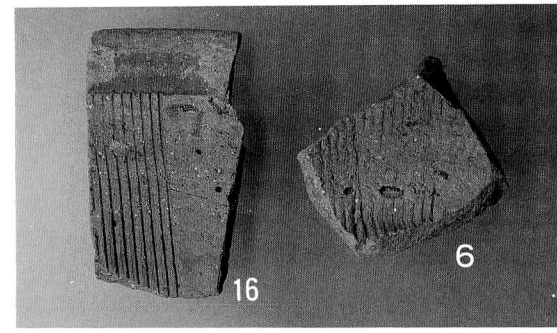


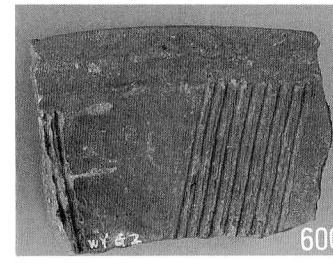


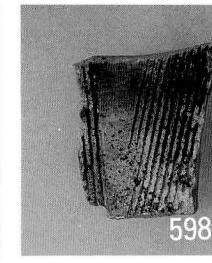


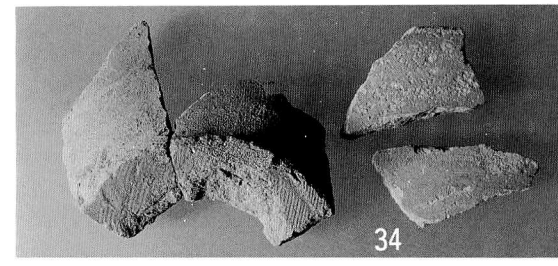


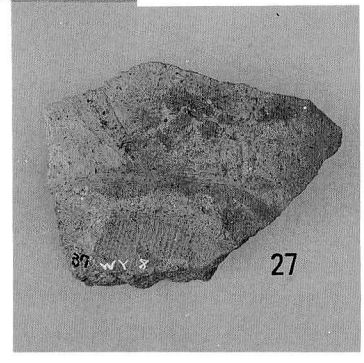


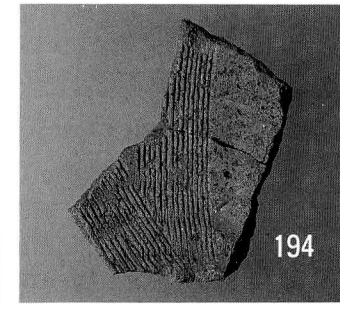




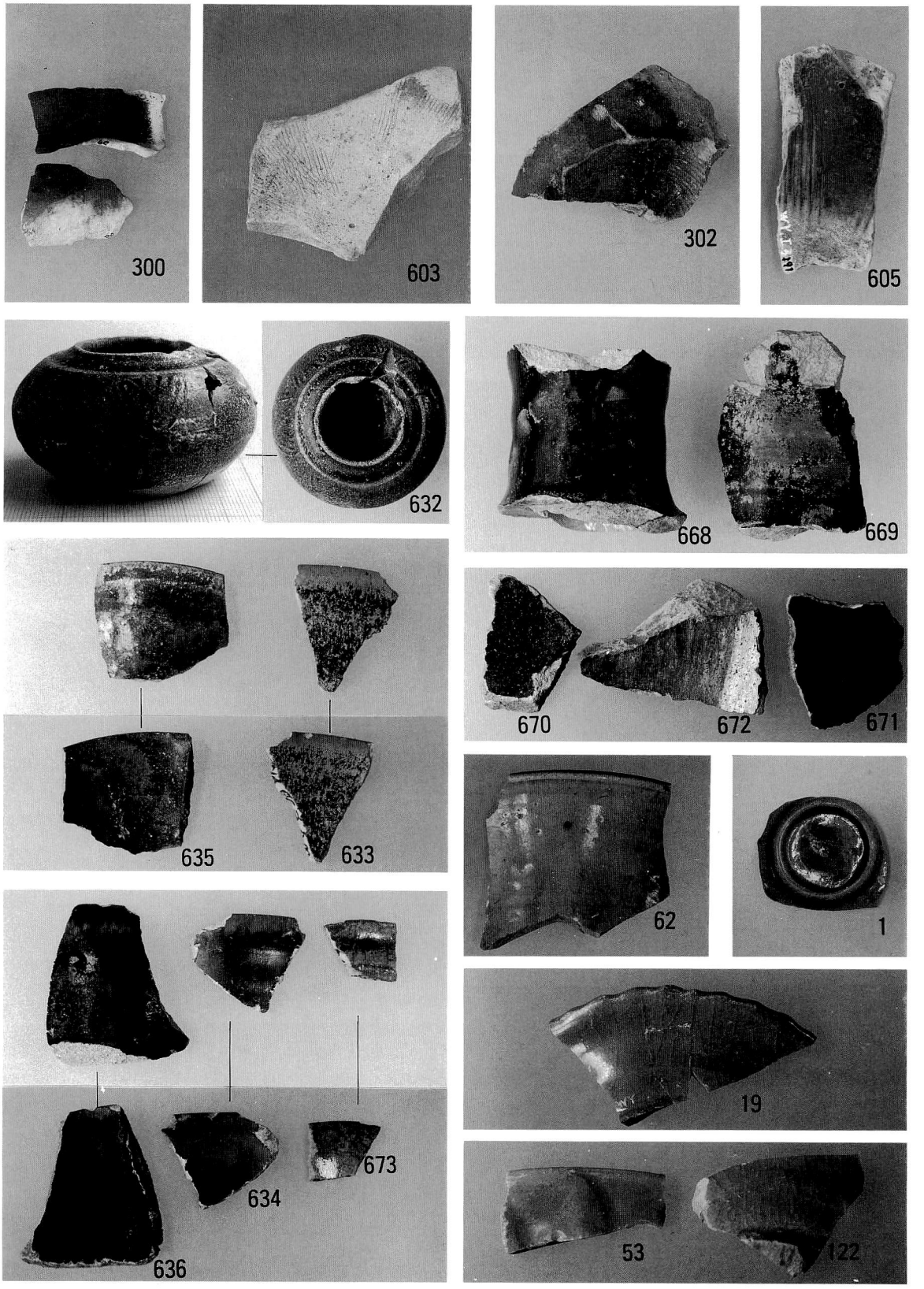






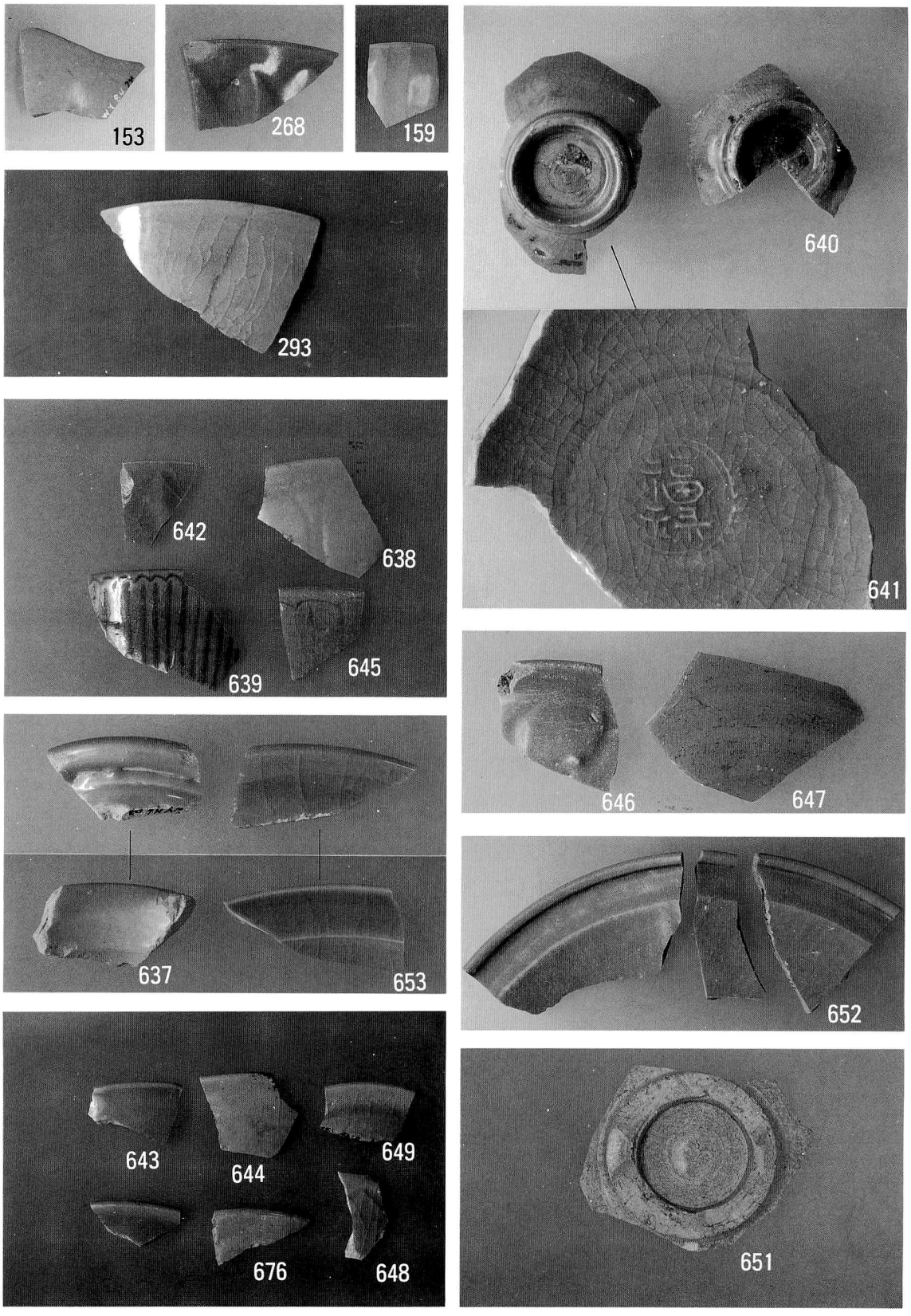


瓷器系陶器、　甕・鉢

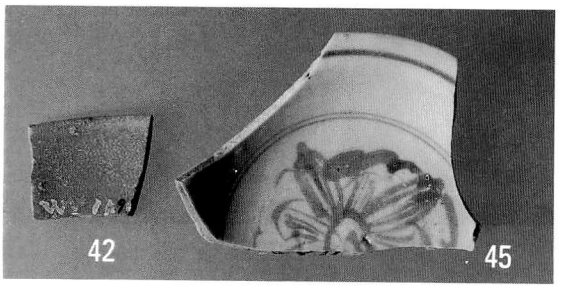


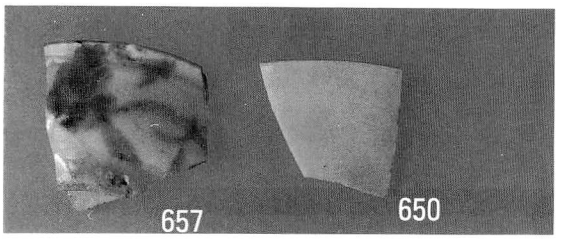
瓦器、　鉢　　施釉陶器、　壺　天目碗　　青磁、　壺・皿・碗

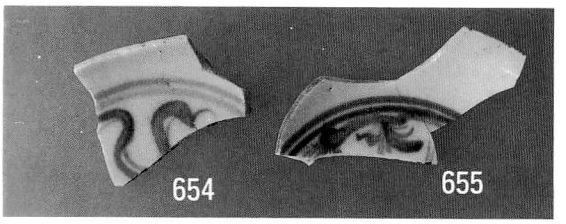
図版14

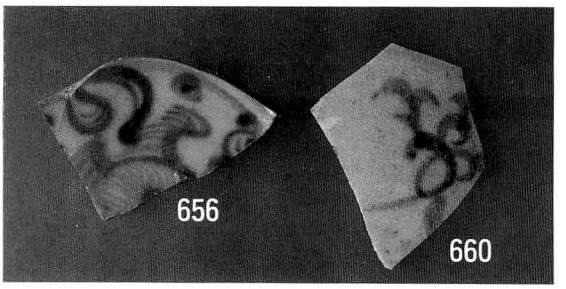


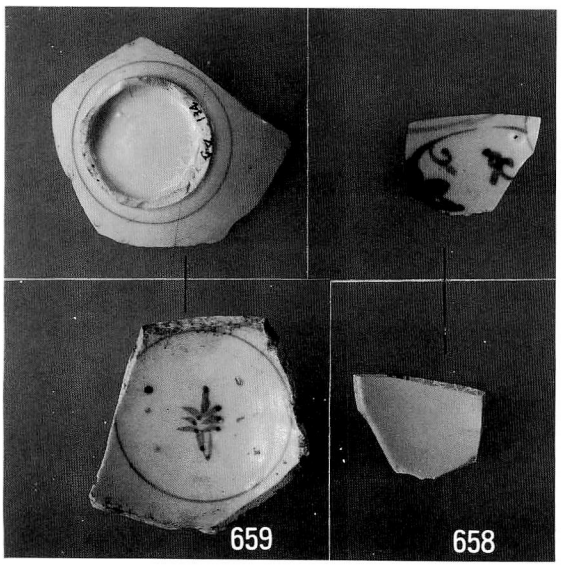
青磁、　碗・盤　　白磁、碗

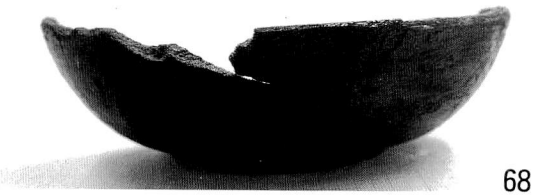


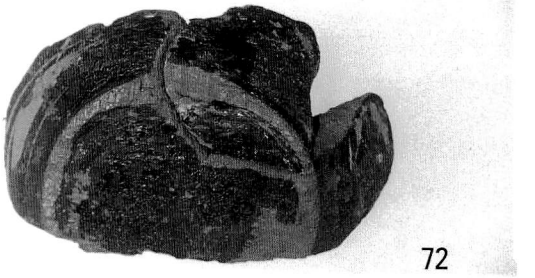


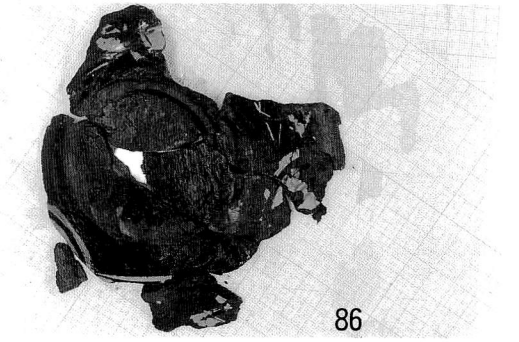




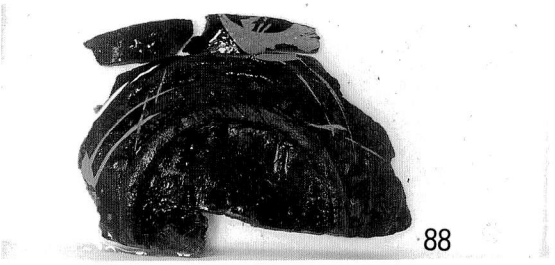


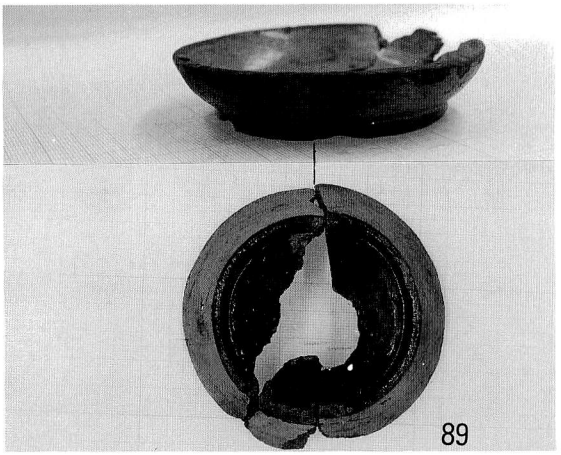


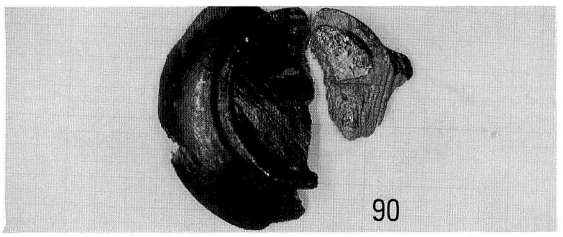


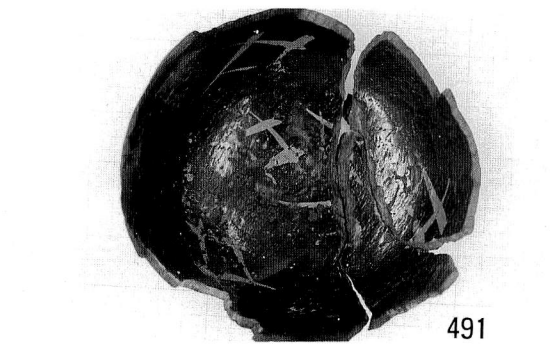


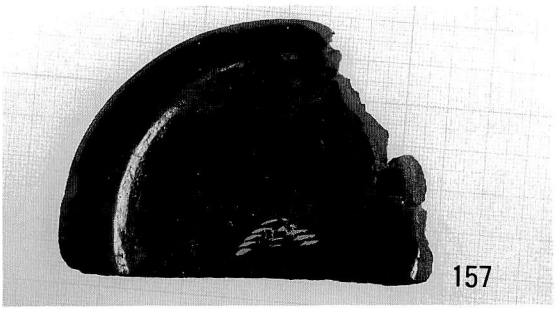
染付、皿・碗　　漆器、　椀・杯

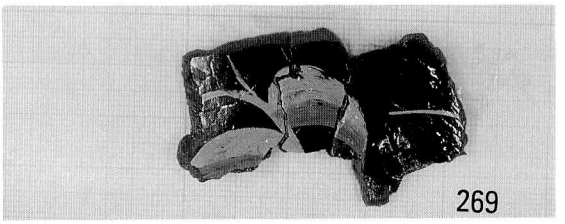


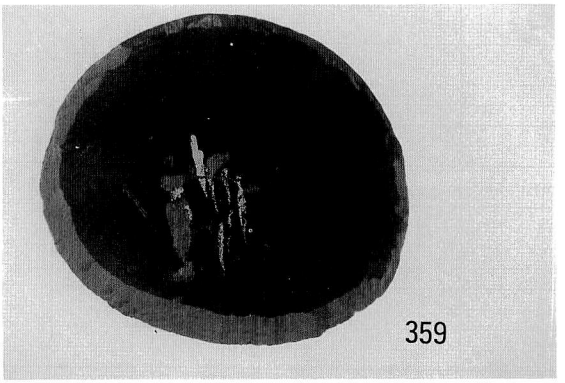


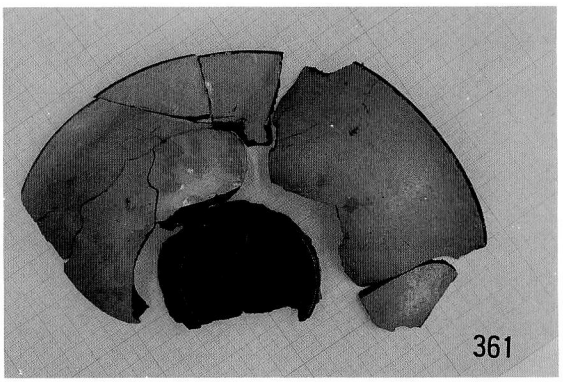


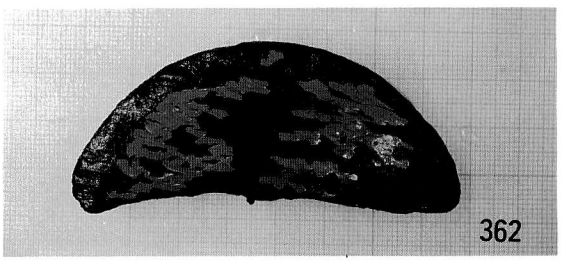




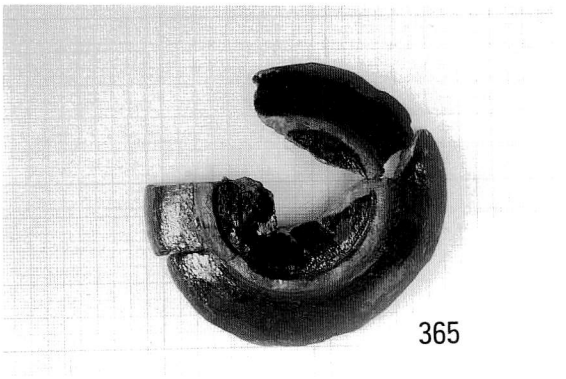


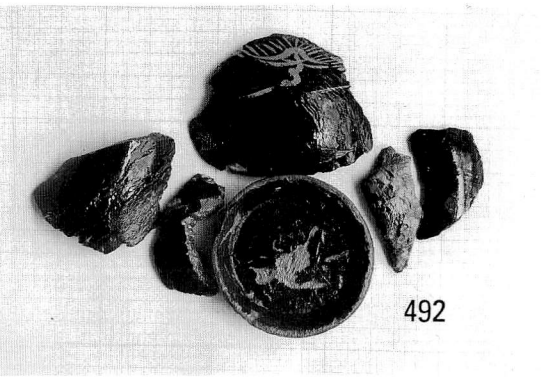


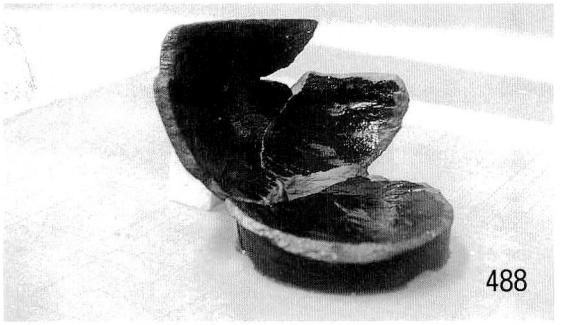


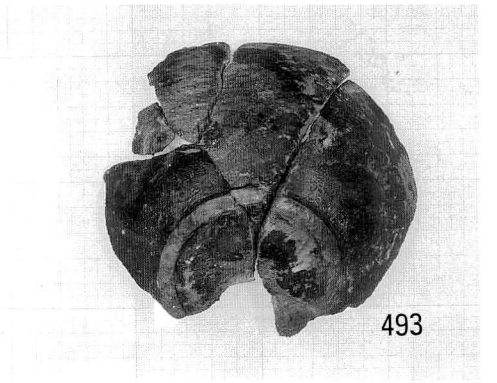


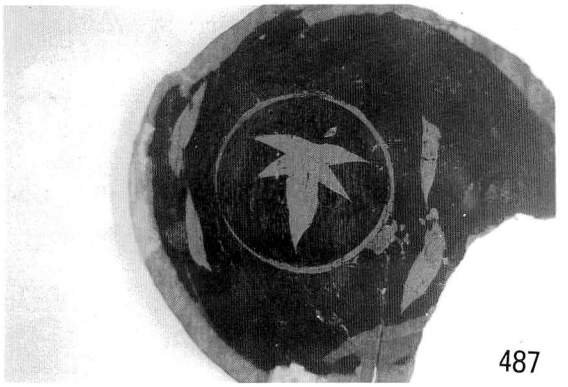
漆　器、　皿・椀

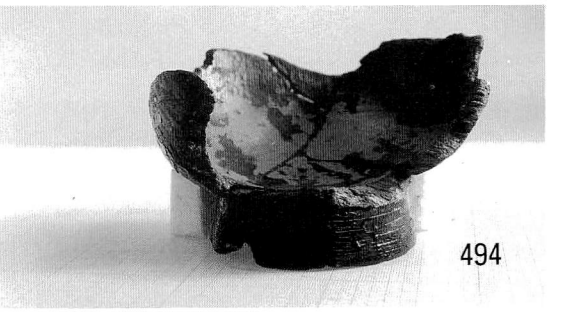

365


492


488


493

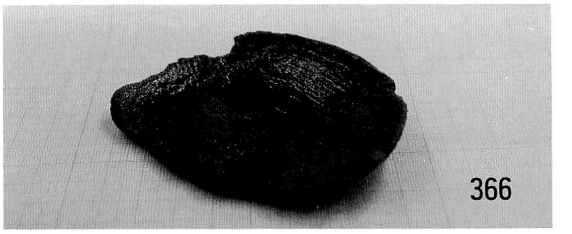

487


494

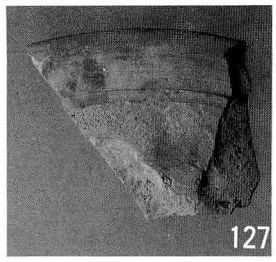
490

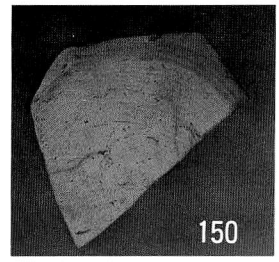
198

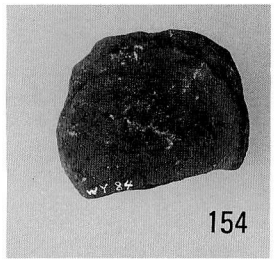
491

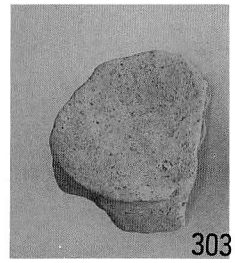

366

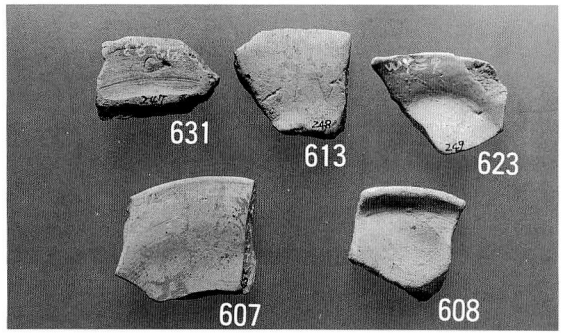
漆　器　　椀・皿

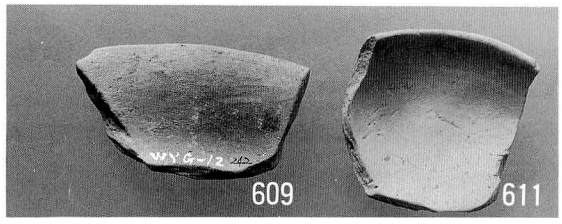

127

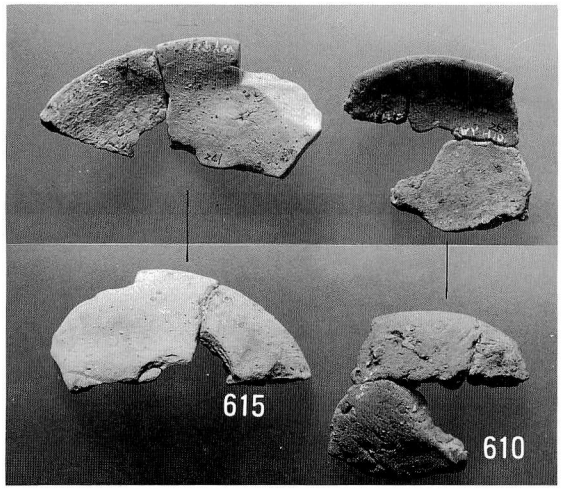

150

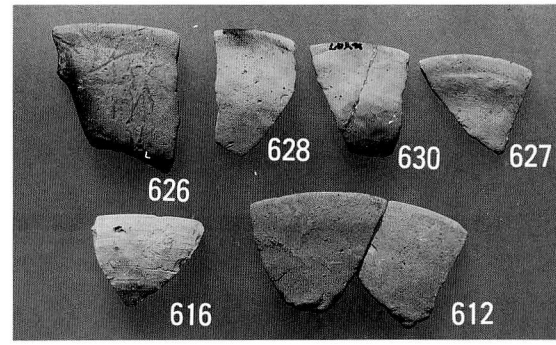

154

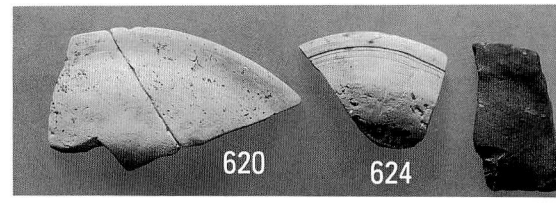

303

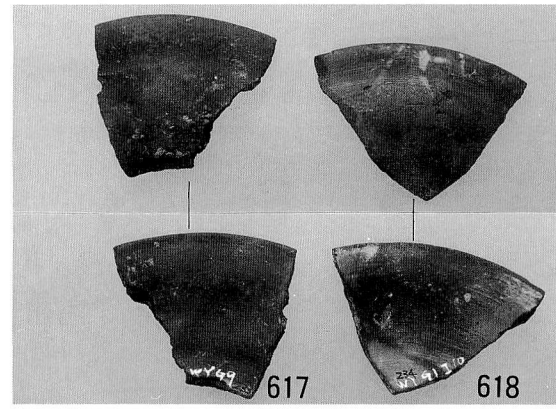

631
613
623
607
608

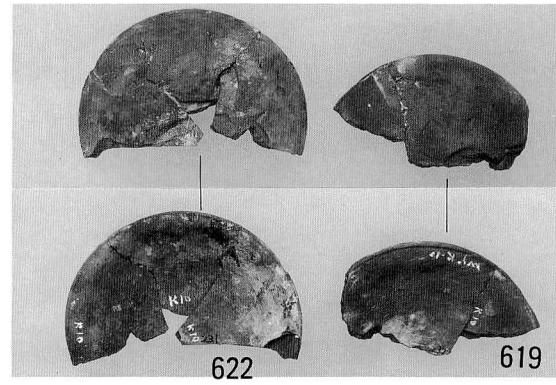

609
611

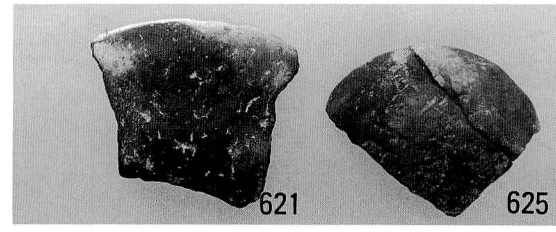

615
610


628
630
627
626
616
612

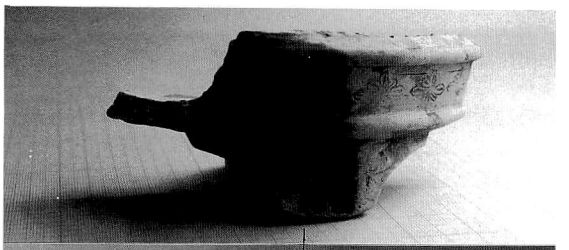

620
624

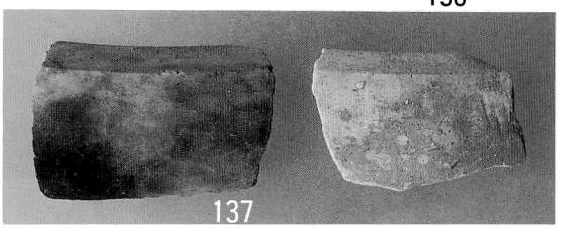

617
618

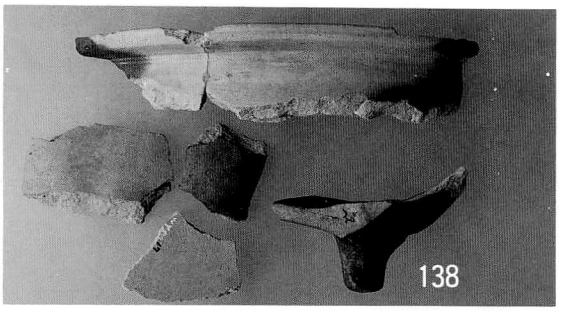

622
619

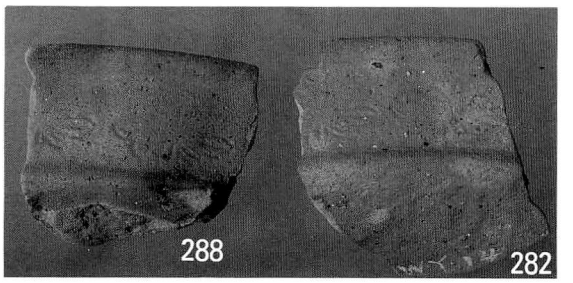

621
625

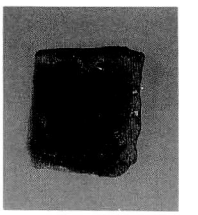
かわらけ、　坏・灯明皿

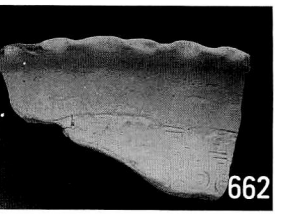


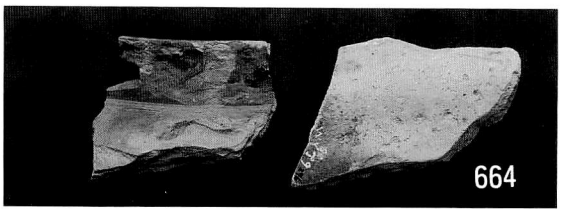


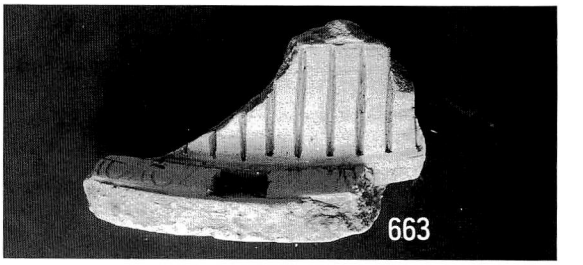


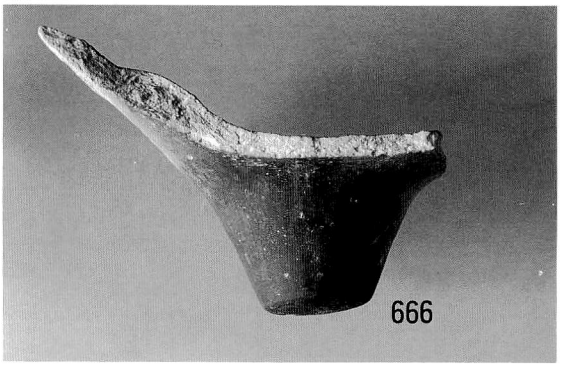


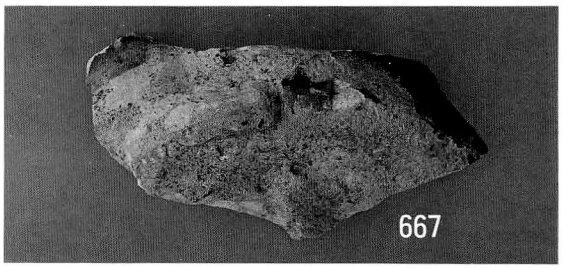


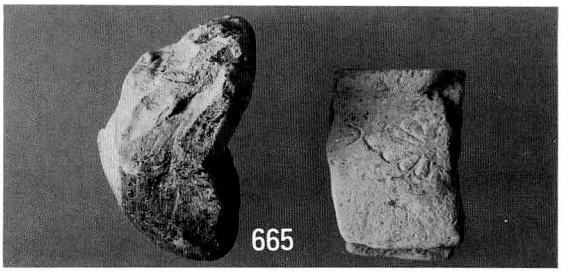




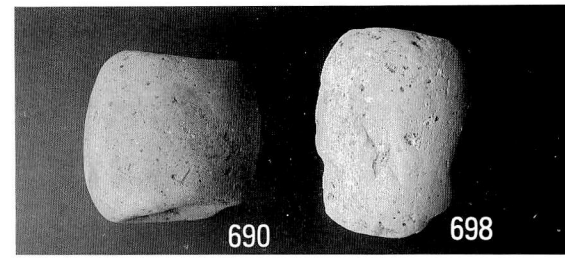


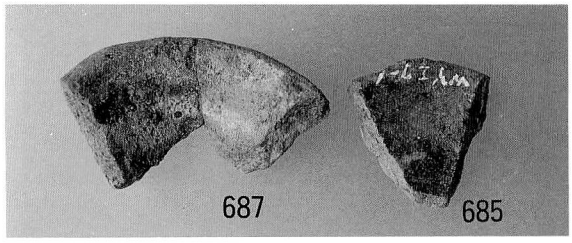


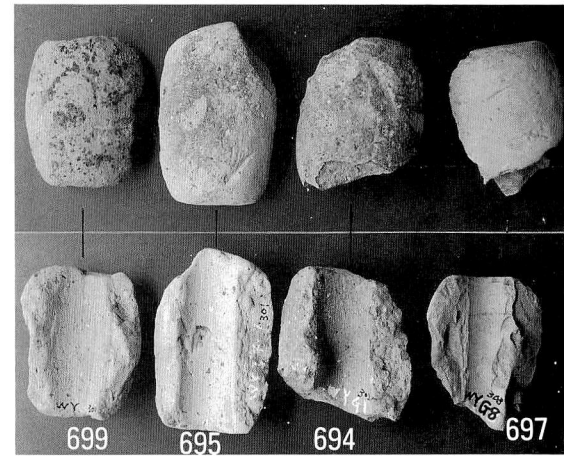


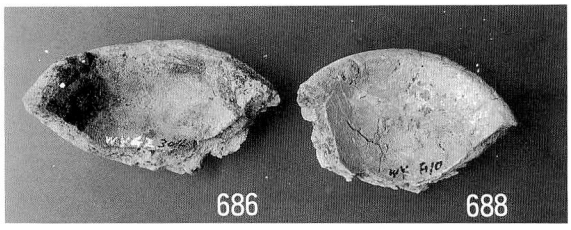


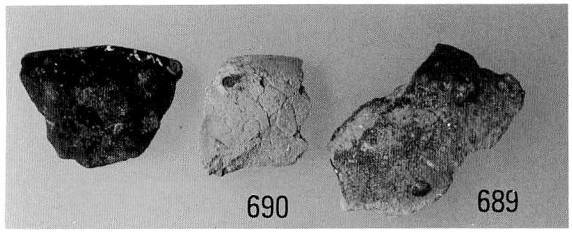
瓦　器、火器

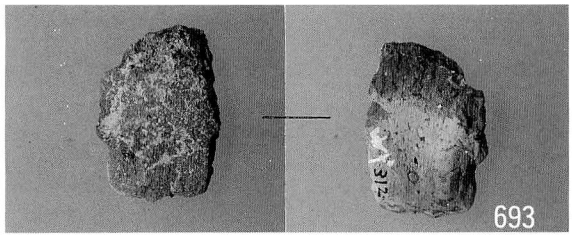


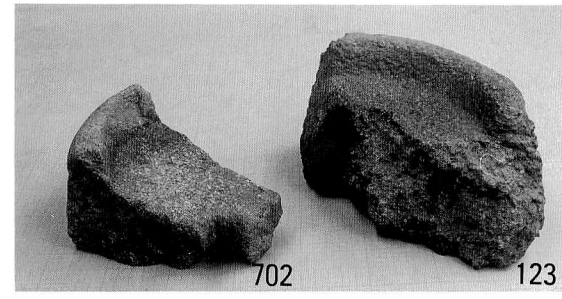


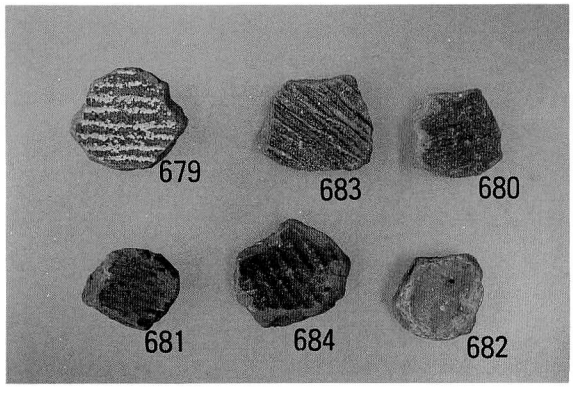


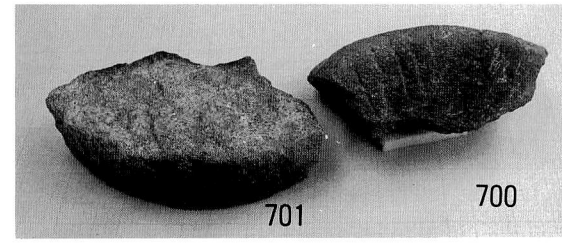




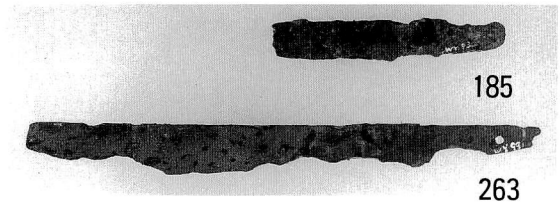


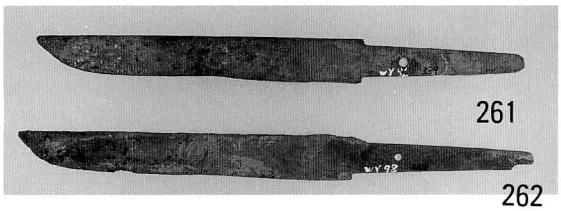


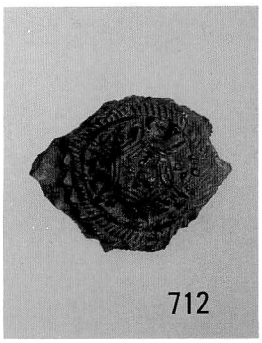


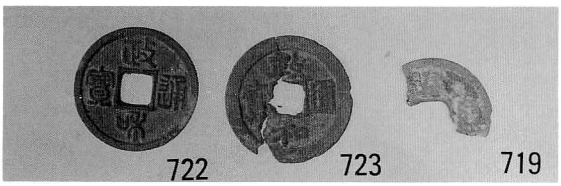


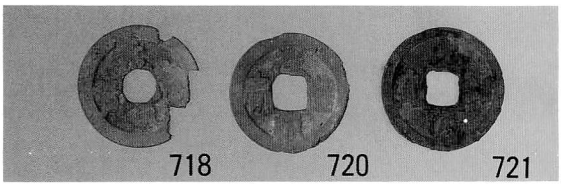
土製品、　ルツボ・羽口・土錘・オハジキ　　石製品、石臼

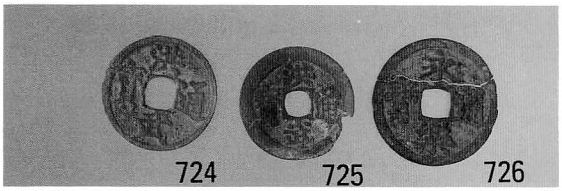


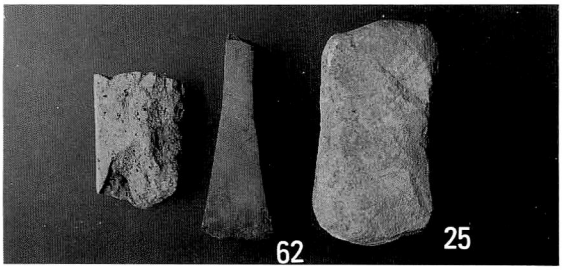


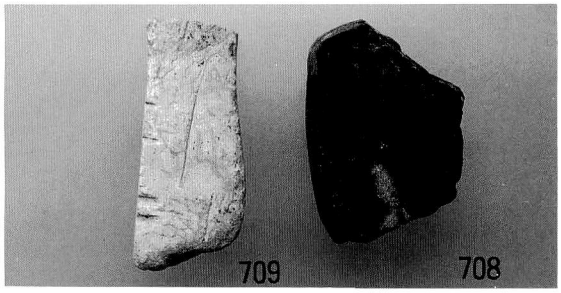


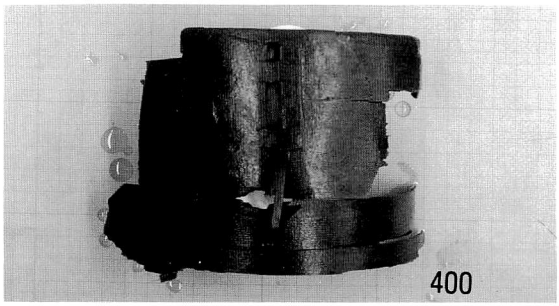






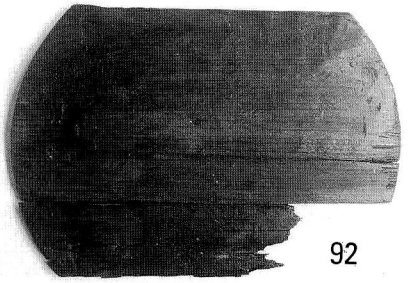


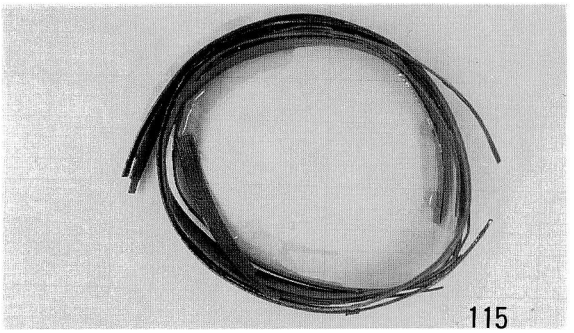


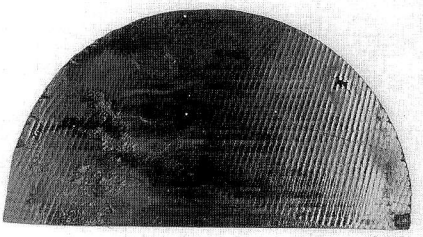


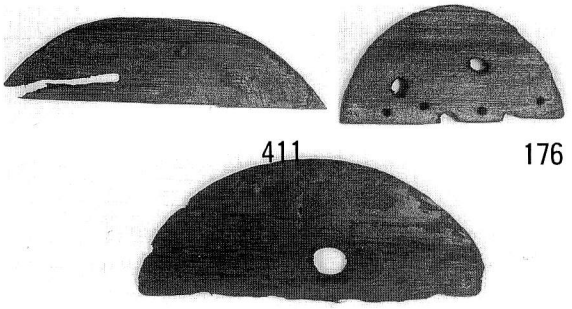
金工品、　短刀・和鏡・銭貨　　石製品、　砥石　　木製品、曲物（井戸側）他

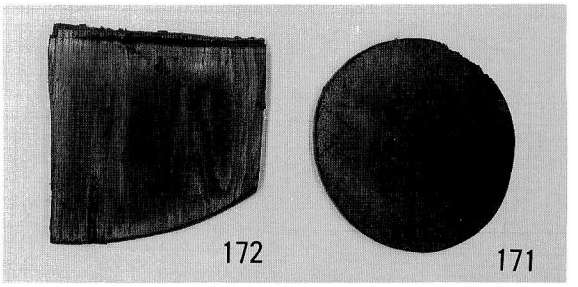
114

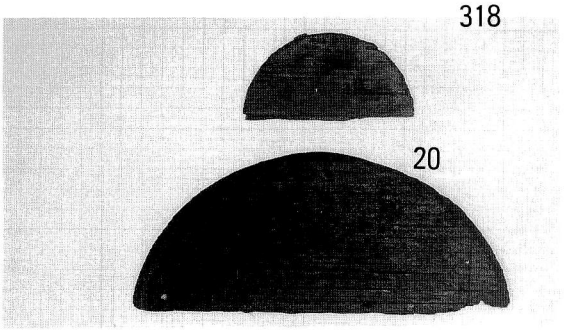

92

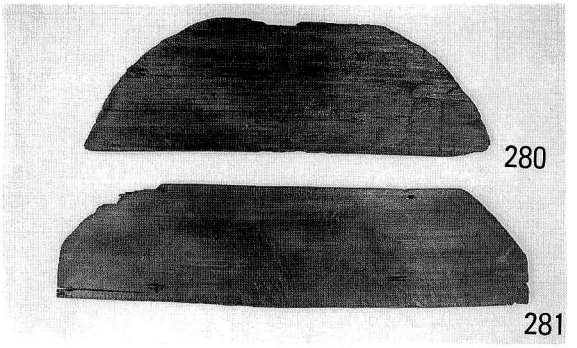

115

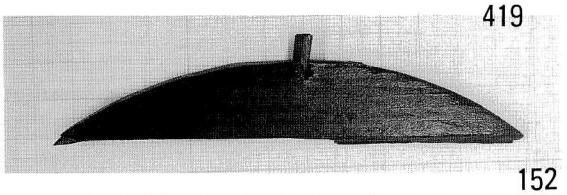

416

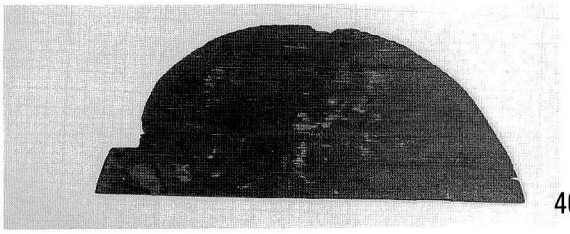

411 176 318

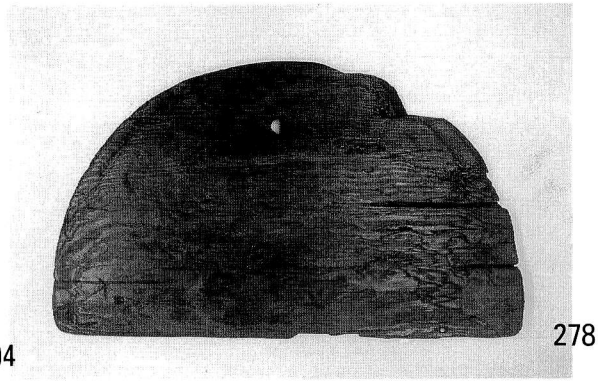

172 171


20 419

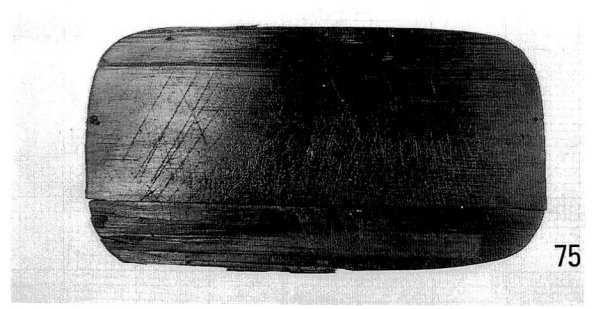

280 281

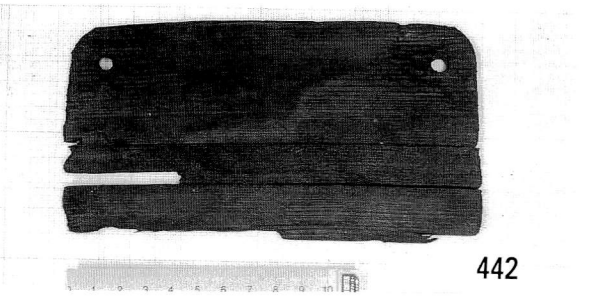

152

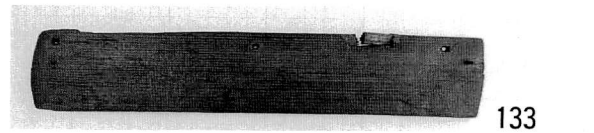

404

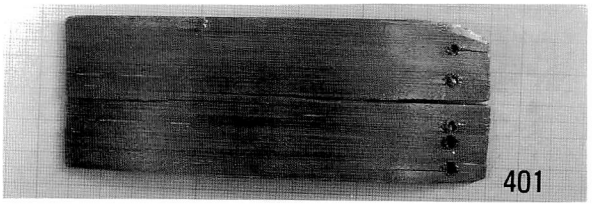

278

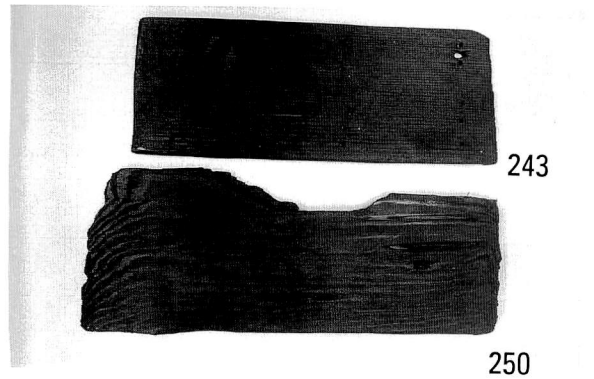
木製品２、　生活用具


75

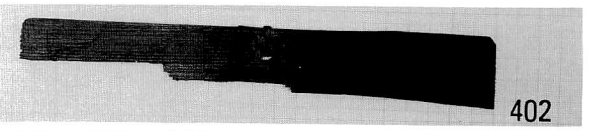

442

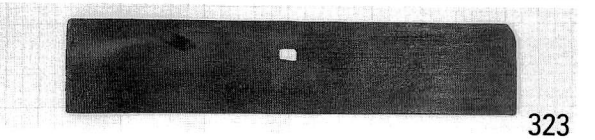

133

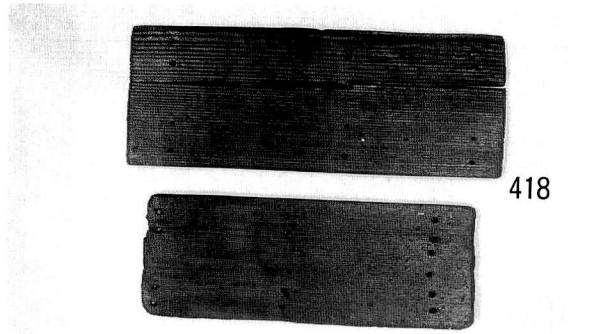

401


243

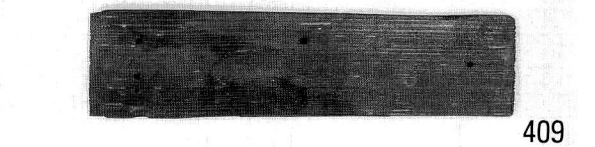
250

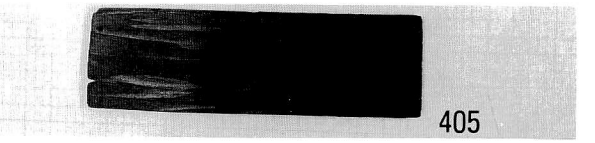

402

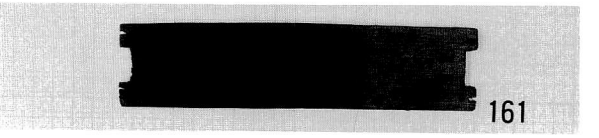

323

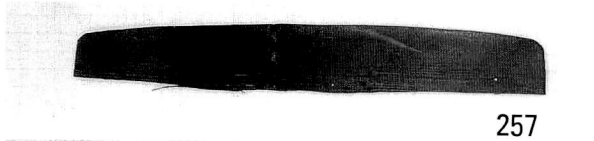

418

274

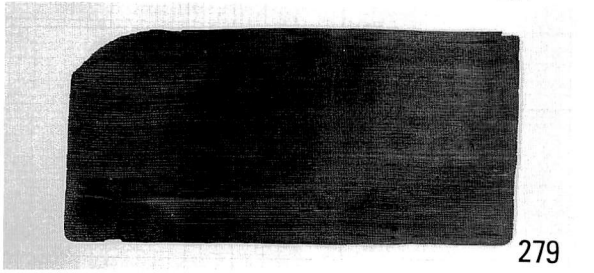

409

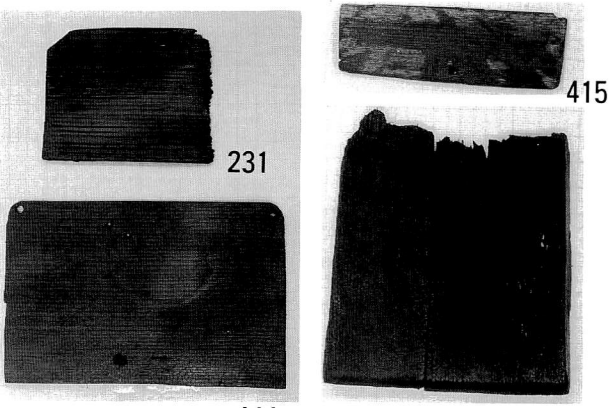

405


161


257

415

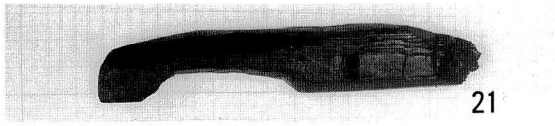

279

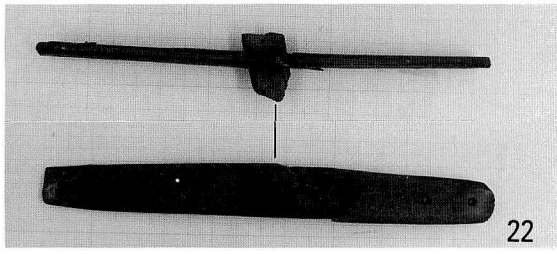

231

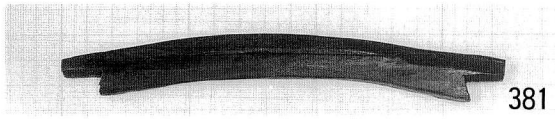
444

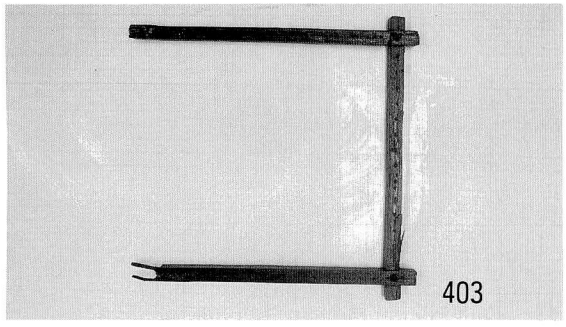
420

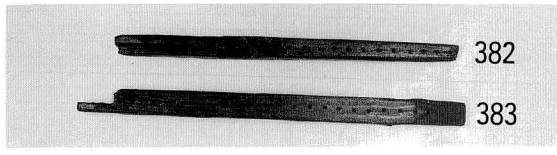
木製品３、　生産用具

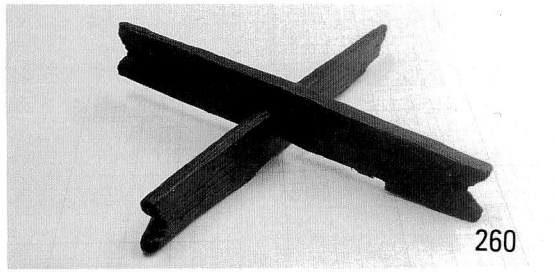

21

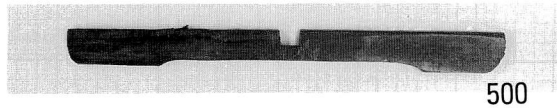

22

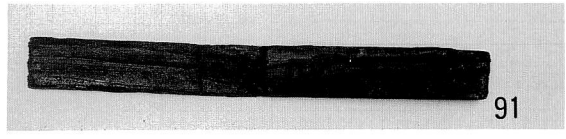

381

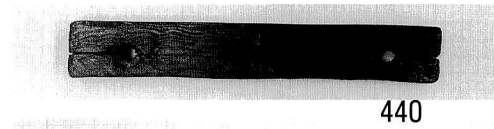

403

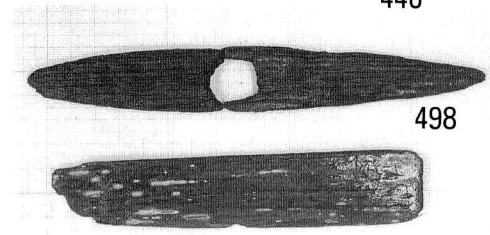

382
383


260

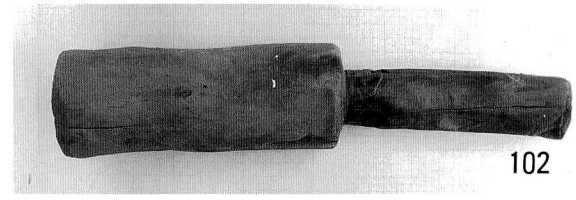

500

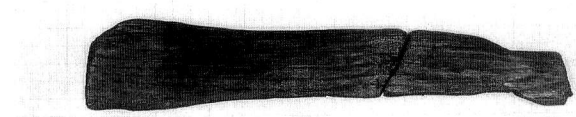

91

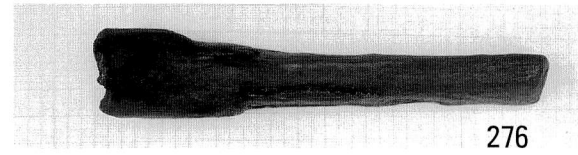

440

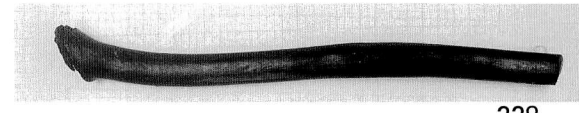

498

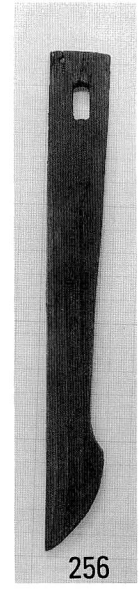
437


102

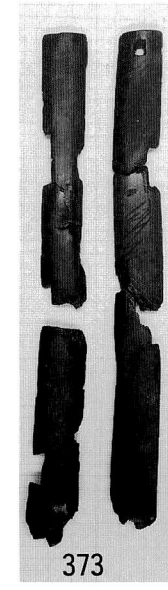

255


276


228

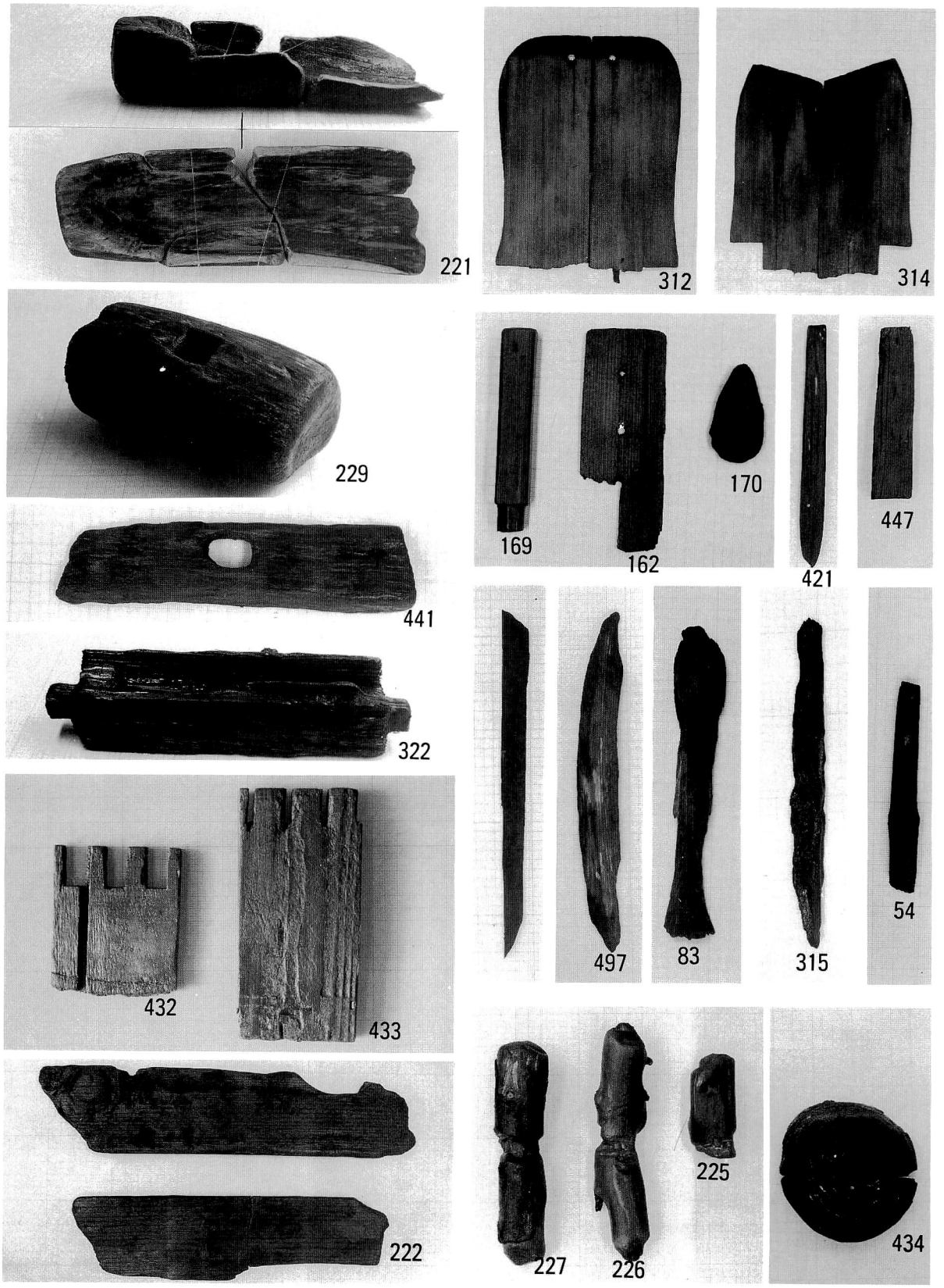

256

135

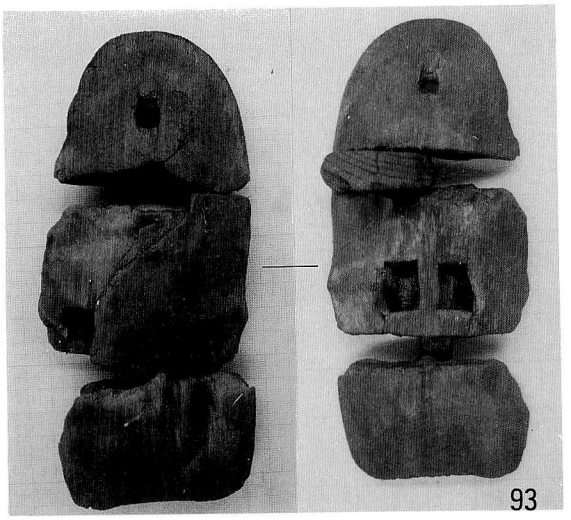

373

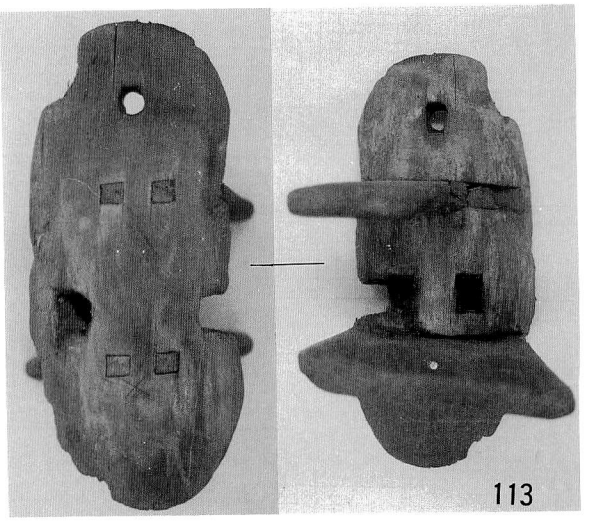
383

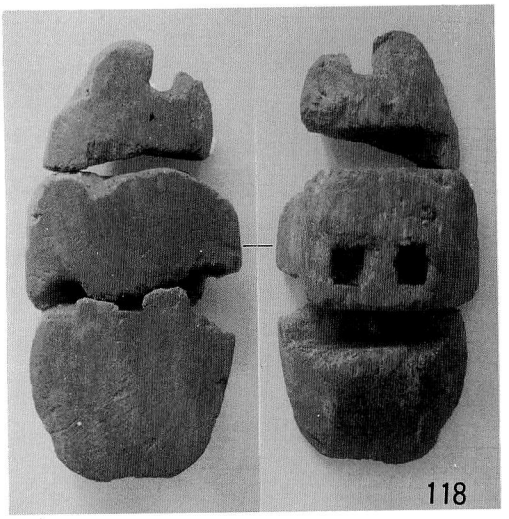
木製品４、　生産用具

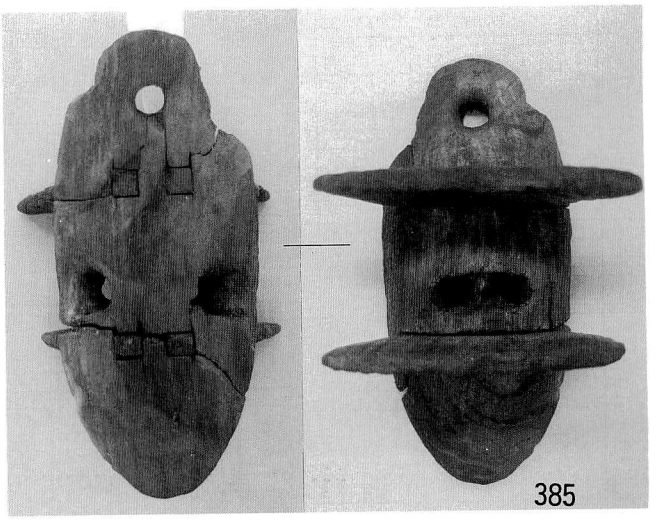


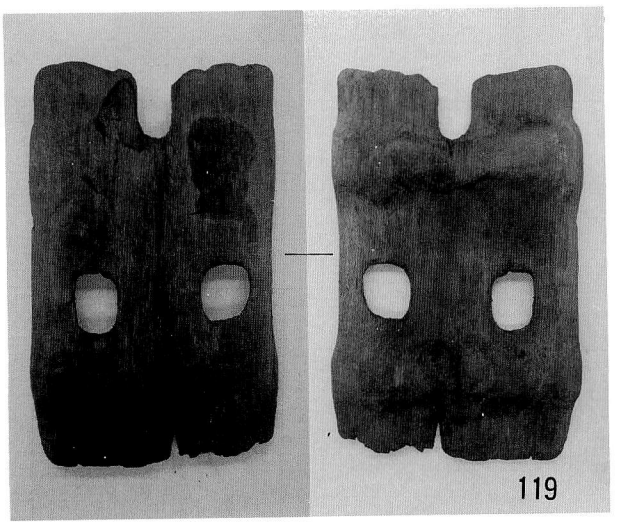
木製品５、　生産用具・生活用具

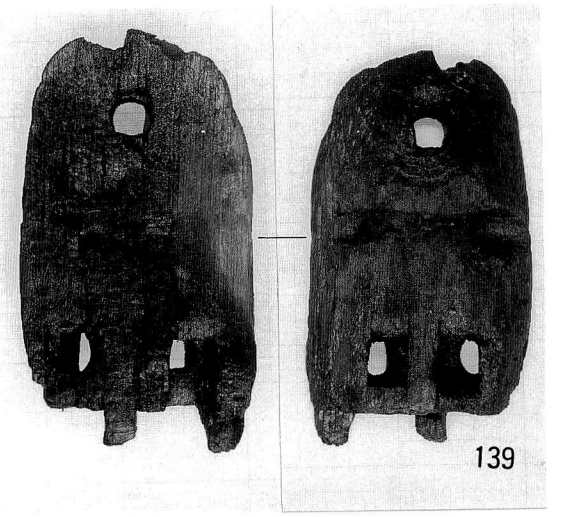




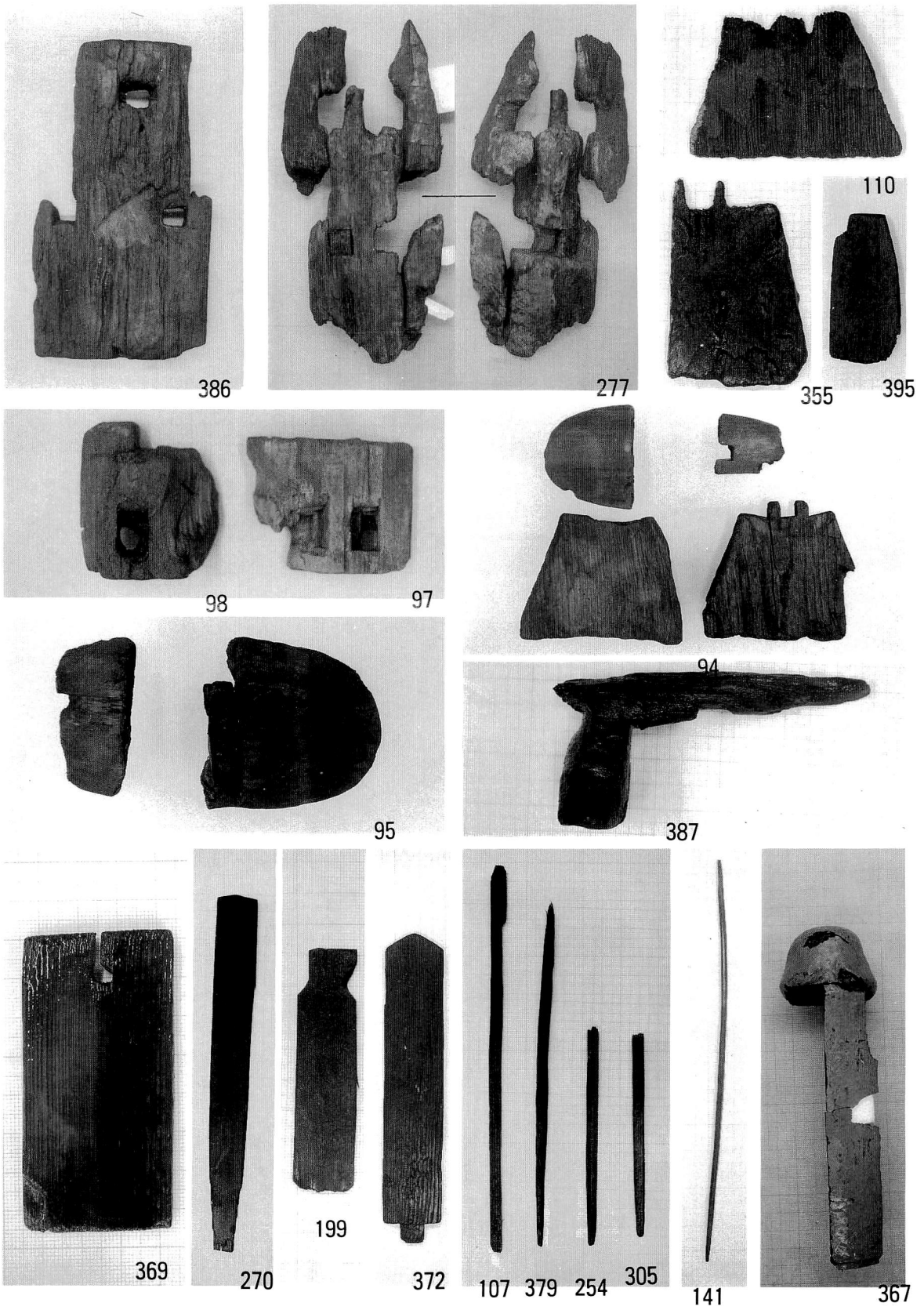




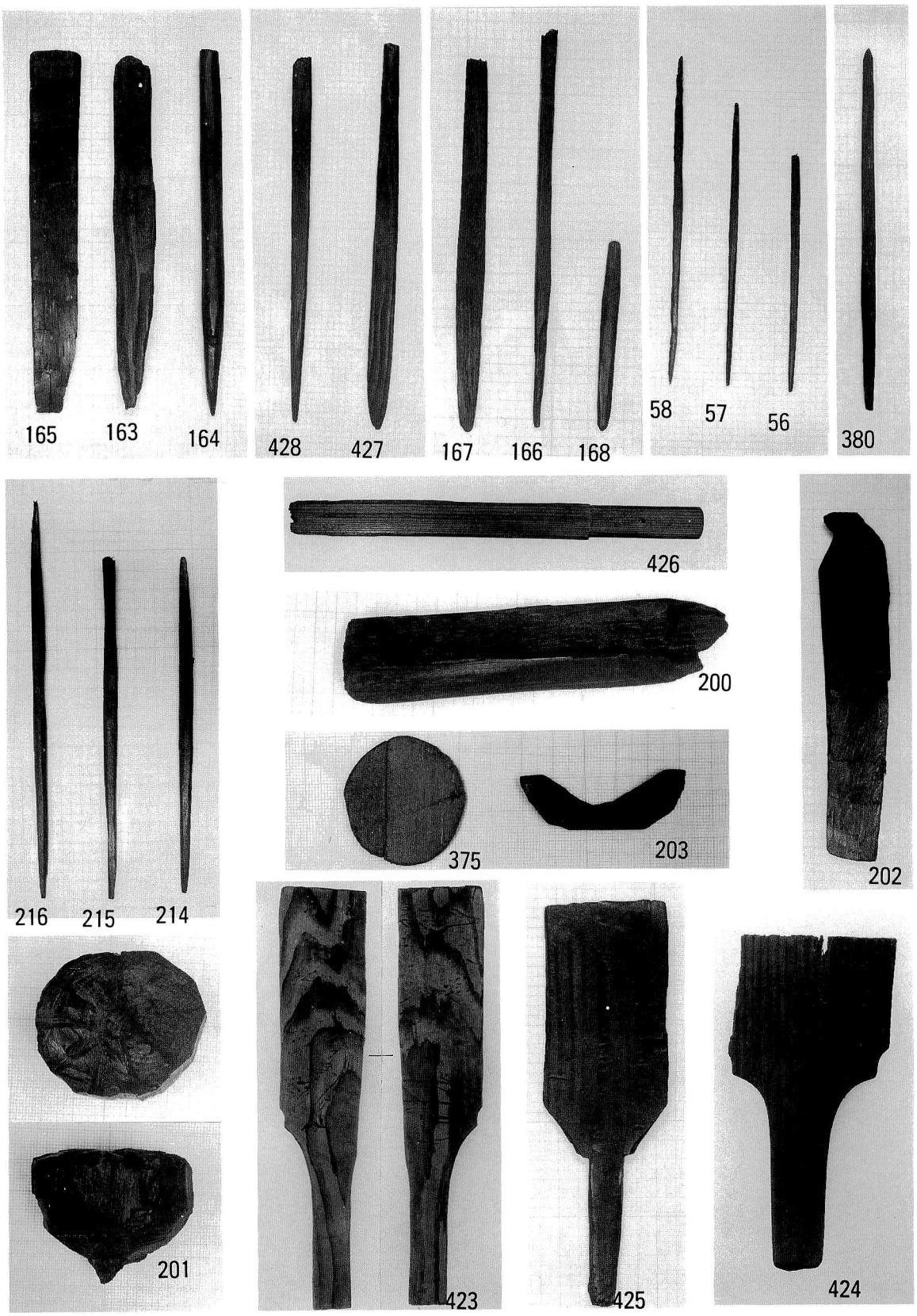




木製品６、　下　駄

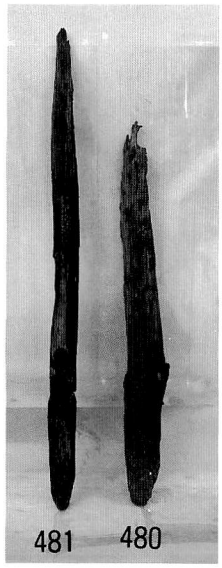


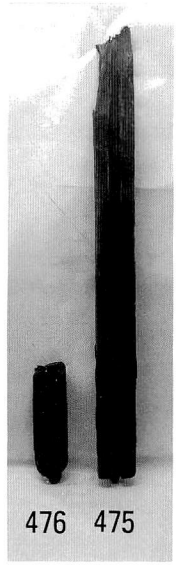
木製品７、　下駄・木簡状木製品・信仰関連用具・木札

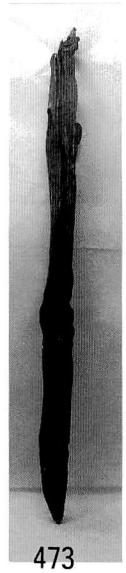


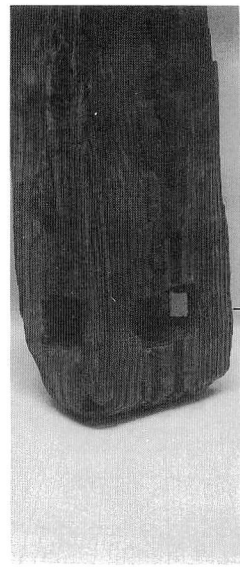
木製品８　　信仰関連用具・遊具

275

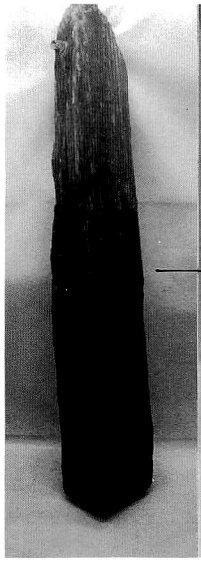

481 480

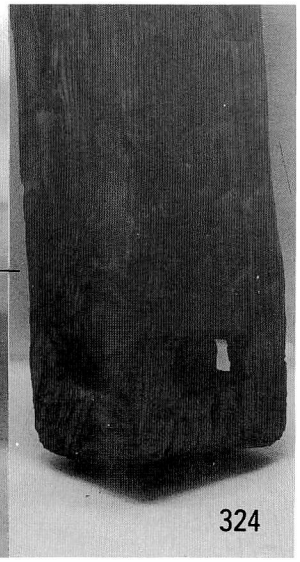

476 475

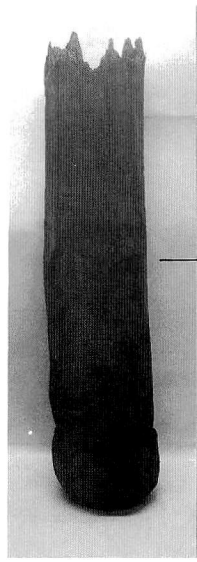

473

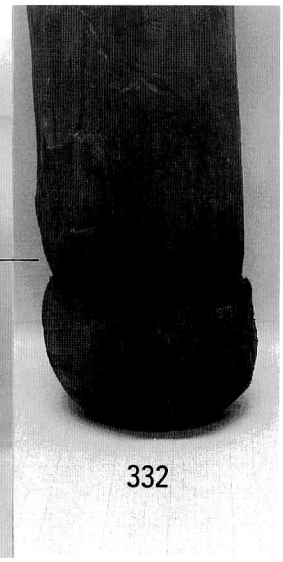


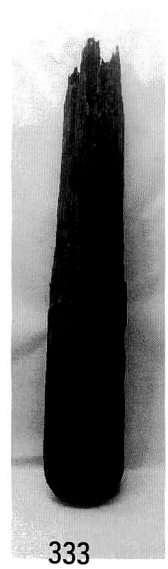
325




324




332

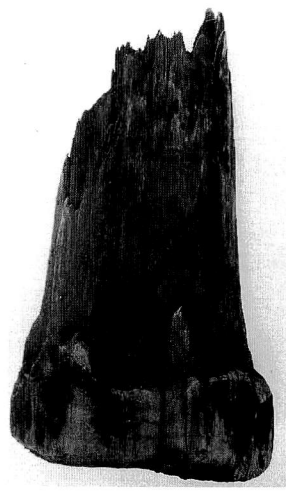

333

337

334

344

346


342

9

柱・杭類、　梯子・橋脚杭・柱類

和納館発掘調査作業員名簿

佐藤貞吉	小林キクヨ	木下　潤	青柳澄子	小松敏夫	安達太作
佐藤　正	大越芳子	浅原タキ	石添一儀	高島四男	樋口サチイ
武田キヨ	遠藤仲子	鈴木トヨ	水沢友子	島津カズ	鈴木和代
小林政雄	大岩春吉	高橋和子	竹内正一	金子太郎	永塚喜代子
中村洋子	富山栄子	富山秋江	澤野慎吾	本田　敦	小林美枝子
頓所タツエ	頓所ヒデ	佐々木キヨ	竹内美穂	岩本正子	井上信雄
井上イシ	山上聖子	金子正栄	海津義仁	高沢慎一	大越和明
涌井貴宏	深川悠介	白倉秀一郎	土橋明博	堀川清登	樋浦真寛
山上貴史	田中　清	川崎佑介	渡辺政彦	栗原健二	谷井大輝
小林　剛	青柳加奈子	樋口真穂			

（順不同　敬称略）

和　納　館　遺　跡
岩室村文化財調査報告

平成９年３月30日印刷・発行

発行　岩室村教育委員会
新潟県西蒲原郡岩室村西中860
ＴＥＬ　0256―82―4444

印刷　有限会社　亀田プリント社
新潟県中蒲原郡亀田町亀田工業団地１丁目２―５
ＴＥＬ　025―382―4601㈹